

大館市文化財調査報告書 第8集

おうぎたみちした
扇田道下遺跡発掘調査報告書

2013

秋田県大館市教育委員会

おうぎたみちした
扇田道下遺跡発掘調査報告書

秋田県大館市教育委員会

序

大館市教育委員会ではここ十数年、市道や学校などの建設に伴って、多くの遺跡－埋蔵文化財－の発掘調査を実施してまいりました。しかし、大館市における文化財の調査はこれに始まるのではなく、早くから重要遺跡の調査・報告が行われてきました。昭和27年から28年の矢石館遺跡、昭和39年の矢立廃寺跡の調査はその一例です。

地方の歴史は『日本書紀』などの記録からだけではほとんどわかりません。文化財はそれだけではものを語りませんが、十分な調査を積み重ねることによって、実に雄弁に歴史を語ります。特に地下に埋もれた遺跡は古代のムラの姿や人々の暮らしを生き生きと語ってくれます。

本書は東北職業能力開発大学校秋田校の建設に伴って実施した扇田道下遺跡の発掘調査報告書です。扇田道下に古代のムラが存在したことは、もちろん現在に伝わる当時の記録には書かれていません。調査は遺跡の一部を発掘したにすぎませんが、平安時代の住居跡が約60軒も見つかりました。本遺跡における平安時代（約1100年前）のムラは律令体制の衰退期に成立し、比較的短期間で崩壊したことがわかり、当時の政治勢力と何らかの関わりがあるムラであったことが知られます。そして、多くの住居跡や出土品は当時の人々の暮らしむきを今に伝えています。

このたび秋田県緊急雇用創出等臨時対策基金事業を活用して、昨年の大館野遺跡に続き、発掘調査報告書を刊行するはこびとなりました。調査・整理に当たりまして、御指導・御協力いただきました関係各位に深甚なる謝意を表します。

平成25年3月

大館市教育委員会

教育長 高 橋 善 之

例 言

- 1 本書は秋田県大館市字^{おうぎたまちした}扇田道下6番地他に所在する扇田道下遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、東北職業能力開発大学校秋田校（現 東北職業能力開発大学校附属東北職業能力開発大学校 秋田校）建設に伴い、大館市が実施した。
- 3 調査主体は大館市教育委員会であり、平成2・3年度に発掘調査を、平成3・22・24年度に報告書作成にかかる整理作業と報告書刊行を行った。整理作業から報告書刊行にあたっては、秋田県緊急雇用創出等臨時対策基金事業を活用した。調査と整理の体制は第Ⅰ章に記した。
- 4 出土遺物と調査にかかる資料はすべて大館市教育委員会大館郷土博物館が保管している。遺物の注記は、扇田道下遺跡を示す「om」に出土地点を併記した。また、本書に掲載した遺物については、本書の図面の番号を袋に付し、別に保管してある。
- 5 本書の作成は大館郷土博物館文化財保護係職員があたった。ただし、本書の「第Ⅵ章 自然科学分析・調査」の鉄滓の分析は株式会社九州テクノリサーチ、種実同定・木材の樹種・放射性炭素年代測定はパリオ・サーヴェイ株式会社にそれぞれ依頼し、報文を掲載した。
- 6 本書の作成は板橋範芳（元大館郷土博物館長）の指導のもと嶋影壮憲（大館郷土博物館文化財保護係主任）が担当した。本文の執筆および編集は嶋影があたった。第Ⅳ章3の遺構の説明は板橋が作成した記録をもとに嶋影が執筆したものである。
- 7 本遺跡出土須恵器は、藤原弘明氏（五所川原教育委員会）に実見していただき、御教示いただいた。鉄製品および鉄関連遺物の整理にあたっては、穴澤義功氏（たたら研究会委員）に御指導いただいた。
- 8 既製の地形図を使用したものについては原図の出典を記した。原図は国土地理院発行200,000分の1地勢図（平成17年発行「弘前」「秋田」）と50,000分の1地形図（昭和32年発行「大館」）、大館市2,500分の1都市計画図（昭和62年、平成5年空撮・現地調査）である。
- 9 発掘調査から本書の作成にいたるまで、下記の方々から多大な御教示・御協力を得た。厚く御礼申し上げます（敬称略、五十音順）。

穴澤義功、宇田川浩一、大澤正己、木村淳一、児玉大成、新海和広、高橋昭悦、高橋 学、藤原弘明、村上義直、秋田県公文書館、秋田県埋蔵文化財センター、大館市産業部農林課

凡 例

- 1 遺構番号は基本的に調査現場で付したものをそのまま使用したが、掘立柱建物と溝については、整理作業で新たに付したものもある。番号は遺構の種別ごとに付した。種別は竪穴住居（S I）、掘立柱建物（S B）、土坑（S K）、溝（S D）で区別し、番号の先頭に付した。
- 2 本書遺構図における各基準は、下記のとおりである。なおその都度スケール、方位、凡例等を示す。
 - (1) 略記号・縮尺

竪穴住居・竪穴建物	S I	1 : 40・1 : 50・1 : 60・1 : 80
掘立柱建物	S B	1 : 40・1 : 50
土坑	S K	1 : 20・1 : 80
 - (2) 図の方位
本書で示す方位はすべて磁北である。
 - (3) 遺構図等の標高
遺構平面図・断面図等の標高値は海拔高度による。単位はメートル。
- 3 遺物の記号および実測図・写真図版の縮尺は、下記を原則とした。
 - (1) 礫の略号はSとした。
 - (2) 縮尺

土器・石製品・鉄関連遺物実測図	1 : 3
石器・鉄製品実測図	1 : 2
剥片石器・石製品・鉄製品写真	約1 : 2
土器破片・礫石器・鉄関連遺物写真	約1 : 3
完形・復元土器写真	任意
- 4 一覧表における遺構の規模の項については長径×短径で表した。また、時期の項は、土器の時期区分で表した。
- 5 掲載した図面のうち、既製の地形図等を使用したものについては、原図の作成者、作成年を示した。
- 6 註は脚注とした。引用文献は著者と発行年（西暦）を（ ）で文中に示し、巻末に一括して掲載した。
- 7 挿図の遺構実測図は1/200の全体分割図13葉、1/40～1/80の個別図67葉がある。全体分割図は北東から南西の順に、1葉におさまる範囲を13のブロックに分けたもので、1～13の番号を付し、それぞれ隣接する図面番号を図版ごとに付した。
- 8 土器実測図の断面は種別で区別した。黒ぬりは須恵器で、それ以外は白抜きである。黒色処理、タールの付着などはそれぞれ異なった網目（スクリーン・トーン）をかけた。網目の表示については挿図ごとに記した。遺物実測図の表現方法等については42頁を参照されたい。

目 次

第Ⅰ章 調査の経過	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査・整理体制	1
3. 調査経過	3
4. 整理作業の経過	3
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境	4
1. 遺跡の位置と風土	4
2. 地理的環境	4
3. 先史・古代の歴史的環境	6
(1) 縄文・弥生時代	6
(2) 古墳時代	6
(3) 奈良・平安時代	7
(4) 扇田道下遺跡周辺の遺跡	9
4. 近世・近代の扇田道下	12
第Ⅲ章 調査の方法	14
1. 調査の方法	14
2. 整理作業	16
(1) 遺物	16
(2) 図面	16
第Ⅳ章 遺 跡	18
1. 概要	18
2. 層序	18
3. 検出遺構と出土遺物	20
(1) 記述にあたって	20
(2) 縄文時代	21
(3) 平安時代	36
(4) 近代	166
第Ⅴ章 自然科学分析の分析・調査	167
1. 扇田道下遺跡出土鉄滓の分析調査	167

(1) いきさつ	167
(2) 調査方法	167
(3) 調査結果	168
(4) まとめ	171
2. 扇田道下遺跡の自然科学分析	174
第Ⅵ章 まとめ	181
1. 縄文時代の遺構と遺物	181
2. 平安時代中期の土器	181
(1) はじめに	181
(2) 変遷の画期	181
(3) 須恵器窯との関係	184
(4) 年代の比定	185
3. 出土鉄製品および鉄関連遺物について	185
(1) はじめに	185
(2) 鉄製品	186
(3) 鉄滓	186
(4) 小結	186
4. 平安時代の遺構と遺跡	188
(1) 竪穴住居と掘立柱建物	188
(2) 遺構の変遷	191
5. 古代集落としての扇田道下遺跡	192
(1) 成立と背景	192
(2) 扇田道下遺跡と市内の古代集落遺跡	195
(3) 結語	198
《引用・参考文献》	199

挿 図 目 次

第1図 確認調査試掘坑配置略図	2	第5図 正保4年出羽一国御絵図	13
第2図 遺跡の位置と環境	5	第6図 調査地区と周辺地形	15
第3図 出羽国の領域変遷と蝦夷の村々	8	第7図 遺構配置概略図	17
第4図 周辺の地形と遺跡分布図	9	第8図 基本層序	18

第9図	地山面の地形	19	第46図	SI14	68
第10図	竪穴住居の概念図	20	第47図	SI14出土遺物(1)	69
第11図	掘立柱建物概念図	21	第48図	SI14出土遺物(2)	70
第12図	遺構全体図(1～13の割付図)	22	第49図	SI15と出土遺物	71
第13図	遺構分割図(1)	23	第50図	SI17と出土遺物	72
第14図	遺構分割図(2)	24	第51図	SI18と出土遺物	74
第15図	遺構分割図(3)	25	第52図	SI19カマドと出土遺物	75
第16図	遺構分割図(4)	26	第53図	SI20	76
第17図	遺構分割図(5)	27	第54図	SI20出土遺物	77
第18図	遺構分割図(6)	28	第55図	SI21	79
第19図	遺構分割図(7)	29	第56図	SI21出土遺物	81
第20図	遺構分割図(8)	30	第57図	SI22・64とSI22出土遺物	82
第21図	遺構分割図(9)	31	第58図	SI23	83
第22図	遺構分割図(10)	32	第59図	SI24	84
第23図	遺構分割図(11)	33	第60図	SI24出土遺物	85
第24図	遺構分割図(12)	34	第61図	SI25と出土遺物(1)	86
第25図	遺構分割図(13)	35	第62図	SI25出土遺物(2)	87
第26図	SI65と出土遺物	37	第63図	SI26	88
第27図	土器分類図	40	第64図	SI27と出土遺物	89
第28図	土師器甕A系法量分布図	41	第65図	SI28	91
第29図	土師器壺・甕の調整技法	43	第66図	SI28出土遺物	92
第30図	土師器煮炊具スス・炭化物付着状況	46	第67図	SI29と出土遺物	92
第31図	SI1	48	第68図	SI30と出土遺物(1)	94
第32図	SI2	49	第69図	SI30出土遺物(2)	95
第33図	SI3	51	第70図	SI30出土遺物(3)	96
第34図	SI4	52	第71図	SI31カマドと出土遺物	97
第35図	SI1～4出土遺物	53	第72図	SI32	98
第36図	SI5	54	第73図	SI32出土遺物	99
第37図	SI6と出土遺物	56	第74図	SI33	101
第38図	SI7と出土遺物	57	第75図	SI33出土遺物	102
第39図	SI8と出土遺物(1)	59	第76図	SI34と出土遺物	103
第40図	SI8出土遺物(2)	60	第77図	SI35と出土遺物(1)	105
第41図	SI9と出土遺物	61	第78図	SI35出土遺物(2)	106
第42図	SI10と出土遺物	63	第79図	SI36・SK2	108
第43図	SI11～13	64	第80図	SI36・SK2出土遺物	109
第44図	SI11出土遺物	65	第81図	SI37	110
第45図	SI13出土遺物	67	第82図	SI38と出土遺物	111

第83図	SI39	112	第114図	SB 5 ～ 7	150
第84図	SI39出土遺物	113	第115図	SB 8	151
第85図	SI40と出土遺物(1)	115	第116図	SB 9	152
第86図	SI40出土遺物(2)	116	第117図	SB10	153
第87図	SI41と出土遺物	117	第118図	SB11	154
第88図	SI42と出土遺物	119	第119図	SB12・13	155
第89図	SI43と出土遺物	120	第120図	SK 1	156
第90図	SI44	121	第121図	SD・SP・包含層出土遺物(1)	161
第91図	SI44出土遺物	122	第122図	包含層出土遺物(2)	162
第92図	SI46	124	第123図	確認調査出土遺物(1)	164
第93図	SI46カマドと出土遺物(1)	125	第124図	確認調査出土遺物(2)	165
第94図	SI46出土遺物(2)	126	第125図	SK 3	166
第95図	SI47	127	第126図	秋田県下の製鉄遺跡出土砂鉄・製錬滓 の化学組成	172
第96図	SI47出土遺物	128	第127図	椀形鍛冶滓(含鉄)の顕微鏡組織	173
第97図	SI48	129	第128図	種実遺体	179
第98図	SI49	130	第129図	炭化材	180
第99図	SI50と出土遺物	132	第130図	平安時代中期の土器の変遷(1)	182
第100図	SI51と出土遺物	133	第131図	平安時代中期の土器の変遷(2)	183
第101図	SI52と出土遺物	134	第132図	平安時代中期の土器の変遷(3)	184
第102図	SI53と出土遺物	135	第133図	鉄関連遺物構成図	187
第103図	SI54	137	第134図	平安時代堅穴住居軸長分布図	189
第104図	SI54出土遺物	138	第135図	平安時代堅穴住居面積分布図	189
第105図	SI55・56と出土遺物	139	第136図	堅穴住居一覧図	189
第106図	SI57と出土遺物	141	第137図	平安時代掘立柱建物軸長分布図	190
第107図	SI58と出土遺物	142	第138図	堅穴住居主軸方向分布図	191
第108図	SI59と出土遺物	143	第139図	平安時代遺構変遷図	193
第109図	SI60と出土遺物	144	第140図	胡桃館遺跡の遺構・遺物	195
第110図	SI61・63	146	第141図	市内の集落遺跡	197
第111図	SI64出土遺物	146	第142図	大館野遺跡の遺構分布模式図	198
第112図	SB 1 ・ 2	148			
第113図	SB 3 ・ 4	149			

表 目 次

第1表	周辺の遺跡一覧	10	第4表	出土遺物の調査結果のまとめ	169
第2表	供試材の履歴と調査項目	169	第5表	放射性炭素年代測定結果及び 暦年較正結果	175
第3表	供試材の化学組成	169			

第6表	主要遺構一覧表	201
第7表	平安時代土器観察表	204
第8表	鉄関連遺物観察表	218

第9表	鉄関連遺物分析資料一覧表	219
第10表	石器・石製品一覧表	220

図 版 目 次

1	遺跡遠景航空写真	28	SI10・11・13出土遺物
2	調査風景 SI58土層断面	29	SI13・14出土遺物
3	扇田道下周辺空中写真	30	SI14出土遺物
4	遺跡近景 確認調査状況 SI65完掘	31	SI15・17～19出土遺物
5	SI1完掘 SI2完掘 SI3完掘	32	SI20出土遺物
6	SI4完掘 SI6完掘 SI7完掘	33	SI21・22出土遺物
7	SI8・9完掘 SI11・12・13完掘 SI17完掘	34	SI24・25出土遺物
8	SI18完掘 SI19カマド SI20完掘	35	SI27～29出土遺物
9	SI21完掘 SI21カマド SI22・64完掘	36	SI30出土遺物(1)
10	SI24完掘 SI25土層断面 SI27完掘	37	SI30出土遺物(2)
11	SI28完掘 SI32完掘 SI33完掘	38	SI31～33出土遺物
12	SI34炭化材検出状況 SI36完掘 SI36カマド	39	SI34・35出土遺物(1)
13	SI38完掘 SI38カマド SI39完掘	40	SI35出土遺物(2)
14	SI39カマド SI40完掘 SI43完掘	41	SI36・SK2・SI38出土遺物
15	SI44完掘 SI46完掘 SI46カマド	42	SI39・40出土遺物
16	SI47完掘 SI49完掘 SI50完掘	43	SI41・42出土遺物
17	SI51完掘 SI52完掘 SI52カマド	44	SI42～44出土遺物
18	SI53完掘 SI53カマド SI54炭化材検出状況	45	SI46・47出土遺物
19	SI55完掘 SI55カマド SI55カマド煙出し ピット	46	SI50～56出土遺物
20	SI55・56 SI56カマド SI57完掘	47	SI57～60・64出土遺物
21	SI57カマド SI58土層断面 SI58完掘	48	SD・包含層出土遺物
22	SI59完掘 SB1完掘 SB2完掘	49	確認調査出土遺物(1)
23	SB3完掘 SB5・6・7完掘 SB9完掘	50	確認調査出土遺物(2)・平安時代土器 調整 技法(須恵器無台埴)
24	SB10・11完掘 SK3土層断面 SK3完掘	51	平安時代土器 調整技法(須恵器壺)
25	SI65・遺物包含層・SI1～4・6出土遺物	52	平安時代土器 調整技法(土師器底部)
26	SI7・8出土遺物	53	平安時代土器 調整技法・使用痕(土師器)
27	SI8・9出土遺物	54	鉄関連遺物分析資料番号1
		55	鉄関連遺物分析資料番号2

第Ⅰ章 調査の経過

1. 調査に至る経緯

遺跡の発見 大館市街地の段丘地に遺跡が分布していることは、以前から知られていた。今回の調査対象となった扇田道下遺跡は、大館市教育委員会が平成元年8月に実施した詳細分布調査によって新たに発見されたものである。

学校建設 東北職業能力開発大学校秋田校（現 東北職業能力開発大学校附属東北職業能力開発大学校 秋田校）は、産業界の多様なニーズに的確に対応できる人材の育成のために設置された短期大学校で、県北部の中心地である大館市内に建設されることとなった。この学校を扇田道下遺跡の存在する地区に建設することが計画された。

扇田道下遺跡の調査について、市内部で具体的な協議がもたれるようになったのは平成2年度に入ってからであり、市教育委員会は他の調査と人員との関係から、遺跡の内容を把握するために確認調査を実施し、日程や予算の計画を立てることとした。

確認調査 確認調査は平成2年8月20日～31日に実施した。計64か所の試掘坑（約580㎡）と、3条の試掘溝（幅2～3m・長さ計約50m、121㎡）を設定し、土層・遺物・遺構のあり方を調査した。その結果、近代には部分的に墓地として利用されていたものの、遺物包含層が存在することを確認し、縄文、平安時代の多量の遺物と、遺構と思われる落ち込みを検出した。これらの所見と地形を勘案すると、当該地の南半部、面積約8,500㎡の範囲の全面調査が必要とされた。

本調査に向けて 扇田道下遺跡の本調査の日程は、確認調査後に協議され、同年度中に実施し、平成3年度に持ち越すことにした。市教育委員会では2企発第533号で文化財保護法第98条の2の発掘通知を文化庁に提出し、作業員募集などの調査準備を行った。

2. 調査・整理体制

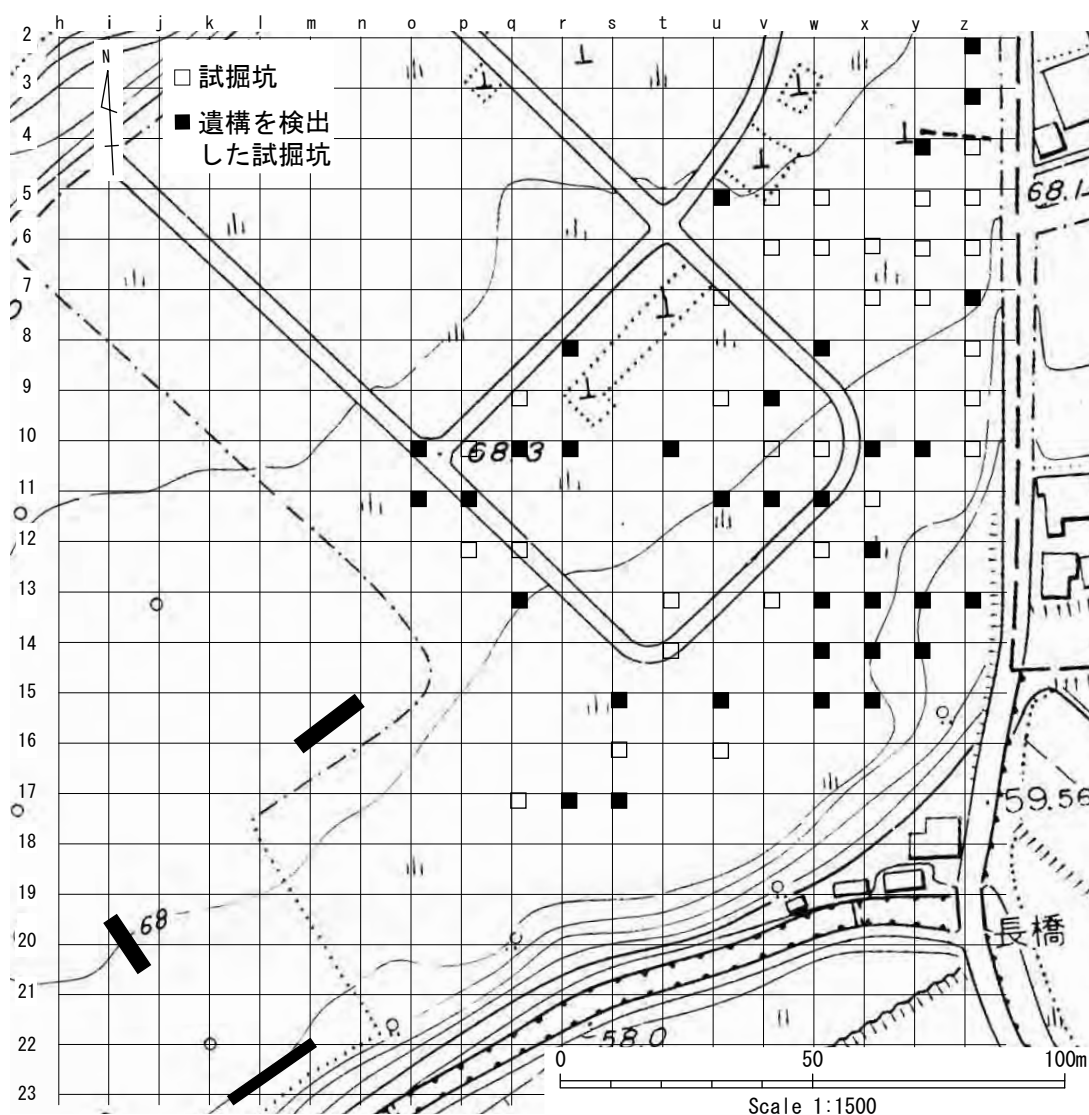
本発掘調査（平成2・3年度） 平成2年10月30日～12月27日、平成3年4月1日～20日

教 育 長	浜 田 章
教 育 次 長	濱 松 和 男
社会教育課長	片 岡 俊 雄（平成3年3月31日まで） 佐 藤 春 男（平成4年4月1日より）
課 長 補 佐	安 達 正 則
文 化 係 長	渡 辺 一 男
同 係 主 査	板 橋 範 芳（調査担当）
同 係 主 任	藤 嶋 正 行

整理作業（平成22・24年度） 平成22年10月1日～平成23年3月31日

平成24年4月1日～平成25年3月30日

教 育 長	高 橋 善 之
教 育 次 長	大 友 隆 彦（平成24年3月31日まで）
	石 井 隆（平成24年4月1日より）
生涯学習課長	名 村 伸 一（平成24年3月31日まで）
	齊 藤 博 樹（平成24年4月1日より）
郷土博物館長	松 田 誠 行（平成24年3月31日まで）
	若 宮 司（平成24年4月1日より）
文化財保護係長	成 田 茂（平成23年3月31日まで）
	岸 匡 也（平成23年4月1日より）
同 係 主 査	鳥 潟 幸 男（庶務担当）
同 係 主 任	滝 内 亨（平成24年4月1日より主査）
同係主任主事	嶋 影 壮 憲（整理担当）（平成24年4月1日より主任）



第1図 確認調査試掘坑配置略図

3. 調査経過

発掘調査は平成2年度から3年度まで、2か年にわたって実施した。当初計画では平成2年12月までで終了の見通しであったが、2年度の調査終了時点で、3年度までかかることが判明した。

平成2年度（10月30日～12月27日）

10月30日、調査開始。調査員1名、作業員約50名の体制をとる。31日からはバックホーで表土除去し、遺構確認をする。4～9列のB～Fで遺構検出し、遺構らしきものを掘るが、いずれも攪乱坑と判明する。攪乱坑はかなり多い。14日、12・13-D・E区で竪穴住居（SI1）を検出、発掘する。引き続き表土除去していた13・14-E・F区より同様の黒色土を検出、竪穴住居と推定する。SI1から竪穴住居の発掘を順次進めたが、11月下旬に入ると冬の天気が続き、作業もはかどらなかった。12月27日、現場を撤収した。

平成3年度（4月1日～4月20日）

記録がなく、詳細は不明だが、調査者（板橋）の記憶によれば、南西部に新たに宿泊棟を建設するというので、南西部の調査および南東崖縁の調査を実施した。

4. 整理作業の経過

出土遺物の洗浄・注記は文化課上川沿整理室で実施した。また、図面・写真の整理も、現場終了後行った。

整理作業を本格的にはじめたのは平成3年度からで、作業員のほかに整理担当職員を配置した。遺物の接合に最も時間がかかった。平成3年度までの段階で遺構の第二原図作成および遺物復元まではおおむね完了していたが、遺構図のトレースおよび遺物の実測・トレース、報告書の原稿については未着手となっており、報告書も刊行されないままとなっていた。

平成22年度に秋田県の緊急雇用創出等臨時対策基金を活用して、大館市内の埋蔵文化財発掘調査による図面および出土遺物の再整理事業を実施する計画を立案した。この事業ではおもに未報告となっている大館野遺跡と扇田道下遺跡の再整理を行い、報告書を刊行することを目的とした。平成22年度は扇田道下遺跡の遺構図面の再整理・トレース、市内遺跡詳細分布調査の調査位置図作成などを行った。平成23年度はおもに大館野遺跡の整理作業を実施し、報告書を刊行した。緊急雇用創出等臨時対策基金事業が平成24年度も継続して行えることとなり、本年度はおもに扇田道下遺跡の整理作業を実施した。平成24年度は未了となっていた土器の接合作業から開始した。遺物の実測などの作業は職員の指示のもと作業員が行った。職員は原稿執筆、挿図のレイアウト、編集にあたった。

なお、平成23年11月12日には、大館郷土博物館にて五所川原市教育委員会 藤原弘明氏に出土須恵器の鑑定をしていただいた。また、平成24年8月20～24日には、大館郷土博物館にて穴澤義功氏（たたら研究会委員）より鉄製品および鉄関連遺物の整理指導をしていただいた。

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

1. 遺跡の位置と風土

扇田道下遺跡は秋田県の北東部、大館市字扇田道下に所在する。秋田県の県庁所在地である秋田市より北東へ約100km、車で約2時間のところにある。

現在、大館市は北秋鹿角地域に属している。秋田県を地域的に大別する場合、県北・県央・県南の三分とするのが一般的である。北秋田は県北にあたる。県北は南北に長い秋田県の北部を占める。現在の行政区分でいえば、南秋田・仙北郡域より北部にあたり、鹿角市・大館市・能代市などの都市がある。

古代においては県北地域は郡制が施行されず、蝦夷が住む「火内」や「楡渚」などと呼ばれるムラがあった。これらの村々の南西の境界に八郎潟があり、隣接する秋田郡と対峙していた。八郎潟は秋田における境界といえる。一般に八郎潟以北の地域は、米代川流域として括することができる。当地方の地域性は第3節においても述べることになるが、この地域性は古代の当遺跡を理解するとき、重要な側面と考えられる。

秋田県は日本海側の気候であり、冬に雪が特に多いことで知られている。しかし、雪の量は秋田県でかなりの格差があり、内陸部に位置する大館市の周辺は、やや少ない地域にあたる。大館市については、雪の初日は11月10日、終日は4月10日頃で、最大積雪深は60cm程で、2mを超えることはまずない。また、12～3月の各月は1か月のうち3分の2以上の日数が降雪日となっている。

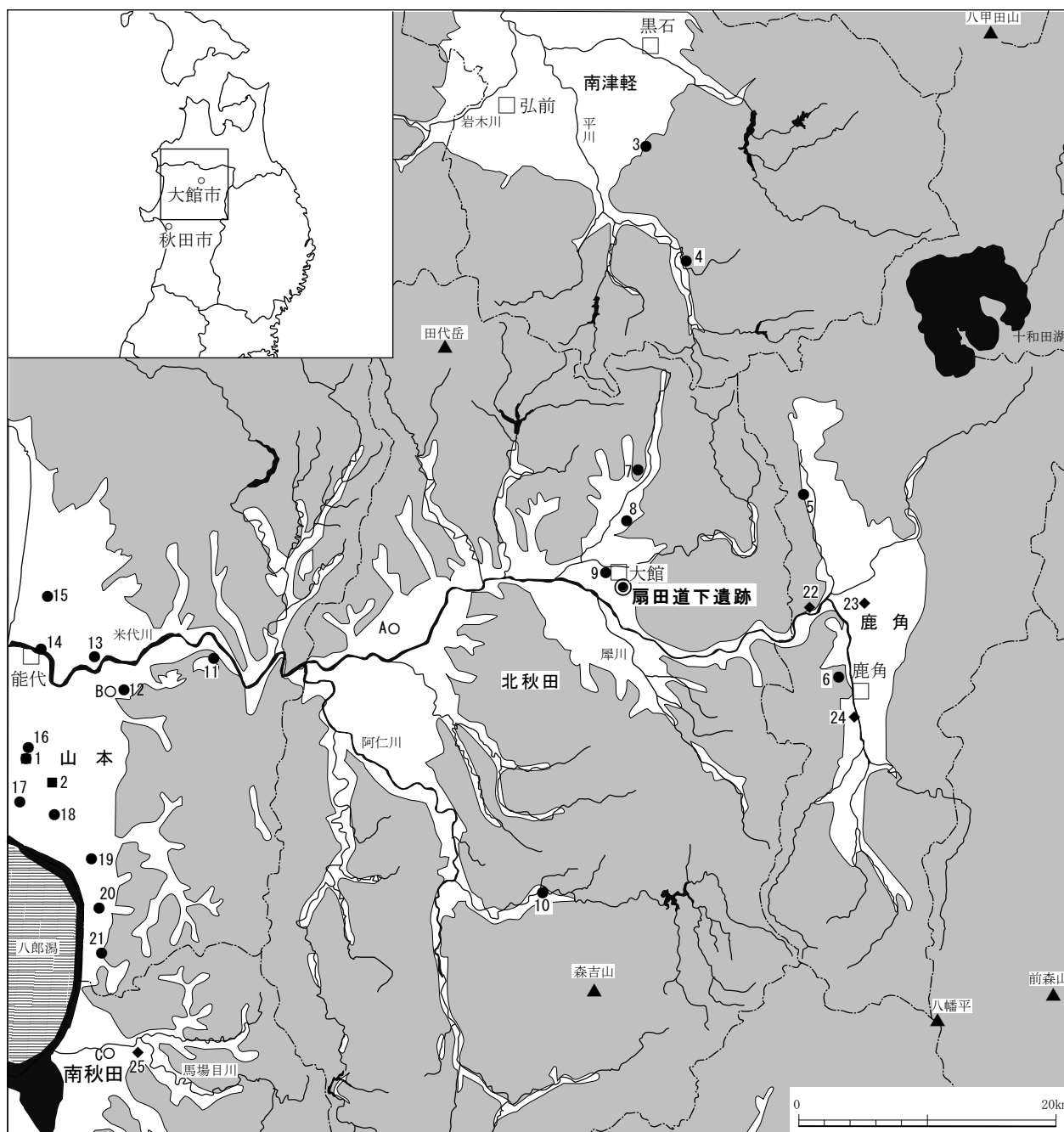
降水量の季節ごとの差は、真冬～初春にかけてが少なく、夏が多い。梅雨は入梅時の6月は雨量が少なく、梅雨明け間近の7月に集中する。一方、秋から冬にかけても雨量がやや多い。11月以降は日本海側特有のしぐれる日が多くなり、いったん天気が崩れると雨や曇が続く。

気温は1月が最も低く、8月が最も高い。また、1・2月には平均気温は氷点下を下り、冬日日数の平年値は年間133日あり、秋田市より48日、札幌市より8日多い。また終日氷点を超えない真冬日も、一年で19日程度ある。夏に気温が高くなるのは、梅雨明けの7月27日頃より後で、8月まで真夏日が20日程度ある。この時期に気温が上がらない場合、冷害となり、米の生産量は著しく減少する。例年の真夏の暑さは東京近辺よりは涼しく、その期間は短いといえるであろう。その一方、冬の寒さは秋田市よりも一段と厳しく、札幌近郊とあまり変わらない。

2. 地理的環境

扇田道下遺跡は、秋田県北部を横断する米代川の中流域、大館盆地の中央部にあり、米代川に平行して発達した段丘の東部に立地する。段丘上でも、段丘の頂部からやや南側に寄った部分で、段丘を開析する柄沢川に面している。標高は約67～69mである。以下に、遺跡をとりまく地形を概観する。

大館盆地は陥没盆地であり、平面形がほぼ二等辺三角形を呈する。盆地東縁は南北方向の大茂内断層が走り、西南縁は北西－南東方向の合地前田・一通断層が走り、盆地内には褶曲構造も多数知られ



(国土地理院20万分の1地勢図「弘前」「秋田」より作成)

- 凡 例
- 山地
 - ▨ 干拓地
 - 須恵器窯
 - 製鉄遺跡
 - ◆ 古 墳
 - 主要遺跡
 - おもな都市
 - 主要郡界 (明治期)

須恵器窯跡

1. 十二林 (能代市)
2. 保竜館 (三種町)

製鉄遺跡

3. 鳥海山 (青森県平川市)
4. 古館 (青森県平川市)
5. 白長根館 I (小坂町)
6. 堪忍沢 (鹿角市)
7. 大館野 (大館市)
8. 釈迦内中台 I (大館市)
9. 土飛山館 (大館市)
10. 地藏岱 (北秋田市)

11. 竜毛沢 II (能代市)
12. 鴨巣 I・II (能代市)
13. 中台 (能代市)
14. 平影野 (能代市)
15. 竹生 (能代市)
16. 寒川家上 A

- (旧寒川 II、能代市)
17. 中渡 (三種町)
18. 扇田谷地 II (三種町)
19. 泉沢中台 (三種町)
20. 般若台 (三種町)
21. 小林 (三種町)

古 墳

22. 石野 (鹿角市)
23. 枯草坂 (鹿角市)
24. 三光塚 (鹿角市)
25. 岩野山 (五城目町)

主要遺跡

- A. 胡桃館 (北秋田市)
- B. 大館 (能代市)
- C. 石崎 (五城目町)

第2図 遺跡の位置と環境

ている（後藤1998）。盆地の東側には、北から東股山、羽保屋山、高森、象ヶ倉山などの高森山地、竜ヶ森が連なり、市境となっている。そして、その西側で、第四系の白沢・釈迦内・大館に段丘が連なる。

盆地西縁は、北西－南東方向の褶曲構造をもった比内段丘と接し、その南西延長の山地の最も高いところに摩当山地をもつ。摩当山地は、大館盆地の南西部に接し、鷹巣盆地との境界をなしている。盆地北縁は白神山地から連なる山地からなる。

盆地中央には、膨大な量の土砂を運搬し、地盤の沈降と平行して厚い沖積層を堆積した米代川が流れ、日本海に注ぐ。米代川は、岩手県との境界をなす八幡平付近を源流とし、花輪盆地内で流れを西に変え、大館・鷹巣盆地を横断する。そして、盆地内には大量の火山灰層が堆積しているが、この火山灰層も、米代川の供給物と考えられる。

大館盆地内の米代川以北においては、長木川・下内川・山田川などが背後の山地から狭い盆地部に直接流れ出し、盆地北東部ではその山麓の谷口に扇状地を形成している。また、扇田道下遺跡に隣接する柄沢地区においても、扇状地が発達しており、本遺跡はその扇状地の西端に立地している。

3. 先史・古代の歴史的環境

(1) 縄文・弥生時代

前節で述べたように、この周辺には山地から張り出した、いくつかの段丘が存在する。市内に存在する縄文・弥生時代の遺跡の大半はこうした丘陵や台地上に立地しているが、特に河川に面した南側の沢沿いに多く存在する。長木川流域には諏訪台遺跡・塚ノ下遺跡、大館段丘には池内遺跡・山館上ノ山遺跡などがある。諏訪台遺跡は縄文後期・弥生前期、山館上ノ山遺跡は縄文前期（後半）～晩期で、この周辺の中心的遺跡である。

大館地方では縄文早期から弥生前期まで、まとまった資料がある。鷹ヶ長根Ⅳ遺跡（縄文早期）、萩ノ台Ⅱ遺跡（縄文前期～晩期）、池内遺跡（縄文前期後半）、寒沢遺跡（縄文中期後半）、本道端遺跡（縄文早期～晩期）などである。これらは、1980年代以降の発掘資料で、良好な資料が得られており、集落の実態が徐々に明らかになりつつある。

これらの資料からみると、縄文早期から弥生前期に至るまで、北海道南西部から青森県と共通した土器様相がみられることが注目される。このことは秋田県内における米代川流域の地域色を端的に示している。

前述した山館上ノ山遺跡の縄文土器は前期の円筒下層式土器として著名である。円筒下層式土器はその分布域が、岩手・秋田県の北半部に限られる。いわゆる円筒土器文化圏のことであり、この文化圏は弥生時代以降も引き継がれるのである。

(2) 古墳時代

古墳時代の秋田は大和政権下になく、該期の古墳は発見されていない。また、古墳時代の遺跡はそれほど多くは知られていない。発掘例も少なく、火内（現大館市）域においては片山館コ遺跡（弥生末

期～古墳前期）（大館市史編さん委員会1973 a）、川口十三森遺跡（弥生末期～古墳前期）（平成23年大館市教育委員会調査、未報告）などがあるにすぎない。これらの資料によれば、遺跡は米代川以北に立地し、前期に並行する続縄文文化（後北C₂・D式）期の遺跡のみである。川口十三森遺跡の発掘資料もあわせて、米代川中流域の火内地域には、北方系の続縄文土器が流入、定着していることが確認され、県北の他地域とほとんどかわるところはない。

資料が断片的で、詳細は不明ではあるが、米代川流域において弥生時代後期頃まで北方系の土器が卓越すると予想され、その後もそうしたあり方が継続するようである。なお、弥生時代末から古墳時代前期にかけての秋田県の土器は、北海道地方と共通する面が多い。

（3）奈良・平安時代

1）文献からみた秋田県北部地方

大館市は古代では中央政権の圏内には属していなかった。秋田県北部地方は具体的には北秋田郡・鹿角郡・能代・山本郡の地域をさすが、この地方は秋田のなかでも特異な歴史をもっている。すなわち、奈良・平安時代中期頃までは、秋田県北部は郡制が施行されなかった地域である。また、鹿角郡・北秋田（比内）郡は平安末期に陸奥国に所属し、地方行政組織も異なった時期がある。中世においても出羽とは異なり、独自の地域を形成していた。現在の方言も秋田県北部地方は県央部とは異なっており、北部でも鹿角地方は北秋田以西とは明確に異なっている。

出羽国の成立と秋田地方 出羽の起源は和銅元年に建郡された越後国出羽郡で、和銅5年には出羽国が建置されている。天平年間以降は、秋田県もその範囲に入った。国の領域が変動するのは対蝦夷の東北経営の進展によると考えられる。

出羽国の成立と領域変遷の過程を整理すると、次のとおりである。

- ①和銅元年（708） 越後国出羽郡建郡
- ②和銅5年（712） 出羽国建置。置賜・最上郡編入
- ③天平5年（733） 出羽柵を秋田村へ遷す
- ④天平宝字3年（759） 雄勝・平鹿郡設置。雄勝城造営
この頃、出羽柵を秋田城に改称
- ⑤8世紀末～9世紀初 秋田郡・河辺郡・山本郡設置

秋田郡以北の建郡の状況はよくわかっておらず、中世末期に後世の出羽国の領域が確定する。この間、かなり大きな変動がみられる。まず、①の段階の出羽の地域は、山形県の内陸（最上・置賜郡）を含まない地域で、庄内地方中心と考えられる。②の出羽国建置からまもなく、陸奥国最上・置賜二郡が出羽国に編入されているからである。出羽ではのちに③の出羽柵が秋田村へ遷され（後の秋田城）、さらに北方へ東北経営が進む。次の、④の雄勝・平鹿二郡の設置を経て、⑤の秋田・河辺・山本郡の設置へと至り、徐々に出羽国の領域が拡大していったことがうかがえる。

出羽国府は当初、庄内の出羽郡に置かれたと考えられているが、所在は不明である。その後、出羽柵が秋田へ遷った際に、国府機能も移転したかどうかについては諸説あるが、考古学的に古代の遺構が確認されるのは創建期の8世紀前半が最も古く、出羽柵が移転した8世紀中葉の時点で、実際に国

府として機能した可能性が考えられる。8世紀後半になると、秋田城周辺の蝦夷の反乱等により国府は移転を余儀なくされる。『続日本紀』によれば、宝亀6年(775)および宝亀11年(780)には国府を秋田城から河辺への移転が議論されている。また、『日本後紀』によれば、延暦23年(804)には秋田城が停止され、国府は河辺府へ移転されている。しかし、『日本三代実録』によれば、国府は延暦年中に出羽郡井口の地に遷され、仁和3年(887)には井口にあったとされる。この井口の国府は、山形県酒田市の城輪柵跡とされている。河辺府については、この井口の国府とする説や払田柵跡をあてる説などがあるが、現在のところ確定していない。『和名類聚抄』によれば、10世紀前半には国府は平鹿郡に存在したことが確認されるが、出羽郡にも「国府」とあって検討の余地がある(秋田市2001)。平鹿郡に出羽国府が置かれるのは、明確な時期は現在のところ不明である。また、実際に平鹿郡に置かれた出羽国府の遺構はいまのところ確定されていない。国府は最終的に庄内の城輪柵へ遷った。

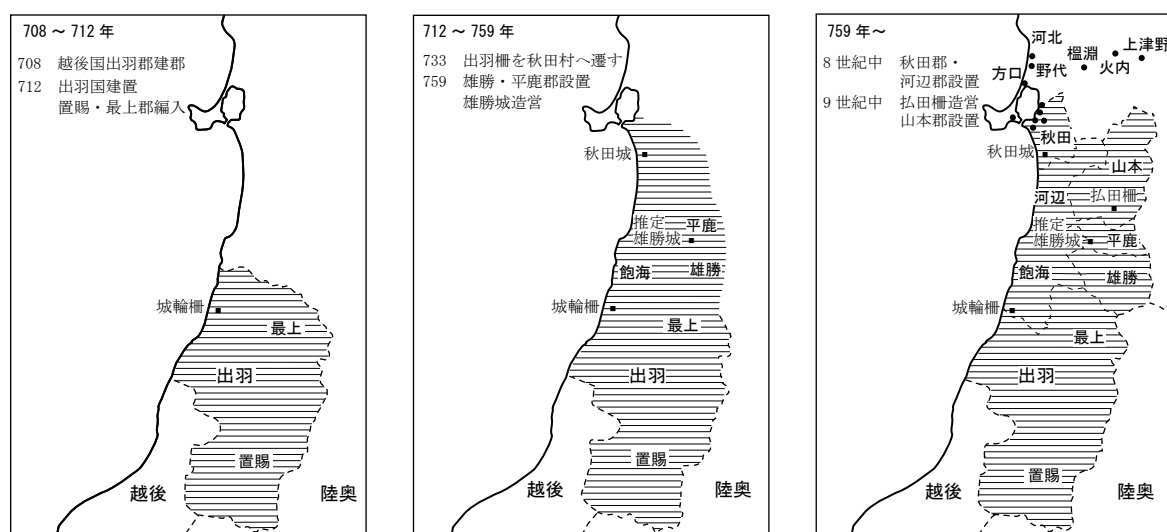
蝦夷の村々 秋田県北部地方の村々は『日本三代実録』によれば、蝦夷12村のうち、上津野・火内・^{のしろ}・^{かわきた}・^{かたぐち}・^{えつりだて}・野代・河北・方口の6村が存在していたとされる。これらの村名をみると、現在の地名と同じものがいくつかあることが注目される。すなわち、「上津野」は鹿角、「火内」は比内、「野代」は能代に対比でき、地名の出自をここに求めることができる。

さて、扇田道下遺跡が具体的にどこの村に比定されるかという問題であるが、「火内」が比内(大館盆地)に比定されることから、火内村であった可能性が高い。本遺跡周辺には古代の遺跡が多く確認されている。「火内」が具体的に大館盆地のどこを指すか断定できないが、9世紀後半の当地域の集落として、後述する池内遺跡と山王台遺跡(旧名。現在は餌釣館跡に包括)が挙げられる。

2) 遺 跡

消費遺跡

平安時代の遺跡は縄文時代に続いて、数多く分布している。遺跡は丘陵上や丘陵裾などに立地している。扇田道下の立地する段丘の南側は特に多く、この段丘につらなる米代川北岸側の山館・中山地区の段丘上も同様に多い。これまで秋田県北部地方の古代遺跡の調査例は数多く実施されている。県北部における調査は、胡桃館遺跡をはじめ数多く実施されており、枚挙にいとまがない。胡桃館遺跡は扇田道下遺跡と同時期の遺跡で、その内容については特に注目される。



第3図 出羽国の領域変遷と蝦夷の村々

胡桃館遺跡（第140図） 米代川北岸の沖積地上に立地し、10世紀初頭を中心とする遺跡である（独立行政法人 奈良文化財研究所2008）。昭和42～44年に秋田県教育委員会と鷹巣町教育委員会により、約430㎡が発掘された。調査により4棟の建物、掘立柱群2基と注目すべき遺物が検出された。掘立柱建物（B1建物）は桁行3間、梁間2間で、桁行3間、梁間1間の総柱建物（B3建物）もみられる。土台建物は2棟（B2・C建物）あり、C建物は桁行11.8m、梁間9mもある大型の建物である。出土遺物には多量の建築部材のほか、須恵器・土師器、特筆すべき墨書土器・木製品がある。木製品には「□□出□□出物名帳」の墨書のある木簡があり、墨書土器には「不」・「寺」がある。これらの資料は国の重要文化財に指定されている。時期は10世紀初頭から前葉までである。

この遺跡は扇田道下と近隣の地域にあり、両者の性格を考えると、きわめて有効な比較資料である。しかし、同じ10世紀前半の遺跡でありながら、遺構・遺物の内容にきわだった差がある。それは①竪穴住居、②墨書土器にあらわれている。胡桃館遺跡は竪穴住居が皆無で、少量の墨書土器が存在し、一般集落とは考えられず、官衙に関連した性格と考えられる。米代川北岸という立地は注目される。胡桃館遺跡以外の発掘資料には、池内遺跡（秋田県埋蔵文化財センター1997・1999）などがある。遺構は竪穴住居27軒が検出されており、9～10世紀代の土器が多量に出土しており、丘陵上に平安時代前期の集落が存在していたことを示している。

生産遺跡

須恵器窯跡 扇田道下遺跡の土器（須恵器・土師器）の編年・流通の問題については、北の須恵器生産の概略を含めて、後述する（第Ⅵ章）予定であり、ここではごく簡単に述べるにとどめる。秋田県における須恵器生産は8・9世紀を主体とし、一部10世紀に及ぶ。秋田県北部地方では、米代川河口南岸に若干の須恵器窯跡（十二林遺跡、保竜館遺跡）が存在するのみである。市内の出土品から、本遺跡周辺に未発見の窯跡の存在が想定される。

製鉄遺跡 秋田県北部には多くの製鉄遺跡がある。県内における製鉄遺跡は大館盆地内の台地のほか、鹿角市の丘陵、八郎潟東岸から米代川の河口域の段丘上に散在している。大館盆地内の釈迦内地区の段丘に立地する釈迦内中台Ⅰ遺跡は平成13～15・17年に調査され、竪型の製鉄炉が6地区から14基検出された。10世紀前半には操業し、終末は10世紀末頃と考えられる。鉄の原料は砂鉄であるが、扇田道下に供給されている鉄素材は周辺地域で生産されたものと考えられる。製鉄遺跡の分布からみると、鉄生産とその素材の供給・流通圏はある程度地域ごとにまとまっていたと考えられ、大館盆地内で生産された鉄素材は盆地内で供給していたとみられる。米代川の中流域の鷹巣地方は未発見だが、下流域の能代地方では八郎潟北東岸とそれぞれ生産地が存在していたであろう。

（4）扇田道下遺跡周辺の遺跡（第4図）

これまで、扇田道下遺跡周辺の遺跡にもふれながら、秋田県北部の歴史的環境を述べてきたが、ここでは特に、本遺跡周辺の遺跡について述べておく。

大館市内最古の遺跡は、唯一の旧石器時代の松木高館平遺跡（4-30）^{まつきたかだてひら}があり、ナイフ形石器と石刃の計6点が採集されている。これらのうち最大のものは長さ22.8cmもあり、全国的にもあまり例をみない大型の石器である。米代川流域では数少ない貴重な資料であることから、市の文化財に指定され

ている（大館市教育委員会2003）。

縄文時代の遺跡は約170か所あり、市内の各時代の遺跡では最も多く、発掘調査された遺跡も多い。米代川支流では、下内川流域に鍛冶屋敷遺跡（4-32）、長木川流域には諏訪台遺跡（4-51）と塚ノ下遺跡（4-53）が分布している。諏訪台遺跡では市内で数少ない後期初頭の集落跡が検出されている。塚ノ下遺跡からは、アスファルトが目にも充填された土偶が出土しており、全国的にも珍しいことから、秋田県の文化財に指定されている。

米代川流域では、北岸の丘陵南斜面に特に多く分布している。扇田道下遺跡が立地する大館段丘もそのひとつである。この段丘で最古の遺跡は縄文早期後半の根下戸道下遺跡である。根下戸道下遺跡は堅穴住居跡4軒、土坑33基などが検出されており、市内最古の集落跡である。米代川北岸では、1980年代以降、国道103号線の道路改良事業や曲田地区農免農道整備事業に伴い、秋田県教育委員会により、数多くの遺跡が発掘調査されており、貴重な成果が得られている。前者の事業では、萩ノ台Ⅱ遺跡（4-67）、池内遺跡（4-68）、山館上ノ山遺跡（4-71）で多量の土器・石器が出土している。池内遺跡と山館上ノ山遺跡は前期の大集落跡であり、池内遺跡では彫刻されたクルミや海産の魚骨が出土し話題となった。山館上ノ山遺跡からは、全国的にも珍しい鋒形石器が2点出土し、秋田県の文化財に指定されている。一方、後者の事業で発掘調査された曲田地区では寒沢遺跡（4-74）や中山遺跡（4-149）など、縄文後期の集落跡が検出されている。米代川南岸では、発掘調査事例が少ないが、本道端遺跡（12-19）がある。本道端遺跡は縄文前期末～中期末までの堅穴住居跡が24軒検出されている。

弥生時代の遺跡には諏訪台遺跡がある。古墳・奈良時代の遺跡は周辺にはない。遺跡が多くなるのは平安時代である。米代川とその支流に面した段丘に点在しており、段丘上に数多く集落が営まれたことがわかる。前述した開発などに伴う発掘調査例が数多くあり、製鉄遺跡としても知られる釈迦内中台Ⅰ遺跡や土飛山館跡（4-45）のほか、塚ノ下遺跡、池内遺跡、餌釣館跡（旧山王台・山王岱遺跡）、餌釣遺跡、上野遺跡など多数存在する。遺跡の多くが9世紀後半から10世紀代であることからみると、この周辺の丘陵上の遺跡の時期的なあり方は注目される。このほか、沖積地に埋没した遺跡が存在することも考えられる。

扇田道下遺跡は調査区内においては10世紀後半には廃絶し、近代に至るまでの約1,000年間はまったく無住の地であった。本遺跡周辺の11世紀後半以降の古代末・中世の遺跡は現在のところ中世城館の

第1表 周辺の遺跡一覧（次頁第4図と対照）

4-24. 釈迦内中台Ⅱ遺跡（古代）	4-62. 稲荷中岱遺跡（古代・中世）	4-124. 岩神遺跡（縄文）
4-25. 釈迦内古館跡（中世）	4-63. 太平山遺跡（縄文晩）	4-140. 扇田道上遺跡（古代）
4-26. 釈迦内館跡（中世）	4-64. 小館花館跡（古代・中世）	4-141. 小館町遺跡（縄文）
4-29. 高館跡（中世）	4-65. 扇田道下遺跡（縄文中・後・古代）	4-142. 蛇沢口遺跡（縄文・古代）
4-30. 松木高館平遺跡（旧石器）	4-66. 萩ノ台Ⅰ遺跡（縄文中・後）	4-143. 諏訪台Ⅱ遺跡（縄文）
4-31. 松木遺跡（縄文前）	4-67. 萩ノ台Ⅱ遺跡（縄文前・中・後・晩）	4-144. 餌釣遺跡（縄文・古代・中世）
4-32. 鍛冶屋敷遺跡（縄文・古代・中世）	4-68. 池内遺跡（縄文・古代）	4-145. 上野遺跡（縄文中・古代）
4-45. 土飛山館跡（古代・中世）	4-69. 餌釣館跡（縄文・古代・中世）	4-149. 中山遺跡（縄文後）
4-46. 大館城跡（江戸）	4-70. 山館跡（古代・中世）	12-17. 長岡城（中世）
4-47. 金坂遺跡（古代・中世）	4-71. 山館上ノ山遺跡（縄文前・中・後・晩・古代）	12-18. 市川遺跡（古代）
4-48. 青嵐亭跡（江戸）	4-72. 竜毛岱遺跡（縄文中・後）	12-19. 本道端遺跡（縄文早・前・中・晩）
4-49. 芦田子上岱遺跡（縄文前・古代）	4-73. 兎沢遺跡（縄文）	12-27. 片貝遺跡（縄文晩）
4-50. 大茂内遺跡（縄文前・中）	4-74. 寒沢遺跡（縄文中・後）	4. 大館市地区
4-51. 諏訪台遺跡（縄文・古代・中世）	4-76. 野沢岱Ⅰ遺跡（縄文早・前）	12. 比内町地区
4-53. 塚ノ下遺跡（縄文後・古代）	4-94. 二井田館跡（中世・近世）	
4-54. 茂内遺跡（縄文前）	4-118. 宮袋遺跡（縄文晩）	



第4図 周辺の地形と遺跡分布図

国土地理院 1957年発行をもとに作図
大館 1:50000→1:40000

みであるから、この時期のおもな居住地はその周辺にあったと考えられる。律令期から王朝国家期に至る集落のあり方はこの周辺の丘陵の遺跡からみて、扇田道下遺跡の終末期頃を境とし、画期があるようである。この点については市内の古代遺跡の消長もあわせて第Ⅵ章5で後述する。

4. 近世・近代の扇田道下

近世にあって、扇田道下遺跡のある大館市周辺は久保田藩領に属していた。久保田藩は慶長7年に佐竹義宣が徳川家康より国替えを命じられ、常陸より出羽へ入部したことにより成立した。領地は雄物川・米代川の流域に広がり、周囲は山林が多くを占め、その範囲は広大なものであった。領地支配にあたっては、支城として北部の大館城と南部の横手城にそれぞれ城代を置いた。対津軽・南部の要衝である大館城には従弟の^{おぼ}小場義成を城代に任命し、支配に当たらせている。大館の町は、小場氏（三代目以降、佐竹氏）により、大館城を中心とする城下町として発展した。大館盆地の中央を米代川が流れているが、かつてこの川を境に北側が北比内、南側が南比内と呼ばれていた。北比内は大館城代、南比内は十二所城代の管轄であった。大館と十二所の間に商人町として扇田村がある。この扇田と大館を結んでいた街道が扇田道であり、本遺跡の字名から付近を通っていたものと推測される。

近世には全国的に多くの新耕地が開墾され、ほぼ現代の村落景観が完成する。扇田道下遺跡周辺にも近世に成立した新田村が多い。元和偃武以降、對外戦争の危機がなくなった幕藩領主は自藩の年貢増徴をめざして大規模な治水事業に着手し、新耕地の開発を積極的にすすめていった。一方、中世末より広範に自立・展開しつつあった小農民層の耕地獲得要求も強まり、その結果多数の新田村落が成立していった。この空前の新田開発ブームはとりわけ近世前半期に大きな山をむかえる。秋田にあっても例外ではなく、寛永2年（1625）から享保14年（1729）までの間に17万1千石余の新田開発を見た。米代川流域地域を有する比内郡域でも新田開発を進め、初代大館城代の小場義成の5,000石から三代義房では1万3千石にまで達した。正保4年（1647）の出羽一国御絵図（第5図）によれば、大館段丘の南側に、池内新田、^{こだてばな}小館花新田、根下戸新田などがみえる。これらは近世初期に開拓された新田村と思われる。一方、近世の扇田道下は無住の地のままであった。

近代になると、戊辰戦争が勃発し、東北地方も戦渦に巻き込まれた。奥羽越列藩同盟を離脱した久保田藩に対し、南部藩が宣戦布告をし、大館地方も戦場となった。南部軍は鹿角街道口などから攻め入り、十二所の茂木軍、大館の佐竹軍を破り、十二所、扇田の町は灰燼に帰してしまった。その後、扇田道を通り、大館方面へ進軍する南部軍は、大館軍と山王台で交戦し、勝利をおさめ、山王台に本陣を構える。さらに進軍する南部軍は、柄沢付近で大館軍と激戦となった。戦いに敗れた佐竹大和は大館城に火を放った。こうして、小場義成が初代城代として入城して以来、11代260年余の間続いた大館城も落城した。敗走する大館軍は町にも火を放ち、大館の町もほぼ全焼してしまった。その後、大館軍は政府軍の援軍を得て大館を奪回するも、大館・扇田・十二所の町は焼き尽くされており、多大な犠牲を払うこととなった本遺跡付近は近代の幕開けとなるこの出来事の舞台ともなったのである。

ところで近世以前の扇田道はどうだったのであろうか。現在は、それを知る手がかりはない。しかし、扇田道下遺跡の初期と同時期の山王台遺跡が扇田道に面して分布していることから、古代から両遺跡をつなぐルートとしての古代扇田道が存在していた可能性は十分に考えられよう。



第5図 正保4年出羽一國御絵図（秋田県公文書館蔵）

第Ⅲ章 調査の方法

1. 調査の方法

調査地の現況 扇田道下遺跡は前述したように、東西方向にのびる丘陵の南東側に立地しており、調査地はその南東半部にあたると考えられる。調査地内は小さな起伏があり、標高は南側の川縁辺が約67mで最も低く、中央から北部の旧共同墓地の部分が約69mで最も高い。南側の川に近い部分は比較的傾斜が急であるが、ほかには小さな起伏がみられる程度である。調査地は大館市扇田道下に所在し、宅地はまったくなく、市農林課の果樹試験農園が大半で、一部が共同墓地となっていた。調査地の北東側にかけてはかつてブルドーザー等によって高い部分を削平したと聞けるが、その規模は明らかでない。ただ調査地内の層序からみれば、畑などの造成によって、削平された部分はかなり広いと考えられるが、地形を大きく改変した状況ではないと思われる。調査地内には何本かの道路が存在する。

グリッドの設定 (第6図) グリッドは4m方眼で、調査対象地内の全域をカバーできるように設定した。南北方向は遺跡東部を通る道路(旧扇田道)に平行に設定した。グリッドの南北方向は、磁北から10度30分東偏する。

グリッドの呼称は、旧扇田道の路線に平行する東側から西側へは、数字の1～48、それに直交する方向の北から南へは、アルファベットのA～Z、a～oとし、両者の組み合わせによって、「1-A」・「2-B」のように表示した。グリッド設定にかかる杭の打設は市土木課に依頼した。

調査方法 調査の基本工程は、①基本層序の確認、②表土・包含層発掘、③遺構検出・精査、④実測・写真である。

①基本層序の確認 基本層序は表土・黒褐色土・十和田a火山灰層・暗黒褐色土・地山となるが、明瞭に包含層と判断されるものは少ない。地山上には一部やや固い漸移層がみられる。

②表土・包含層発掘 調査区南東部から始めたが、遺構・遺物の出土が少なかったことから、重機(バックホー)により表土を除去した。包含層の発掘は人力である。人力による排土は一輪車で発掘区外へ運搬した。

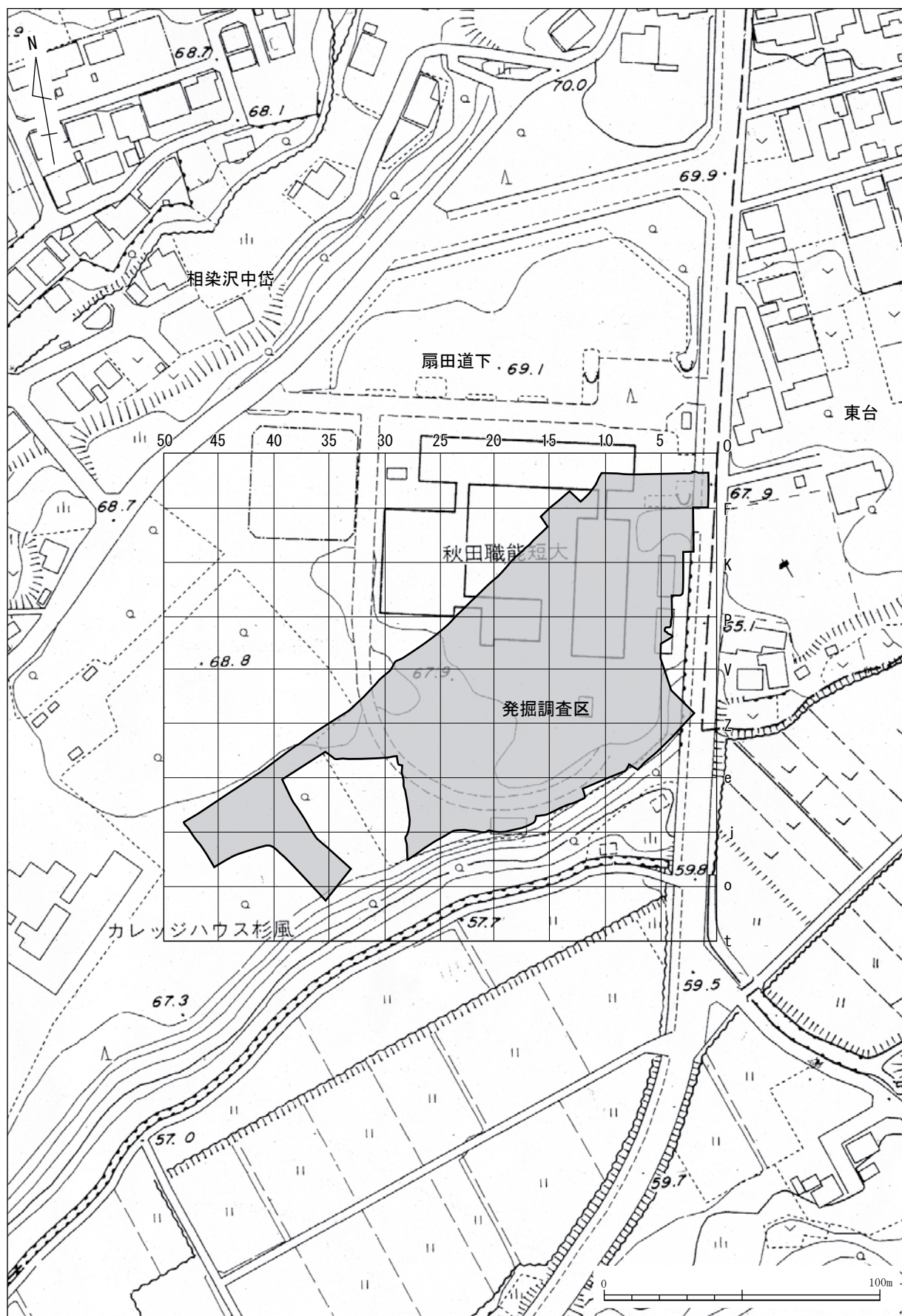
③遺構検出・精査 包含層の発掘の後、遺構検出にとりかかる。検出された遺構に番号を付し、発掘する。遺構番号は種別ごとに付した。種別はSI(竪穴住居)、SB(掘立柱建物)、SK(土坑)、SD(溝)などである。

④実測・写真 遺構の実測は平断面図1/20、カマドの平断面図が1/10とした。

竪穴住居の発掘方法 遺構の中心になる竪穴住居跡はまず、①検出しプランを確認した後、「+」字状にアゼを設定する。②カマドをのぞいて平面的に分層しながら掘り下げる。まとまった遺物をこの段階でとりあげる。③アゼの実測・写真の後、アゼを除去。④実測。⑤カマドの調査。トレンチによる断面観察、出土土器の実測など。

東部に攪乱が著しく、多くの竪穴住居で攪乱を受けているような状況であった。断面観察などはこの攪乱坑も有効に利用した。

掘立柱建物の発掘 掘立柱建物は発掘前に全体のプランを把握した例は多くなく、いくつかの柱穴



大館市都市計画図
1993年測図 1:2500 → 1:2000

第6図 調査地区と周辺の地形

を掘った段階で確認したものが大半である。柱穴が切り合っている例は少なく、発掘は平面的に少しずつ掘り下げて、柱痕跡の確認をしたのち、完掘した。おおむね、柱穴底面に柱のくぼみが存在し、これより柱の位置を把握したことが多い。

写真 写真はカラー・スライドと白黒の２種類を使用した。35mmカメラで、28mmと35mmレンズを用いた。

2. 整理作業

(1) 遺 物

出土遺物の大半は土器で、そのうちでも平安時代の須恵器・土師器が主体を占める。土器以外では鉄製品が少し出土しているが、木製品はない。

土器 出土した土器はまず基礎整理として、袋ごとに①洗浄、②注記、③分類する。洗浄は須恵器・土師器を一緒に行った。注記は基本的に白色のポスターカラーを使った。注記の文字にはニスを塗った。分類は遺構と包含層（グリッド）に分け、それぞれ遺構・グリッドごとにまとめた。遺構のうち、遺物量がまとまっているのは竪穴住居である。接合は基本的に遺構ごと1グリッドごとに行い、切りあった遺構などについても接合のチェックをしたが、それ以外のものについては原則的に接合のチェックはしていない。石コウ復元は実測・観察の障害になるため、最小限にとどめ、実測後に保存と写真撮影を考慮し、復元を追加した。実測は、竪穴住居の土器を中心に行い、出土量や出土状況を勘案して、可能な限り図化するものと、代表的なもののみ図化するものに分けた。

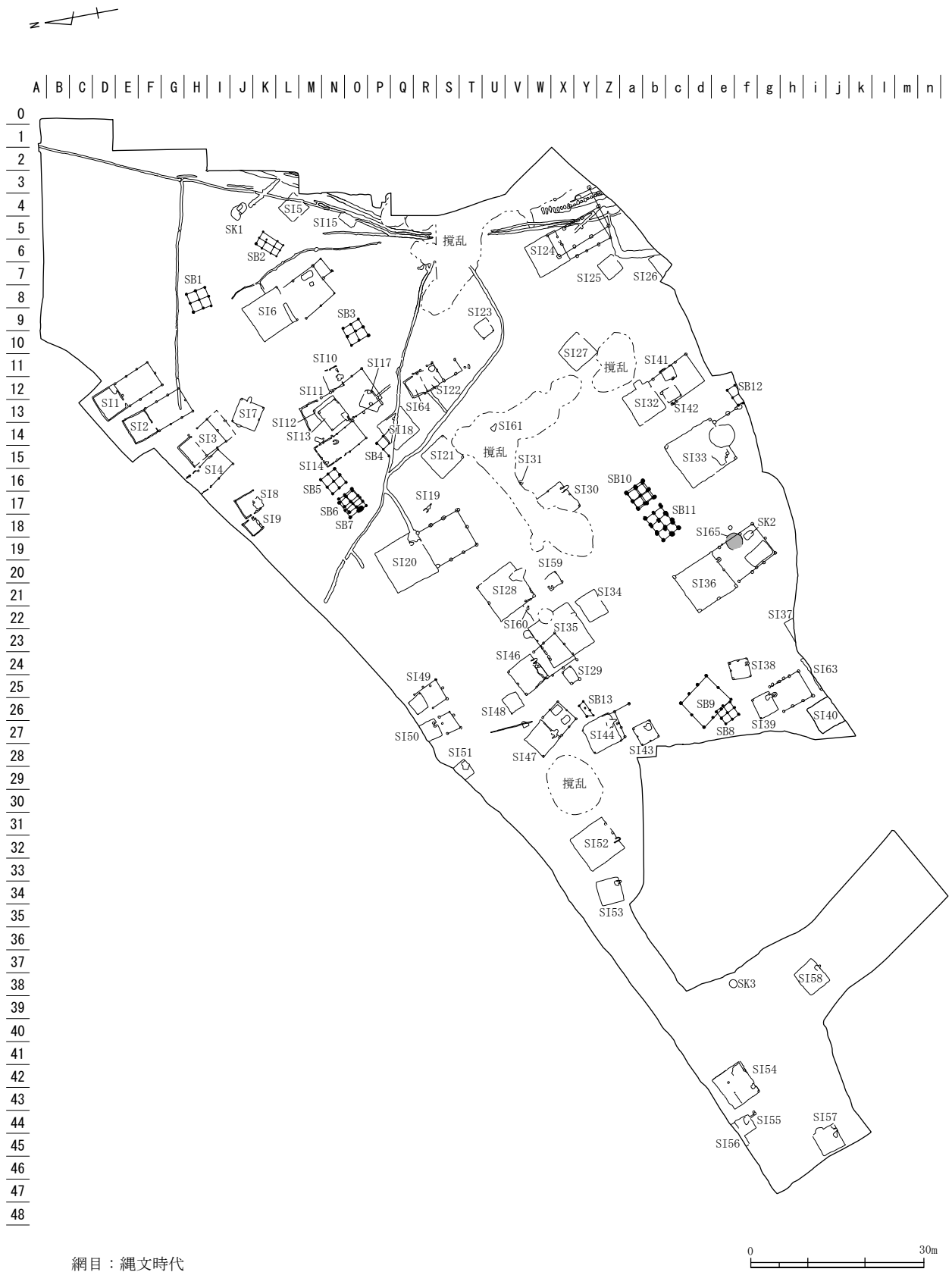
なお、土器復元作業では、高橋昭悦氏（大館市文化財保護指導員）に御協力いただいた。

鉄器 鉄器はあまり出土していない。保存処理は行っていない。鉄器および鉄関連遺物整理・分類指導は、穴澤義功氏に委託し、分類、代表遺物の選別、遺物の方向の指示、分析遺物の選定、分析カードの作成指示などを指導していただいた。

(2) 図 面

現場で作成した遺構実測図はA2版用紙で約230枚の量にのぼった。実測図はグリッドごとの平面図（1/20）と断面図（1/20）・微細図（1/10）等に分けており、それぞれに通し番号を付し、台帳を作成した。図面はトレースを考慮して第2原図を作成した。

遺構実測図は1/40～1/80と1/200の２種類を作成した。前者は竪穴住居などの主要遺構のみで、1/200図は全体を13ブロックに分割したもので、すべての遺構を記入した。遺構の断面図は、最小限にとどめた。その他詳細については第Ⅳ章にて述べる。



第7図 遺構配置概略図

第Ⅳ章 遺 跡

1. 概 要

遺跡の時期は縄文時代、平安時代の二つに大別される。このうち縄文時代は竪穴住居が1軒のみで、遺物の出土量もごく少ない。主体となるのは平安時代である。部分的に時代ごとの包含層が分離していたが、ほとんど同一平面上に重複するものが多い。検出された平安時代（9・10世紀）のおもな遺構は竪穴住居約60軒と掘立柱建物13棟である。

縄文時代 遺構は竪穴住居1軒のみである。18・19-e・f区にある。出土土器の時期は前期中葉から晩期前葉である。全体を合わせても遺物の出土はごく少ない。縄文土器は小破片がほとんどで、石器も剥片を含めて7点を数えるにすぎない。時期のおおよそわかる土器は、前期中葉～晩期前葉の時期である。竪穴住居以外の遺構は明確でなく、遺物の出土状況からみてもほかの竪穴住居などの居住施設が調査区内に存在したとは考えられない。

平安時代 遺跡の主体をなす時期である。検出された遺構は竪穴住居約60軒、掘立柱建物13棟、土坑2基のほか、多数の溝・ピットがある。これらは調査区全体にわたり多く分布する。

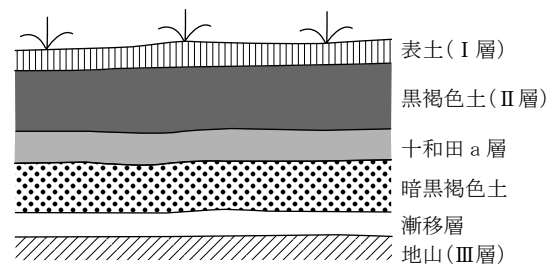
竪穴住居はすべて方形プランで、規模は一辺3m以下のものから一辺8mのものまでである。多くは一辺5m以下である。竪穴住居のカマド主軸方位は北西－南東方向に偏向するものが多い。深さは5～54cmである。竪穴住居には掘立柱建物が連結しているものも多数みられる。南東側にカマドをもつのが一般的である。カマドは土に粘土を混ぜてつくっており、土師器の甕などを芯に入れているものが多い。竪穴には明確な床面が確認できなかったものがある。壁溝もすべてにみられるものではない。埋土で特徴的なのは十和田a火山灰二次堆積層とみられる乳白色の細粒火山灰層が堆積していることである。掘立柱建物は総柱建物と側柱建物がある。調査区の北東部に比較的集中する。総柱建物は2間×2間の規模が多い。束柱をもたないものは梁間2間、桁行は3間～4間である。

出土土器の年代は9世紀後葉から10世紀前半までであり、調査区内の遺構の時期もこれと一致すると考えられる。土器のほかには、鉄器が少量ある。

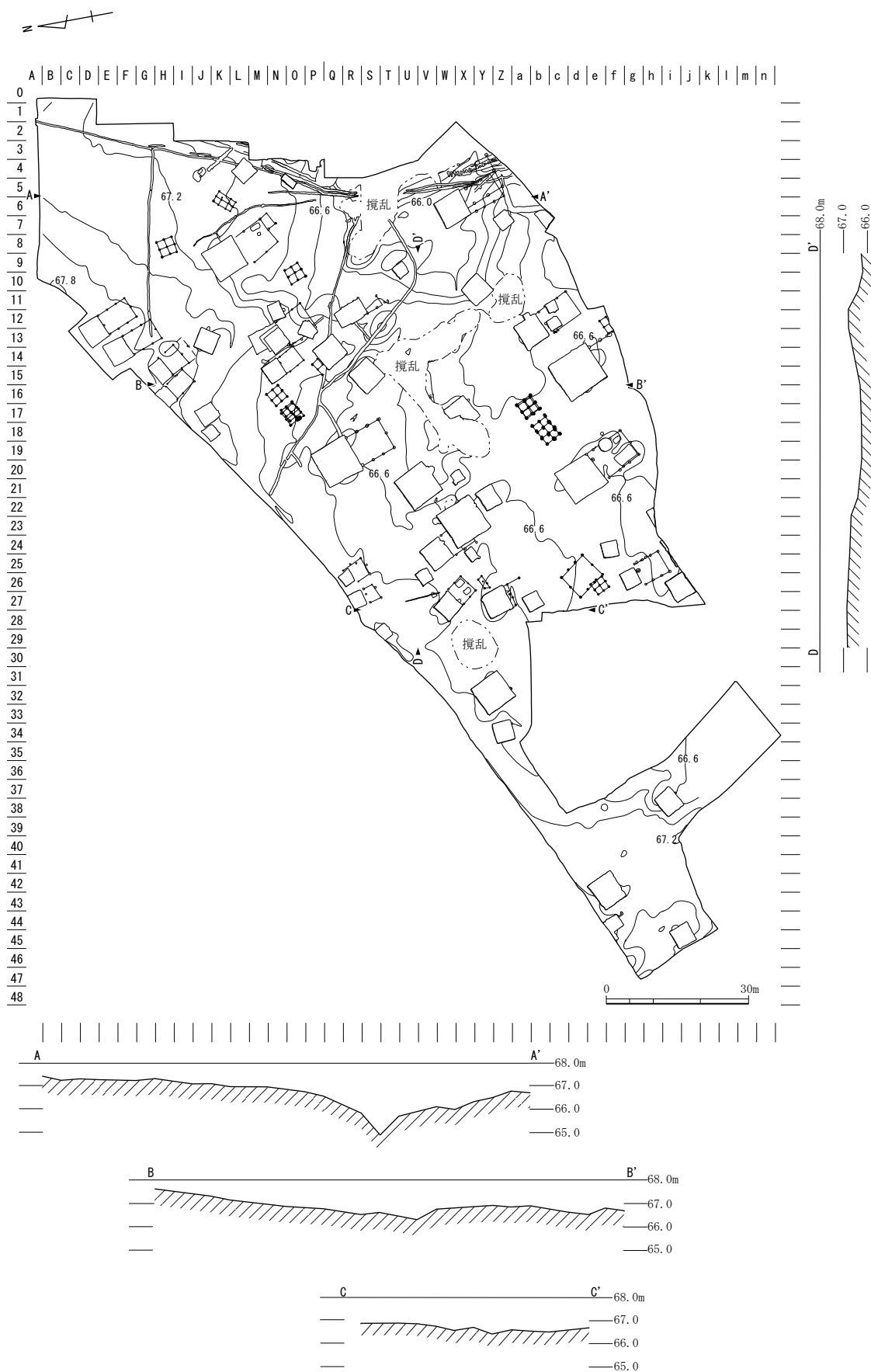
2. 層 序（第8・9図）

発掘区内は高低差が1～2mの起伏をもった段丘で、南側は川に落ち込む。東半部は攪乱が著しく、旧状をとどめた部分は多くはない。攪乱は部分的な乱掘坑によるものである。高い部分はおおむね削平されている。

基本層序は①表土（Ⅰ層）、②包含層（Ⅱ層）、③地山（Ⅲ層）に大別される。①表土は黒褐色土で、10cm程度である。高い部分は薄く、低い部分は厚い。②包含層が遺存していたのは攪乱されていない低い部分および調査区



第8図 基本層序



第9図 地山面の地形

西部である。包含層は墓地の攪乱が及んでいない28-T付近では3層に分離していた。その下層は黒褐色土層で、若干の縄文土器片と炭片を含む。中層は十和田a火山灰。Ⅱ層は黒褐色土層で、平安時代の遺物を含む。下層・中層はよくしまっており、下層はⅡ層に比し、色は暗い。地山は黄褐色土である。削平されて包含層が存在しないところでは、表土の直下は地山となる。

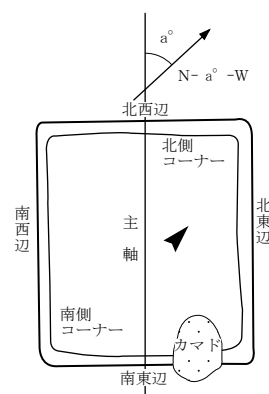
3. 検出遺構と出土遺物

(1) 記述にあたって

ここにとりあげる遺構は、おもに竪穴住居と掘立柱建物・土坑である。以下、個別に記述するが、これらの記述にあたっての一応の基準と、使用する語句や数値の意味、実測図の表現方法などについて、あらかじめ述べておく。この基準は『山三賀Ⅱ遺跡』（新潟県教育委員会1989）にしたがったが、本遺跡に当てはまらないものは除外した。なお、遺構の種別は「竪穴住居」・「掘立柱建物」・「土坑」などとし、あえて「竪穴住居跡」のように「跡」を付していない。これはすべての遺構は原則として何らかの痕跡、「跡」であり、特にいちいち付す必要はないと考えるからである。

竪穴住居（第10図）

- ① 位置はグリッドで示す。複数のグリッドにわたる場合は、それぞれ記したが、わずかな部分は省く。
- ② 重複する場合の新旧関係は、「切る」、「切られる」と表現し、「AがBを切る」と表現すれば、AがBより新しいことを意味する。切り合い関係の把握に及ばなかったものは不明とする。
- ③ 主軸はカマドのある辺とその向かい側の辺（対辺）とに直交する。方位は北から東西に偏する角度（ a° ）を「 $N - a^\circ - W$ （またはE）」と表現する。多くの場合は西に偏している。なお、グリッド方向は北から約10度東偏している。
- ④ 住居の四辺の呼称は方位にしたがう。主軸の偏向角度が30度以下の場合は南北と東西を組み合わせ「南東辺」・「北西辺」などとする。この場合、四辺のコーナーは「南側コーナー」・「西側コーナー」とする。
- ⑤ 平面形の長さ・深さの寸法は確認面からである。面積は四角形として計算したもので、細部は考慮していない。平面形は正方形ではなく、長方形のものがある。この場合はそれぞれの長さを示した。平面形に若干の歪みがあるものも多く、部分的に異なるものもある。
- ⑥ カマドについての「左右」・「前後」の表現は、竪穴内からカマドにむかっての位置を示す。カマドの寸法も確認部分のものである。
- ⑦ 柱穴の番号は付していない。
- ⑧ 埋土は時期決定の要素となる「乳白色火山灰層」の有無に重点をおいた。なお、「埋土」は遺構内に入っていた土である。いわゆる「覆土」と同じ意味であり、人為的に埋めた土を意味するものではない。

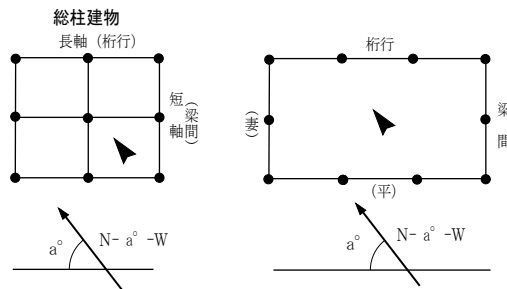


第10図 竪穴住居の概念図

⑨ 平安時代の時期（Ⅰ～Ⅱ期）は土器（第Ⅵ章2）の時期を示す。

掘立柱建物（第11図）

- ① 掘立柱建物の用語については建築史の分野の用語を使うのが通例である。しかし、それらの専門用語は建築の知識のないものにとっては難解なものが多い。ここでもなるべく通例にしたがって、使用したつもりではあるが、根本的な認識の誤りも多いと思われる。
- ② 柱間の多い部分（原則として長軸）の柱の間を「桁行」、柱間の少ない部分（原則として短軸）の柱の間を「梁間」とする。「梁間」は「梁行」と同じ用語である。2間×2間の場合などはこの区別ができないため、「桁行」・「梁間」は使用しない。しかし、柱間が同じでも建物の平面プランが正方形ではなく、長軸・短軸の区別できるものは、これを使う。建物の方向は長軸を基本に示す。
- ③ 建物の内側にも柱穴があり、これが側柱を結ぶ線の交点に位置する場合は「総柱建物」という。当遺跡の掘立柱建物の大半は総柱建物である。
- ④ 柱穴の径・深さは確認面からのおおよその数値である。
- ⑤ 面積は長軸と短軸の乗数を示した。



第11図 掘立柱建物概念図

遺構実測図について

遺構実測図は1/200の全体図と1/40～1/80の個別図がある。個別図は竪穴住居・掘立柱建物と土坑のみ抽出した。全体図は遺構の存在する範囲を、多少の重複部分をとって13葉に分割した。それぞれの図の位置関係を第12図に示し、それぞれの挿図にも略図を示した。発掘区の範囲は、下端の部分を直線で結んだ。多数存在する攪乱は二点鎖線で示した。カマドは外側の輪郭のみを記した。断面図は任意の位置（直線で示す）を選び、作成した。

個別図は竪穴住居・掘立柱建物・土坑ごとに分けたが、重複するものはその限りではない。おもな遺物の出土地点は黒丸等で平面図に示した。断面図は方向を統一させるため、原図を反転したのものもある。

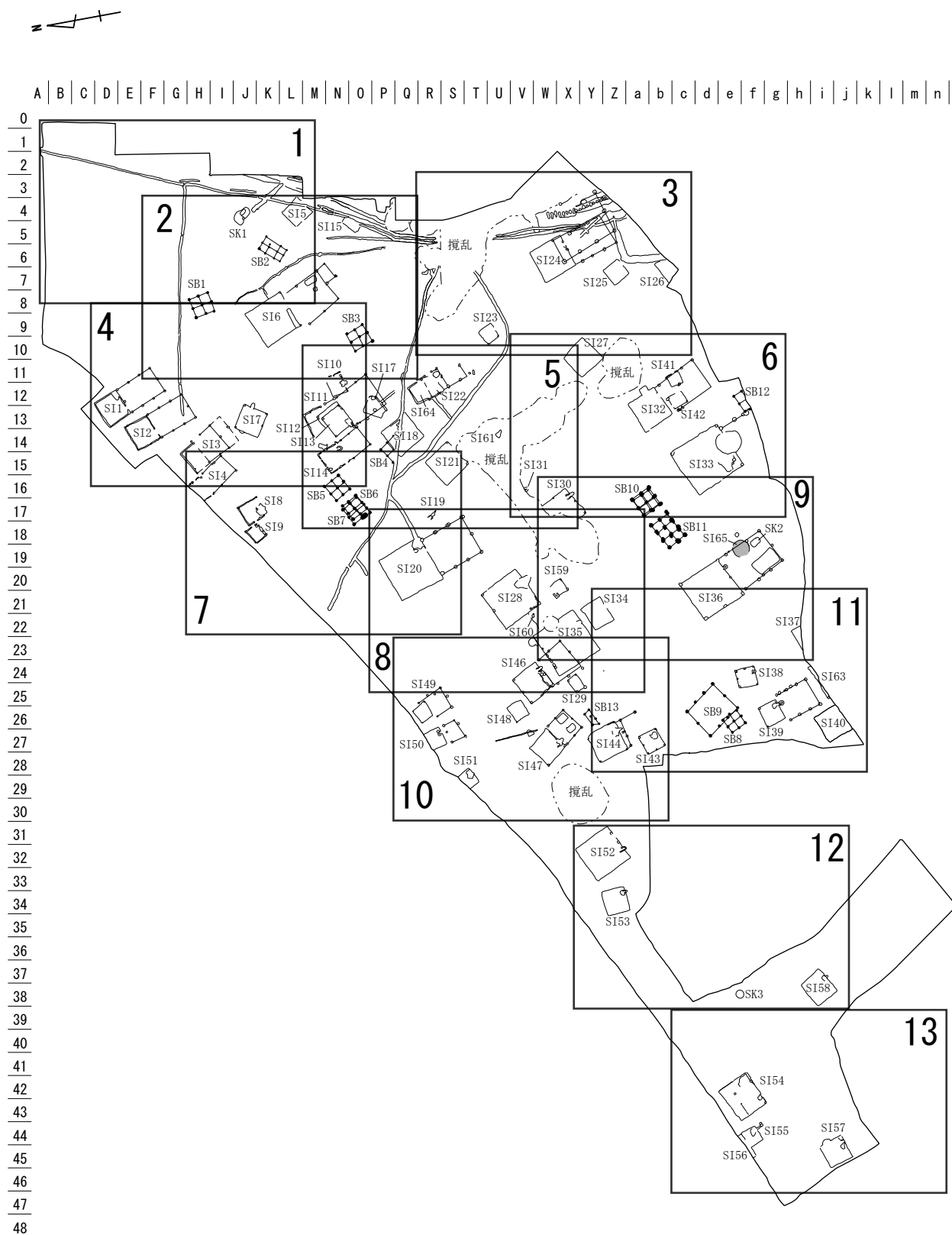
(2) 縄文時代

1) 遺構

SI65（第26図）

位置 18・19－e・f区。SI36に切られる。

遺構 平面形は円形。規模は上端が2.9×2.8m、下端（床面）が2.8×2.7mである。小型の住居跡であ

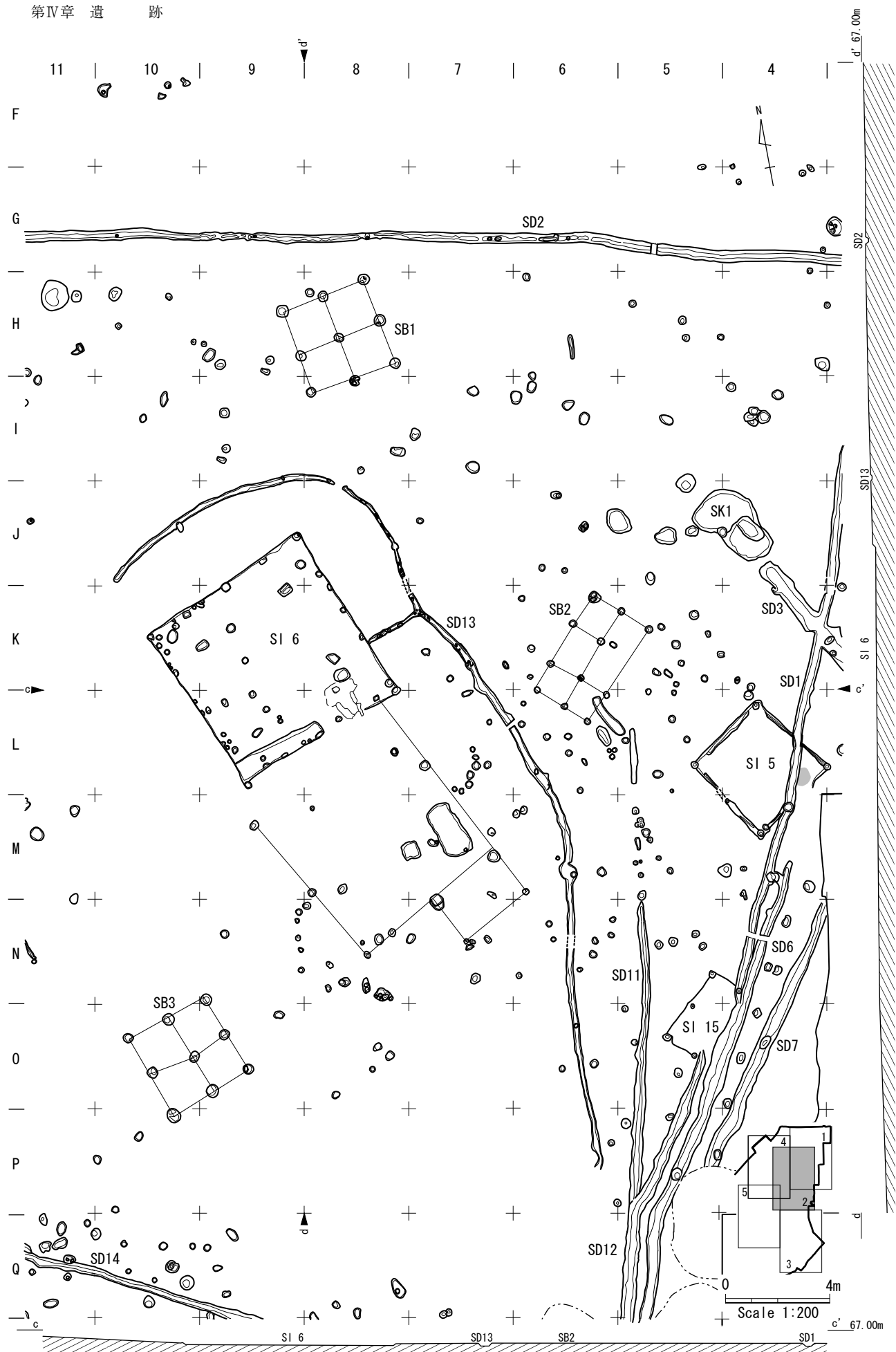


網目：縄文時代

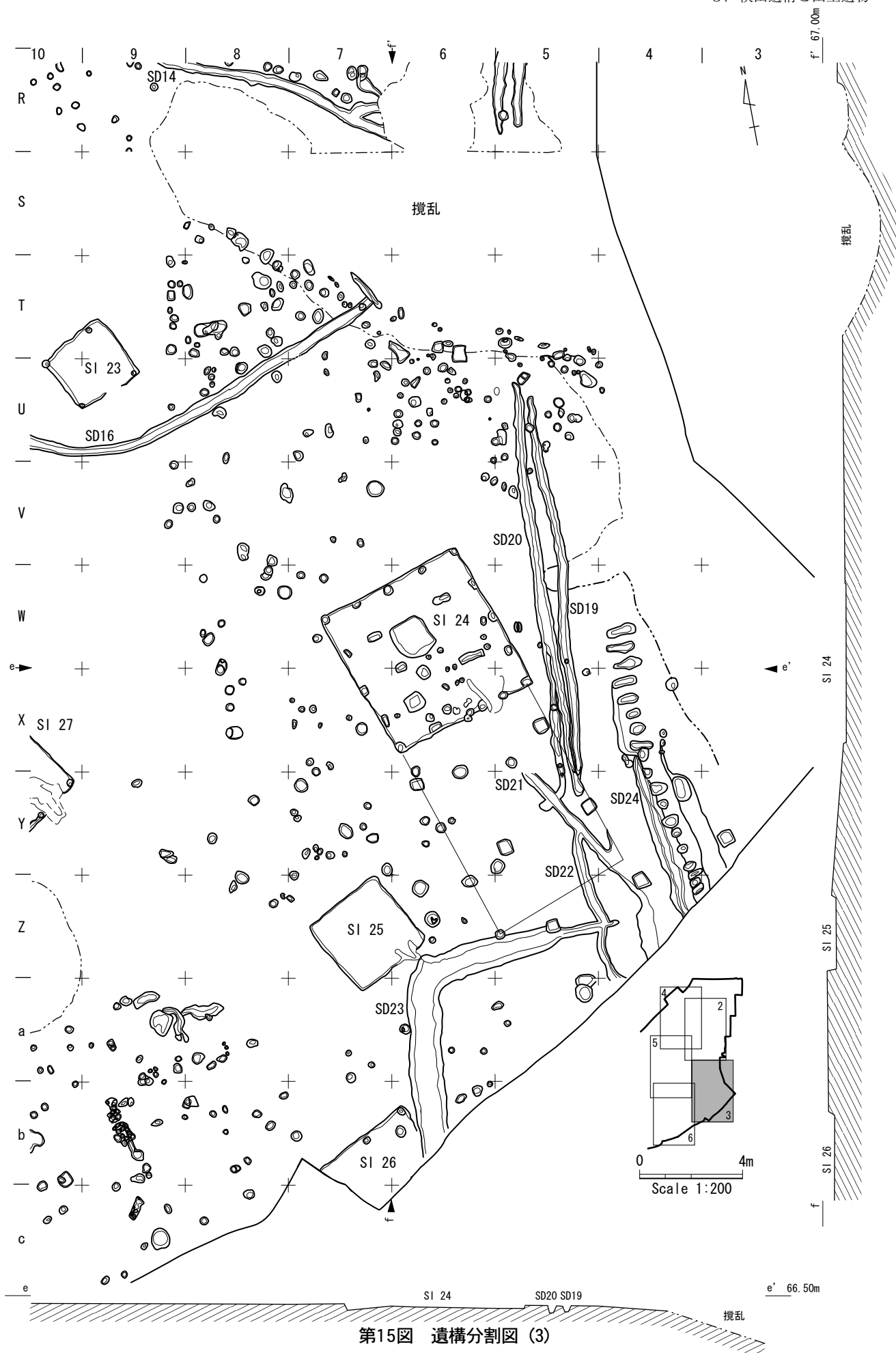
第12図 遺構全体図（1～13の割付図）



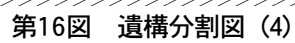
第13図 遺構分割図 (1)

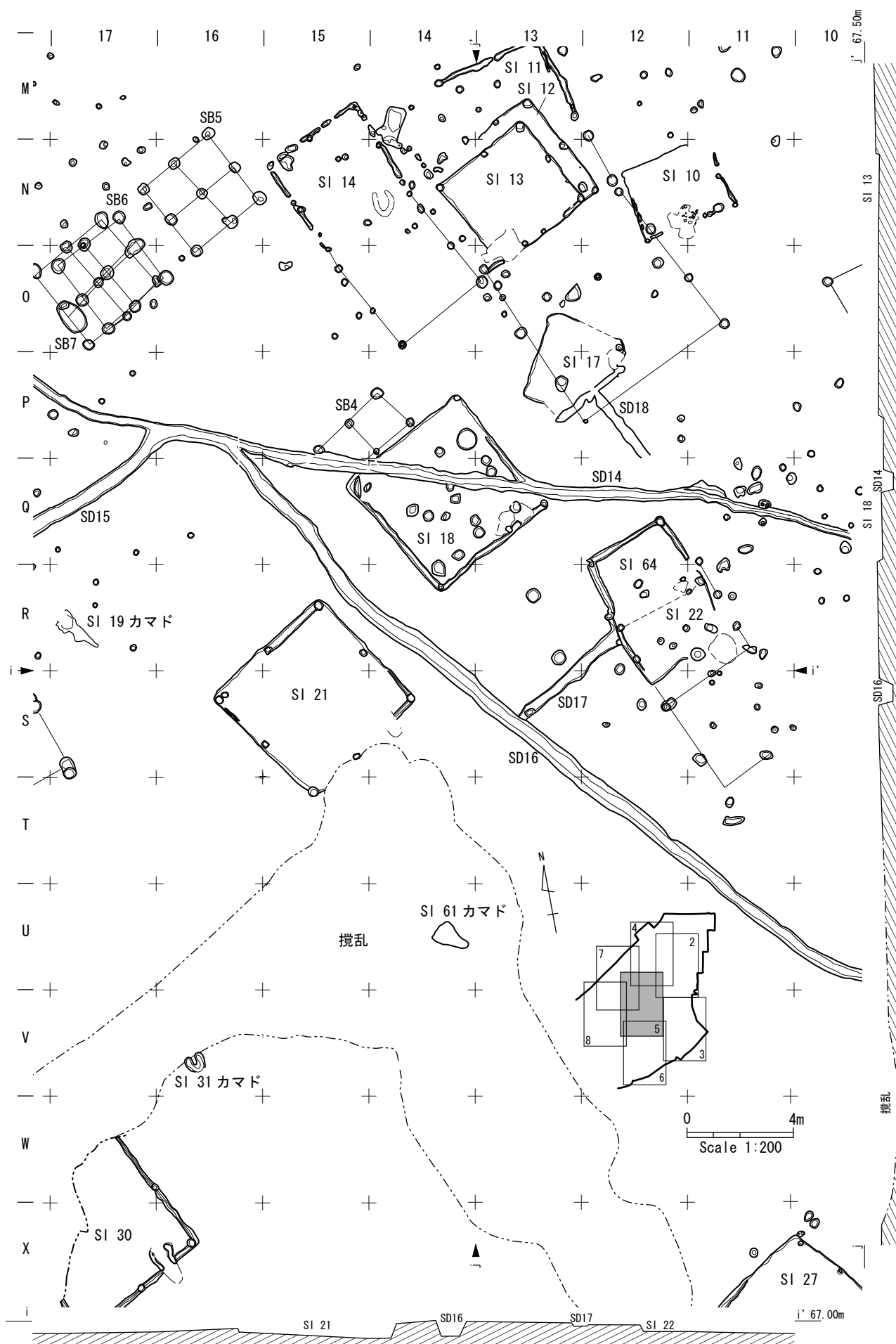


第14図 遺構分割図 (2)

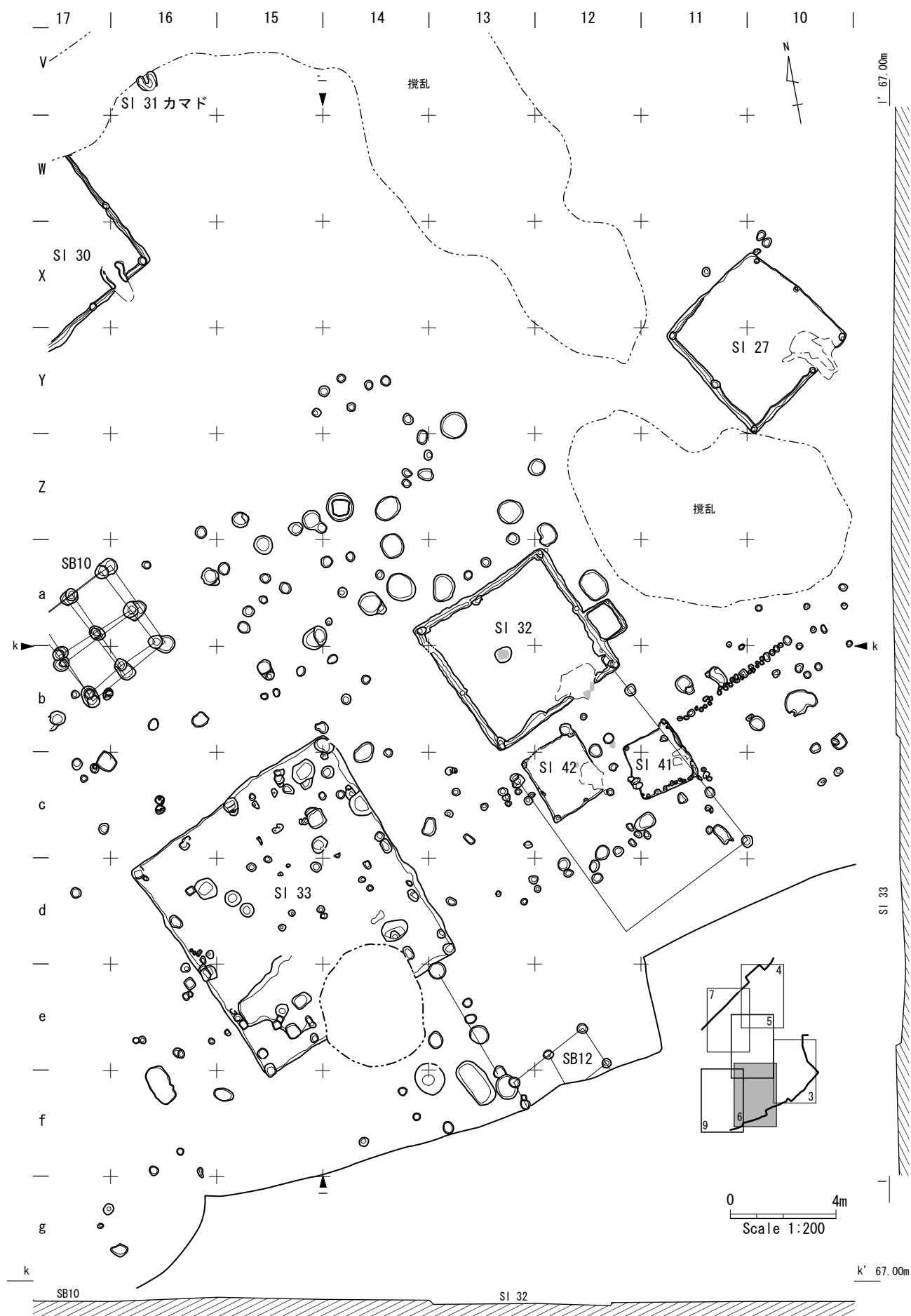


第15図 遺構分割図 (3)

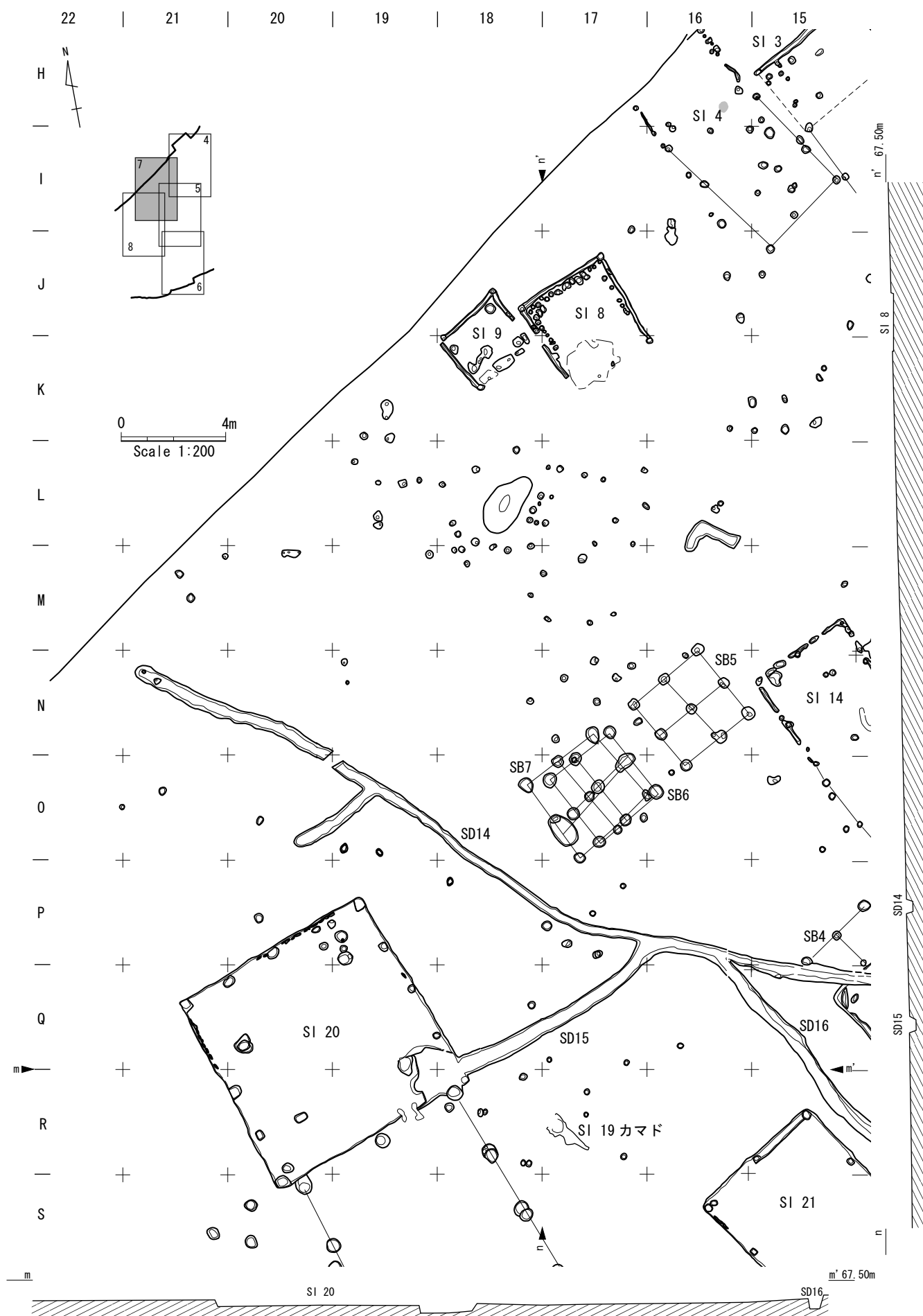




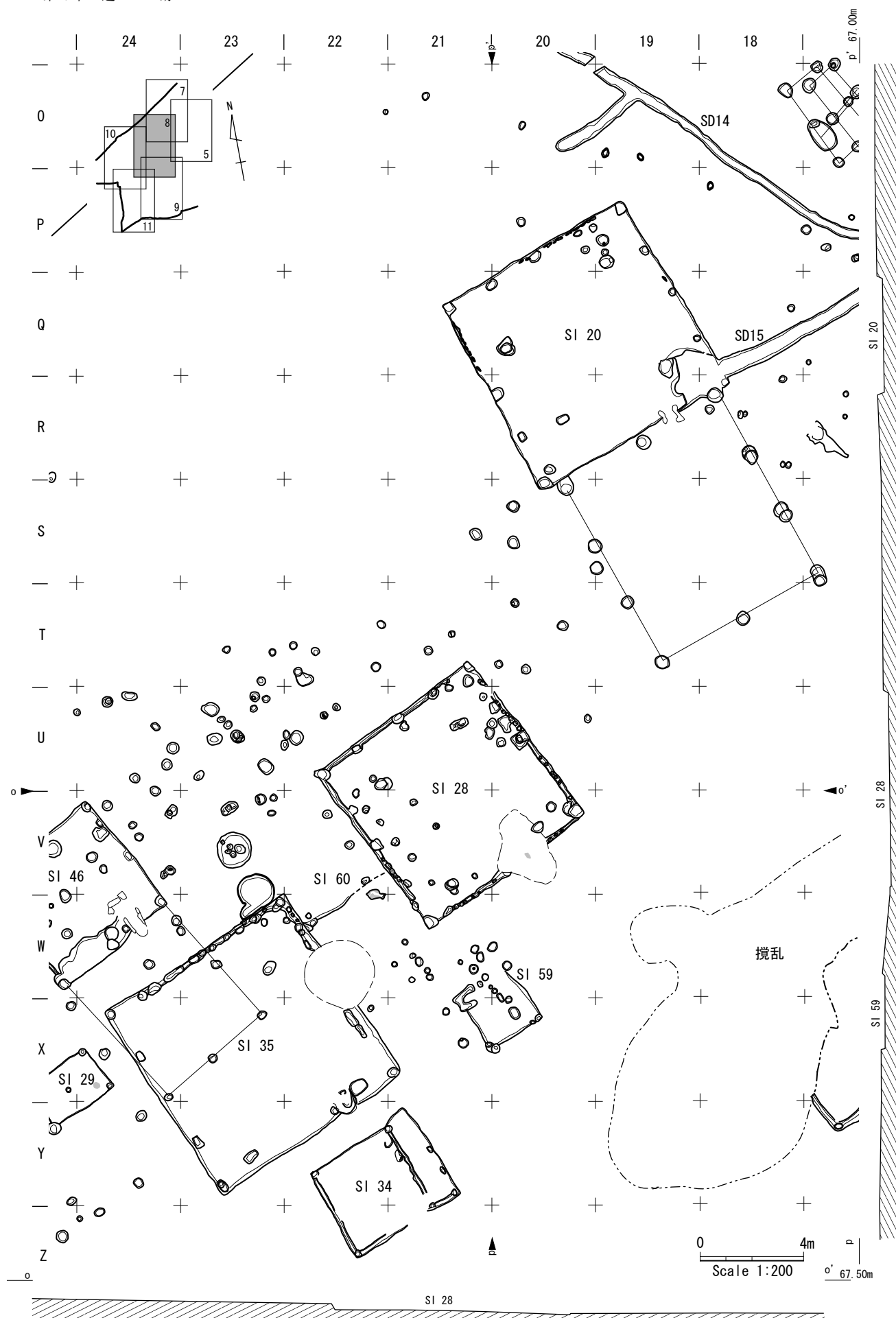
第17図 遺構分割図 (5)



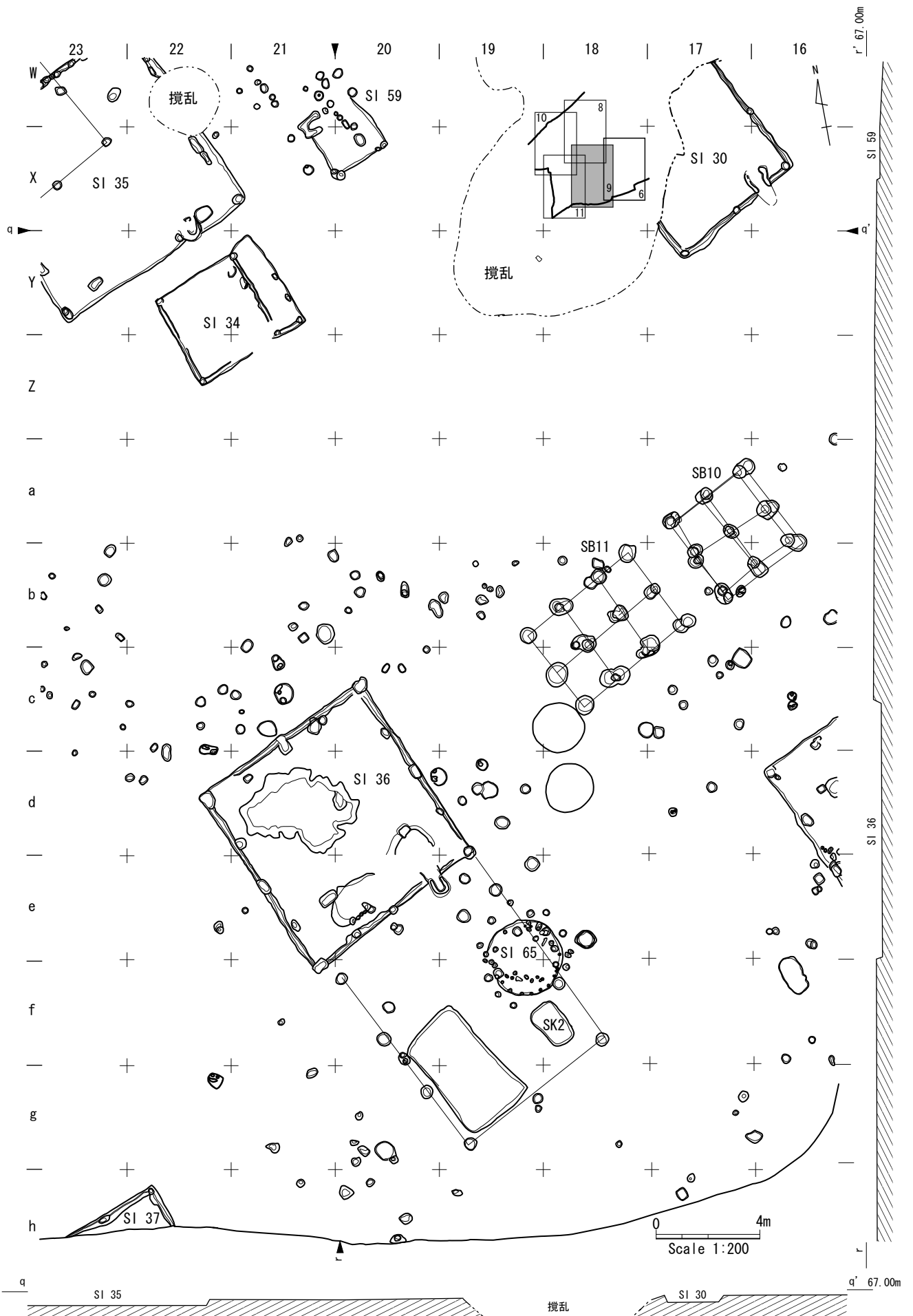
第18図 遺構分割図 (6)



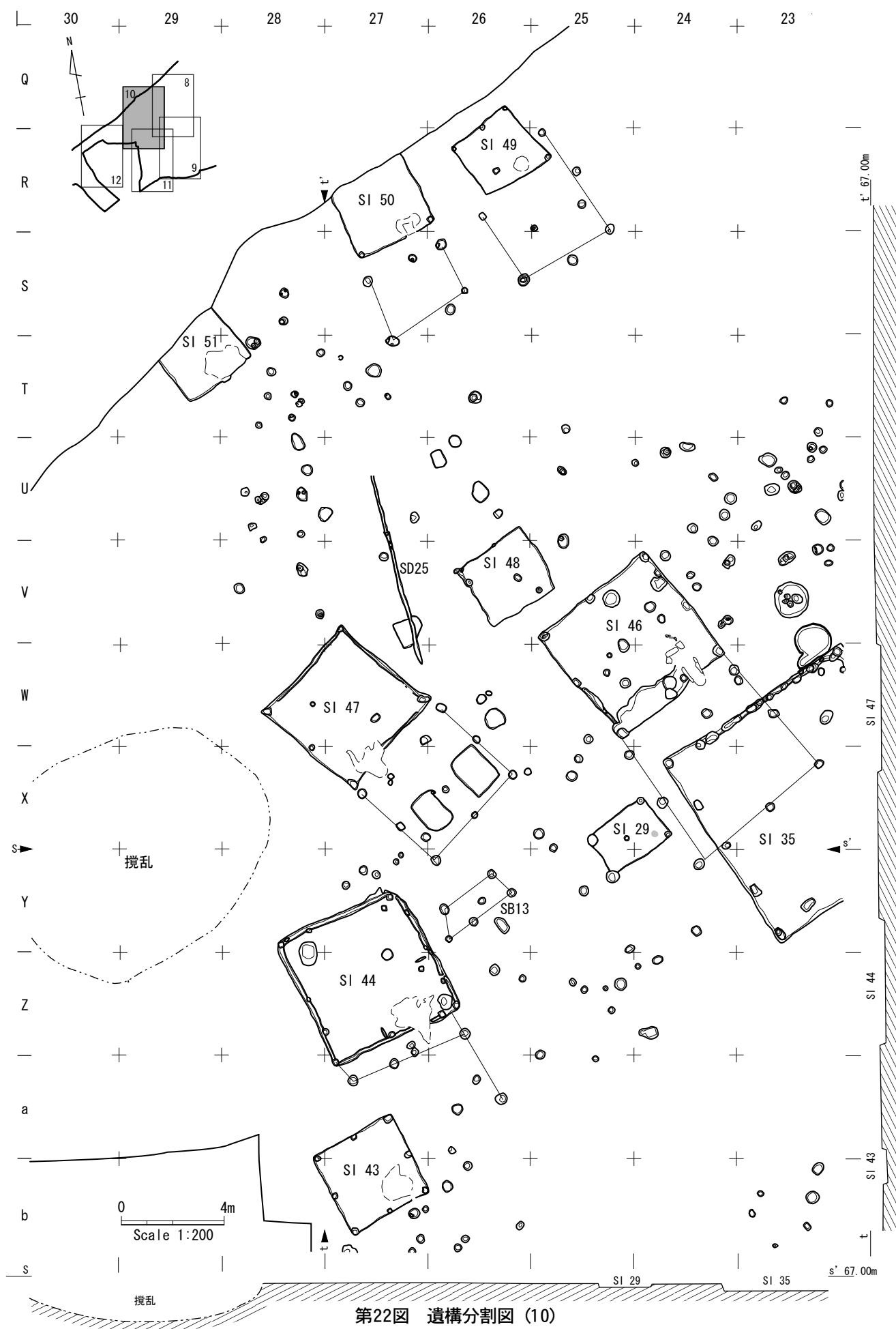
第19図 遺構分割図 (7)



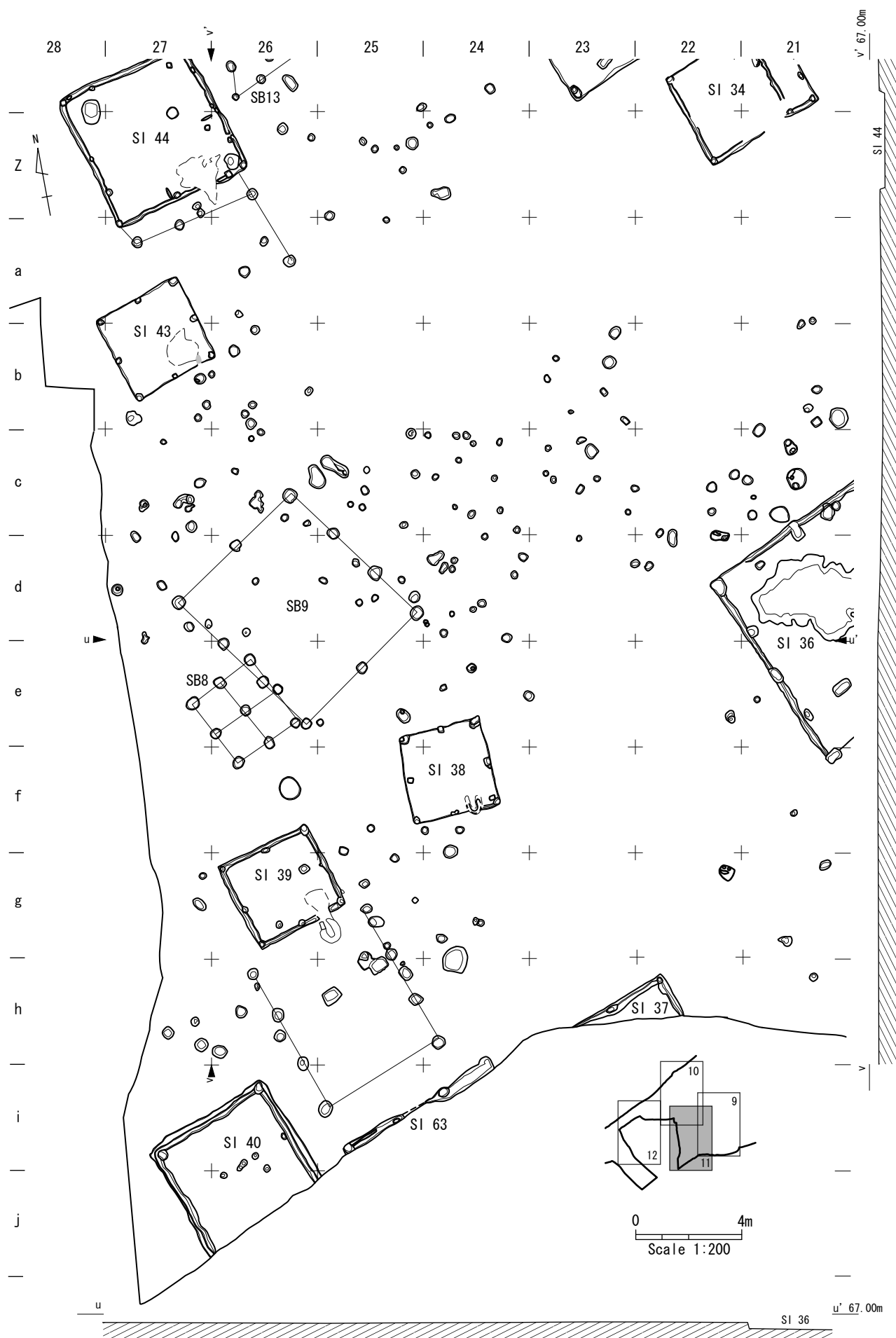
第20図 遺構分割図 (8)



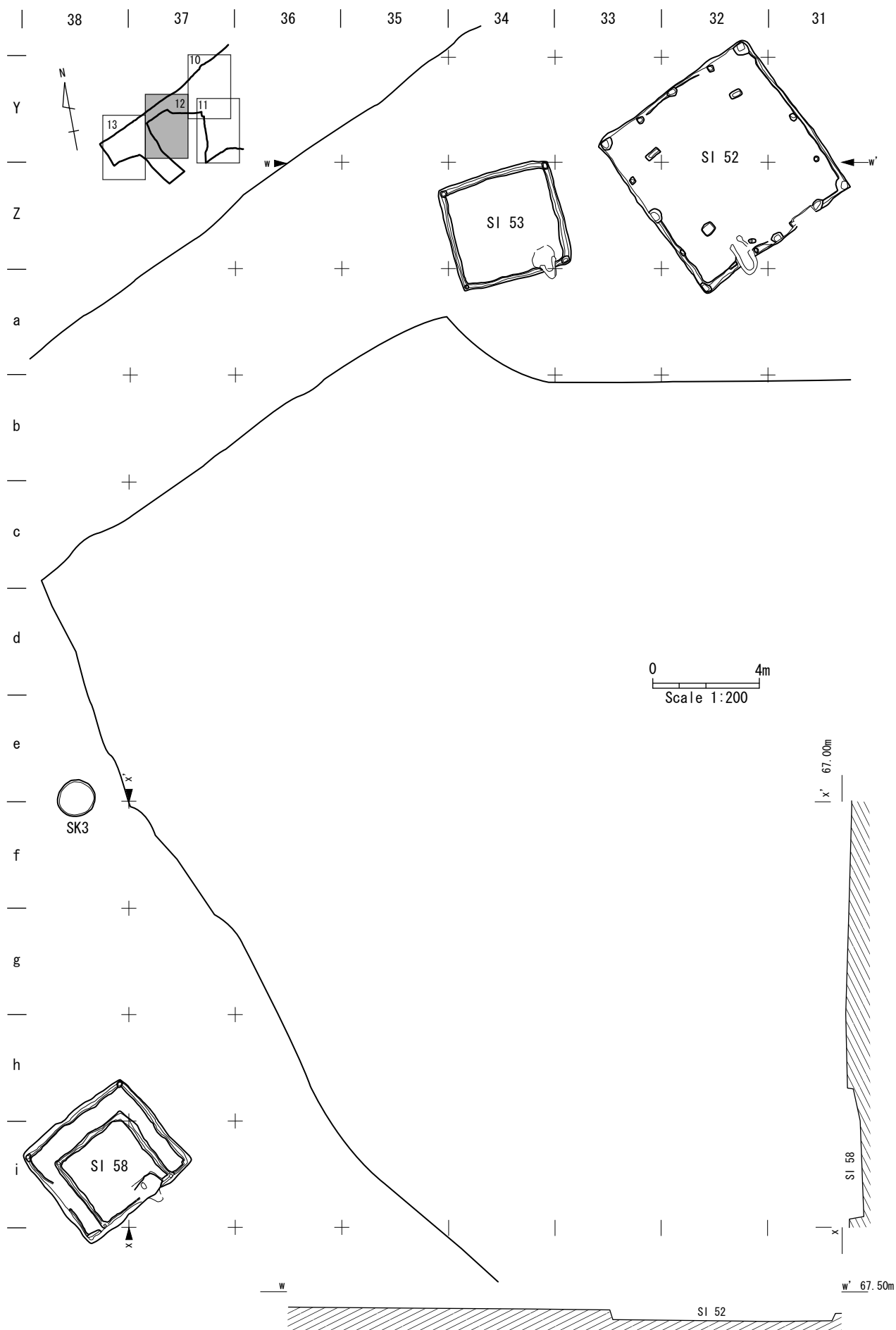
第21図 遺構分割図 (9)



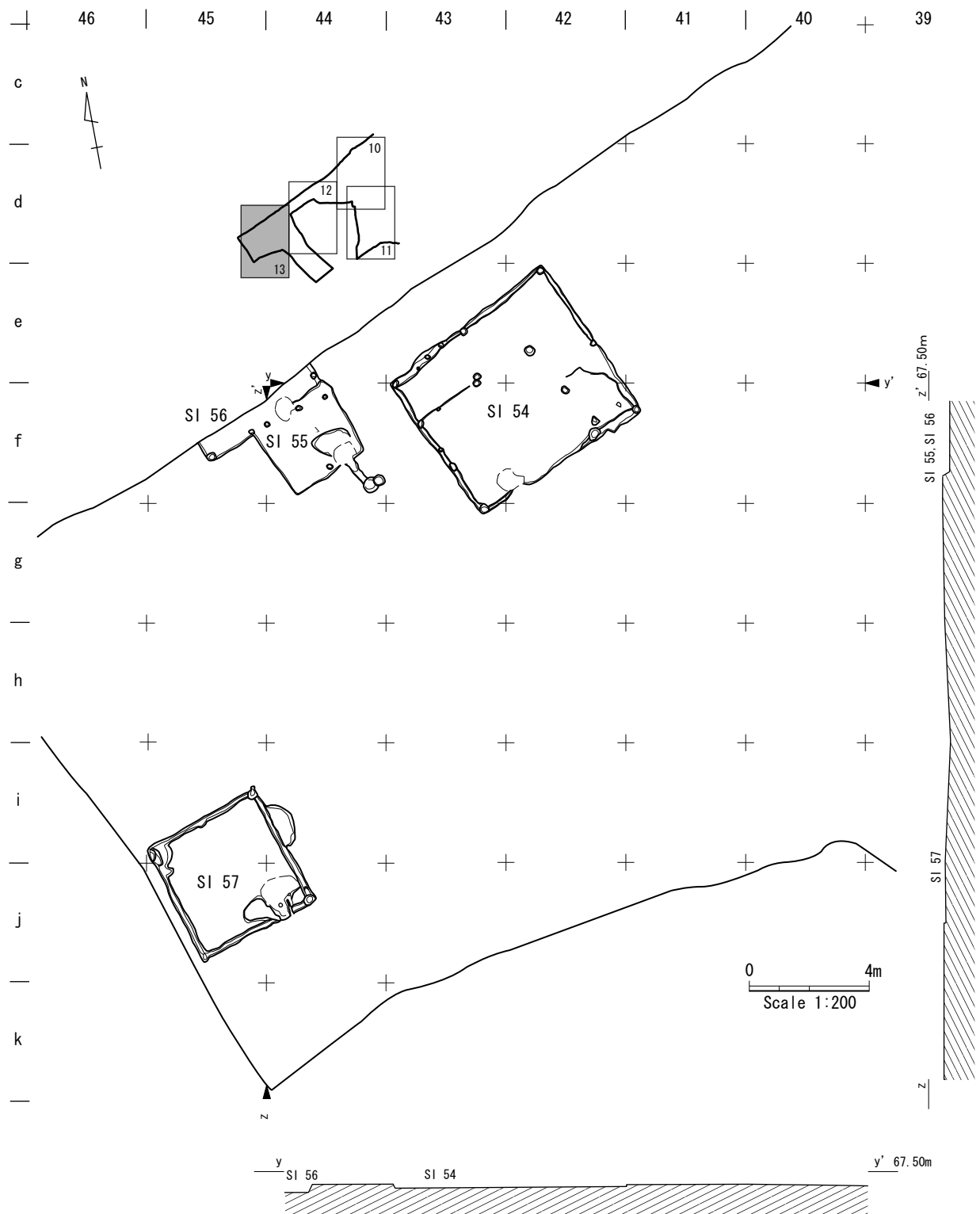
第22図 遺構分割図 (10)



第23図 遺構分割図 (11)



第24図 遺構分割図 (12)



第25図 遺構分割図 (13)

る。炉跡は竪穴中央やや南西よりで地床炉を1か所検出した。柱穴は竪穴内に33基、西壁を切って2基、周辺の竪穴外から13基検出。竪穴内の柱穴は、壁沿いに分布する傾向がうかがわれ、径5cm以下の小柱穴と15cm以上のものに大別される。竪穴の周囲に位置する柱穴は、いずれも径20cm前後の大きさである。

遺物 床面出土遺物はない。埋土中の遺物は縄文中期末葉が主体。第26図1～3は縄文中期末葉の土器。

時期等 縄文中期末葉。

2) 遺物（第26図）

調査区内の遺物包含層は、前節で述べたように、耕作等による攪乱が著しく、柄沢川に面する丘陵先端付近と枝沢部分に残されているのみである。このため、プライマリーな遺物包含層から得られた遺物量は、調査面積に比べ非常に少ない。発掘区から得られた縄文時代の遺物量は、土器片83点、石器類6点、総計89点である。これらは、大きく、縄文前期中葉、中期末葉、後期中葉、晩期前葉に位置づけられる。

発掘区から得られた土器は、耕作によって破砕が進み、小片である。遺物量は全体の1%以下である。分類別の出現頻度は中期末葉が縄文遺物の90%に達しており、前期と晩期は散見される程度の出土量である。第26図4～11に、遺物包含層出土のおもだった土器片を示す。以下、分類別に掲載遺物について記す。

前期の土器（4）

絡条体回転文、貼付帯を特徴とする円筒下層a式に位置づけられる小破片が3点得られた。いずれも器壁は厚く、焼成は不良であるが、小片で、器形や大きさをうかがい知れるものはない。

中期末葉の土器（7）

大木10式に並行するとみなされる。大半が小片のため、器形や全体の文様構成等をうかがい知れるものは少ない。

後期の土器（5・6・8・9）

十腰内Ⅱ～Ⅳ群に相当する一群で、沈線、刺突文などが付されたものと縄文のみのものが認められる。内面はていねいなナデが施されている。

晩期の土器（10・11）

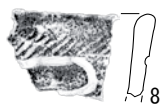
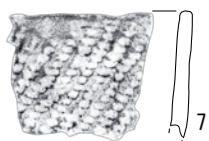
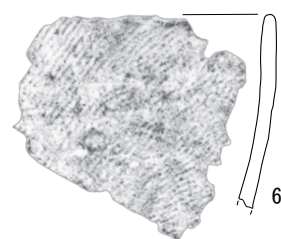
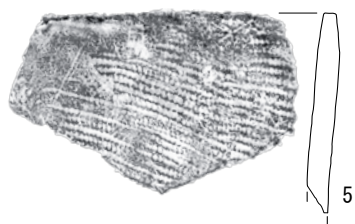
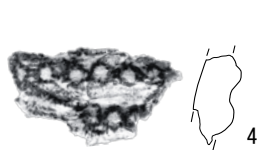
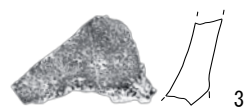
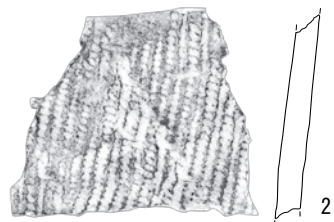
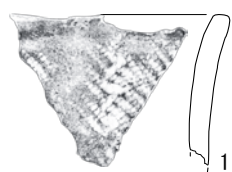
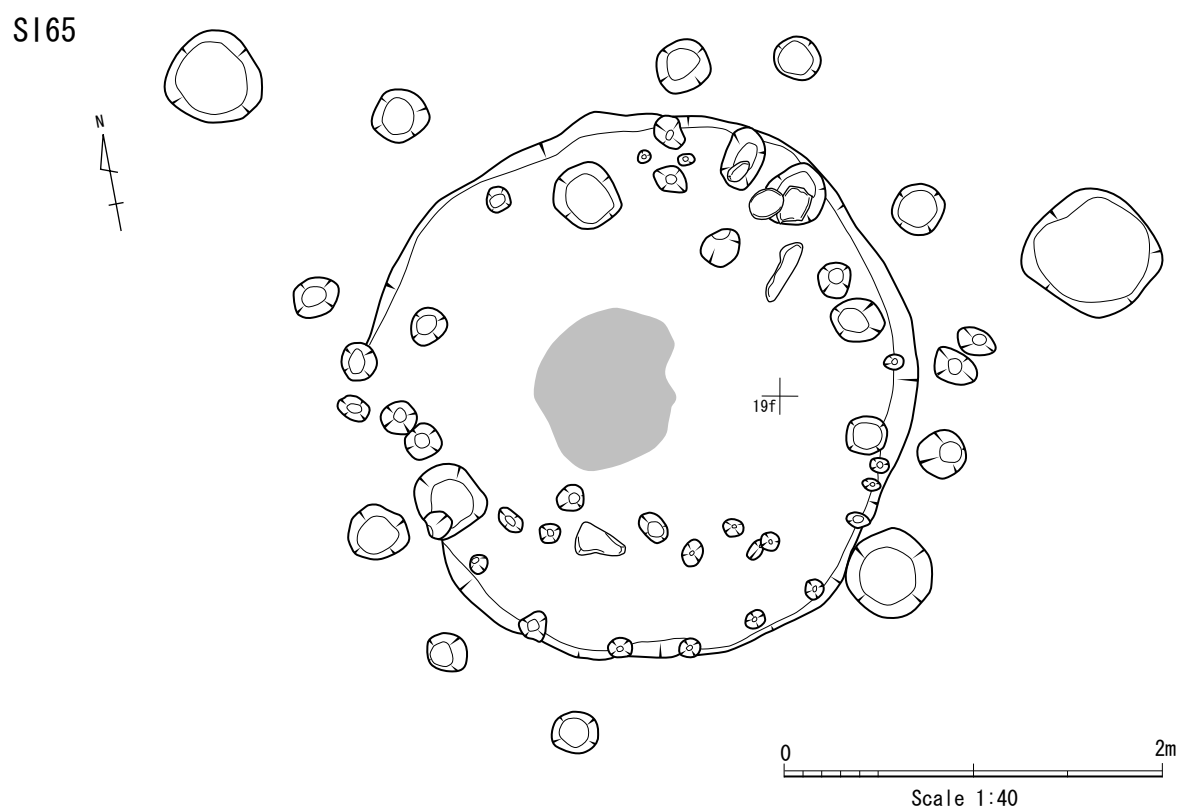
晩期とみなされる一群は、沈線などが付されている。本群に属するものの多くは小片で、文様が判然としない。

(3) 平安時代

1) 土器の概観

平安時代の土器の出土総量は深さ18cmの整理箱（コンテナ）で約50箱である。このうち、遺構の主体をなす竪穴住居出土の土器は全体の約7・8割程度と推定される。

出土土器は9世紀後葉～10世紀前半のもので、須恵器と土師器である。このうち土師器が大半を占



4~11 遺物包含層



第26図 SI65と出土遺物

めており、須恵器は少ない。土師器には少量の黒色土器を含む。このほか、土製品が若干ある。土製品は基本的に土師質である。施釉陶器や磁器はない。

図化にあたって 実測個体は各竪穴住居出土の土器のうち、遺存状況と器種を考慮して選択した。遺存状況の良好なものはおおむね実測したが、その遺構内の器種構成や個体数を勘案し、遺存状況が悪いものでも実測したものもある。出土個体数の多い土師器甕類などは全体の1/4以上の遺存をおおよその目安にした。したがって、実測個体からおおよその器種構成・様相は把握できる。

観察表の作成 個々の土器については観察表（第7表）を作成し、これに土器の出土地点・種別・器種・胎土・手法等を記した。観察表の項目ごとの要点基準については後述する。

なお、古代の土器の分類等については、『山三賀Ⅱ遺跡』（新潟県教育委員会1989）を参考にした。以下に述べる土器の器種分類・製作技法・実測図の表現方法等については、これに準拠したものである。

2) 器種分類

器種分類はいずれの時代・時期についても容易ではない。全国レベルで比較的共通した器種が存在する9・10世紀の土器についても、器種の分類・呼称はかならずしも共通したものではないが、本書で用いる基本的な考え方を明らかにしておきたい。

この時期の土器の構成として、食膳具・煮炊具は土師器、貯蔵具は須恵器という機能の分担のあり方が原則的にみられる。したがって、出土土器の大半を占めるのは、土師器碗（坏）類（食膳具）と土師器甕・鍋（煮炊具）で、これに若干の須恵器甕類・瓶類（貯蔵具）が加わる。以下、各器種の概要を述べるが、名称はなるべく形態を表現する術語を用い、これを細分する場合にA・B・Cなどのアルファベットを付す。同一器種のうち法量の異なるものはⅠ・Ⅱのローマ数字をさらに付す。

須恵器（第27図）

食膳具と貯蔵具があり、器種は碗（坏）・短頸壺・長頸瓶・広口壺・甕などがある。貯蔵具の多くは破片資料である。

無台碗（坏）（1） 碗は高台をもたないもののみである。全体の器種のなかでも個体数は最も少ない。完形のものはなく、復元口径14cm、高さ8cmである。

短頸壺（2） 球形に近い体部に短い口縁部をもつと思われる。無台である。1点しかない。

小瓶壺（3・4） いくつかのタイプがあるが、数は少ない。頸部は長いものと思われる。

広口壺（5） 広く大きく外反する口縁部をもつもの。数点出土。

甕（6） 広い口で短く外反する口縁部をもつ甕。広口甕ともいえる。多くは破片であり、口縁部が出土している住居跡は少ない。破片数は多いが、全体の個体数は多くないと考えられる。

転用具 本来の器を転用したもの。甕の体部に赤色顔料の痕を残すものがある。意図的に打ちかいたものである。顕著に磨滅している。数点の出土。

土師器（第27図）

前述のとおり、土師器には製作技法が根本的に異なるものがある。それは大きくみて、ロクロを使用していないもの（①非ロクロ土師器）と、使用しているもの（②ロクロ土師器）である。①非ロクロ土師器は奈良時代以来の系譜下にあるもので、②ロクロ土師器は県内においては在地の須恵器生産が活発になる8世紀後半に出現し、のちに普及する（小松2001）。

皿(7) 身のごく浅い皿。2点しかない。

無台碗(8~12) 碗のうち高台をもたないもの。食膳具の主体をなすもので、有台碗よりかなり多く全体の器種のなかでも個体数は甕類に次いで多い。法量・器面調整ともいくつかある。

無台碗A(8) 非ロクロの小型品で、食膳具と考えられる。数は少ない。Ⅱ期におもにみられる。

無台碗B(9~11) ロクロ土師器の碗として、一般的なタイプである。平底で高台をもたず、体部は丸味をもってたち上がるもの。口径11~13cm前後の小型のもの(碗BⅡ)と口径15cm前後の中型のもの(碗BⅠ)がある。碗BⅠには内面に暗文状の細かいヘラミガキがみられる。黒色土器が多い。住居跡出土土器では多い。

無台碗C(12) 碗Cは碗Bよりも口径に対する底部の比率が大きいもの。ごく少ない。

有台碗(13) 碗のうち高台をもつもの。全体の器形がわかるものはなく、高台部が遺存しているものは少ない。

長甕(14~16) 小甕とならび、煮炊具の主体をなすもの。内面にまったく炭化物をとどめないことから、これで直接米を煮るものではないとされる(坂井1988)。製作技法から、A系(非ロクロ)・B系(ロクロ平底タイプ)の2種に大別され、A系はさらに2種に細別される。なお、破片のみの資料であるが、タタキ目をもつ土師器甕があり、それについては丸底タイプの可能性もある。それぞれの製作技法についての詳細は後述する(41頁)。

長甕A系(14・15) ロクロを使用しないもので、底部は平底である。頸部のしまりは少なく、体部は若干ふくらむ。高さは28~32cm、口径20~25cmのもの(長甕AⅠ)が多いが、高さ25cm前後で、やや小さいもの(長甕AⅡ)もある(第28図)。

長甕B系(16) ロクロ土師器のうち、平底形態のもの。出羽型ではなく、秋田でも北部地方に分布の中心をもつ公算が強い。ロクロ土師器成立期に一般的である。口縁部は「く」の字状に外反し、体部はあまりふくらまない。底部は平底である。体部下半にタタキ成形はみられない。出羽型の煮炊具と比較し、ロクロ土師器と認めない見方もできよう。

小甕(17~20) 高さ15cm以下の甕で、長甕との器高差は大きい。口径は10~15cm。製作技法による分類は基本的に長甕と同様で、口縁部の形態も類似する。いずれも原則として平底である。口縁部内面のみに炭化物が帯状に付着しているものが多く、用途は汁物を煮ることが主であったと考えられる。

小甕A系(17・18) 非ロクロの小甕。頸部のしまりがなく、体部はあまりふくらまない形態で、鉢に近い器形のものが多い。高さ9~12cm程度のものがある。内面に黒色処理を施すものもある。

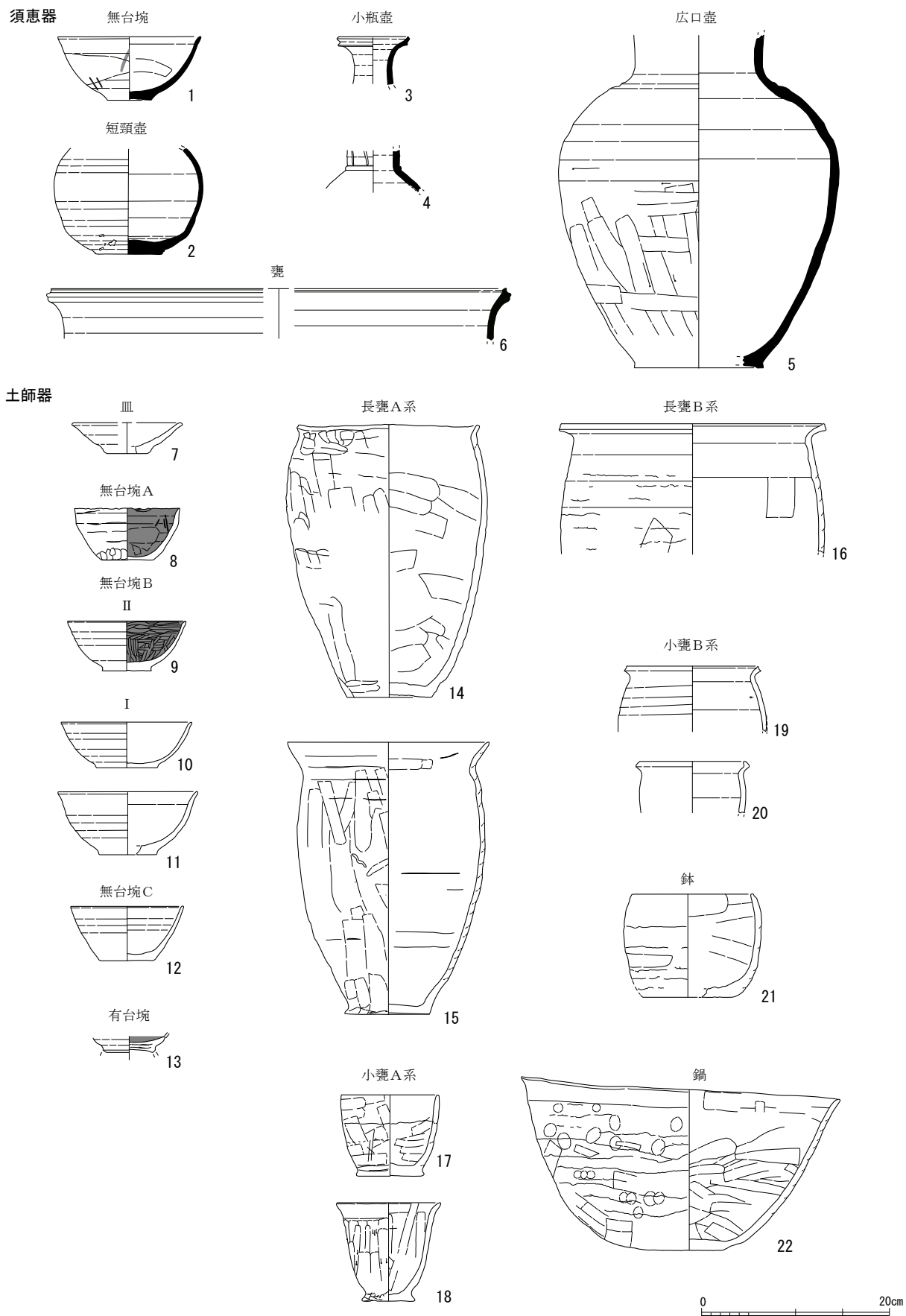
小甕B系(19・20) ロクロ土師器で、甕B系と共通の技法により製作されたもの。口縁部は「く」の字状に外反し、体部は中位がふくらむ。底部は平底とみられる。底部が遺存しているものがなく、高さは不明であるが、復元口径11cmのごく小さいものも1点ある。

鉢(21) 鉄鉢形のものがある。1点のみである。

鍋(22) 煮炊具としては長甕、小甕に次ぐ量がある。製作技法は長甕・小甕とは異なり、非ロクロのみであり、丸底のものはない。形態・製作技法は甕に類似する。

3) 土器の製作技法

ここでは出土土器の大半を占める土師器碗類と甕類の調整技法を含めた製作技法について述べてお



第27図 土器分類図

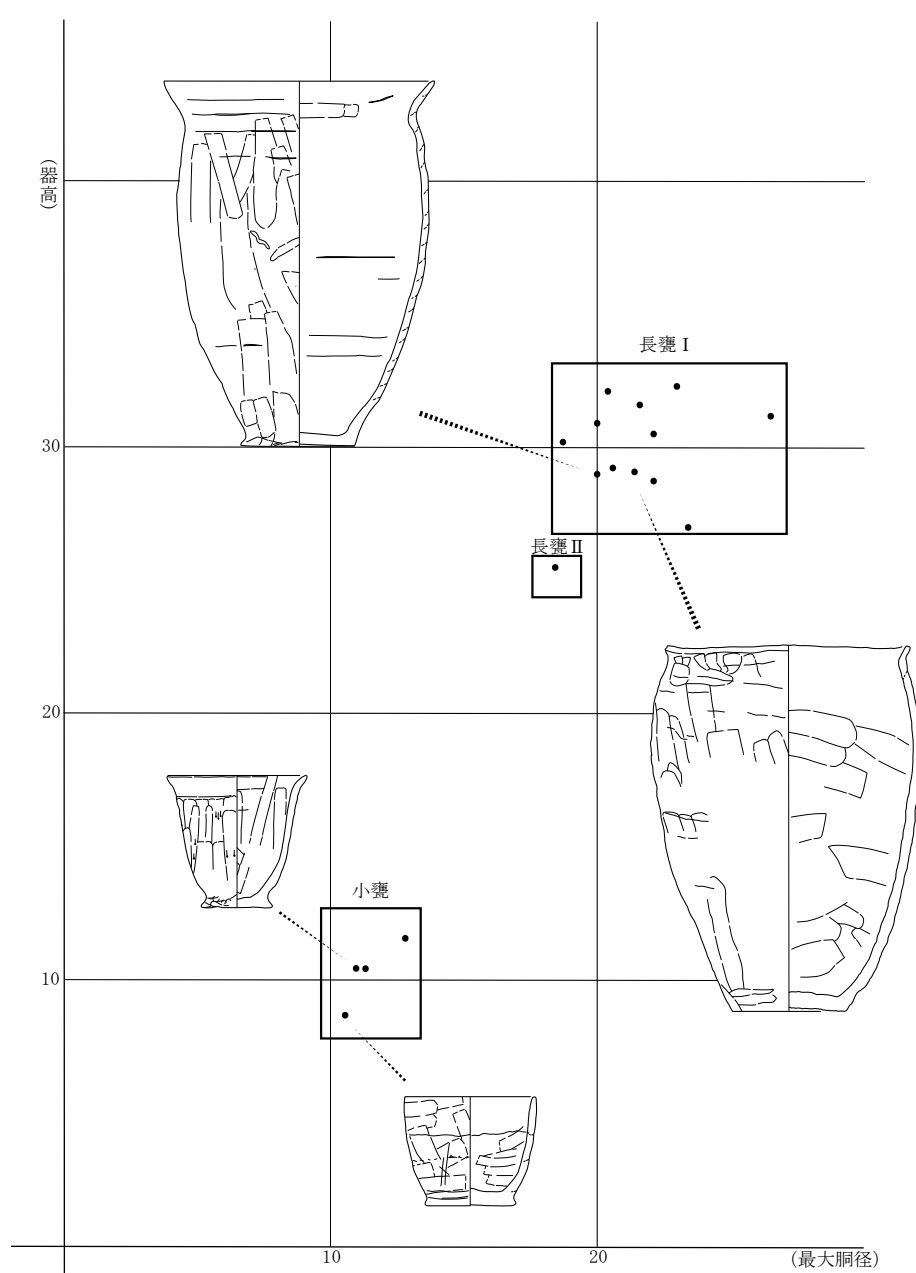
く。あわせて調整技法の定義についてもふれることにする。

土師器（第29図、図版25・47・52・53）

埴 底部外面が回転糸切りで、ほかがロクロナデであるのが一般的である。ロクロの回転方向は右回りが一般的である。底部の再調整は原則的にみられず、かるくヘラナデを加えるものがある程度である。底部内面の凹凸は少ない。黒色土器は内面にていねいなヘラミガキをし、内面のみ黒色処理するものが一般的である。

長甕A系 底部は平底で、体部はふくらまず、口縁部と体部の境が不明瞭で、口縁部はゆるく弧状に外反する。

口縁部はヨコナデであるが、ナデがごく粗いもの（1類）とていねいにヨコナデしているもの（2



第28図 土師器甕A系法量分布図

類)がある。1類は指頭圧痕がよく残り、歪みも大きい(図版25-17)、2類は、歪みが少ない(図版47-6)。1類は回転台を使用せず、土器を固定したままでナデているものと推定される。

体部内外面はケズリないしナデで、外面はタテ方向、内面はヨコ方向が一般的である。器面には粘土紐のふくらみがよく残り、接合痕をそのまま残しているものもある。

底部は安定した大きな平底である。底部外面は「木葉痕」・「砂痕」・「不調整」などがある(図版52・53)。木葉痕は木の葉の裏面の葉脈の圧痕が底面に残るもので、広葉樹の網状脈のほかに、笹のような平行脈のものもある。砂痕は砂が付着したもので、木葉と同様に底面が「土器製作の台」から離れやすくするために砂を使ったものと考えられる。砂の付着は、全面に付着するものと中央をのぞく周縁部のみのものがある。後者は底部中央がくぼむことによるのであろう。砂痕と木葉痕の両方が存在するものもある。木葉痕と砂跡は1類に、明瞭な調整がみられない不調整のものは2類に多くみられる。回転台を使用するとすれば、木葉や砂などの「離れ材」は不必要であり、1類は回転台不使用、2類は回転台使用という想定がされている(坂井1989)。

長甕A系の成形は平らな底部の円板の上に、粘土紐を積み上げる。体部の下部から口縁部までの積み上げは一気に行わず、3回程度に分ける。それは一気に上部まで積み上げると、粘土自体の重味で形を崩すためと考えられ、ある程度乾燥させたのち、さらに積み上げるのであろう。積み上げの単位は土器のカーブの変化点や器壁が厚くなる部分で判別できる。粘土紐の接合方法は、実測図の断面に表現すると、左下がり右上がりの線になる。すなわち、上の粘土紐はすでに積んである下の部分の内側に張り合わせ、ユビオサエで接合させる。ある程度粘土紐で成形したのち、体部内外面をヘラや指のナデで調整し、口縁部はヨコ方向になでる。

長甕B系 口縁部は体部から明瞭に屈折し、直線的に「く」の字状に外反し、底部が平底である。体部上半部にロクロナデが施され、ロクロ回転を利用した調整が認められる。特にⅠ期に一般的である。Ⅱ期以降にはみられない。

口縁部も内外面ロクロナデである。タテ方向のヘラナデもままある。中位から下位の外面はタテ方向のヘラナデ・ヘラケズリである。タタキ技法をほとんど用いない。底部が遺存している資料はなく、ヘラナデ・ヘラケズリは底部外面まで及ぶかどうか判断できない。体部下半はタテ方向のヘラナデをするものが多い。内面はナデ・指頭圧痕・ロクロナデなどである。

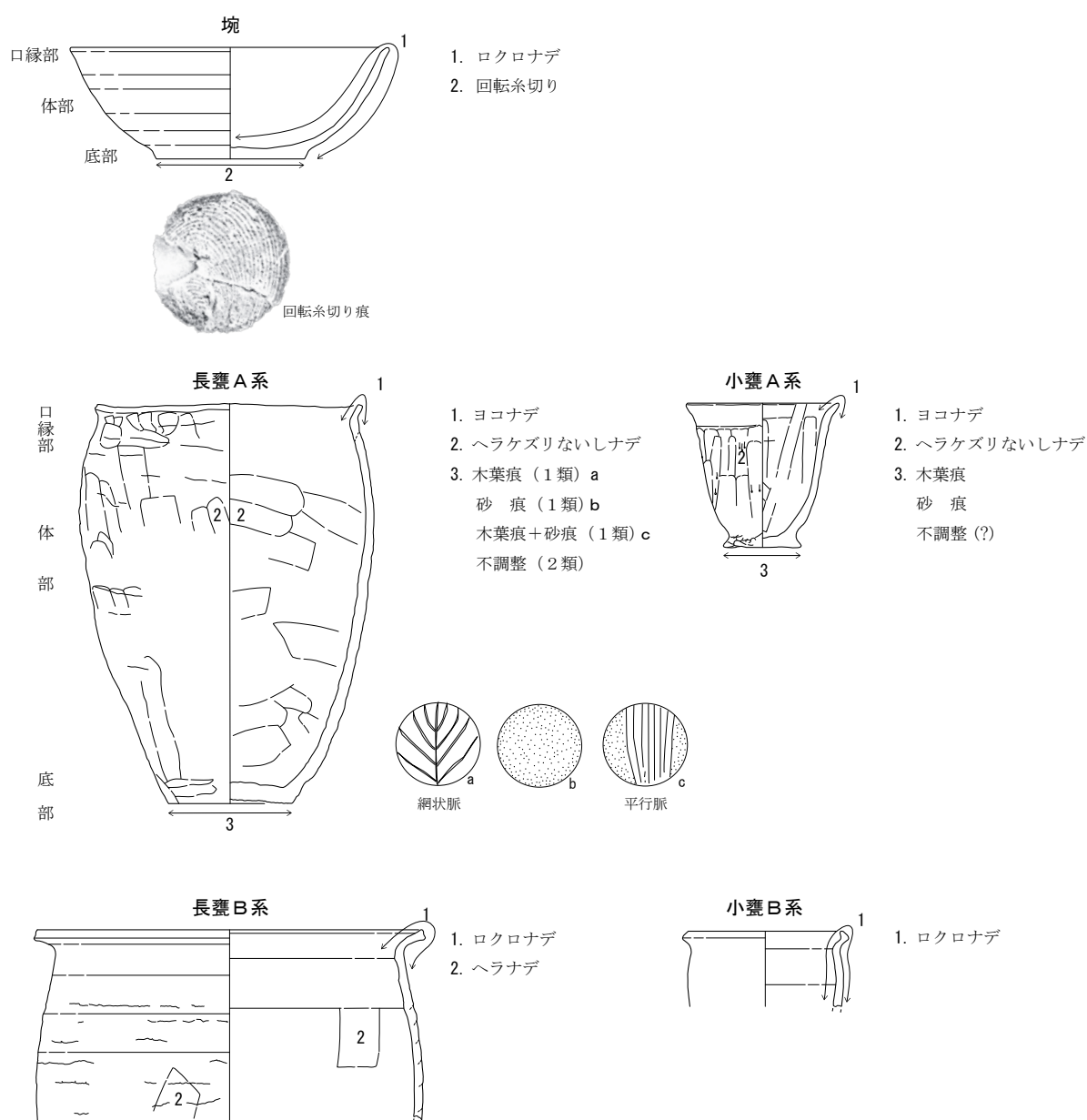
甕B系の製作技法は、タタキにより丸底形態にする工程を省いたものである。ただし、ロクロナデは、シャープな須恵器より確実に鈍く、ロクロの機能などの差が示唆される。

小甕・鍋 小甕のA・B系はそれぞれ長甕のA・B系と形態上類似するばかりでなく、共通した技法によってつくられており、対をなすことは明らかである。鍋は長甕A系に類似する。10世紀代には、体部外面下半に斜め方向のヘラケズリがよくみられる。底部外面は木葉痕か不調整、糸切り、砂痕である。不調整は明確な切り離しや調整痕がないものである。糸切りはⅡ期の前半に消滅する。糸切りは回転糸切りのみである。

4) 実測図の表現方法

土器の実測図は原則として通例にしたがって表現したが、本書では基本的に前述の『山三賀Ⅱ遺跡』(新潟県教育委員会1989)の基準を参考にした。ただし、本書に限られるものもあるので、あらためて実測図の表現方法を説明しておく。

- ① 中心線の右側は断面と内面、左側は外面を描く。
- ② 原則として全体（径）の2/3以上残存しているものは、中心線の両面を測り、ほぼ1/2以下のものは、片面を測って反転した。小破片で径の復元が困難なもの（ほぼ1/12以下）については、中心線と左右の線を離した。
- ③ 外形と断面以外の線には、定規で引いた直線とフリーハンドの線の2種がある。定規で引いた線は中心線を除き、横方向のものに限られるが、これは「ロクロ」、あるいは「回転台」の回転を利用して生じた線を意味する。ただし、口縁上端部の線については、非ロクロ土師器でも口縁部のヨコナデがていねいなものや小破片は口縁部を定規の直線で表示した。これに対し、口縁部の歪みの大きいものはフリーハンドで忠実に表示した。



第29図 土師器 碗・甕の調整技法

- ④ 「ナデ」・「ヨコナデ」・「ロクロナデ」はナデの痕跡などの具体的な表現はしていないが、「ヨコナデ」と「ロクロナデ」による器面の凹凸（稜線など）は2点で切った破線で示した。この場合原則として凸部に入れた。「回転台」を使っていないと考えられる弱い「ヨコナデ」はフリーハンド、「ロクロナデ」と「回転台」を使ったと考えられるていねいな「ヨコナデ」は定規の直線である。また、「ヨコナデ」・「ロクロナデ」の範囲を示すところ、たとえば、口縁部と体部の境付近の内外面には調整技法の変化することを明示する意味で、実線で表示した。ただ、範囲が明確でない場合もありかならずしも一本の線で表現できないところもある。
- ⑤ 横方向の実線はほかに沈線にも2条の直線で表示した。直線の箇所や断面の凹凸などを勘案してその表現する意味を判断されたい。
- ⑥ ヘラケズリにはロクロ回転を利用した「ロクロケズリ」と、それを利用しない「ヘラケズリ」がある。「ロクロケズリ」は定規の直線で表示した。「ロクロケズリ」と「ヘラケズリ」には砂粒の移動痕を表示した。また「ヘラケズリ」の1回の単位がわかるものについては、その範囲を破線で示した。
- ⑦ 「タタキ目」・「あて具痕」・「指頭圧痕（ユビオサエ）」などの調整も適宜表示した。調整以外では粘土紐の接合痕なども明確なものについては表現した。断面で明瞭に観察できる接合痕は破線で入れた。
- ⑧ 底部の調整は実測図で表現できないため、観察表の手法に記入した。ただし、土師器甕類は砂痕が大半で、これについては拓本をつけた。使用痕のうち灯明皿かと思われるタール状の付着物などは網目で表現した。「スス」・「炭化物」・「黒斑」は表示していない。観察表を参照されたい。

5) 土器の胎土

土器の胎土は一樣ではない。胎土は土器の生産を示す有力な情報であり、それを明瞭に識別することは土器の生産と流通を考えるうえで、きわめて重要である。しかしながら、個々の土器について、生産地を同定することはかなり難しい。須恵器であっても、かならずしも生産地の状況が細かくわかっておらず、胎土等に含まれる鉱物や素地についての理解も不十分だからである。

ここでは、須恵器については2つに大別し、土師器には含まれている鉱物をわかる範囲で記入した。個々の土器の胎土は観察表に記入した。

須恵器

A・Bの2群に大別した。

A群 胎土が精良で、長石を多く含むもの。産地は不明であるが、秋田県北部のどこかに存在する窯跡産と考えている。五所川原の須恵器生産が広域に流通する以前、10世紀前半までは本群の製品は比内地域にいくつか散見されることから、特に当遺跡のあり方が特異なものではない。

B群 胎土そのものが相対的に粗く、石英・長石・海綿骨針を多く含む。実測個体では全体の約50%である。持子沢窯跡や前田野目窯跡群を中心とする青森県五所川原地方の須恵器と推定される。器面はざらついたものが一般的で、含まれる鉱物の粒子は海綿骨針をのぞくと比較的大きい。B群の多くは五所川原須恵器窯の製品であることは確実であろう。

土師器

胎土の明瞭な識別基準を設定できないが、多くの個体を通観すると、いくつかの種類が存在するようである。まず、おおよそ識別できるのは、非ロクロ土師器（技法A系）とロクロ土師器（技法B系）である。後者には須恵器と同様の胎土のものがある。素地となる粘土に大きさが比較的均一な鉱物を含むもので、須恵器B群と同じように、胎土が粗雑で、石英・長石を含むものが多い。また素地は精良で、含有鉱物も少なく、須恵器のA群に対応すると考えられるものもある。一方、非ロクロの土師器の胎土はロクロ土師器と比較して、含有鉱物が石英・長石などに限定されず、ほかの礫も含み、しかもそれらの粒子がロクロ土師器に含有される粒子に比し、粒子の大きさが一定しておらず、形も丸味をもっている。このことから、非ロクロ土師器の胎土は粘土に砂粒などを混ぜたことが推定される。川砂は大きさが一定でなく、丸く磨滅しているからである。これに対し、ロクロ土師器の胎土は山土のなかに存在する鉱物の粒子をそのまま「混入」していると推定される。このような、非ロクロ土師器とロクロ土師器の相違は、両者がともに存在する9世紀後葉～10世紀前葉を中心とした時期に注意される。

以上を整理すると、土師器の胎土はおおよそ次の3つに分けられる。

- ① 「非ロクロ系胎土」。非ロクロの土師器に特有なもの。
- ② 「非須恵器系胎土」。ロクロ土師器のうち、精良なもの。
- ③ 「須恵器系胎土」。ロクロ土師器のなかで、あまり精良でないもの。

須恵器と土師器が同一の胎土としても煮炊具にはより多くの砂粒を含んでおり、素地作りにあたっては須恵器の食膳具・貯蔵具および土師器の食膳具と土師器の煮炊具では明確に区別していたことがうかがえる。

6) 使用痕

土器の使用痕は土器が具体的にどのように、何に使われたかを示す重要な情報である。そのためここではできる限り、使用痕を観察した。

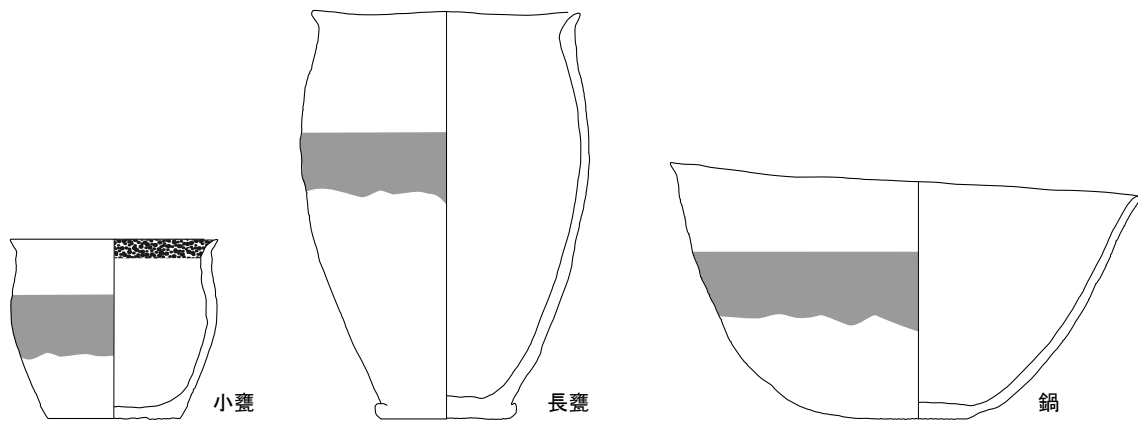
須恵器

須恵器の使用痕はここでは通常認められなかった。出土遺物の多くが貯蔵具であり、器そのものに使用痕が残ることが少ないからであろう。

土師器

土師器の大半を占める煮炊具の使用痕は、①二次焼成、②外面のスス、③内面を中心とした炭化物（おこげ）がある。従来「二次焼成・スス付着」といった観察に終ることが多かった。しかし、具体的な煮炊方法を知る手がかりとするためには、内面の炭化物の有無、炭化物のある場合はその部位が重要な点である（坂井1989）。現在、古代の煮炊きの方法については、煮ると蒸すというまったく異なった方法が知られている。煮る方法であれば、容器のなかに水と調理する米などといっしょに入れ、加熱する結果、内面に炭化物が付着することが多い。蒸す方法は水を入れた容器の上に米を入れた蒸し器をのせて加熱し、水蒸気で調理する。その結果、水を入れた容器と蒸し器の内面には炭化物が付着することはない。坂井秀弥によれば、長甕の内面には炭化物の付着が原則として認められないことから、これで煮ることはなく、蒸す方法が古代で一般的であったという（坂井1988）。小甕の場合は口縁部内面にのみ炭化物が付着するものが多い（図版53-6～11）。これは汁物を煮た容器と考えられる。

一方、本遺跡では、小甕のなかにも内面に炭化物がまったく付着しないものがいくつかみられるため、違う用途で使用されたものがあるようである。



外面：スス

内面：炭化物（おこげ）

第30図 土師器煮炊具スス・炭化物付着状況

7) 遺構各説

SI 1 (第31・35図)

位置 11・12・13-D・E区に位置する竪穴住居。調査区のなかでは最も北側に位置する。

遺構 竪穴住居と掘立柱建物がセットになる構造の建物である。主軸はN-25°-Wで、南側コーナーにカマドがある。北東・南西辺がやや長く4.9m、ほかは4.6mで、竪穴部分の面積22.5㎡である。深さは20cm前後である。四隅に20cm前後の小さなピットがあり、住居の柱と思われる。壁溝は竪穴内を全周し、幅12~36cmである。カマドは0.7×0.7mである。

掘立柱建物は、竪穴住居の南東側、すなわちカマド設置側に構築されている。桁行3間(約7.7m)、梁間2間(約4.9m)、面積は37.7㎡である。桁行の柱間寸法はほぼ等間である。柱掘方は径32~40cmの円形である。

遺物 竪穴南東より土師器小甕(2)が出土した。土器の出土量は10個体未満で少ない。このほか、床面から鉄製の鋤鍬先(3)が出土した。須恵器は1個体もない。

第35図1・2は小甕底部である。カマドから出土した2は芯材に利用された可能性をもつ。1の底部外面には木葉痕がみられる。2の底部外面は、全面に砂の付着がある。3はU字形の鋤鍬先で、耳部~刃部が半分ほど遺存しており、重量は90gである。

時期等 時期はⅡ期に比定される。

SI 2 (第32・35図)

位置 12・13・14-E・F・G区に位置する。

遺構 SI1同様、南東側には本竪穴住居とセットになると考えられる掘立柱建物がある。主軸はN-22°-Wで、カマドは南側コーナーにある。一辺4.8~4.9mのほぼ正方形で竪穴部分の面積は23.5㎡である。深さは8cmと浅い。これはこの竪穴住居が高い位置にあり、かなり削平されていることによると考えられる。四隅のほかに14個のピットがある。径20~24cmである。柱穴の可能性はある。壁溝は竪穴内を全周する。壁溝は幅4~24cm、深さ6~8cmと浅い。カマドは0.5×0.7mで、かなり削平を受けている。ほぼ全部焼けている。

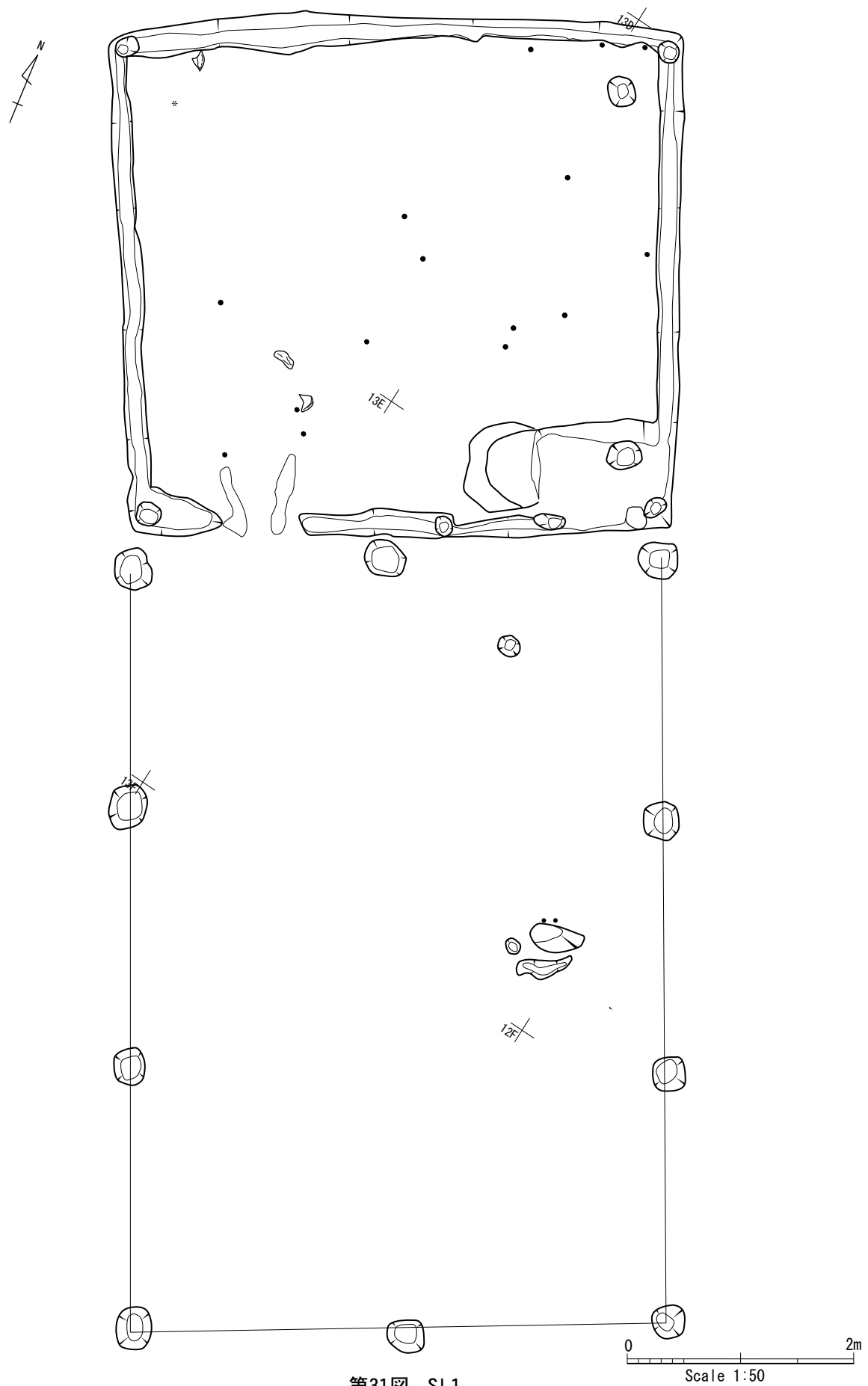
掘立柱建物は3間(約7.5m)×2間(約5.0m)で、束柱はもたない。平面形はほぼ長方形で、面積37.5㎡である。いずれもほぼ等間である。柱掘方は径30cmほどの円形である。

遺物 上部全体がかなり削平を受けていることもあって、カマドより土師器埴(4)、小甕(5)、甕(6・7)が出土した。土器の出土は約5個体である。

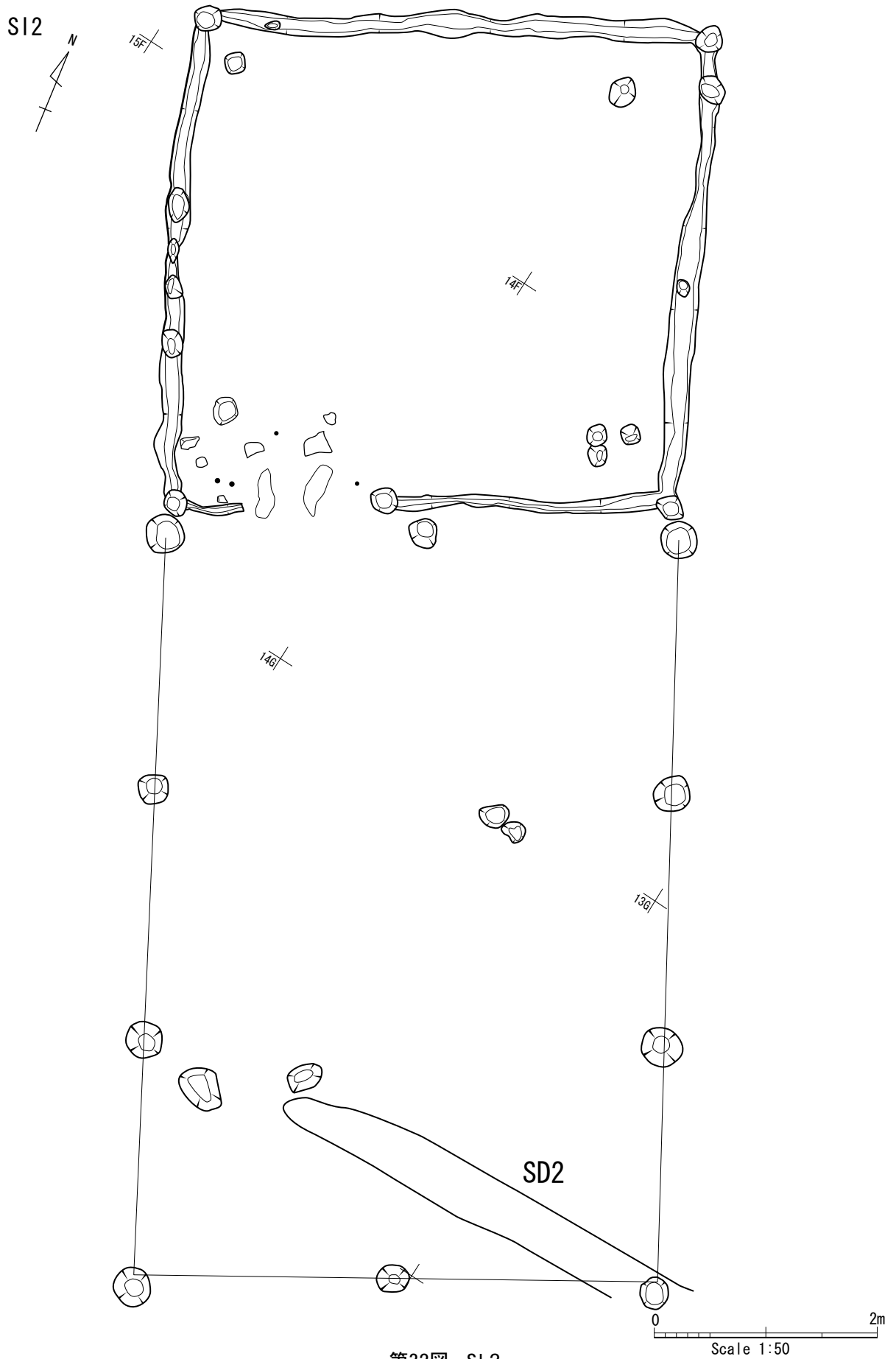
第35図4は内面黒色で、底縁が張り出す。底部外面は回転糸切りである。胎土は他と明確に異なるものではなく、搬入品とは即断できない。5は底部が外面不調整である。6・7は長甕で同一個体の可能性もある。6は復元口径22cmで大きく、口縁部と体部外面に炭化物の付着はまったくみられない。この口縁部は、「く」の字状に短く外反し、端部が尖り気味である。外面の調整はていねいでなく、全面に施されない。器面に凹凸もみられ、調整はよくない。平底の底部(7)は外面に指頭圧痕があり、A系である。

時期等 時期はⅡ期である。

S11



第31図 SI 1



第32図 S12

SI 3 (第33・35図)

位置 13・14・15－E・F・G区に位置する。

遺構 本竪穴も掘立柱建物がセットになる。主軸はN－31°－Wで、東側コーナー寄りにカマドがある。一辺3.1～4.0mで、長方形を呈する。竪穴部分の面積は12.4㎡、深さは14cmである。四隅のほかに床面西部を中心に径12～24cmのピットが11個あるが、柱穴かどうかは不明である。このほかに竪穴外に15個ほどのピットが存在し、竪穴とセットになると思われる。壁溝は北東と北西の2辺にのみにめぐ。壁溝は幅16～32cm、深さ6cmと浅い。カマドは、床面が浅いこともあり、遺存状態は悪い。

掘立柱建物は竪穴の南東部、カマド側に設置されている。桁行2間（約4.5m）、梁間2間（約5.4m）、面積約24.3㎡の建物である。桁行はさらに南東にもう1間ある可能性があるが、桁行が3間となれば、南東側の柱穴は間仕切りと考えられる。この柱間寸法は約2.2mで、ほかの桁行きは約1.7mである。柱掘方は円形で径30～35cmほどである。

遺物 カマド内からは土師器小甕、甕（9）などが出土した。床面から土器（8）が出土した。出土土器は5個体未満であるが、須恵器はなく、大半は土師器煮炊具である。

第35図8・9は土師器長甕A系の底部である。8は平底の底部の内外面にヘラナデないしヘラケズリする。底面の外周部分はヘラケズリするもので、底縁が「く」の字状に張り出す。この胎土は石英など小礫を含むがやや精良である。

時期等 時期はⅡ期である。

SI 4 (第34・35図)

位置 15・16－H・I・J区の調査区際に位置する竪穴住居で北辺が調査区外へのびる。

遺構 鉄滓の出土より鍛冶工房の可能性が考えられる。本竪穴も掘立柱建物が南東にセットになる。主軸はN－31°－Wで、南東辺にカマド火床の可能性のある焼土をもつ。全容は不明であるが南東辺は長さ3.6mほどである。床面には小さくて浅いピットが15個あるが柱穴かどうかはわからない。壁溝は北東辺および北西辺に一部ある。壁溝は幅8～16cmである。カマド火床の可能性のある焼土は径30cmほどである。

掘立柱建物は桁行2間（4.6～5.7m）、梁間1間（4.0m）、面積20.6㎡である。東柱はない。梁間は長さからみて、2間のものと推定されるが、ここでは中間の柱は確認できなかった。柱間寸法はそれぞれ等間ではない。柱掘方は径28～32cmの円形である。

遺物 埋土中より土師器（10）、鉄滓が出土した。出土土器の総数は約5個体である。鉄滓の総量は1,317gである。

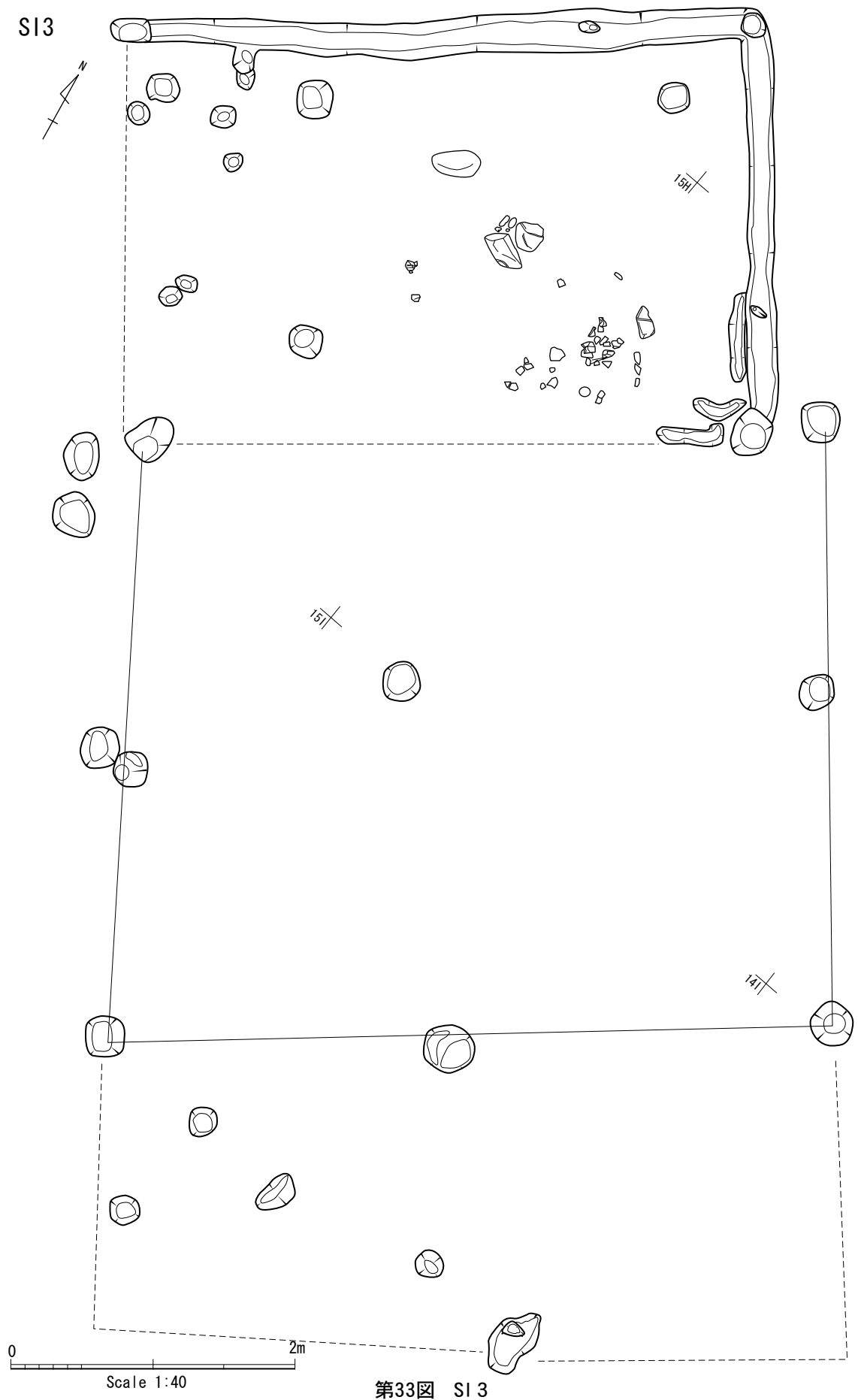
第35図10は内面黒色処理の埴Bとも考えられる。外面は回転糸切りである。11は椀形鍛冶滓。12は棒状の砂岩を素材とする手持砥石で、表面に作業面をもつ。重量は26.6gで埋土から出土した。

時期等 時期はⅡ期に比定される。

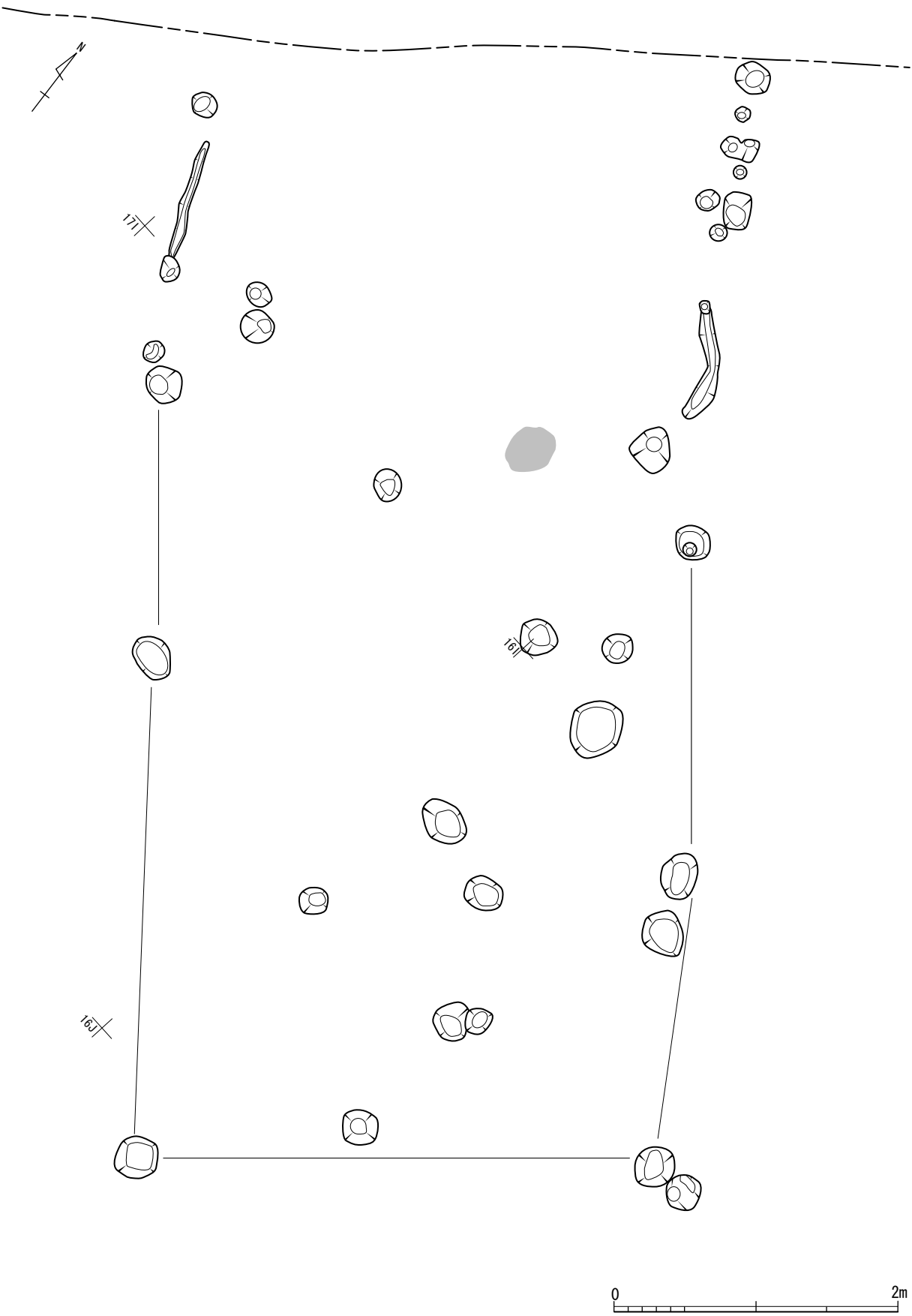
SI 5 (第36図)

位置 4・5－L・M区の調査区際に位置し、SD2に切られる。

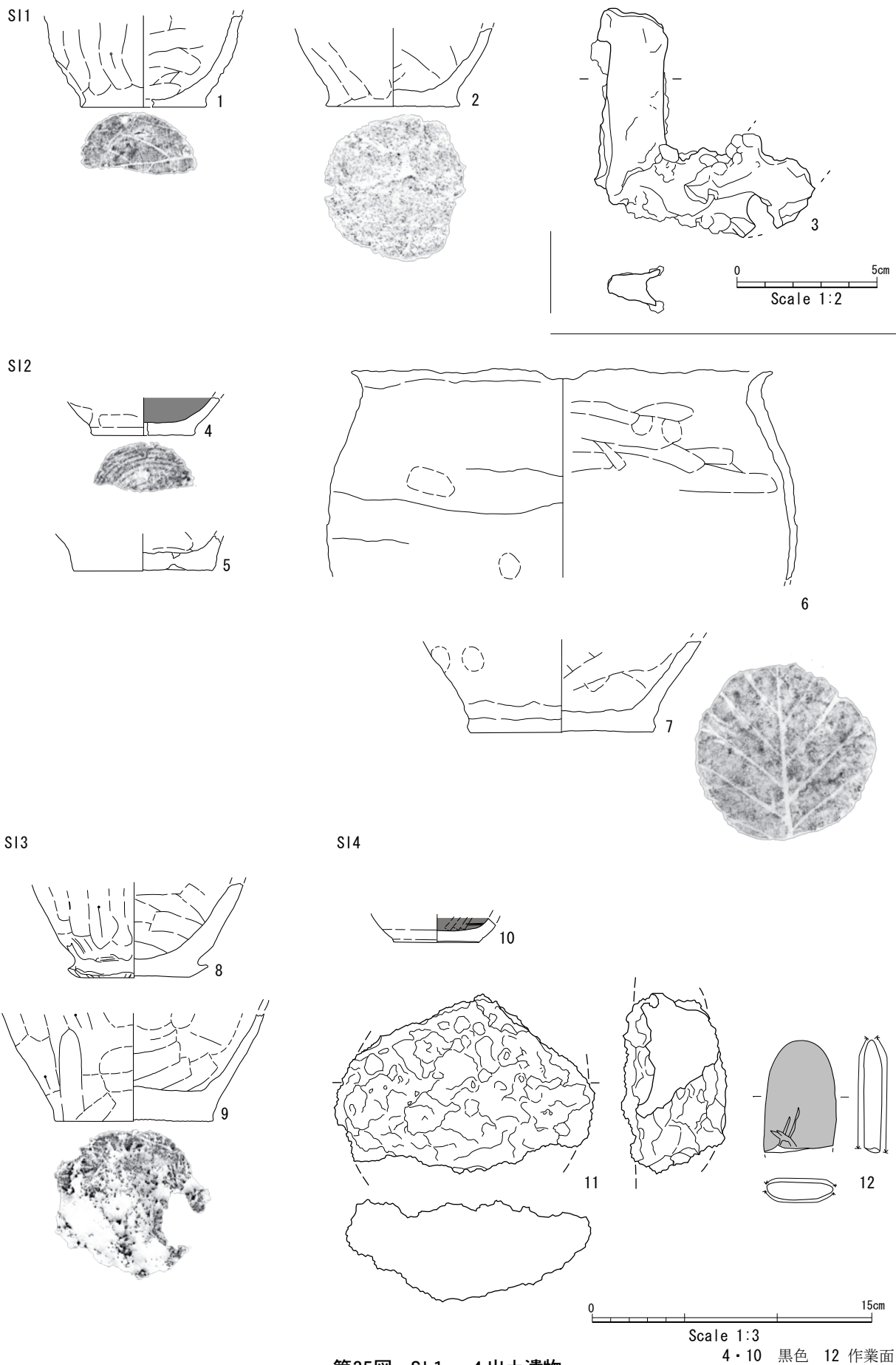
遺構 主軸はN－36°－Wで、SI4とほぼ同じである。カマドは南東辺にある。一辺の長さは3.8mのほ



S14



第34図 SI 4



第35図 SI 1～4 出土遺物

ほぼ正方形で、面積は14.4㎡と小さい。深さは6cmで、壁溝は四辺にあり、幅8～28cmである。四隅と壁際に小さなピットが、計6個存在する。住居に伴う柱穴と考えられる。カマド火床とみられる焼土は0.5×0.7mで、土層は焼けた粘質土である。

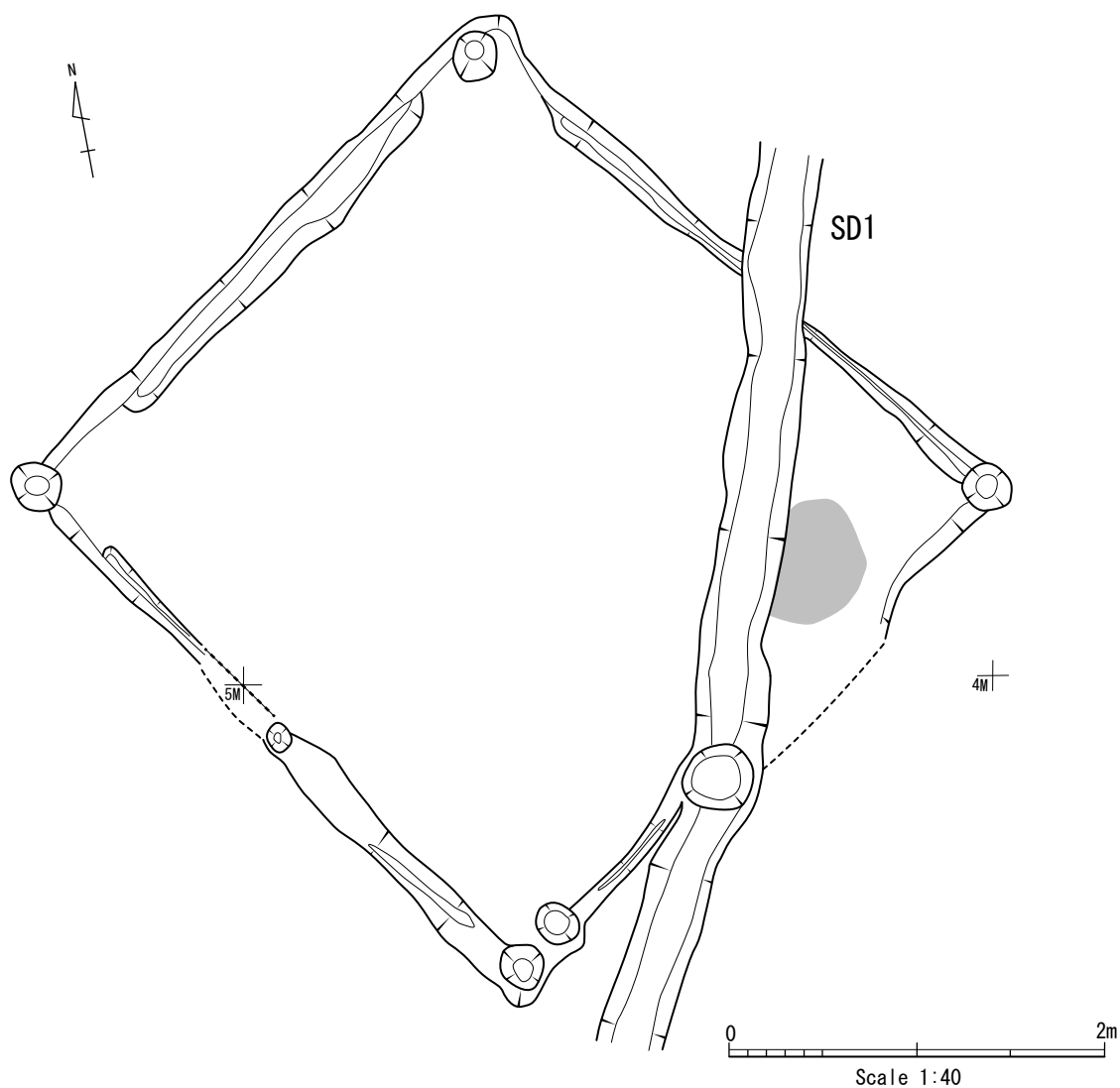
遺物 出土遺物などなく、時期も不明である。

SI 6 (第37図)

位置 6・7・8・9-J・K・L・M・N区に位置する。

遺構 竪穴住居と掘立柱建物がセットになる構造となる。主軸はN-23°-Wで、北東辺にカマドがある。一辺の長さは約6.8mの正方形で、面積46㎡以上の大型の竪穴住居である。深さは8cmである。柱穴は四隅と壁際、竪穴内に支柱穴とみられるものがいくつかある。壁溝はない。カマドは1.6×1.3mで、下層に焼けた土がある。この焼けた土をはさむように左右に袖と考えられる暗茶褐色土がある。これからするとカマドの主軸は住居の主軸と一致する。

SI 5



第36図 SI 5

掘立柱建物は竪穴住居の北東部、カマド側に設けられている。桁行2間（約6.8m）、梁間2間（約6.6m）の建物である。やや平面形は歪みがある。面積は44.8㎡である。柱掘方は径約30～50cmの円形である。

遺物 縄文土器2点のほか、土師器片が数個体分、棒状不明鉄製品（1）1点が出土した。土師器は小片が多く、図示しなかった。第37図1は器種不明の鉄製品で、棒状を呈し、断面形はやや膨らみをもった方形である。釘または紡錘軸の一部と考えられる。埋土から出土した。

時期等 時期はⅡ期に比定される。

SI 7（第38図）

位置 12・13-J・K区に位置する。

遺構 N-58°-Wで、北東辺にカマドがある。ほぼ正方形をなし、長さは4.4mで、面積は19.3㎡で、比較的小さい。深さは25cm前後である。カマドのある辺をのぞいて、壁溝がめぐる。北辺と南辺はカマドに近い部分で壁溝が切れる。壁溝は幅12～32cm、深さ25～34cmである。壁面のたち上がりはいずれも垂直に近い。壁溝の埋土はよくしまっている。四隅に小さなピットがあり、住居の柱穴と考えられる。このほかの壁際のピットも柱穴と考えられる。カマドは0.9×0.7mで、しっかりしている。

遺物 カマドの手前側（住居内部からみて）を中心に、土師器（1～4）が出土した。土器は上層を含めても少なく、カマド以外では数個体である。土師器の長甕に良好な資料があるが、須恵器はないため、全体の様相はやや不明確である。土師器は非ロクロのA系のみである。

第38図2は小甕底部で、ヘラケズリ調整であるが、底部外面は不調整である。

長甕（1・3・4）1は復元器高27cmを測る。口縁部は弧状に短く外反し、端部は丸くおさまる。体部外面上～中位はナデ、下位はヘラケズリで、特に下部は強いヘラケズリである。体部は水平方向に割れており、粘土紐の積み上げの区切りと考えられる。内面は平滑であり器面調整はナデである。3も口縁部がゆるく弧状に外反し、端部は丸くおさまる。ヨコナデ、ナデはていねいだが、粘土紐の積み上げ痕を一部に残す。4は長甕の底部である。底部外面は木葉痕がある。

時期等 時期は、やや不分明であるが、Ⅱ期と考えられる。

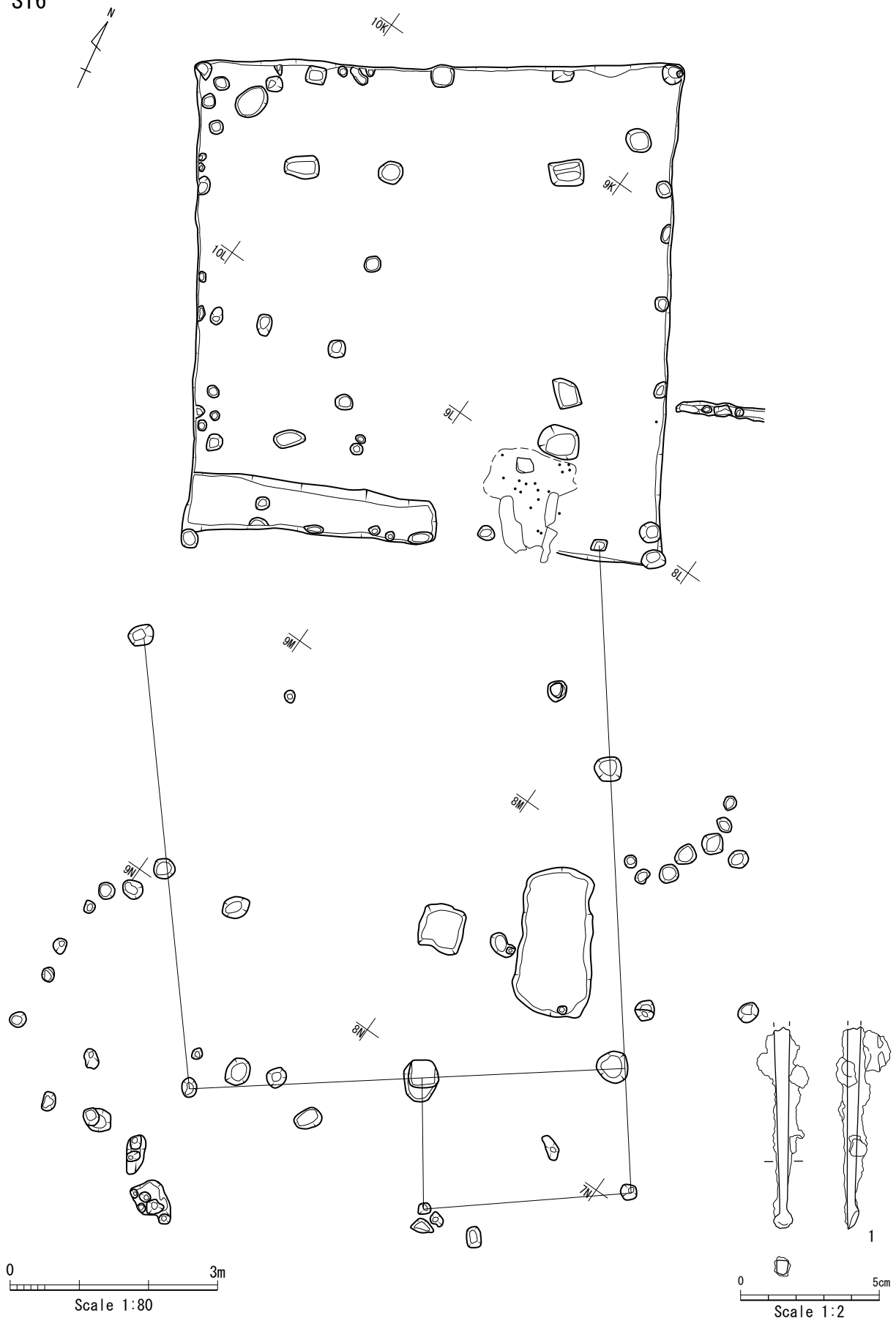
SI 8（第39・40図）

位置 16・17・18-J・K区にある竪穴住居で、南西辺はわずかにSI 9と接する。SI 9との新旧関係は不明である。

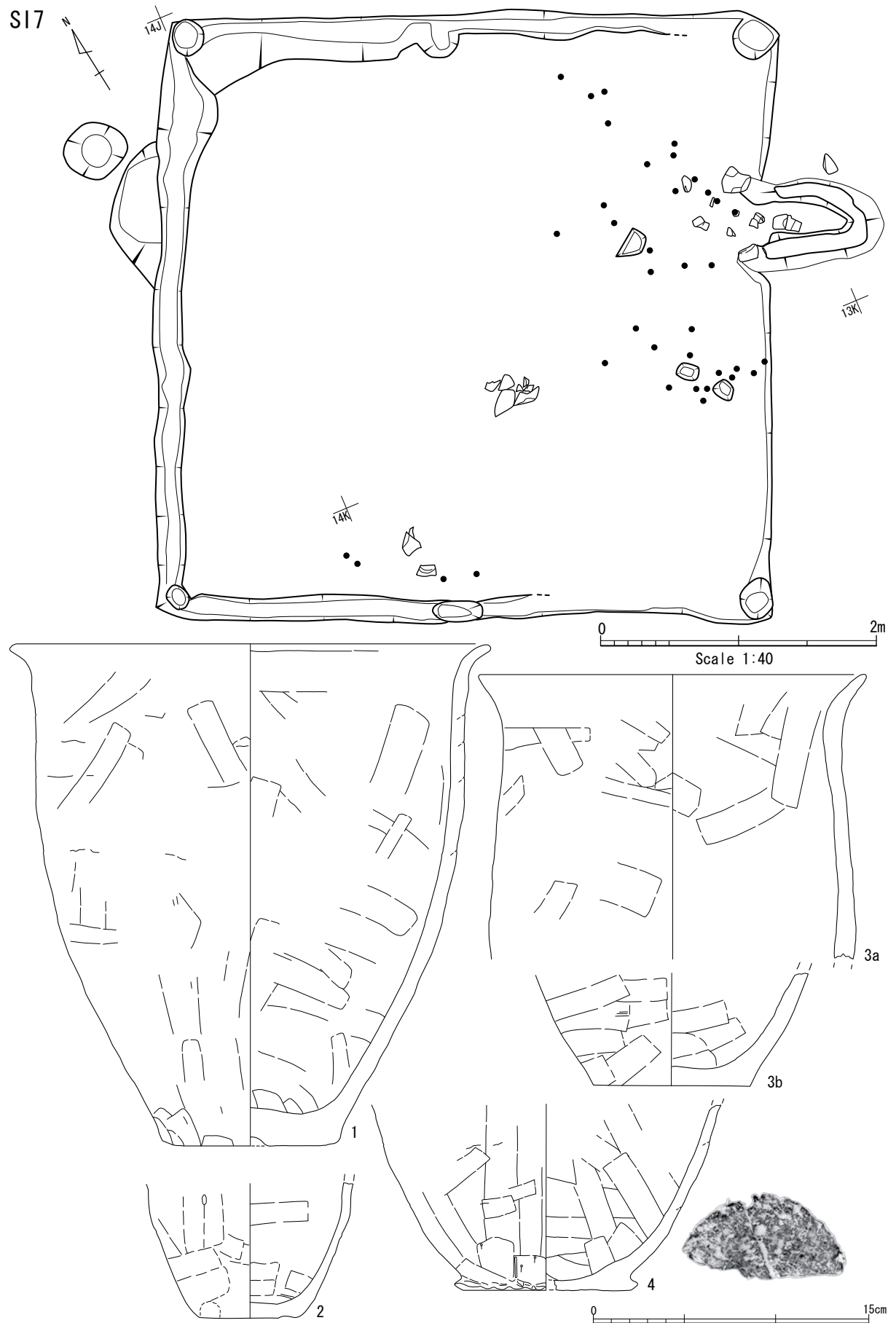
遺構 主軸はN-20°-Wで、南東辺にカマドをもつ。一辺の長さは3.8～3.9mで、明確に正方形を呈する。面積は約14.8㎡である。深さは約10cmである。径10～20cm程度の小さなピットが37個あるが、配置からみて、柱穴であると思われる。カマドのある辺をのぞいて、壁溝がめぐる。北西辺はカマドに近い部分で壁溝が切れる。壁溝は幅12～32cm、深さ11～14cmである。カマド構築材であったとみられる粘土の範囲は1.8×2.1mで、中央下層が赤味をおびた粘土まじりの土層、その上が黄赤褐色粘土で、この部分が燃焼部と考えられる。カマドより土師器壺（3・4）、小甕（5）、甕（6～9）、鍋（10）、須恵器甕（1・2）が出土した。竪穴の埋土はしまりがいい。

遺物 土器の出土量はやや多く全体で10個体以上ある。

S16



第37図 SI 6 と出土遺物



第38図 SI 7 と出土遺物

須恵器 (1・2) いずれも甕の体部破片で、外面は縄目状の平行タタキ目である。

土師器 (3~10) 埴 (3・4) はロクロ調整で、器形は口縁部の外反がやや強い。底部を欠くが、他に高台部は出土しておらず、無台埴と考えられる。口径約14cmである。胎土は精良である。小甕 (5) は体部中位~下位が遺存していないが、同一個体とみられる。外面に粗いヘラケズリがなされている。長甕 (6~9) 6は復元口径16cmでやや小さいが、長甕と考えられる。口縁部と体部内面に炭化物の付着はまったくみられない。6・7の口縁部は短く「く」の字状に外反し、端部は丸くおさまる。体部外面のヘラケズリはやや粗く、全面に施されない。器面も凹凸がみられ、調整はよくない。7はカマド出土で、SI2カマド出土の破片と接合した。底部 (8) は底面不調整であり、6の底部の可能性が考えられる。底部は平底ではあるが、若干突出気味で、胎土は比較的粗い。内面はナデでていねいに調整されており、つくりもよい。底部 (9) は外面にヘラケズリ痕を残すものである。鍋の底部 (10) は非ロクロのものである。底部は厚く、平底で、大きく開いてたち上がる。

時期等 時期はあまり明確でないが、I期頃と推定される。

SI9 (第41図)

位置 18-J・K区に位置する。北東側にSI8が近接する。

遺構 主軸はN-33°-Wで、カマドは南側コーナー近くにある。平面形は主軸ではない東西方向が長く、約2.8m、ほか2.6mで、比較的明確な長方形をなす。面積は7.3㎡。深さは13cmで、カマドのある辺をのぞいて、壁溝がめぐる。壁溝は幅12~24cm、深さ9~12cmである。床面南にあるピットは浅くレンズ状のものである。北西側のやや大きなピットは深さ約13cmであり、柱穴とも考えられる。カマドは0.4×0.7mで、ほぼ中央に焼土があり、この部分から土師器小甕 (1・2)・甕 (3) が出土した。

遺物 出土量は少なく、数個体である。第41図1は小甕A系で、端部は丸くおさまる。2は小甕A系の底部で、底部外面は不調整である。長甕 (3) は口縁部1点がSI8出土のものと接合した。口縁部から「く」の字状に外反する。体部外面はヘラナデされるが、粘土紐の接合痕を明瞭に残し、内面の調整は不明瞭である。底部内面は平滑である。体部中位が張る形態である。

時期等 時期はI期に比定されよう。

SI10 (第42図、図版28・52)

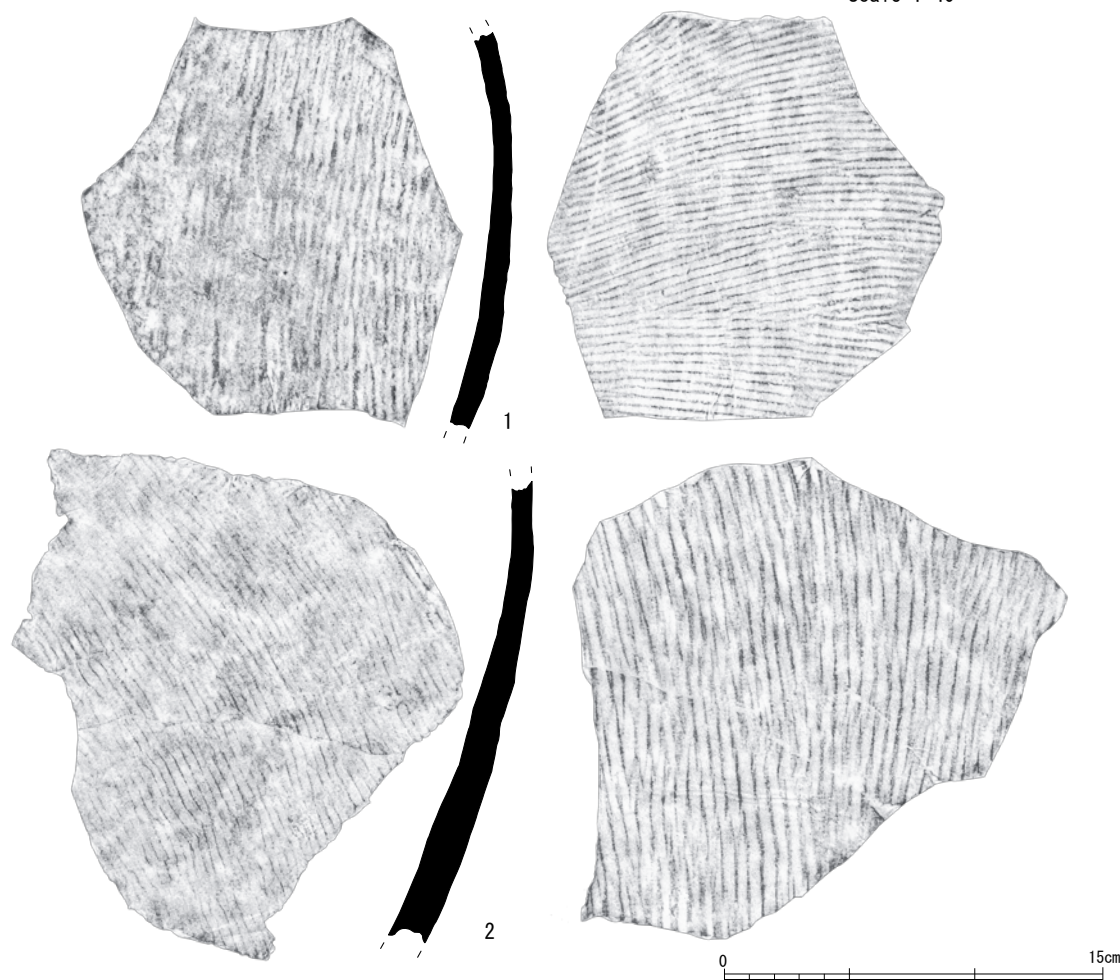
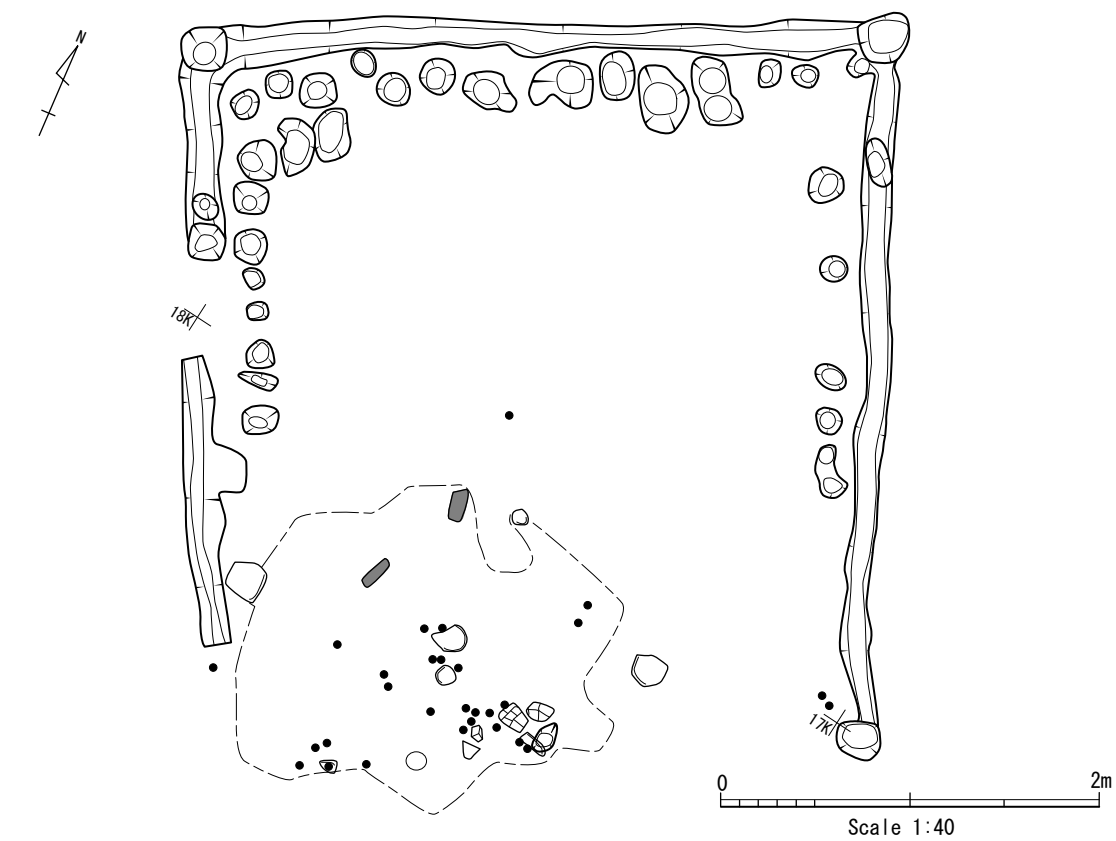
位置 11・12-N区に位置する。

遺構 主軸はN-14°-Wで、南辺にカマドがある。カマドのある南・北辺がやや長く、3.8m、東・西辺は2.9mで、面積11㎡である。深さ5cmと非常に浅く、削平を受けている。カマドの部分のをのぞいて、幅4~8cmの壁溝が途切れながらめぐる。柱穴は壁際に8個ある。カマドは1.2×1.1mで、カマドとその周りの粘土が混じる部分は、焼けているのが北半分のみで、カマドの芯である土師器埴 (1)・小甕 (3・4)・甕 (9) がこの部分で検出された。

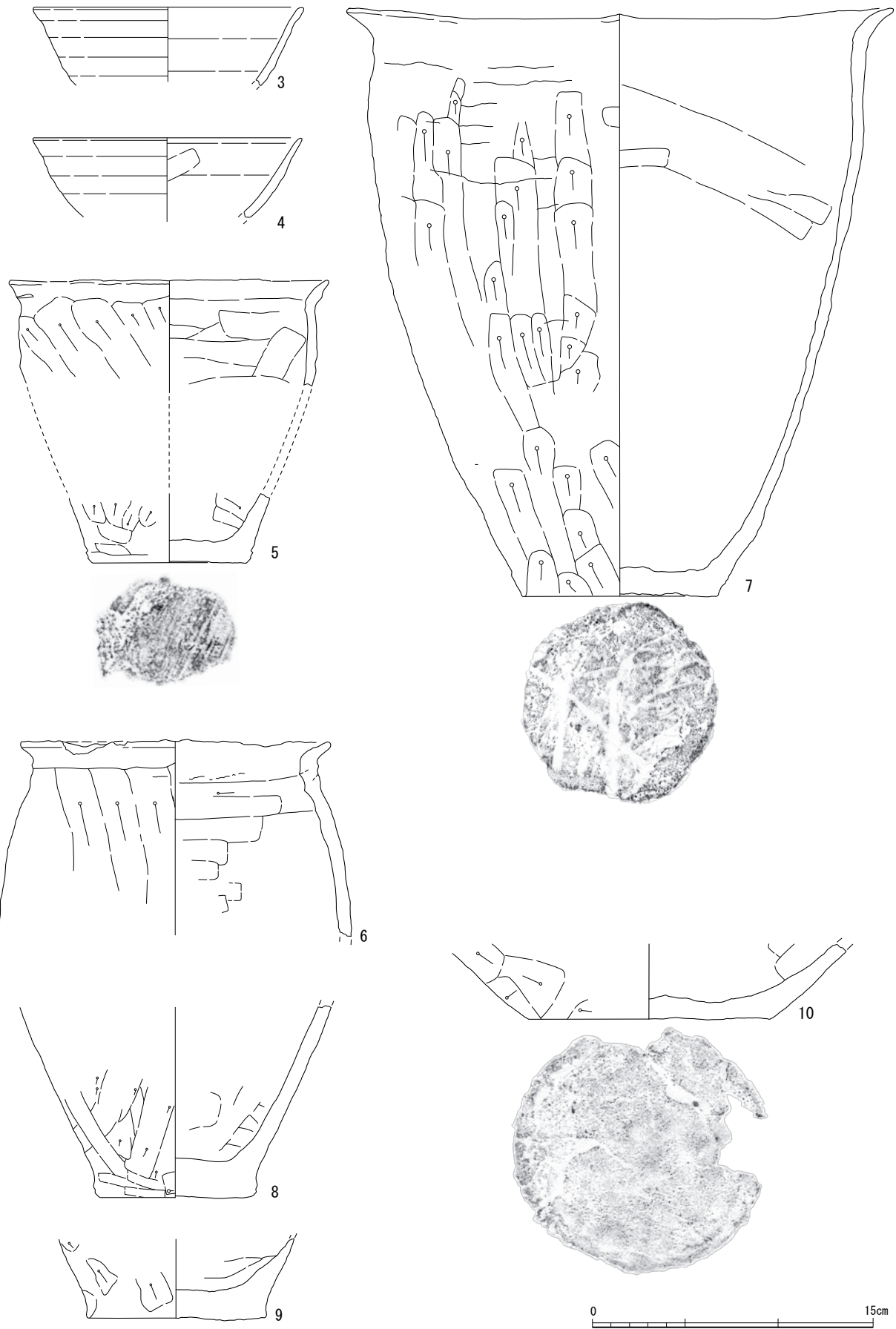
遺物 遺物の出土は比較的多い。出土個体数が10個体程あり、良好な資料である。須恵器はなく、土師器はB系のものを含む。I期の基準資料である。土師器は無台埴・小甕・長甕・底部がある。

埴 (1・2) 1はきわめて少ない無台埴Cである。器形・技法は須恵器と同様で底部外面は回転糸切りののちヘラナデと思われる (図版28-1)。しかし、褐色の色調と軟質の焼成で胎土も須恵器と異

S18

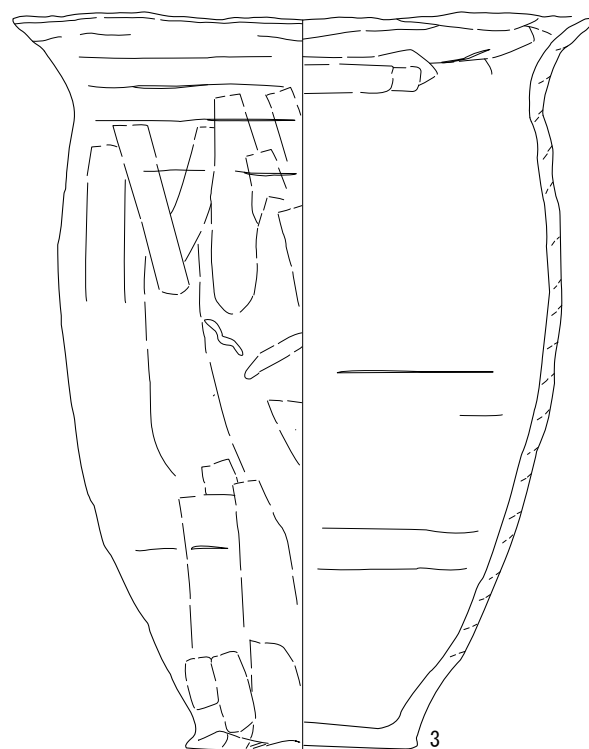
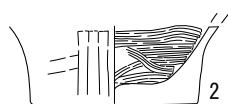
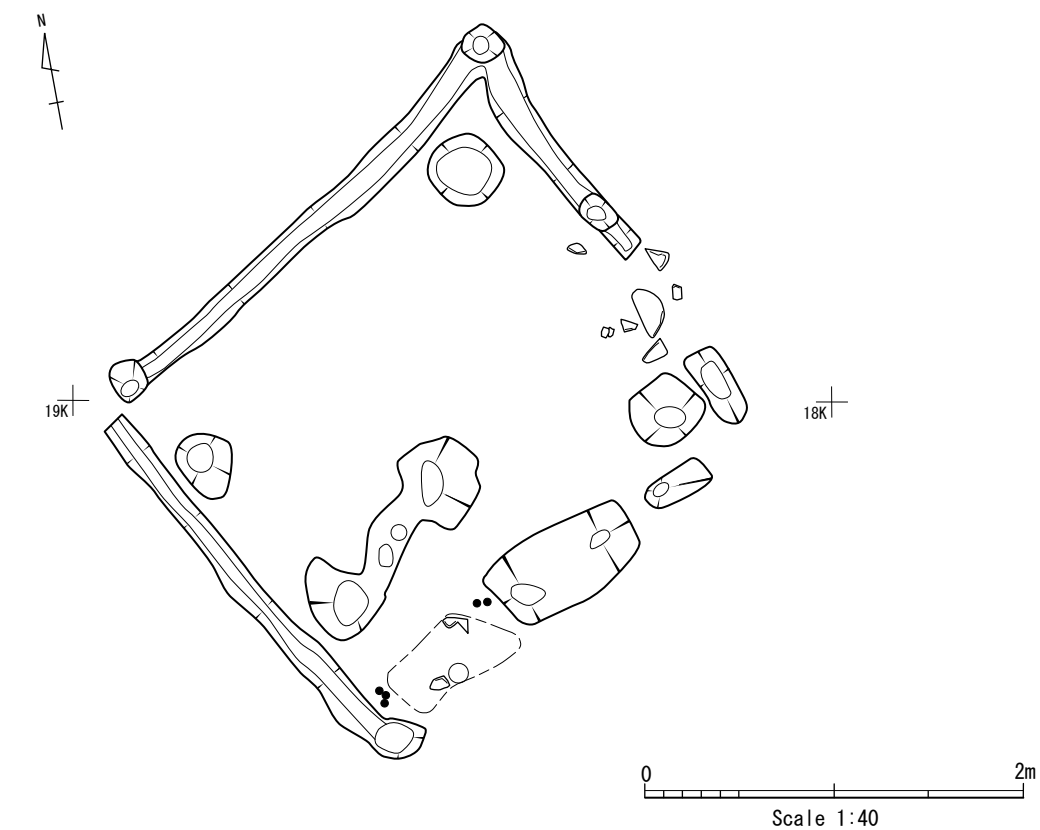


第39図 SI 8 と出土遺物 (1)



第40図 SI 8出土遺物 (2)

S19



第41図 S19と出土遺物

なる。2は無台埴Bである。

小甕（3～7） 法量からみて、口径約13cmのもの（3）、口径15～17cmのもの（4・5）に分けられるが、全体の器形、法量が不明なこともあり、それぞれの区別は明確ではない。5などは特に体部がやや長く、法量はかなり大きい。口径20cm以上の長甕との差は大きい。5の口縁部内面には炭化物が付着しており、一般的な小甕と同様の用途と考えられる。小甕の技法は6をのぞき、A系である。5は口縁部が「く」の字状に直線的に外反し、つくりはていねいである。底部（7）は大きさからみて、小甕であろう。6もその可能性が強い。これは底部が水平である。

長甕（8・9） 9は口縁部がゆるく外反し、ロクロのB系である。口縁部のロクロナデはきれいで、胎土も精良で、明るい色調である。底部（8）は厚い器壁である。底部外面は木葉痕で（図版52-2）、体部外面はヘラケズリないしヘラナデであり、B系の長甕とは考えられない。

時期等 カマド内の土器はI期として考えられる。

SI11（第43・44図）

位置 11・12・13・14-M・N・O・P区に位置する。SI12に切られており、南側半分は遺存していない。

遺構 主軸はN-15°-Wで、南西辺にカマドがある。北東辺がやや短く、約3.6m、北西辺は約4.4mで、面積は約15.8㎡と推定される。深さは5cmで、壁溝は北東・北西の遺存している部分にのみみられる。壁溝は幅12～36cm、深さ9cmである。埋土はよくしまっている。カマド火床は0.4×0.4mで、上面よりカマドの芯と考えられる土師器埴（1）、甕（5～7）が、検出された。

遺物 遺物の出土は少ない。土師器埴・小甕・長甕が数点出土している。埴と7はロクロのB系である。

埴B（1・2） 1は埴Bである。内外面はロクロナデで、基本的に須恵器と同一である。しかし、焼き上がりは酸化焰焼成の土師器で、胎土も小礫を含まず、一般的な須恵器とはちがうようである。2は黒色土器で内面黒色を呈し、ヘラミガキ調整されている。

小甕（3） 3は底部で、外面の木葉痕をヘラナデで消している。

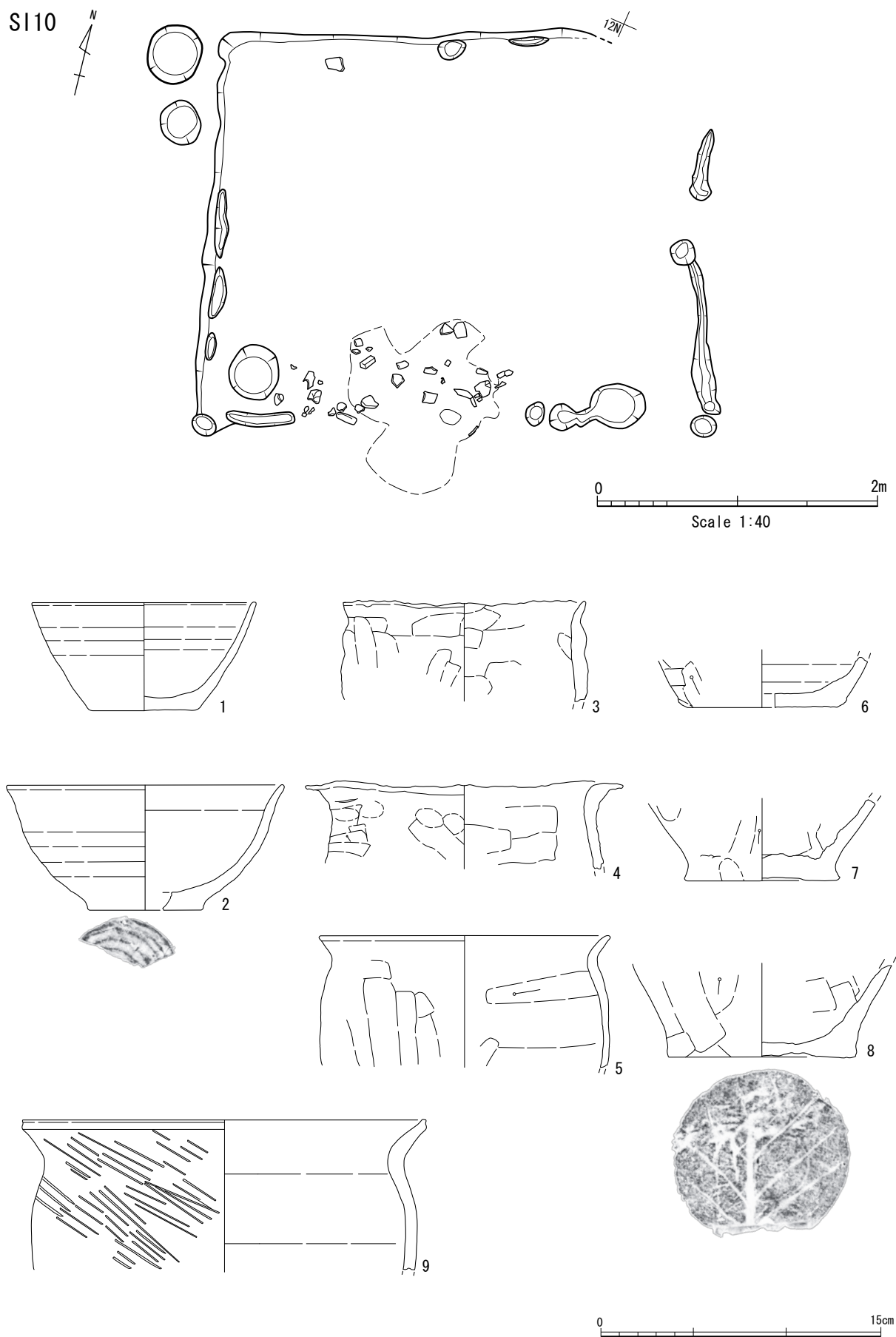
長甕（4～7） 5は口縁部の外反が明確で、端部は丸くおさまる。器壁は全体に薄い。口縁部と体部の外面にはかすかにヘラナデが残る。6は口縁部が短く緩やかに外反する。屈折は鈍い。7は内外面ロクロナデである。胎土は赤っぽく、含まれる粒子は須恵器と異質なものである。こうした胎土は明確なロクロ使用の1と類似する。底部（4）は外面全面にヘラケズリする。A系である。

時期等 時期はI期と考えられる。

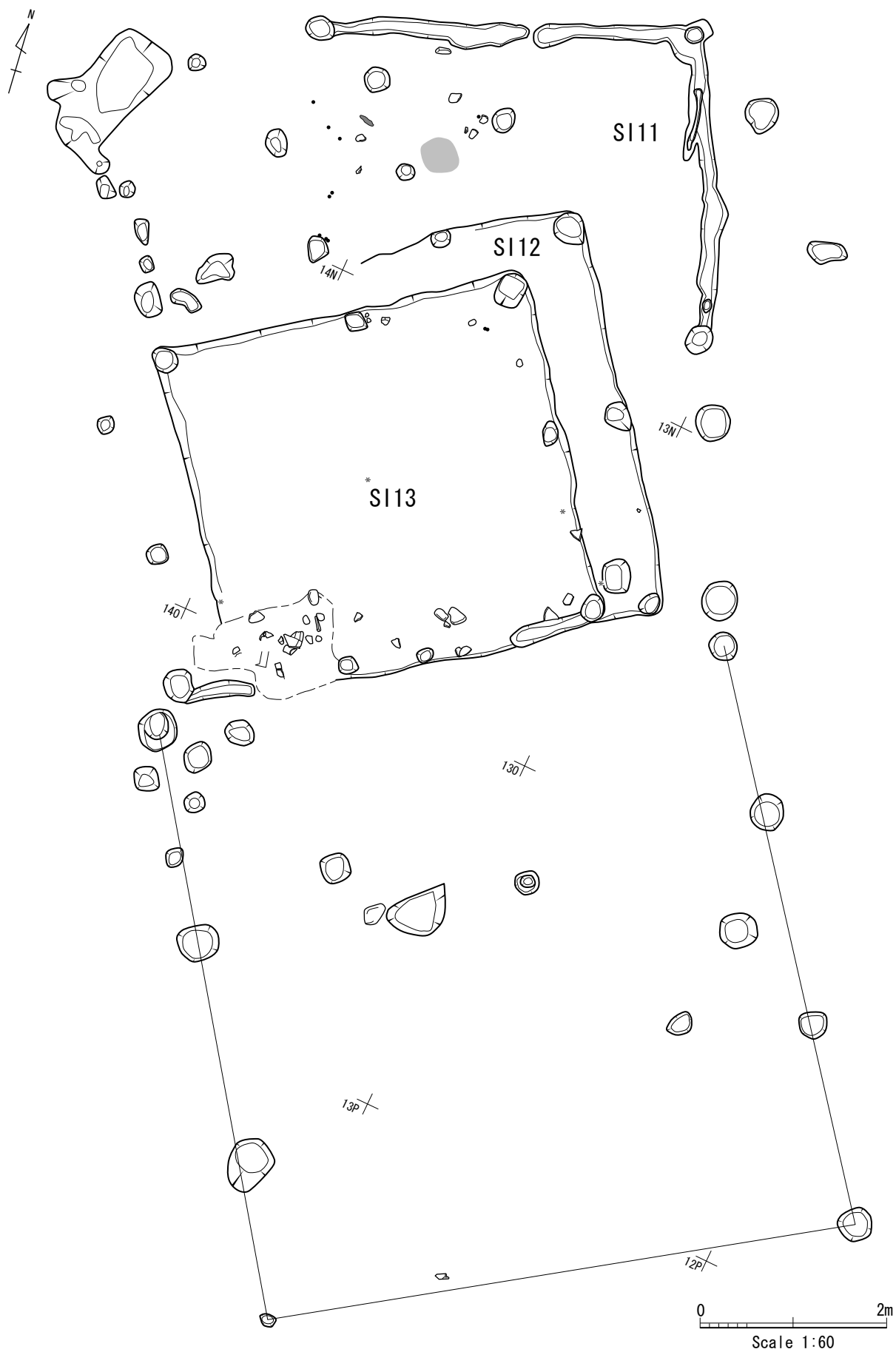
SI12（第43図）

位置 12・13-M・N区、SI11を切る竪穴で、SI13に切られており、南西側の大半は遺存しておらず、全容は不明である。

遺構 本竪穴か本竪穴を建替えたと思われるSI13の南東部には掘立柱建物が取り付く。主軸はN-27°-Wで、カマドは遺存しておらず、住居かどうかは不明。北東辺は長さ約4.4mで、ほかは不明で、全体形および面積も不明である。比較的高い位置にあるため、削平を受け、深さは10cm前後である。



第42図 S110と出土遺物



第43図 SI11～SI13

壁溝はないが、柱穴は壁際に5個ある。

掘立柱建物は長軸方向が竪穴とほぼ一致し、桁行4間（約9.8m）、梁間1間（約6.7m）の建物である。やや平面形は歪みがある。面積は約52.8㎡である。梁間は長さからみて、2間のものと推定されるが、ここでは中間の柱は確認できなかった。柱掘方は径約35cmの円形である。出土土器は竪穴から土師器1点が出土しているにすぎない。

時期等 土器が少なく、時期は明確でないが、Ⅱ期の古い段階かと考えられる。

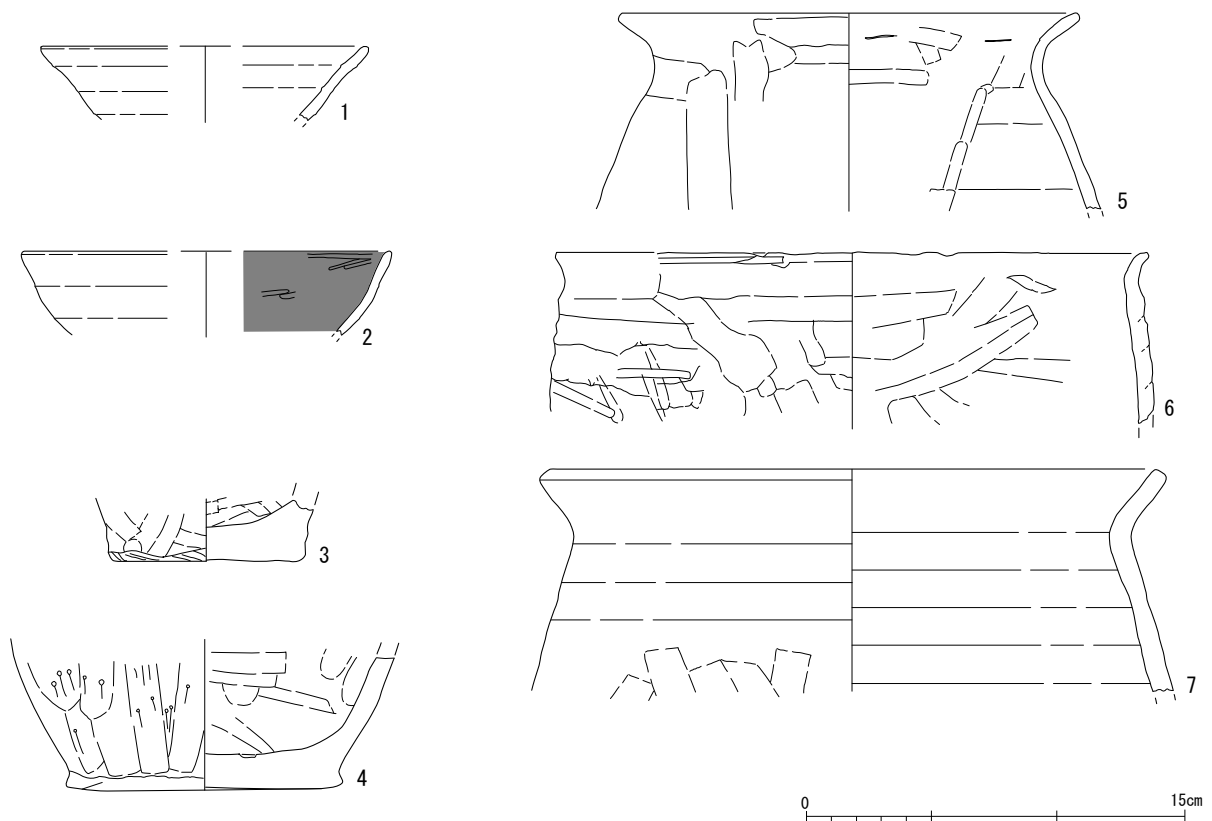
SI13（第43・45図・図版28）

位置 13・14-M・N・O区、SI12の南側に位置する竪穴住居で、SI12を切る。

遺構 主軸はN-28°-Wで、カマドは南側コーナーにある。南東・北西辺が長くて、4.1m、ほかが3.8mで、長方形をなす。面積は15.6㎡で、小さい。壁溝は南東部に一部認められる。壁溝は幅20cm、深さ27cmである。柱穴は壁際に7個ある。カマドは1.1×1.6mである。カマドより土師器小甕（3）・甕（4～7）が比較的まとまって出土した。

遺物 出土土器は8個体ほどで少ない。鉄の棒状不明品（9）が出土した。須恵器には甕（1）がある。体部片である。内面はよく磨滅し、転用硯とみられる。

土師器には無台埴（2）・小甕（3）・長甕（4～8）がある。2は黒色土器である。内面を黒色処理する。底面に糸切り痕が観察される。小甕は底部（3）がある。3の底部外面には全面に砂が付着しているのがみられる（図版52-7）。内面は指ナデとみられ、非ロクロである。胎土は小礫を多量に



第44図 SI11出土遺物

含むが、精良である。底部から体部の器壁が比較的均一で、たち上がりがスムーズである。

長甕（４～８） 口縁部（７・８）のうち、８は器壁が厚く、「く」の字状に外反した口縁端部は丸くおさまる。比較的精良な胎土で、底部（３～５）と共通する。７は端部が丸味をもつ。４は底部外面までヘラケズリされるもので、長甕Ａ系であるが、特に胎土が赤っぽい。８と同一個体の可能性がある。５も明確なＡ系である。５は底部外面を含めて内外面ともハケ状工具によるナデである。

９は断面形が長方形の鉄製品で、半ばよりねじれて２本が一体化している。重量は８３ｇで埋土から出土した。

時期等 土器が少なく時期は明確でないが、Ⅱ₂期に比定されよう。

SI14（第46～48図）

位置 13・14・15-M・N・O区の調査区北東部に位置する。

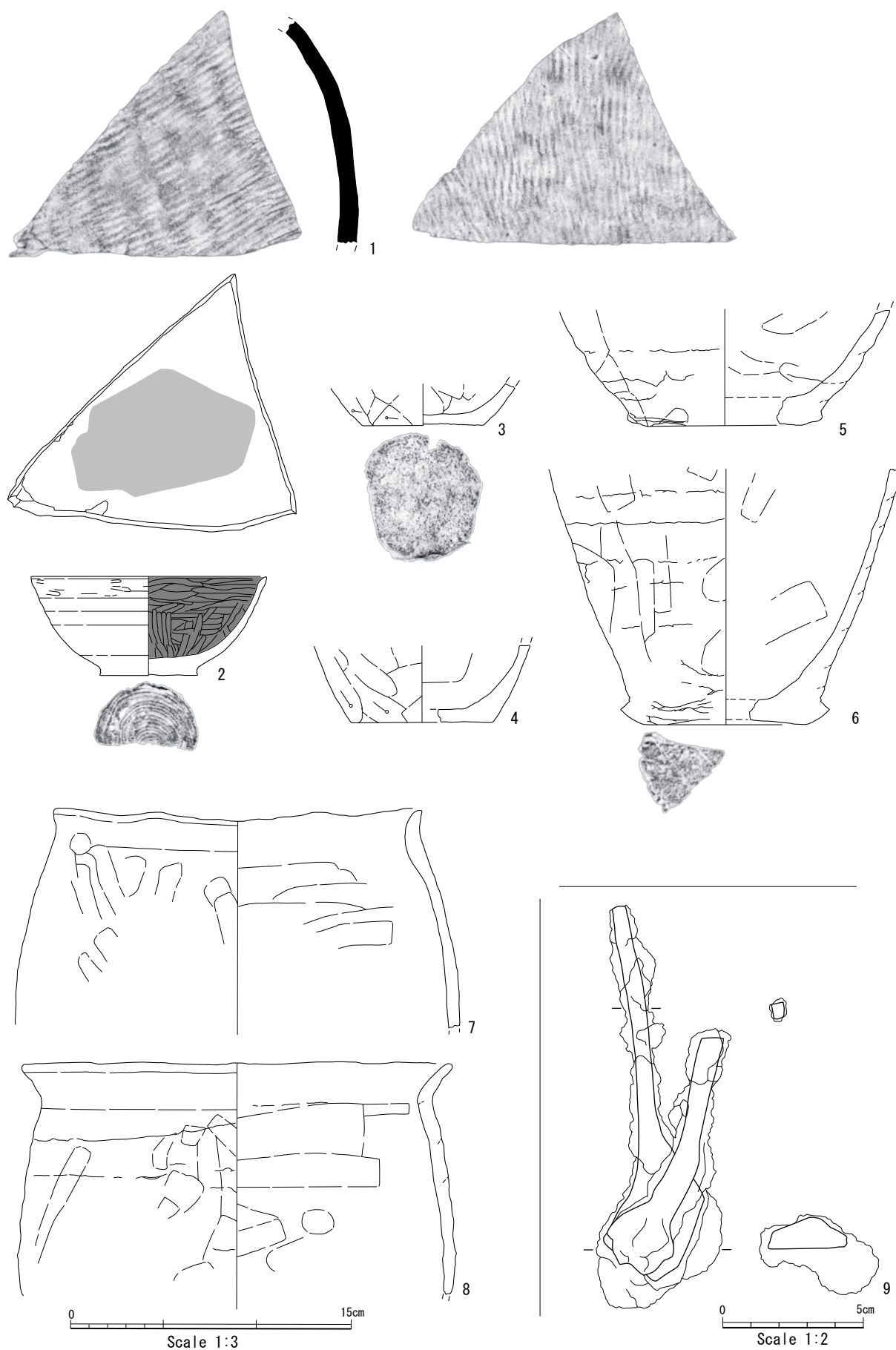
遺構 本竪穴の南東部には掘立柱建物に取り付く。主軸はN-28°-Wで、南東辺にカマドがある。一辺の長さは4.1mで、正方形を呈する。竪穴部の面積は16.8㎡で小さい。深さ約7cmである。カマドのある辺をのぞいて、壁溝がめぐる。壁溝は幅16～24cmである。柱穴は壁際にある。カマドは1.0×0.8mで、カマド内には土師器小甕（１）、甕（８）が入っていた。土師器鍋（10）もカマド内出土である。このほかの出土土器は少ない。

掘立柱建物は3間（約4.6m）×1間（約4.0m）の建物で、平面プランはやや歪んでいる。面積約18.4㎡である。柱掘方は径20～40cmの円形である。

遺物 出土土器は全体でも10個体未満で少ない。土師器甕が多い。小甕（１）は形態がやや特異である。非ロクロ土師器であり、器壁は全体に薄く、口縁部はゆるく長く外反する。胎土はやや精良である。底部（３）の外面は木葉痕のくぼみがある。

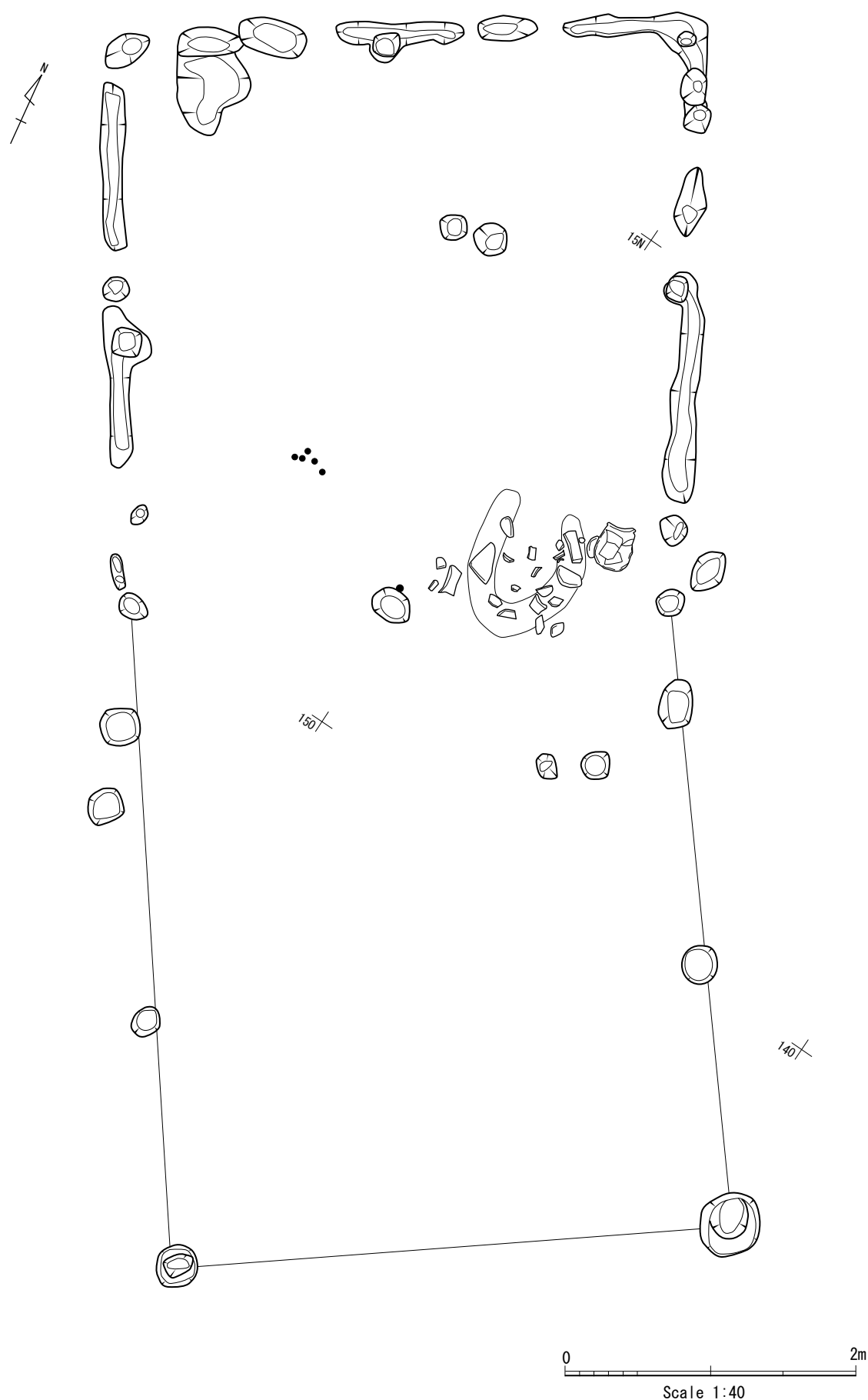
長甕（４～９） 口縁部（４・８）は端部が丸くおさまる。底部（５）は大きな平底のＡ系である。全体を残す６・７の２個体のうち、６は体部外面下半のヘラケズリ痕はナデでかなり消され、内面のナデ痕は明瞭に残る。また、上半部のナデはていねいで粘土紐の積み上げ痕はみられない。外面下半はナデで一部ケズリとなる。ナデの痕跡ははっきりとしない。底部内面は接合のふくらみをまったく残さない。体部はあまり張らない形態である。７は全体のつくりが粗雑で、焼成も軟質の感じを受ける。口縁部は外反し、やや外方につままれ、外面に面をもつ。体部外面上半部のナデの下には粘土紐の積み上げ痕が若干残る。体部外面下半は粗いヘラケズリ、内面はナデである。ナデの凹凸はなく比較的平滑である。８は口縁部が外側に開き、体部外面の粘土紐の積み上げ痕は凹凸が大きい。外面の調整は弱く、部分的である。胎土は長石など小礫を含むが、比較的精良で、器面の感触はなめらかである。須恵器系の胎土とは異なる。９は口縁部が「く」の字状に外側に開き、体部外面の凹凸は小さい。外面の調整はていねいであるが、部分的に粘土紐の積み上げ痕を残す。胎土は鉄滓とみられる粒を含み、やや粗いが、器面の感触はなめらかである。須恵器系の胎土とは異なる。鍋（10）は非ロクロのものである。鍋としては全形を知りうる数少ない例である。底部は厚く、平底で、丸味をもってたち上がる。口縁は直線的にたち上がり、端部は尖る。

時期等 土師器甕以外の器種が少なく、時期ははっきりしないが、Ⅱ期頃に比定されよう。

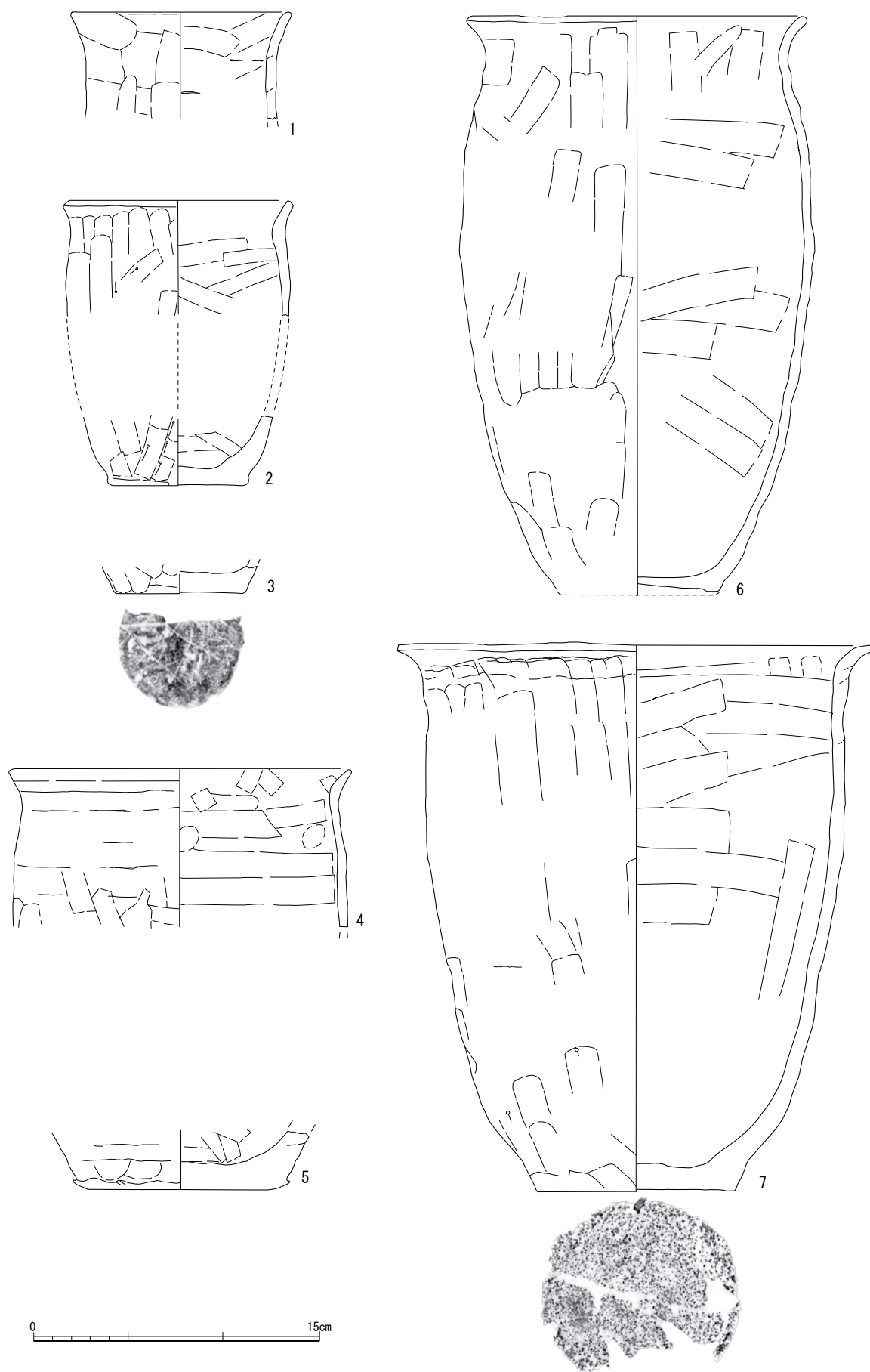


第45図 SI13出土遺物

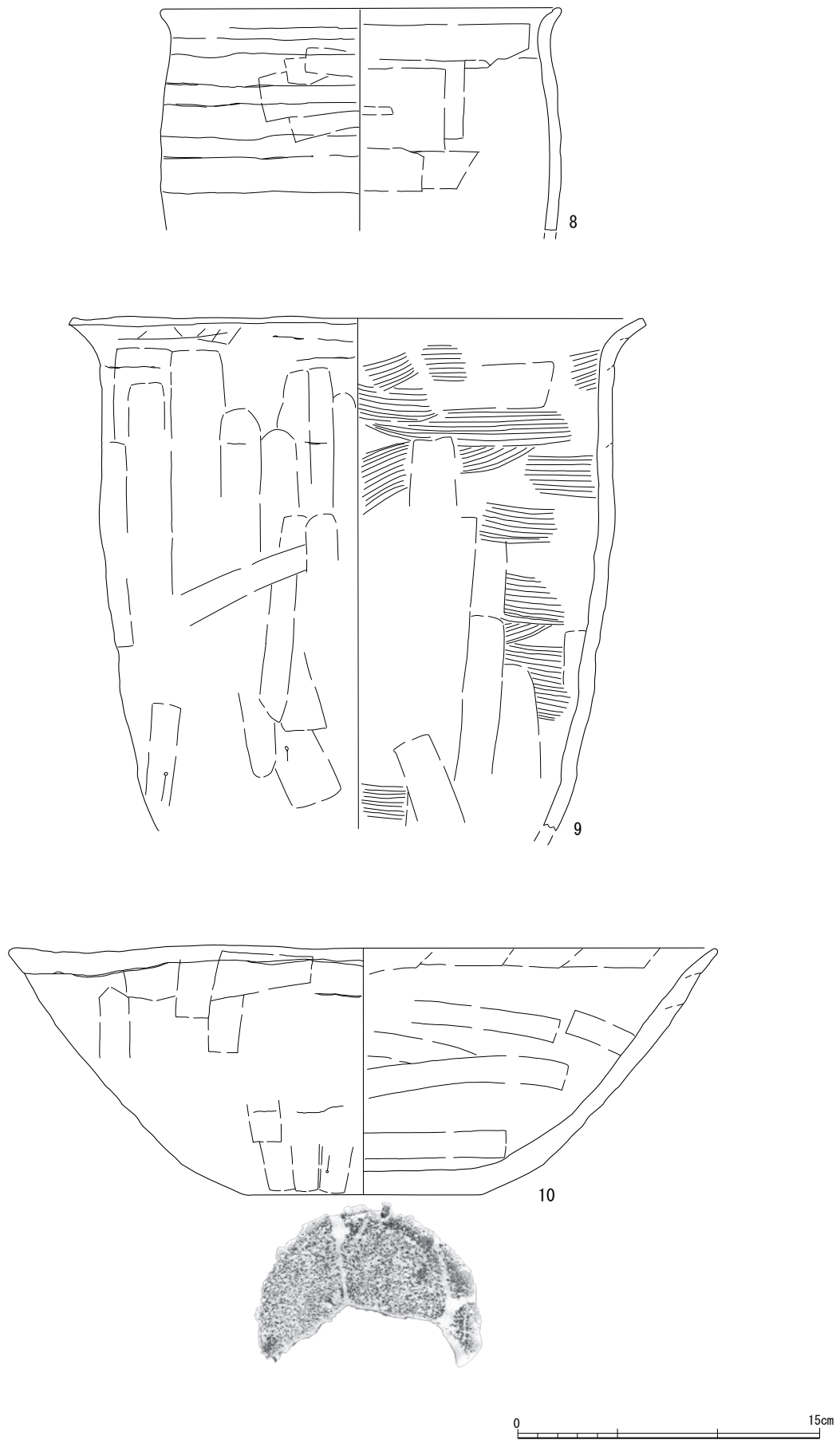
SI14



第46図 SI14



第47図 SI14出土遺物 (1)



第48図 SI14出土土器 (2)

SI15 (第49図)

位置 4・5-N・O区に位置する。SD2・6・13に切られており、全容は不明である。

遺構 主軸は不明である。プランを明確に把握できなかった。カマド・壁溝はない。

遺物 出土土器はかなり少ない。第49図1・2は須恵器甕体部片である。

時期等 土器が少なく、時期ははっきりとしないが、Ⅱ期に比定されよう。

SI17 (第50図)

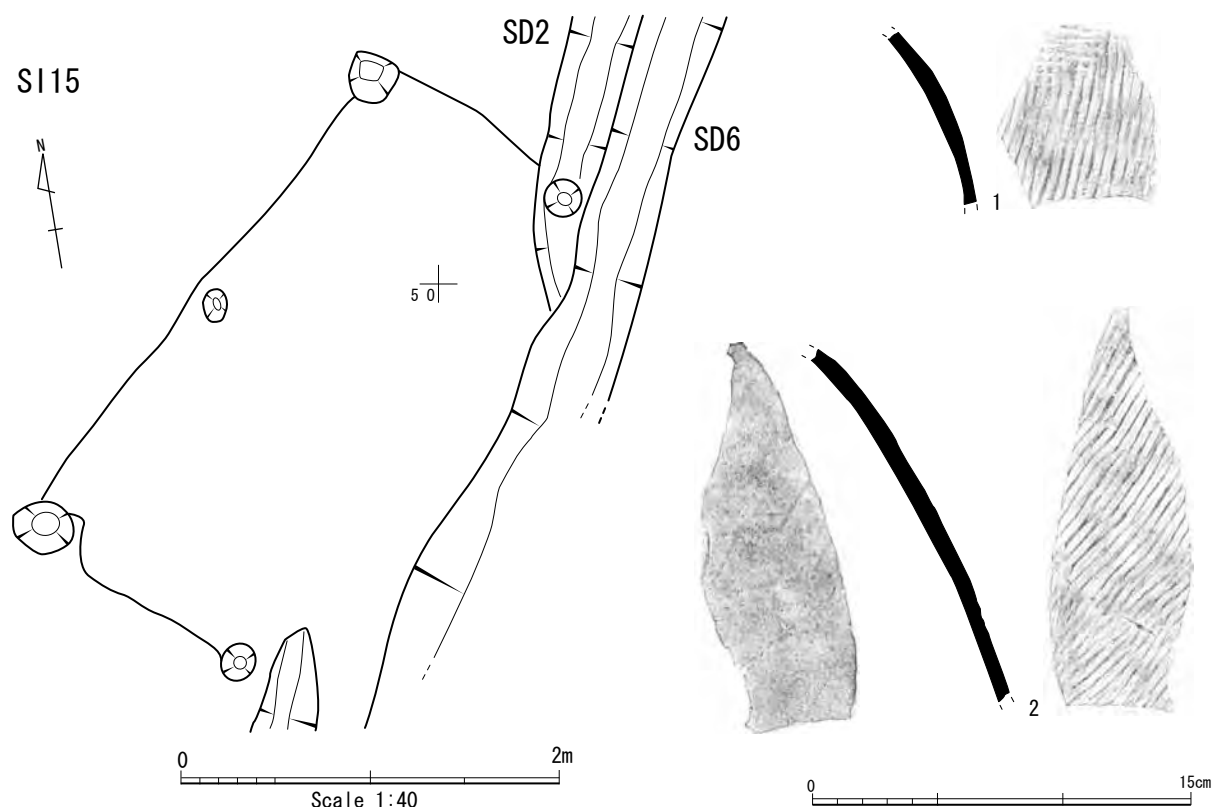
位置 12・13-O・P区に位置し、SD25に切られる。

遺構 主軸はN-30°-Wで、東辺北よりにカマドがある。西辺がやや長く、約3.4m、北辺は約3.1mで、推定面積は約11㎡である。高いところに位置するため、深さは浅い。床面に浅いピットがあるが、浅くて柱穴とは考えられない。カマドは1.2×1.9mである。上層はよく焼けており、カマド内からタタキ目の須恵器甕(1)が出土した。

遺物 土器は少なく、個体数は10個体未満である。

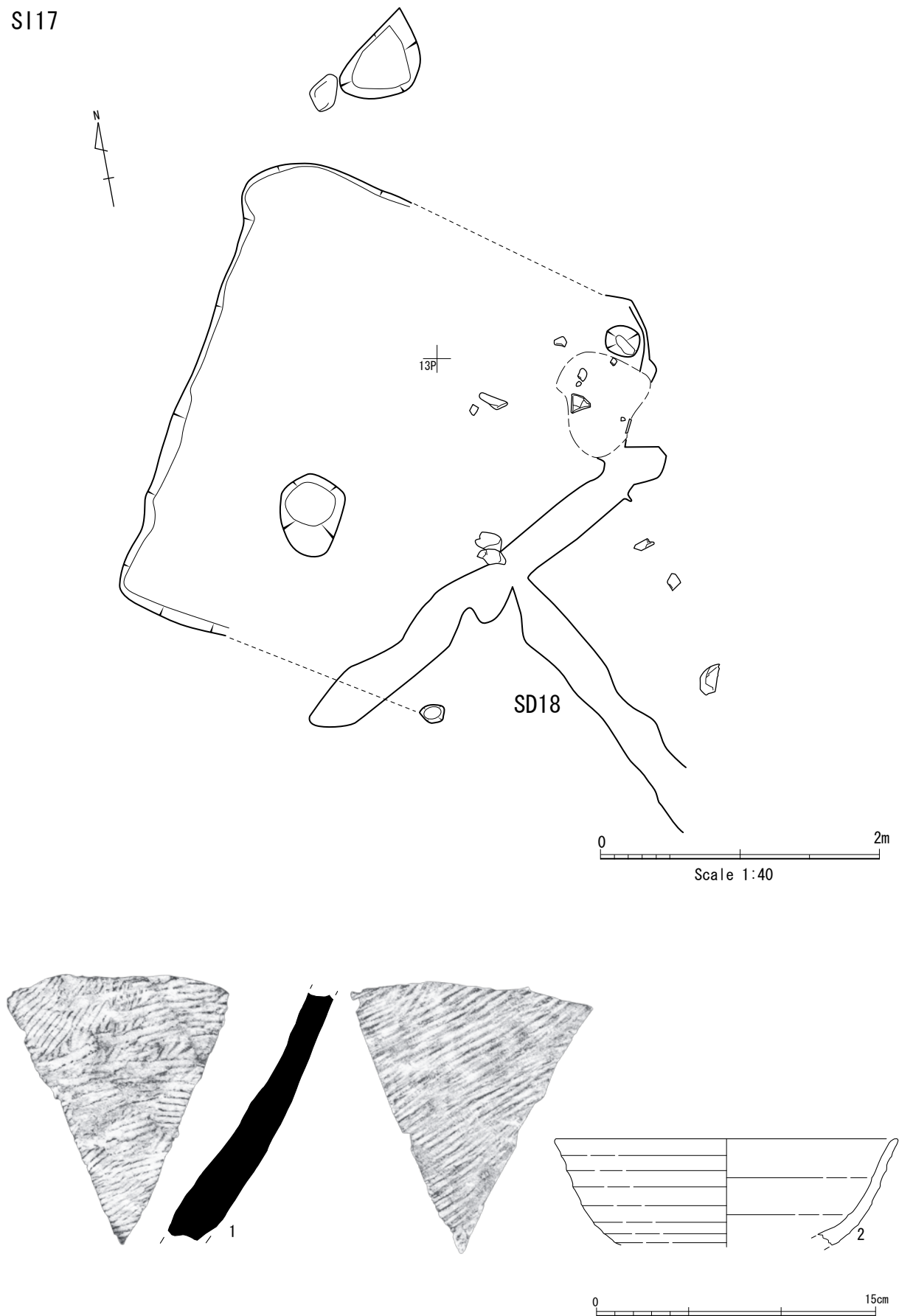
第51図1は須恵器の甕体部片である。外面が縄目状の平行タタキ目・内面が平行文あて具痕である。2は土師器埴Bで、胎土は精良で、須恵器系胎土である。

時期等 時期はⅠ期頃に比定されよう。



第49図 SI15と出土遺物

SI17



第50図 SI17と出土遺物

SI18 (第51図)

位置 13・14・15-P・Q・R区に位置する。北西側にはSB4があるが、新旧関係は不明である。また、SD16に切られる。

遺構 主軸はN-22°-Wである。比較的傾斜したところに位置する。ほぼ正方形で、整った平面形を呈する。カマドは東辺に1基存在する。南東・北西辺約5.3m、北東・南西辺約5.4mで、深さは斜面のため、23cmである。床面にあるピットは柱穴の可能性もあるが、配置が不規則である。壁溝は北西辺をのぞく、3辺にめぐり、壁溝は幅16~24cm、深さ24~28cmである。カマドは0.8×1.7mで、上部が粘質を帯びる。

遺物 カマド内を含め、付近から比較的まとまって土器が出土した。

第51図1は土師器塀。口縁部のみで、塀Bの可能性もある。口縁部は内湾する。ロクロ調整である。内面に、黒い付着物がある。2~4は土師器甕底部で、2・3は小甕とみられ、底部外面木葉痕である。2は体部外面下端をハケ状工具でナデるだけである。器壁が厚く均質である。4はやや大きな平底のA系である。

時期等 時期はⅡ期の新しい段階に比定される。

SI19 (第52図)

位置 17-R区に位置する。カマドを検出したのみで、全体形は不明である。

遺構 カマドとその粘質土の分布は1.8×0.8mの範囲に広がる。カマドの構築土と考えられる。

遺物 カマド中より須恵器(1)、土師器(2・3)が出土した。

第52図1は須恵器甕の体部片である。外面が縄目状平行タタキ目。内面にはあて具痕がない。2は小甕である。3・4は長甕の口縁部と体部下半部であるが、胎土・手法からみて、同一個体の可能性も考えられる。3はA系である。器壁が厚く、体部がやや張る。短胴甕に近い器形の可能性もある。4は底部で全体に器壁がかなり厚く、つくりは雑な感じが強い。ケズリは幅広いものであり、内面のナデ痕は指である。胎土は、長石等を多く含む。外面のヘラケズリは粗く行われる。

時期等 時期はⅡ期に比定される。

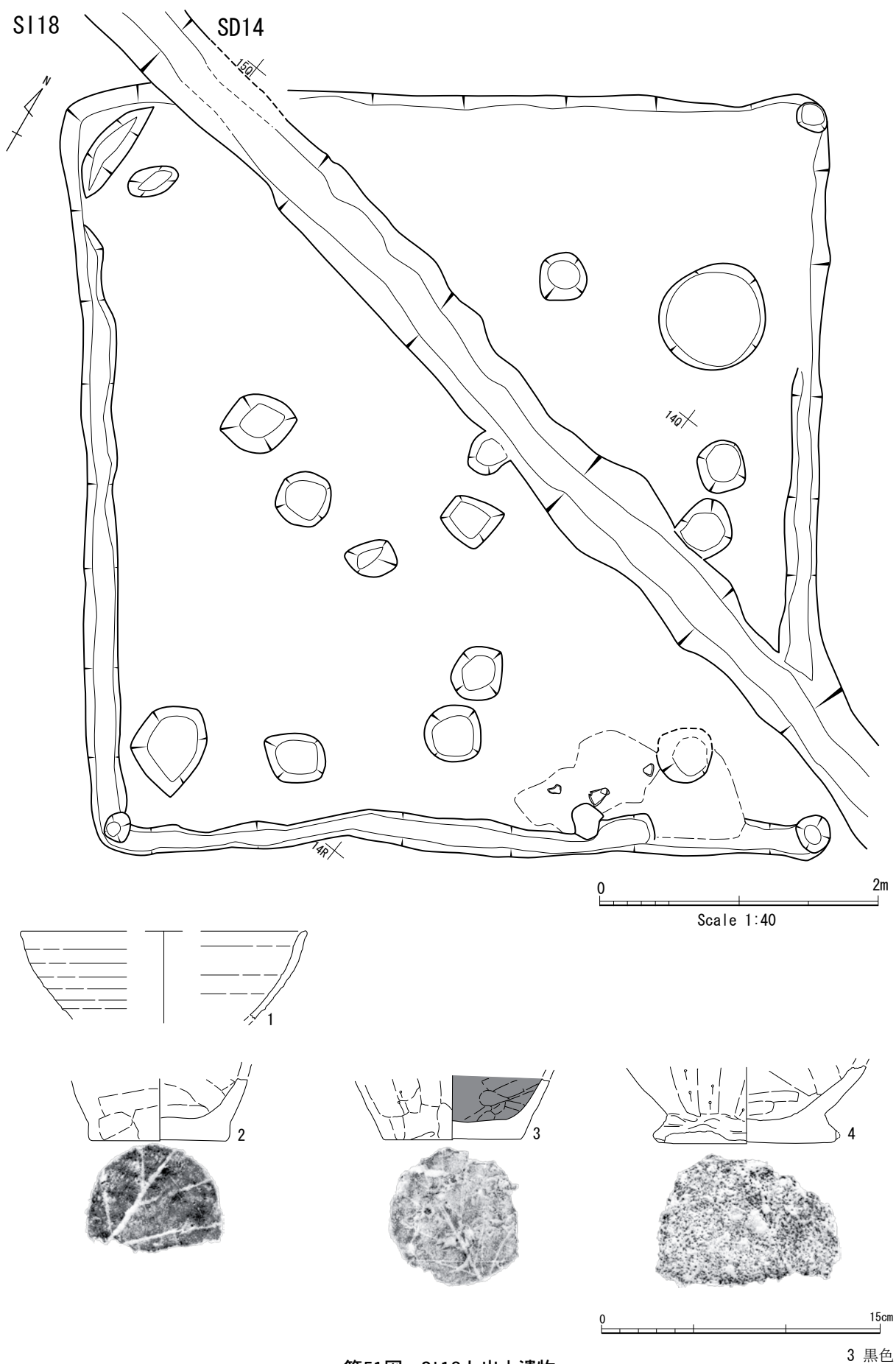
SI20 (第53・54図)

位置 17・18・19・20・21-P・Q・R・S・T区に位置する。

遺構 大型でしかも北部に攪乱坑があり、平面プランをすぐに把握できなかったものである。本竪穴の北東部には掘立柱建物がセットとなる。主軸はN-10°-Wである。北東辺にカマドがある。平面形は正方形に近い。一辺8.1~8.9m、面積は約72㎡で、検出された平安時代の竪穴住居中最大規模である。深さは24cmである。

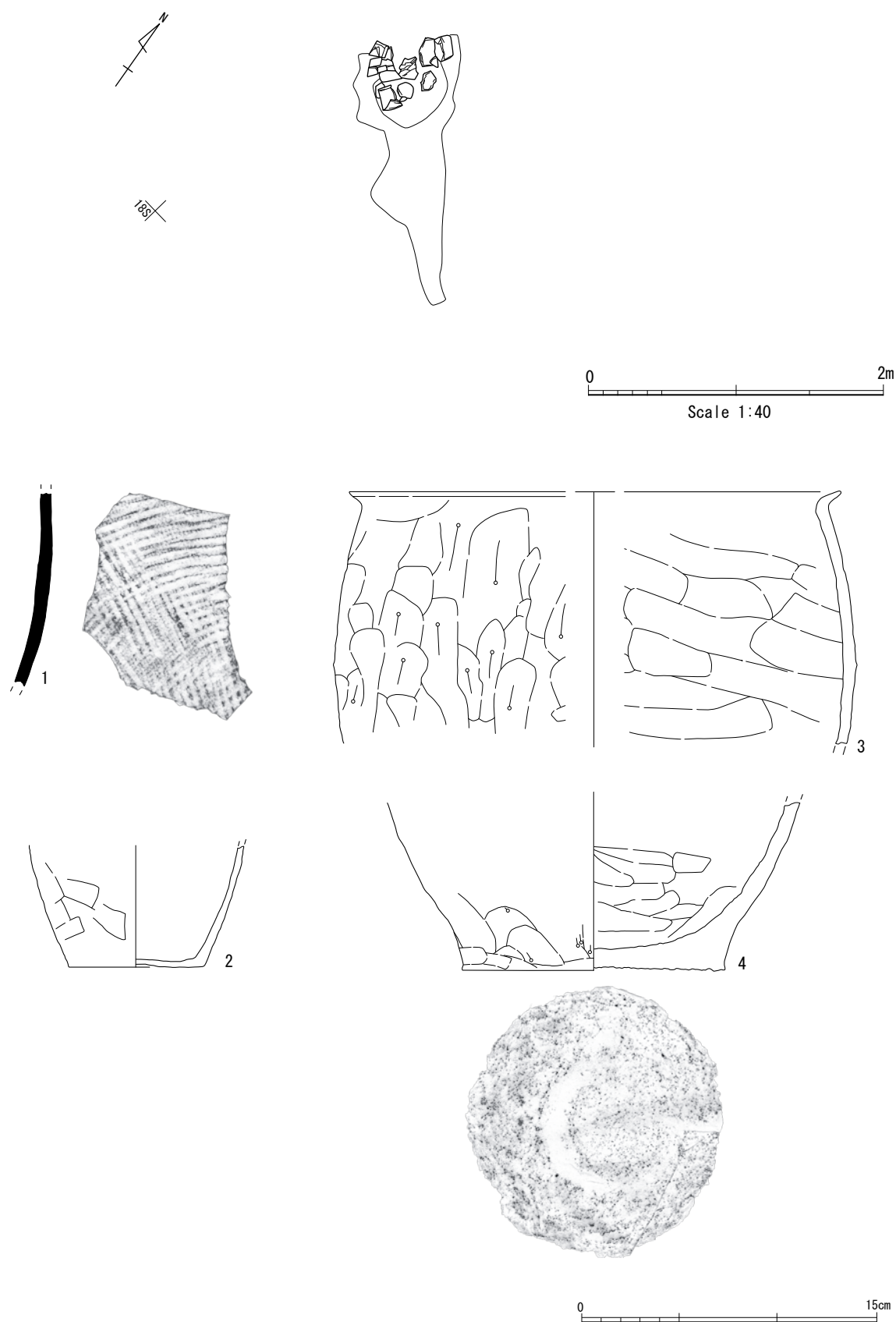
南東・北西辺には壁溝状の浅いくぼみがあるが、全体にめぐりものではない。これらは幅16cmほどである。壁際には径28~40cmのピットが比較的等間隔にあり、柱穴と考えられる。これ以外のピットも、西側コーナー付近の小さいものをのぞけば、いずれも柱穴とみられる。規模の大きい主柱穴をもたない住居の構造と考えられる。なお、壁溝などに沿ってある柱穴は溝の埋土を切っている。

カマドは0.8×0.8mで、上部は削平されている。上層部が焼けた粘質土である。住居の埋土はあま



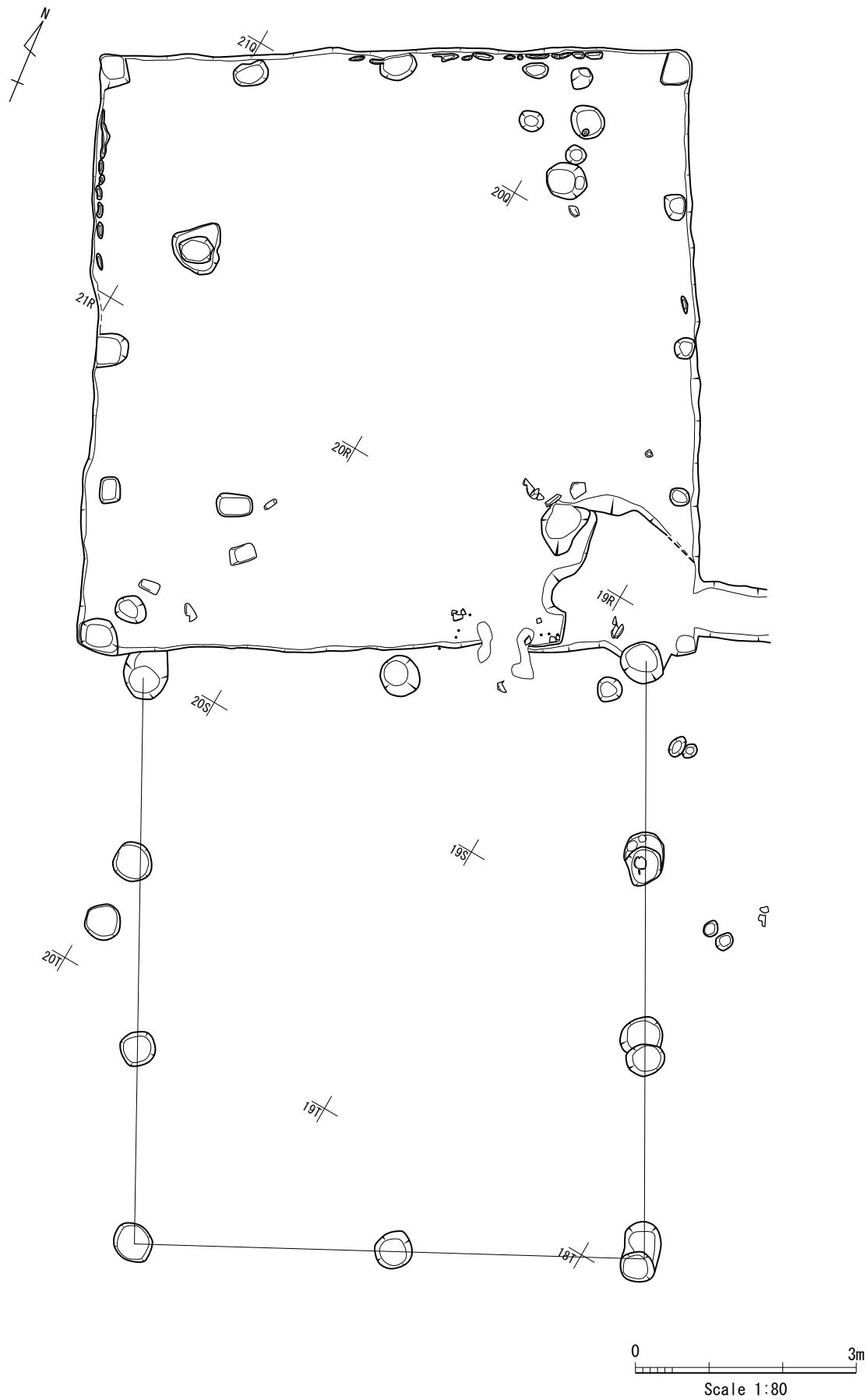
第51図 SI18と出土遺物

SI19カマド

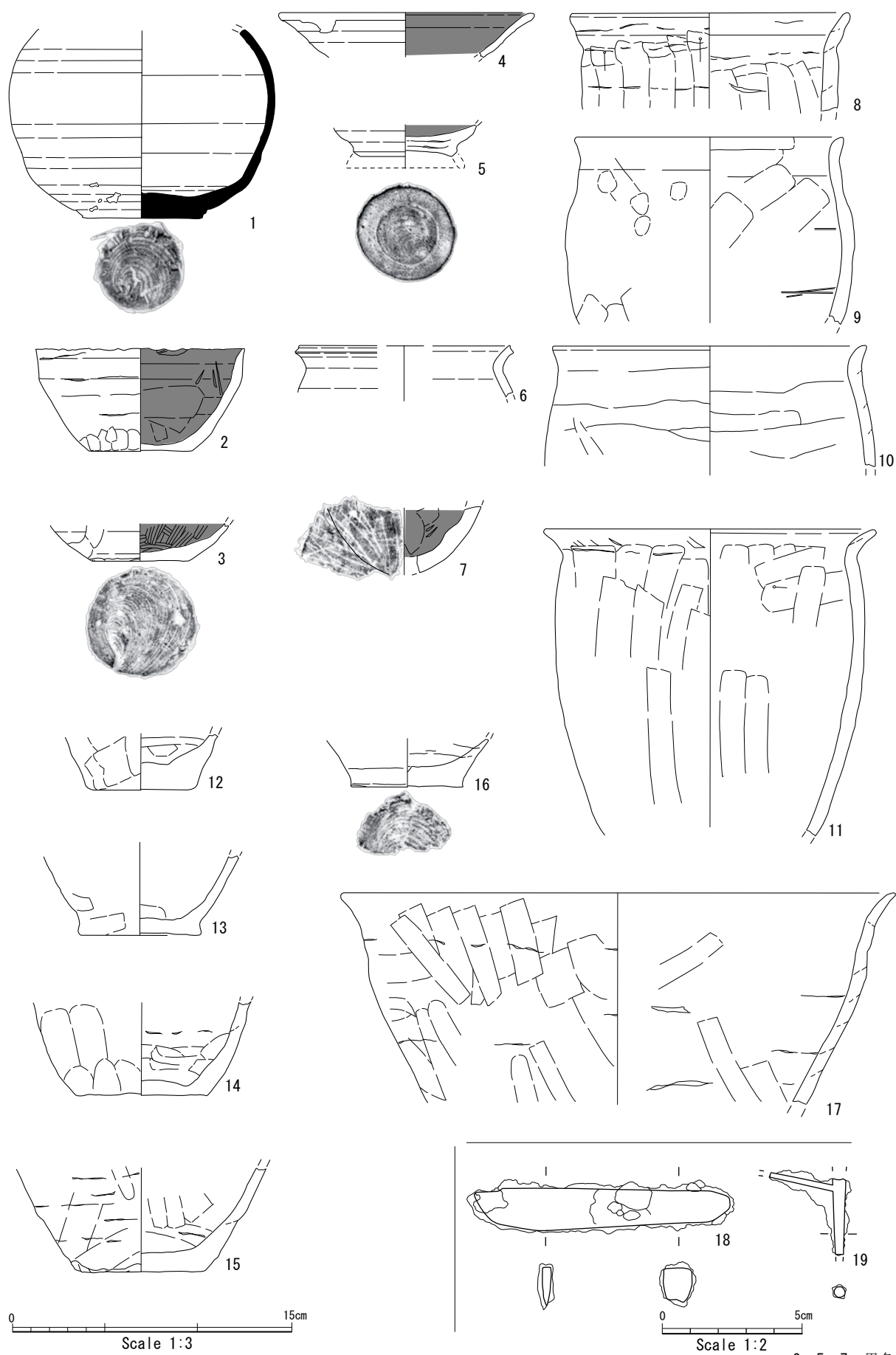


第52図 SI19カマドと出土遺物

S120



第53図 S120



第54図 SI20出土遺物

りしまっていない。

掘立柱建物はカマド側に設けられている。桁行3間（約8.3m）×梁間2間（約7.5m）の建物で、平面形はほぼ長方形のプランである。面積62.2㎡である。柱掘方は径50cmほどの円形で、深さは38～42cmである。

遺物 土器の出土量は10数個体と比較的多く、土師器小甕（6～9・12～16）・甕（10・11）・鍋（17）・無台碗（2・3）が出土した。また、土師器皿（4）、有台碗（5）、丸底の小甕（7）、須恵器壺（1）などは、当遺跡では一般的でない器種であり、この住居の階層を示唆し、住居の大きさと住人の階層との一定の関係を知ることができる。そのほか鉄製品の刀子（18）などが出土した。

須恵器（1） 短頸壺（1）は古く、前の住居に伴うものであろう。器壁は薄く、球形の体部に短く直立する口縁部をもつものと推測される。灰色の色調である。

土師器（2～17） 皿（4）、有台碗（5）、無台碗（2・3）、長甕（10・11）、小甕（6～9・12～16）、鍋（17）がある。3～6はシャープなつくりのB類である。

皿（4） 碗に比して量はごく少なく、このほかに1点あるのみである。口径約13cmで、器高は3～4cmほどと推定される。口縁部は直線的に開く。全体の器形を知りうる例はないが、平底で高台をもつものと推測される。それは山王台遺跡出土例（大館市教育委員会1990）から類推される。内外面ともロクロナデである。この土器の内面は明瞭に黒色処理したような状況ではなく、ススが付着したようなものであるが、火を受けたような痕跡がみられることから、黒色処理したものが火を受けて、炭素が消失したものと判断される。5と同一個体の可能性もある。

有台碗（5） 5は高台をもつ碗（または皿）である。器面があられているが、底部内面はヘラミガキと思われる。

無台碗（2・3） 2・3は黒色土器である。2碗Aで、口縁部はヨコナデ、体部下端と底部外面がヘラケズリされる。内面は黒色処理されている。口縁端部は意図的に打ち欠いたとみられる。3は碗かと考えられる黒色土器。

小甕（6～9・12～16） 口縁部（6・8・9）のうち、6のみ体部から「く」の字状に外反し、他は体部からゆるく弧状に外反する。6は口径約11cmの最も小さいタイプである。口縁部は短く外反する。胎土は小甕（16）に類似する。8・9は非ロクロ土師器で、A系である。9は外面に指頭圧痕がある。丸底の7はB系である。硬質の焼き上がりで、器壁は厚く不均質で、つくりはあまりよくない。内面指頭圧痕、外面はタタキ目である。内面は黒色処理されている。12は小礫を多く含むものである。13はナデ調整のA系であるが、底部外面は木葉痕をナデで消している。15は小甕か長甕かは不明であるが、大きさからみて、小甕であろう。底部外面は周縁部のみ砂が付着し、長甕A系の底部の可能性が考えられる。14もその可能性が強い。これは底部が水平である。16は底部外面が回転糸切り不調整で、体部下端をかるくロクロナデする。糸切りはこれだけである。

甕（10・11）はいずれもヨコナデが弱いA系である。11は口縁端部が丸くおさまる。体部外面にナデ痕が残る。鍋（17）は体部から口縁部がゆるく弧状に外反し、器壁も比較的薄く、シャープなつくりである。

18・19は鉄製品である。18は刀子で、刃部の関は不明瞭である。重量は19gで、埋土から出土した。19は釘かとみられるもので、断面は長方形を呈し、重量は3gで埋土から出土した。

時期等 時期はⅡ期頃に比定されよう。

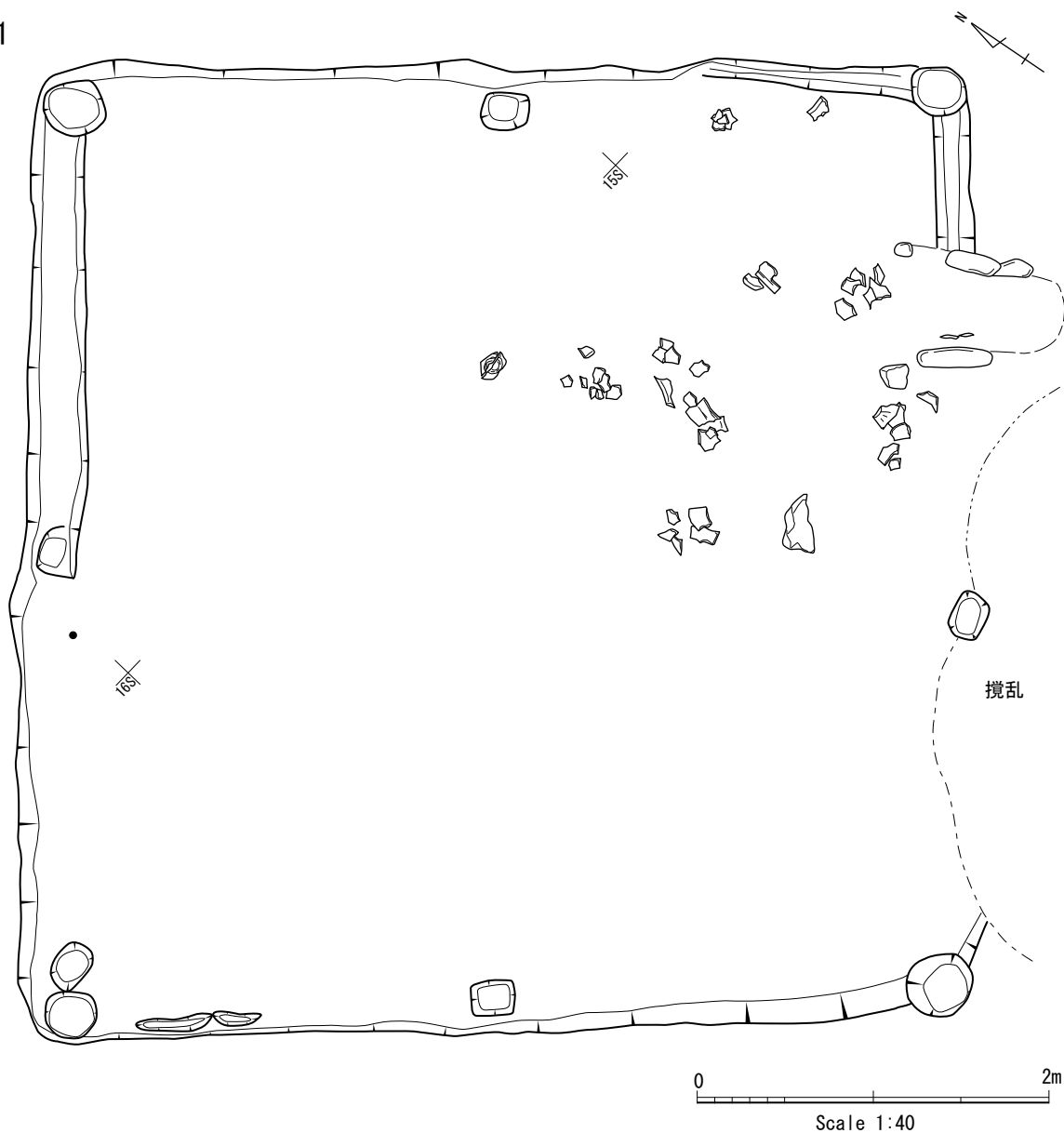
SI21 (第55・56図)

位置 14・15・16-R・S区に位置する。

遺構 主軸はN-12°-Wで、東辺のコーナーよりの部分にカマドがある。一辺約5.5mで、面積は約30.2㎡である。ほぼ正方形である。深さは約10cmで、削平はかなり受けていると考えられる。東側コーナー付近と北西側には壁溝がある。これらは幅12~36cmで、深さは14~40cmである。四隅とその間に8個のピットがあり、柱穴と考えられる。カマドは0.9×0.7mで、土師器が数点(3・8~10・12~14)出土した。このうち12と13はカマドの芯の可能性がある。上層は焼けていない粘質土で、その下に焼けた粘質土がある。住居の埋土はよくしまっている。

遺物 出土土器は20個体ほどである。非ロクロ土師器を主体とする時期のものである。

SI21



第55図 SI21

須恵器 (1) 胎土はB群である。

土師器 (2～14) 小甕・長甕のほかに埴B (2)、手づくねの3がある。

埴 (2) 2は内面黒色処理の埴Bである。口径13cm、器高は5cmほどと推定される。口縁部の開きの角度は、通有の埴に比してたち上がっており、口縁部はほとんど外反しない。口縁部内面は横方向のハケ状工具によるナデと黒色処理がなされているが、ロクロナデで生じた口縁部内面のふくらみはそのまま残る。外面はロクロナデであるが、凹凸はあまり顕著でない。

手づくね土器 (3) 口径5cmのミニチュア土器で粘土紐の積み上げ痕が目立つ。

小甕 (4～6) いずれも非ロクロA系で、4は口縁部である。5は底部が水平で、底部外面はヘラナデされる。6の平底の外面には砂の付着痕が明瞭に残る。

長甕 (7～14) いずれも非ロクロA系である。7・8はSI8 (第40図6) のように口縁部が「く」の字状に外反するタイプである。9は胎土に粒子を多く含み、細かいナデでよく調整されてはいるが、口縁部のヨコナデは弱く、粘土紐の接合痕が器面に残る。これと同一個体かは不明であるが、砂痕の底部がある。10は甕かと考えられ、内面指ナデを行うものである。11は器壁が薄く、調整がていねいである。12は体部外面にヘラナデ調整がなされており、底部外面は砂痕である。明確ではないが、長甕と思われる。13・14は長甕である。13は底部外面が砂痕で、砂が付着していたくぼみがたくさんある。外面のヘラナデは強い。14も底部外面に砂痕を残す。器壁が厚い。

15は擦痕のある礫である。安山岩の円礫を素材とし、全体的に擦られている。重量は437gで埋土から出土した。

時期等 Ⅱ期の新しい段階に比定されよう。

SI22 (第57図)

位置 11・12-R・S・T区のSI64の南東側と重複し、SI64に切られる。南西側にはSD20がある。SD20との新旧関係は不明である。また、竪穴の全容も不明である。

遺構 主軸・大きさは不明で、カマドはない。床面にあるピットは柱穴の可能性もあるが、配置が不規則である。南西辺沿いには壁溝状の浅い (深さ約10cm) 溝があるが、全体にめぐるものではない。

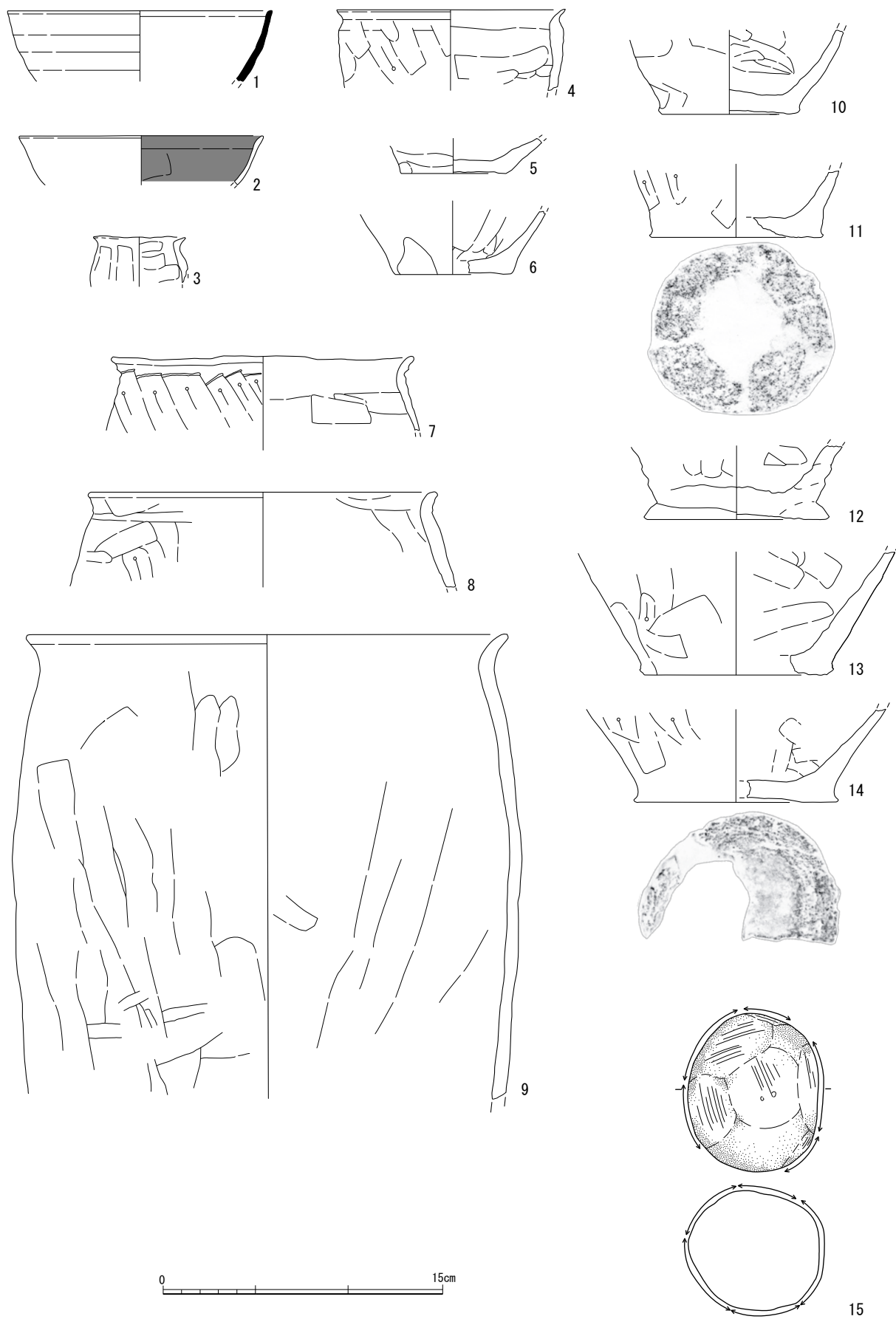
遺物 出土土器は土師器甕片39点と少ない。第57図1は埴の黒色土器で内面黒色を呈し、ヘラミガキ調整されている。

時期等 時期はⅡ₁期頃と考えられる。

SI23 (第58図)

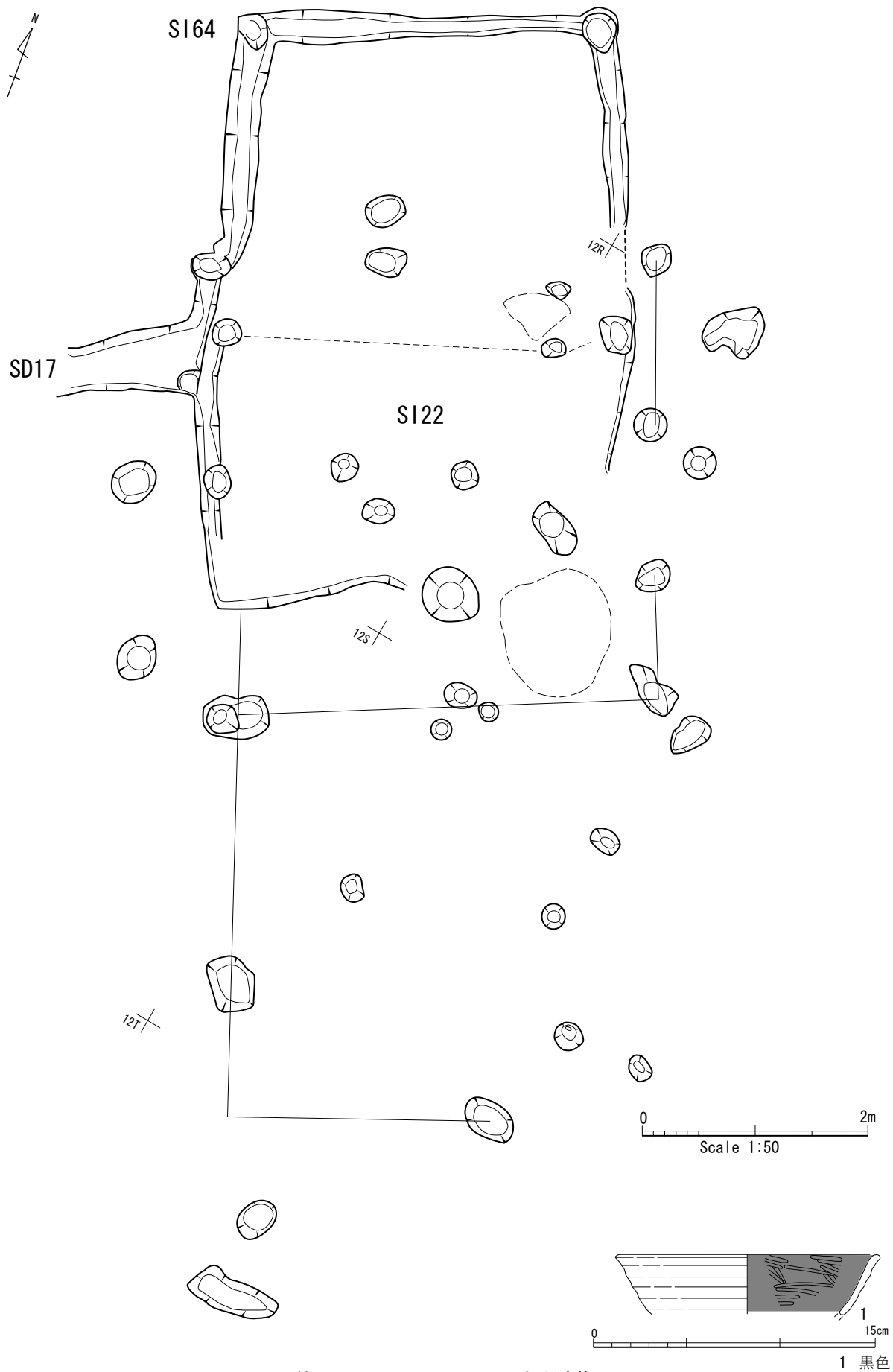
位置 9・10-T・U区に位置する。

遺構 主軸はN-20°-Wで、南東辺にカマドがある。平面形はほぼ正方形で、2.6×2.8mで、面積は7.2㎡である。比較的小さい。深さは13cmで、上部はあまり削平を受けていない。四隅にあるピットは住居の柱穴と考えられる。主柱穴をもたないものである。壁溝はない。カマドとその周辺の粘質土の分布は1.0×1.3mの範囲に広がる。カマドの構築土と考えられる。褐色粘質土はそのまま、住居中央部付近までのびる。カマド中より土師器、須恵器が出土した。土器の出土量は5個体未満で少なく、時期は不明である。



第56図 SI21出土遺物

2 黒色



第57図 SI22・64とSI22出土遺物

SI24 (第59・60図)

位置 5・6・7-V・W・X・Y・Z区に位置する。

遺構 本竪穴の南東部には掘立柱建物に取り付く。主軸はN-20°-Wで、西偏するグループに属する。東辺にカマドと考えられる粘質土が若干ある。竪穴の平面形は方形で、一辺6.0m、面積36㎡である。比較的規模が大きい。深さは24cmとやや浅く、上部は削平を受けている。柱穴は壁際に16個ほどあり、なかにも柱穴とみられるピットがいくつかある。壁溝はいっさいない。埋土内に比較的土器がまとまっていた。

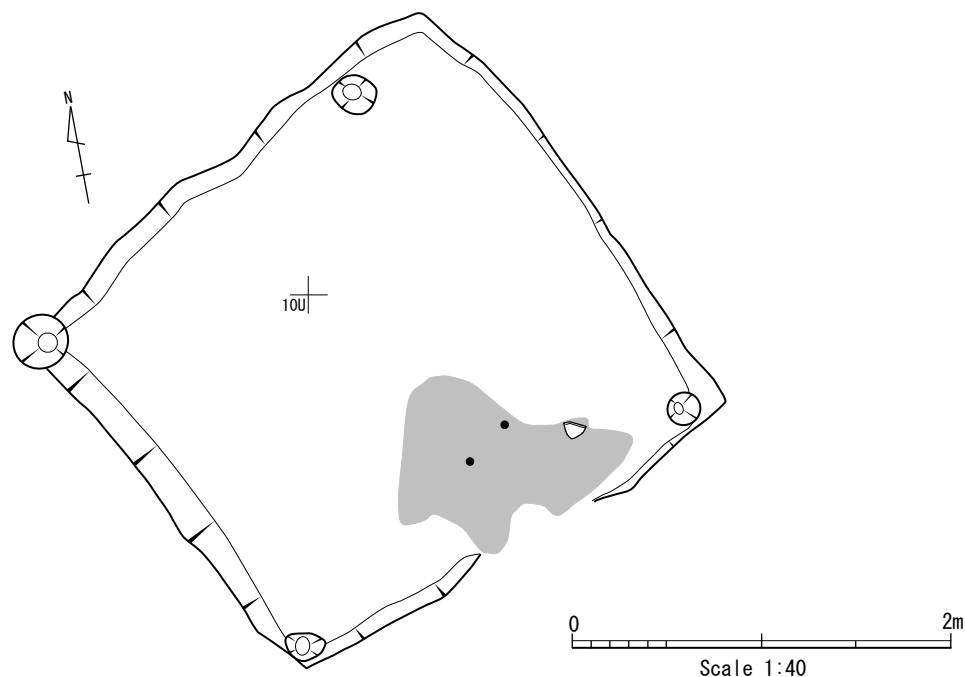
掘立柱建物はカマド側に取り付けられている。桁行4間(約8.2m)、梁間は不明である。面積は約48㎡、平面プランはほぼ長方形を呈するものと推定される。柱掘方は径36~56cmの円形である。

遺物 カマドと考えられる地点から土師器甕が一括出土した。

第60図1は体部から口縁部がほとんど直線的に開くもので、埴Aとしてはやや特異である。内面はヘラナデ、外面はていねいにヘラケズリする。胎土は精良なものではない。底部外面は砂を敷いたのちヘラナデしたものであろう。口縁部内面には炭化物が付着している。用途は胎土や炭化物から煮炊具に属するものと思われる。2は鉢で、丸味をもってたち上がり、やや内湾する口縁部をもつ。全体に器壁は厚く、均一である。内外面ともナデる。胎土は長石などの粒子を多く含み、1・3とも同様に、一般的な非ロクロ土師器煮炊具と共通する。ロクロは不使用で、体部のつくりは非ロクロ土師器と同様である。二次焼成をよく受けており、口縁部外面にスス・炭化物が付着している。外面には幅約1.3cmの粘土紐の接合痕が観察される。煮炊に使用されるための器であると考えられる。3は明確なA系である。口縁部が短く、「く」の字状に外反し、端部は角張る。体部上半部は内面がナデ、外面がヘラケズリである。

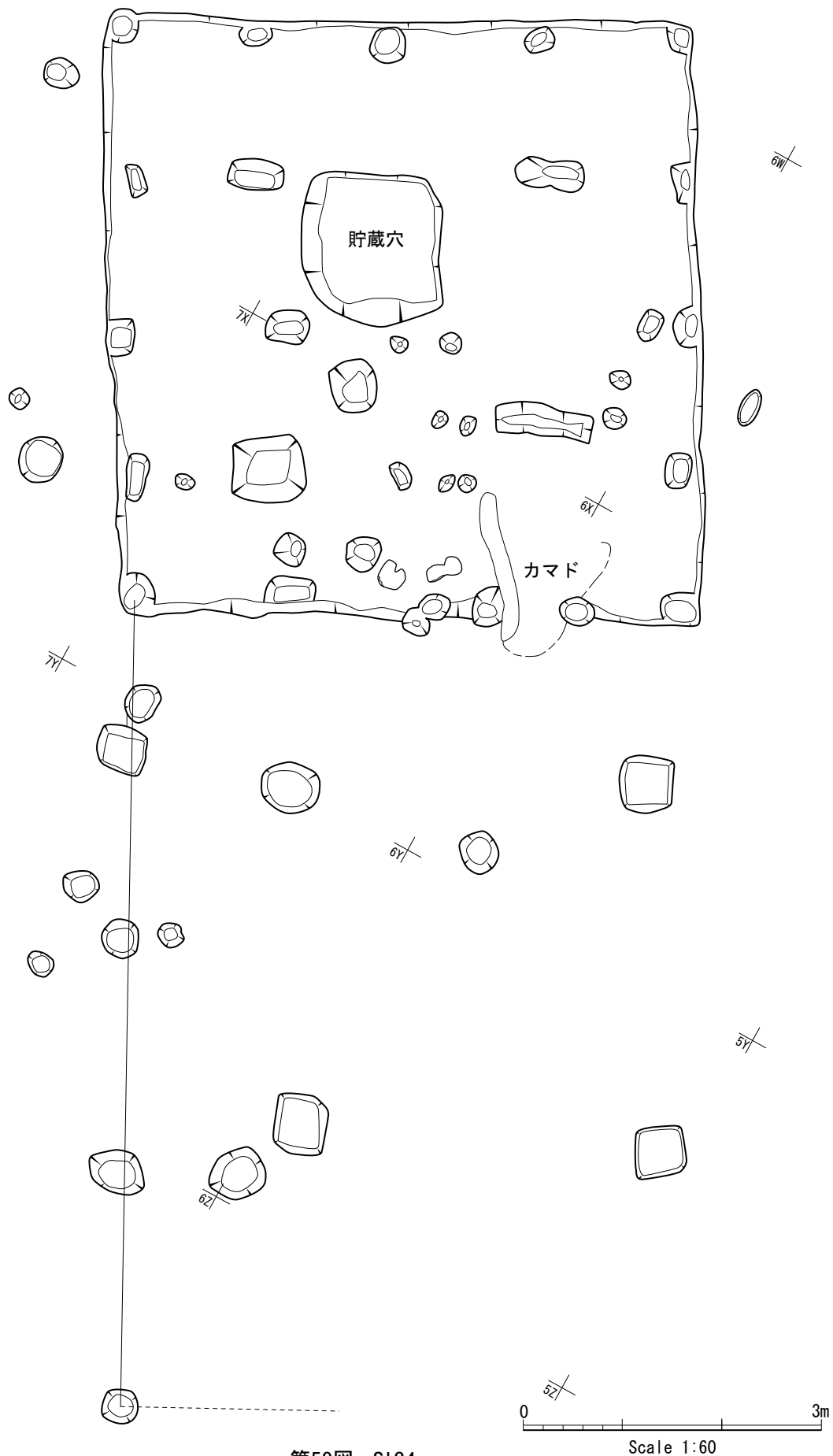
時期等 時期はⅡ期である。

SI23



第58図 SI23

S124



第59図 S124

SI25 (第61・62図・図版52)

位置 6・7-Z・a区に位置する。

遺構 主軸はN-23°-Wで、カマドは東側コーナーにある。平面形はほぼ正方形で一辺3.3mである。面積10.8㎡で、小型である。深さは約40cmである。明確な柱穴はなく、壁溝もない。カマドは0.9×0.8mで、住居外側に張り出す。中層の粘質土層がやや赤味をおびるが、明確に焼けているかどうかはわからない。カマドより土師器甕(3)が倒立状態で出土した。これはカマド内に意図的に入れたものと思われる。埋土は最下層の薄い黒色土層をのぞけば上層が暗褐色土層、下層が「乳白色火山灰層」である。カマドの脇から土師器甕(4~6)、住居中央東よりから土師器甕(7)が一括出土した。3はカマド右袖の芯の可能性はある。

遺物 全体の土器出土量は約10個体である。

須恵器(1) 甕体部片で、外面は平行タタキ目、内面は平行文と重弧文状のあて具痕である。器壁はやや厚い。

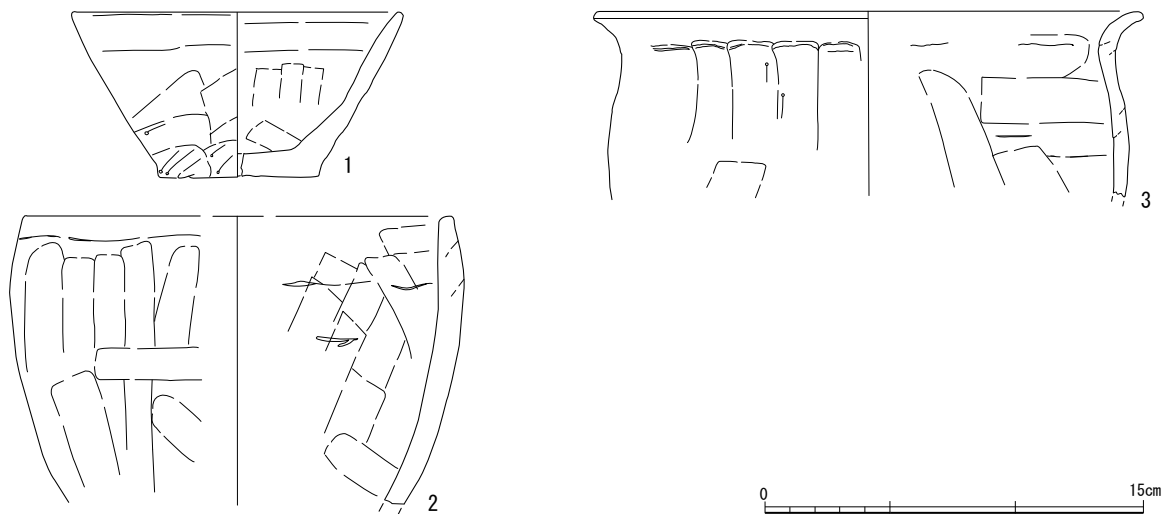
土師器(2~7) 小甕と長甕のほかに、埴Bがある。

小甕(4) A系で、口縁部はごく短く外反するのみで、端部は尖る。体部下半のヘラケズリはごく粗い。

長甕(5~7) いずれもA系に入るものであるが、5は器壁が相対的に厚く、やや薄い7と技法の系譜が異なる。5は平底の甕底部。5は外面下半部にタテ方向のヘラナデ、最下部にナナメ方向のヘラナデが入る。長甕と思われる。6は体部中位にナデ痕が観察され、内外面ヘラナデである。ヘラナデはシャープなものではなく、曲がった部分がある。胎土はやや精良なものである。7は外面にヘラナデがなされる。焼成は軟質である。

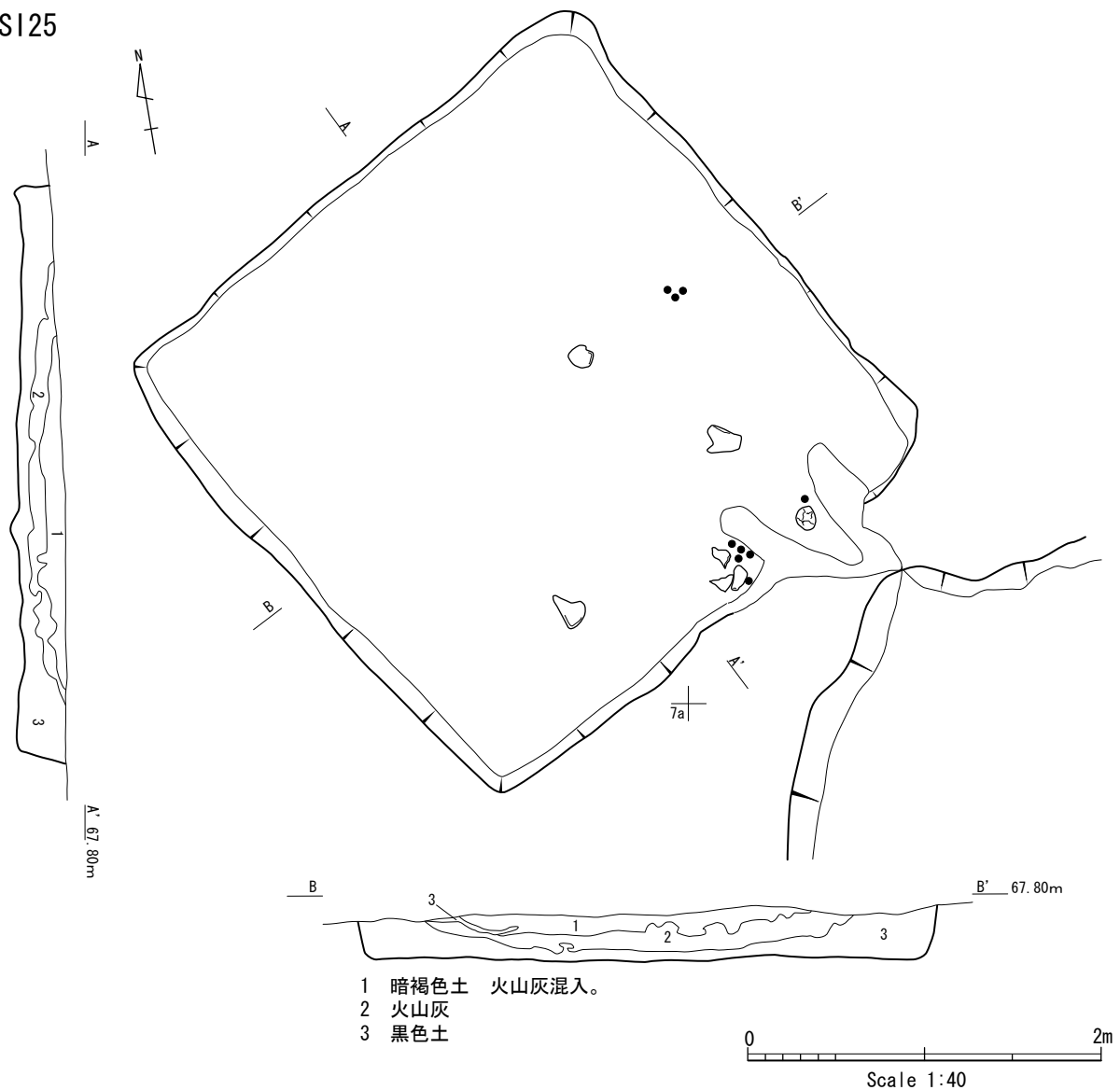
埴B(2・3) 2は復元口径12cm、高さ6.1cmで、底部外面は糸切り(静止か回転か不明)ののち、ヘラナデを行う。外面はロクロナデ、内面はロクロナデ後、ナデである。3は口径14cm、高さ5.7cmで、底部外面は回転糸切りである。体部下端の底部との境には糸切り後、一部ヘラケズリがなされる(図版52-5)。底径は口径の約1/2で安定しており、口縁部は外反しない。内面のロクロナデはていねいであるが、凹凸を残す。胎土はあまり精良ではなく、軟質な焼き上がりである。

時期等 時期はI期に比定されよう。

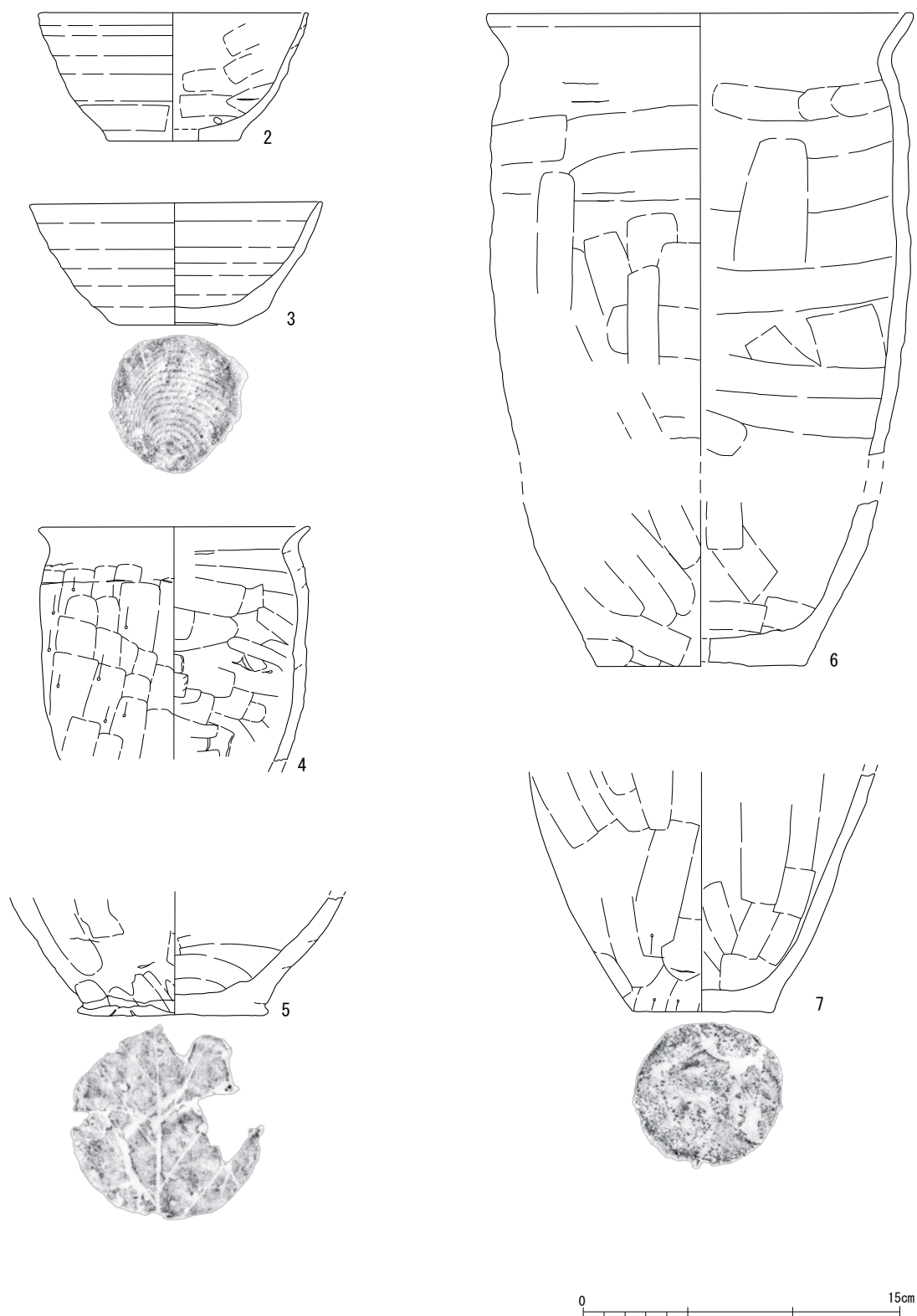


第60図 SI24出土遺物

SI25



第61図 SI25と出土遺物 (1)



第62図 SI25出土遺物 (2)

SI26 (第63図)

位置 調査区南東端の6・7-a・b区に位置し、南側は調査区外のため調査できなかった。SD32に切られる。

遺構 主軸は不明で、カマドは検出されていない。全体形も不明である。深さは約13cmで、上部は全体に削平を受けている。床面北コーナーの壁際に2つ浅いピットがあり、柱穴と考えられる。壁溝はない。出土遺物がなく、時期は不明である。

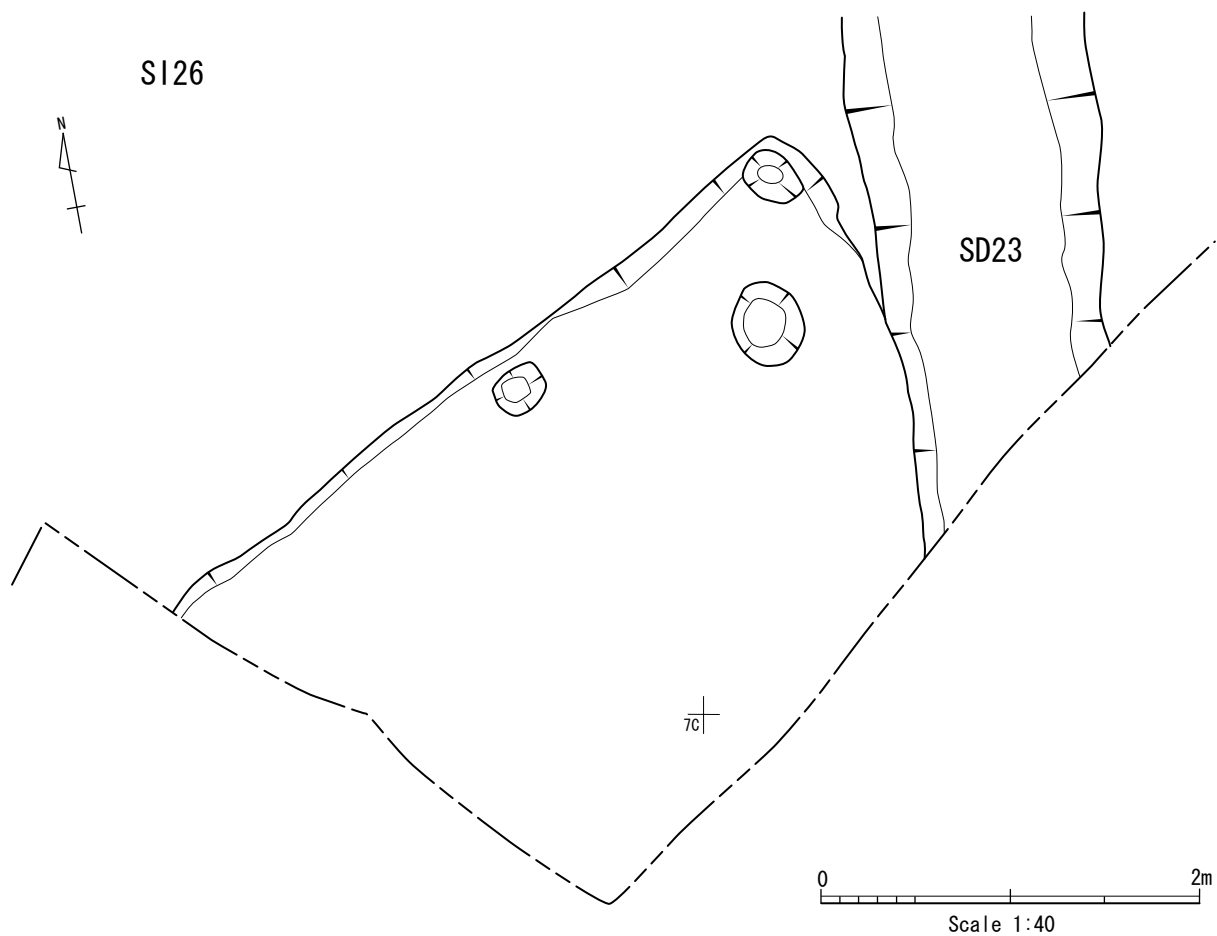
SI27 (第64図)

位置 10・11-X・Y区に位置する。

遺構 主軸はN-39°-Wで、カマドは東側コーナーにある。一辺5.0mほどで、面積は25㎡である。深さは25cmで比較的浅く、上部は削平を受けている。壁際には深さ13~53cmの小さなピットがみられ、小さな柱穴と考えられる。壁溝は西側半分にのみ検出された。これらは幅16~36cmである。住居南部の床面直上に、径40cmくらいの範囲で褐色焼土がみられる。

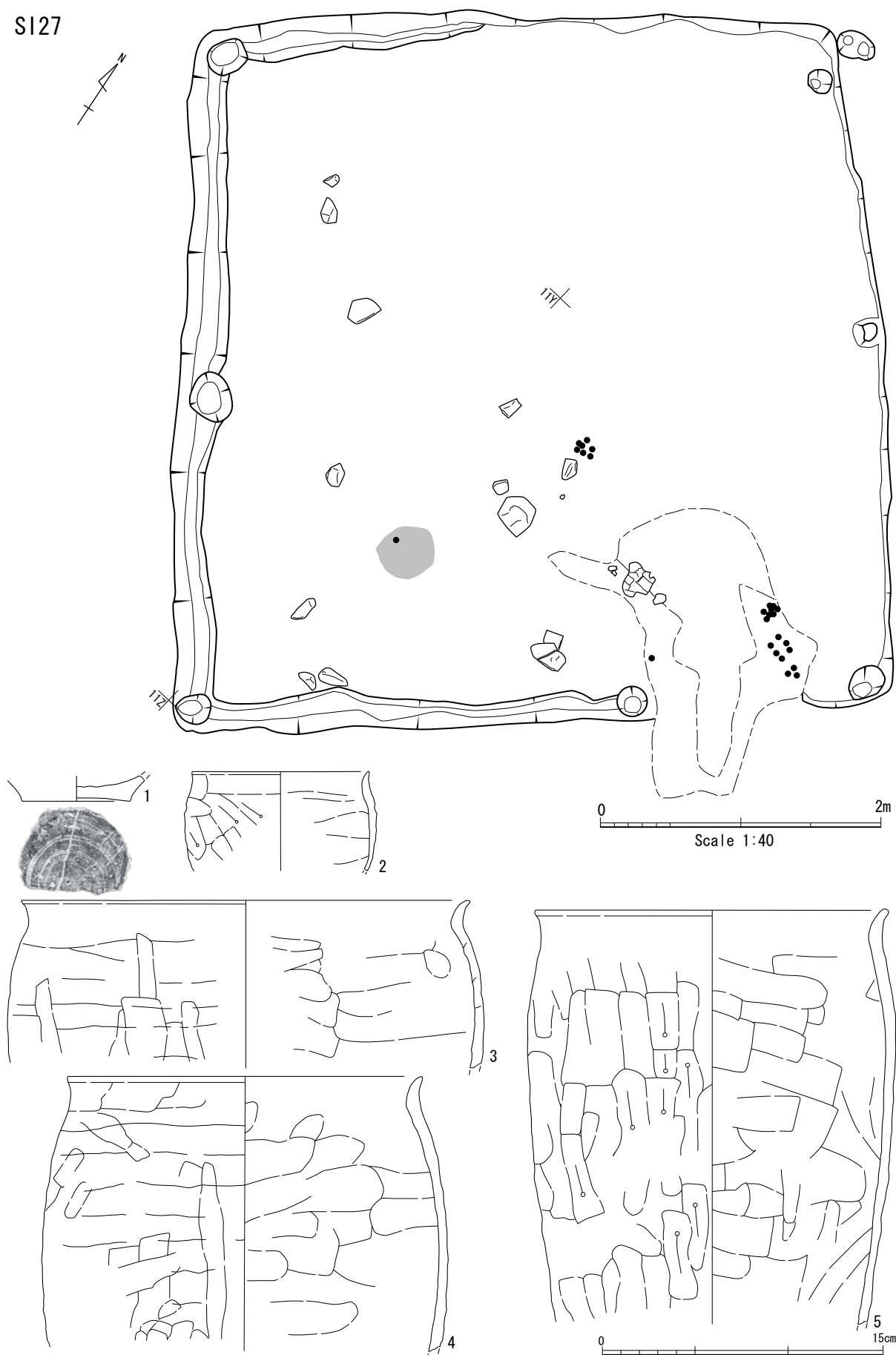
遺物 土師器食膳具が1個体と煮炊具が4点出土している。長甕(3~5)のほかに無台塀・小甕がある。

第64図1は塀。胎土はやや精良で、須恵器系胎土ではない。底部外面は回転糸切りで、ヘラケズリはなされない。体部は丸味をもつ形態であろう。2は小甕口縁部で、2は体部から直立気味にたち上



第63図 SI26

SI27



第64図 SI27と出土遺物

がる。3は体部からゆるく弧状に外反し、端部が外側へつままれる。

4は体部内外面ナデである。体部外面は粘土紐と思われる痕跡が目立ち、ケズリ調整はなされていないと考えられる。口縁部はゆるく弧状に外反し、端部は丸くおさまる。5は体部に強いヘラケズリを行うものであるが、凹凸が比較的みられ、調整が粗い。内面はヘラナデが広く及ぶ。口縁部はゆるく弧状に外反し、端部は丸味をもつ。胎土は比較的精良である。

時期等 時期はⅡ期に比定される。

SI28 (第65・66図)

位置 20・21・22-T・U・V・W区に位置する。

遺構 主軸はN-23°-Wで、カマドは南東辺東よりにある。平面形はほぼ正方形で、一辺7.4~7.5mで、面積は55.5㎡と大きい。深さ19cmで、柱穴は壁際と床面に30個ほどある。壁溝は各辺にあるが、部分的に途切れる。幅は約20cm、深さ14~36cmである。カマドは3.1×2.2mである。カマドから土師器埴(1~3)、小甕(4~6)、長甕(6~9)が出土した。

遺物 出土土器は約10個体で、須恵器と土師器がある。

須恵器(1) 1は甕の体部片で、外面は平行タタキ目、内面は同心円文のあて具痕がある。

土師器(2~10) 埴、小甕、長甕がある。

埴(2~4) 2は黒色土器の埴で、内面はヘラミガキである。3はこれよりひとまわり小さく復元口径12cmである。4は復元口径14.6cmでやや大きい。胎土は褐色でやや精良、焼成は特に硬質である。胎土などが異質であり、搬入品の可能性もある。

小甕(5~7) 口縁部(5)と底部(6・7)がある。5は口縁部が短く、A系と思われる。6は体部外面下端がナデられ、体部は直線的にたち上がると思われる。7は外面に砂痕が残る。器壁が厚く、体部下端がややくびれる。

長甕(8~10) 8は体部内面がナデで、下端部がヘラナデである。9は非ロクロ土師器である。10は形態からみて長甕と考えられる。口縁端部は丸く、ヨコナデがていねいで、内外面がタテ方向である。

時期等 時期はⅡ期頃に比定される。

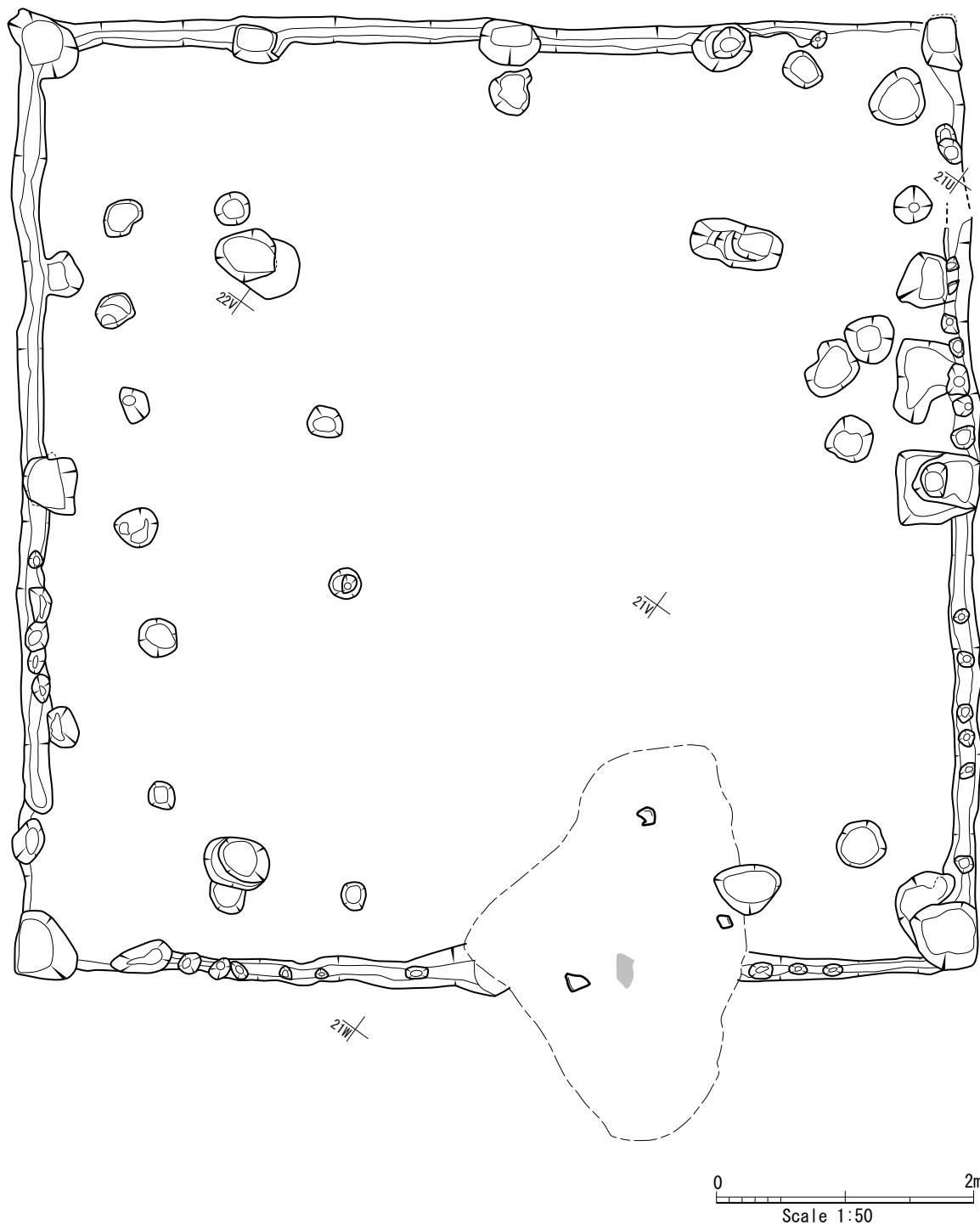
SI29 (第67図)

位置 24・25-X・Y区に位置する。

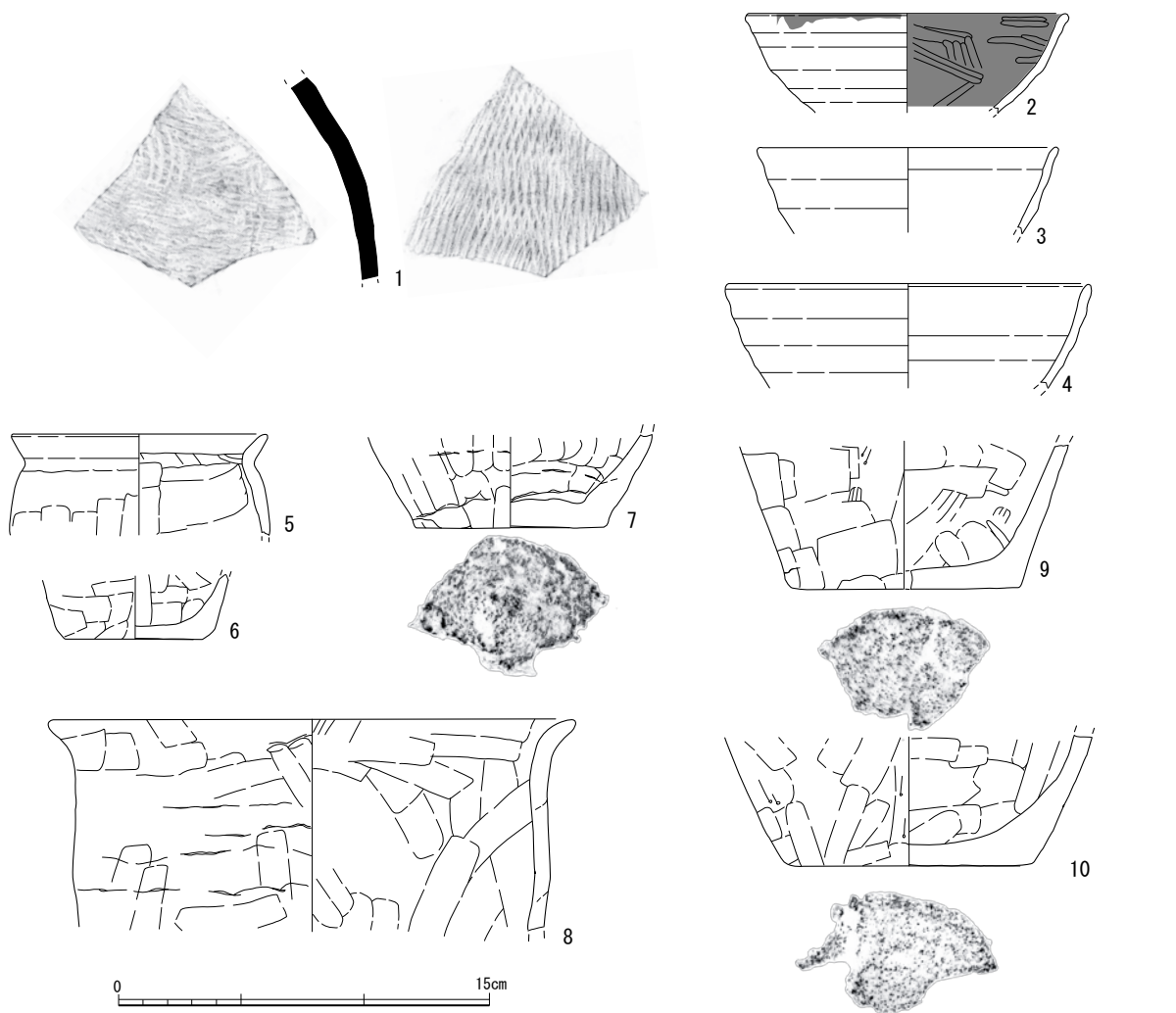
遺構 主軸はN-50°-Eで、カマドはないが、東側コーナーに焼土がある。主軸方向がやや長く、約2.8m、ほかは約2.0mで長方形を呈する。面積は5.6㎡である。上部は多少削平されていると思われる。床面には小さなピットが5つある。深さは11~22cmで、四隅のものは柱穴と思われる。壁溝はない。焼土は0.2×0.2mである。

遺物 出土土器は土師器小甕1個体のみである(第67図1)。1は外面下端をタテ方向にヘラケズリするものである。器壁が厚く、内面のナデも粗い。時期は不明である。

S128



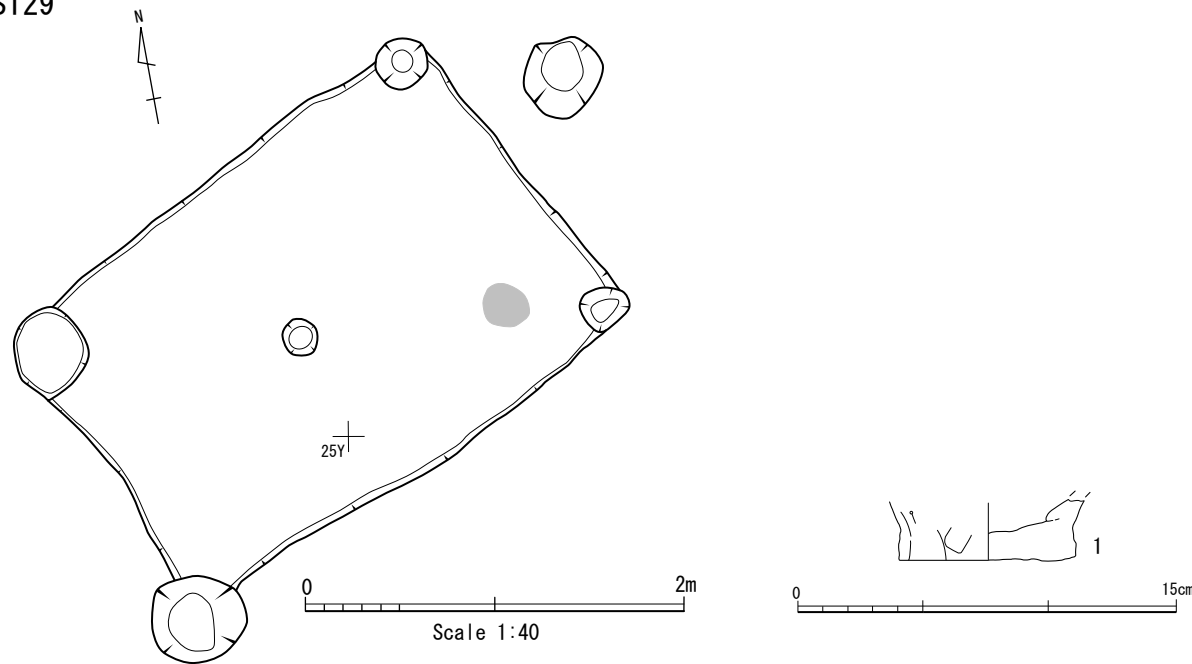
第65図 S128



第66図 SI28出土遺物

2 黒色

SI29



第67図 SI29と出土遺物

SI30 (第68～70図、図版53)

位置 16・17-W・X・Y区に位置する。堅穴の西側はゴミ穴により壊されている。

遺構 主軸はN-24°-Wで、南東辺の東側コーナー付近にカマドがある。長さ・面積は不明である。深さは25cm前後で、上部は若干削平を受けていると思われる。ピットが4つ存在し、柱穴と考えられる。壁溝は各辺に検出された。これらは幅12～36cmで、深さは29～36cmと深い。カマドは粘土を含み、焼けている。床面からは土師器甕(第69図19)が検出された。カマドからは拳大の川原石が2点出土した。

遺物 須恵器、土師器のほか、鉄製品、砥石(第70図25)も出土している。

須恵器(第68図) 小瓶、広口壺、甕がある。小瓶(1)は球形に近い体部に細い頸部をもつものと思われる。体部外面にはロクロ目がみられ、頸部には「Ⅱ」のヘラ記号がみられる。広口壺(2)は大型で、頸部と体部に2～3条の凹線様のくぼみをめぐらす。胎土はB群と考えられるが、白色の粒子を含む。自然釉もきれいにかかっている。3は甕で口縁端部の面に沈線状のくぼみが2条あるもので、鋭さはない。黒褐色で、焼成は硬い。

土師器(第69・70図) 小甕、長甕のほか、有台碗と無台碗がある。

無台碗(4～6) 4は口縁部にタール状の物質が付着し、灯明皿として使用されたものと思われる(図版53-5)。5は体部が丸味をもつ。また、焼成はかなり硬質である。須恵器と近い属性をもつものとして注目される。これに対し、ほかの2点の胎土は精良で須恵器系ではない。6は内面黒色処理の碗と考えられる。器壁は薄く、口径は10cm以上になるものであろう。胎土は碗Bと類似する。

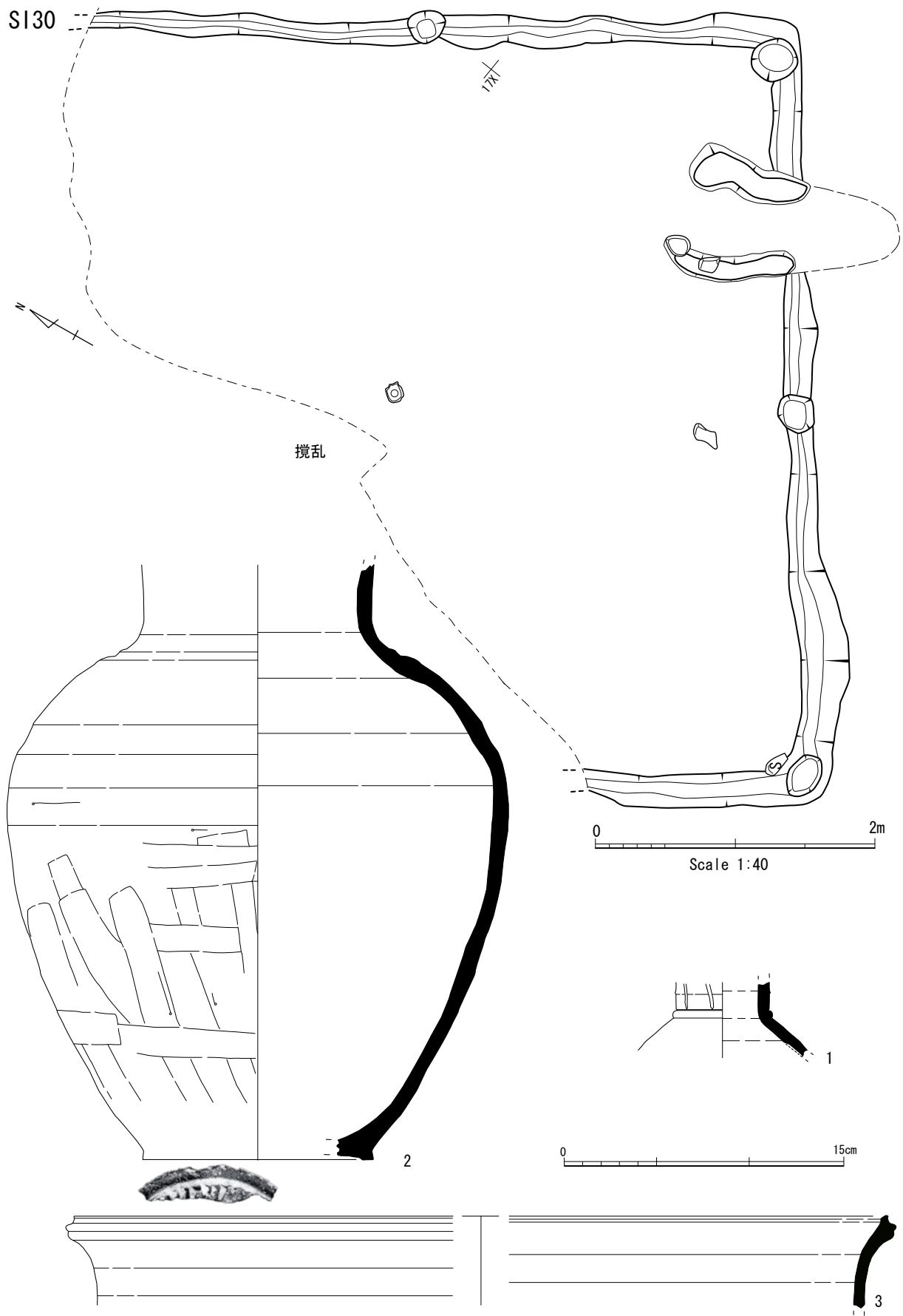
有台碗(7) 無台碗に比して有台碗は量的にごく少ない。7は有台碗の台部がとれたもので、底部内面の中央部が小さく突出する。

小甕(8～14) 口縁部(8～10)はいずれも短く外反する。9は体部が丸いが、口縁部は10に類似する。11～14は底部。11は底部外面が回転糸切り不調整で、体部下端をかるくケズリを行う。糸切りはごく少ない。かなり小型のものである。胎土はやや精良である。12は外面下端をタテ方向にヘラナデするものである。体部の器壁が薄く、底部と体部との接合部もあまり厚くならない。13は底部外面が砂痕であるが、内面はナデである。器壁は全体に薄い。12～14はA系である。14は底径が小さい。

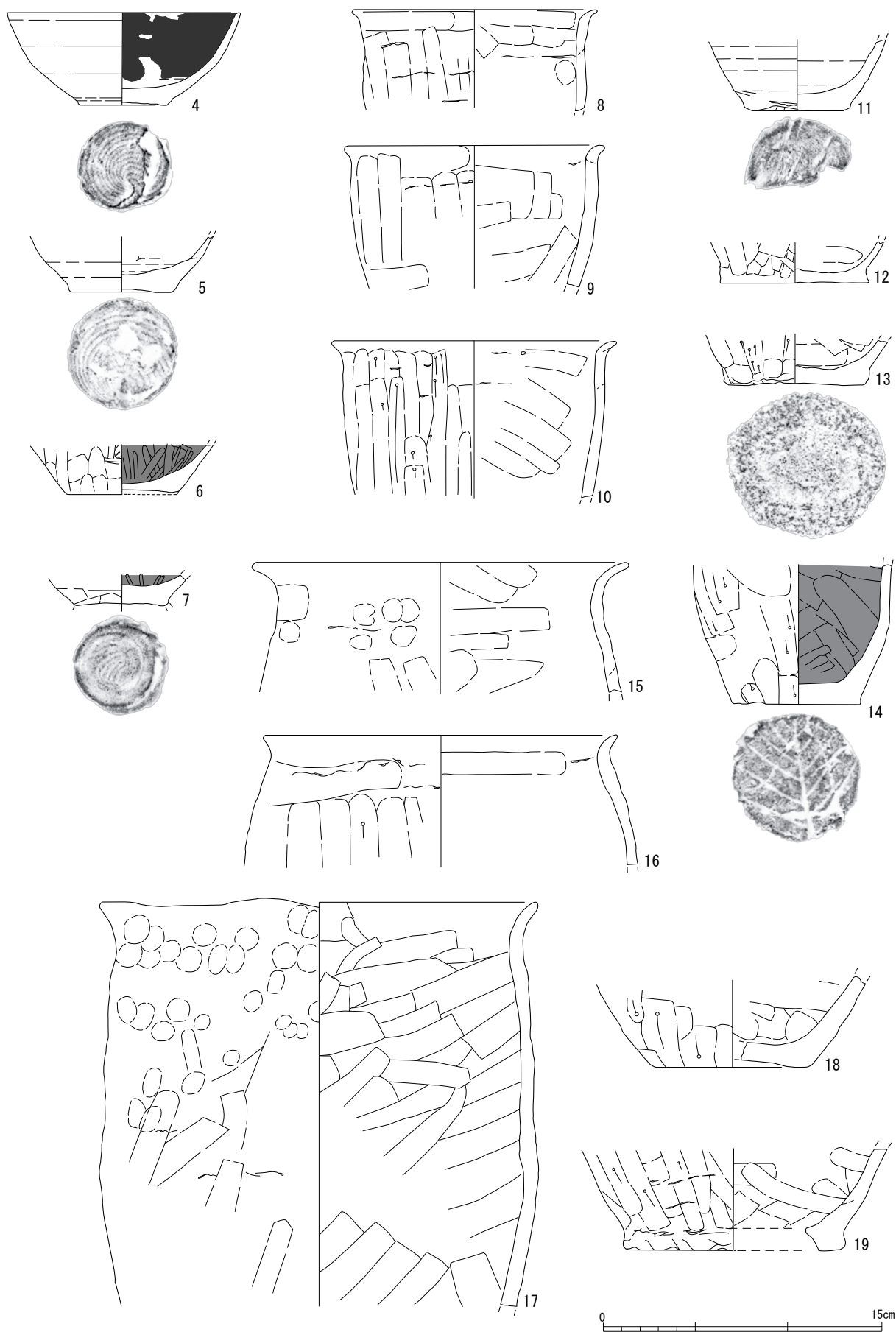
長甕(15～21) 15は口径がやや大きく、短胴甕の可能性がある。16はSI20(第54図10)、SI27(第64図4)と同じタイプである。17は上半部のみで、底部の形態はわからない。内外面のナデの単位は幅広く、体部外面の調整はきわめて弱く、器面の凹凸が大きい。器壁が厚く、体部と口縁部の屈折も鋭くなく、B系でないことは確実である。口縁部が直線的にのびている。底部のみの18は形態・手法からみて、あまりないタイプで、短胴甕の可能性がある。19は外面をヘラケズリ・ナデするもので、器壁は厚い。20・21はともに一括出土した長甕の半完形品である。20は口縁部がゆるく弧状に外反し、端部は丸くおさまる。体部外面下半はヘラケズリ、内面はナデである。外面中位には部分的にヘラナデされている。21は口径約19cm、高さ約32cmで、高さに比し、口径がやや小さい。口縁部は外反が弱く、端部は丸くおさまる。

第70図22～24は鉄製品。22は土師器甕に棒状の鉄製品が固着したもの。23は手鎌で両端部を欠損している。重量は7gである。24は両関式の刀子で、重量は17gである。

25は手持ち砥石で、正・裏面と両側面に作業面をもつ。石材は頁岩で重量は1,014gである。埋土

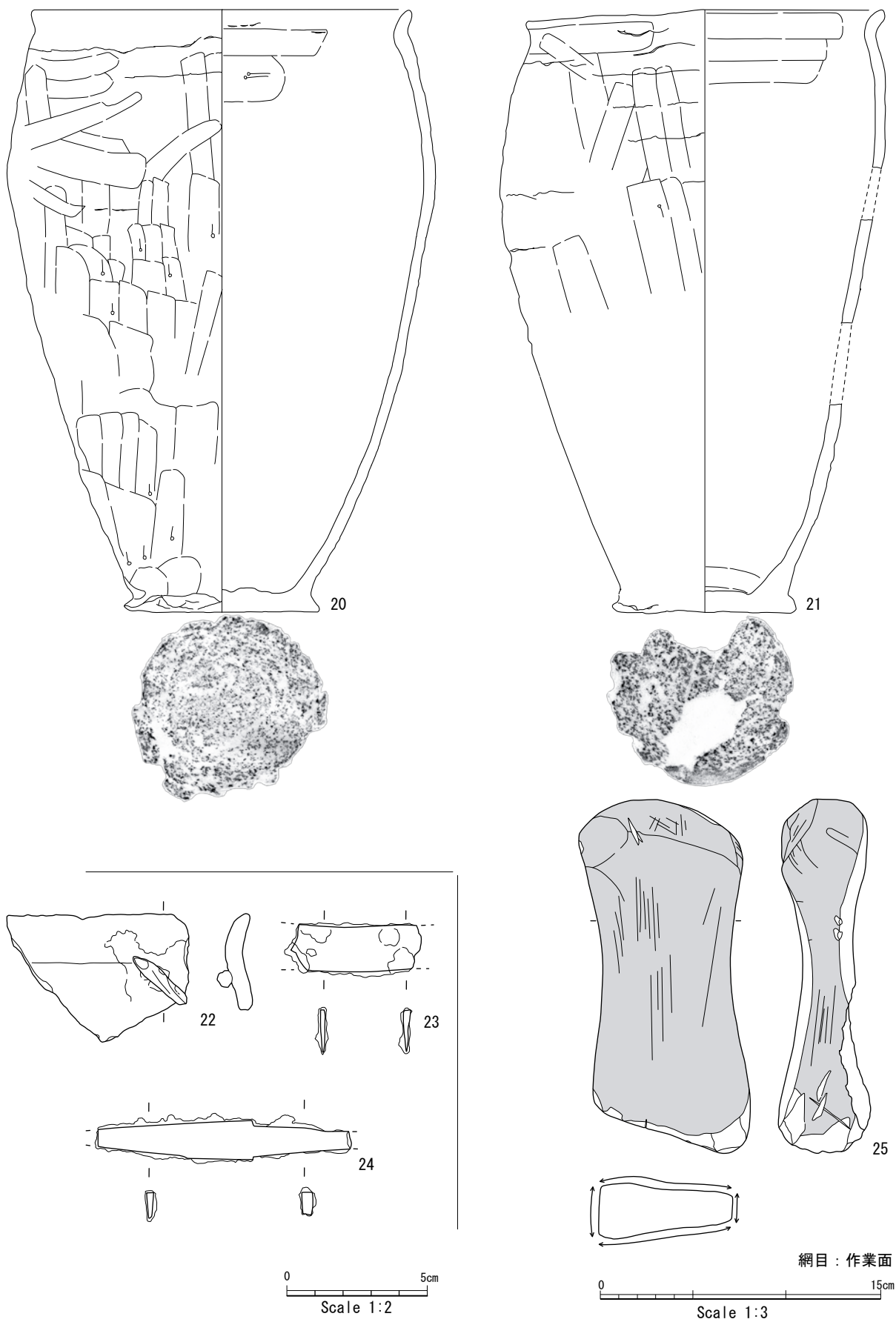


第68図 SI30と出土遺物 (1)



第69図 SI30出土遺物 (2)

4 タール 6・7・14 黒色



第70図 SI30出土遺物 (3)

から出土した。

時期等 時期はⅡ期である。

SI31（第71図）

位置 16-V区でカマドのみ確認された。竪穴のほとんどは攪乱により、壊されており、全体形は不明である。

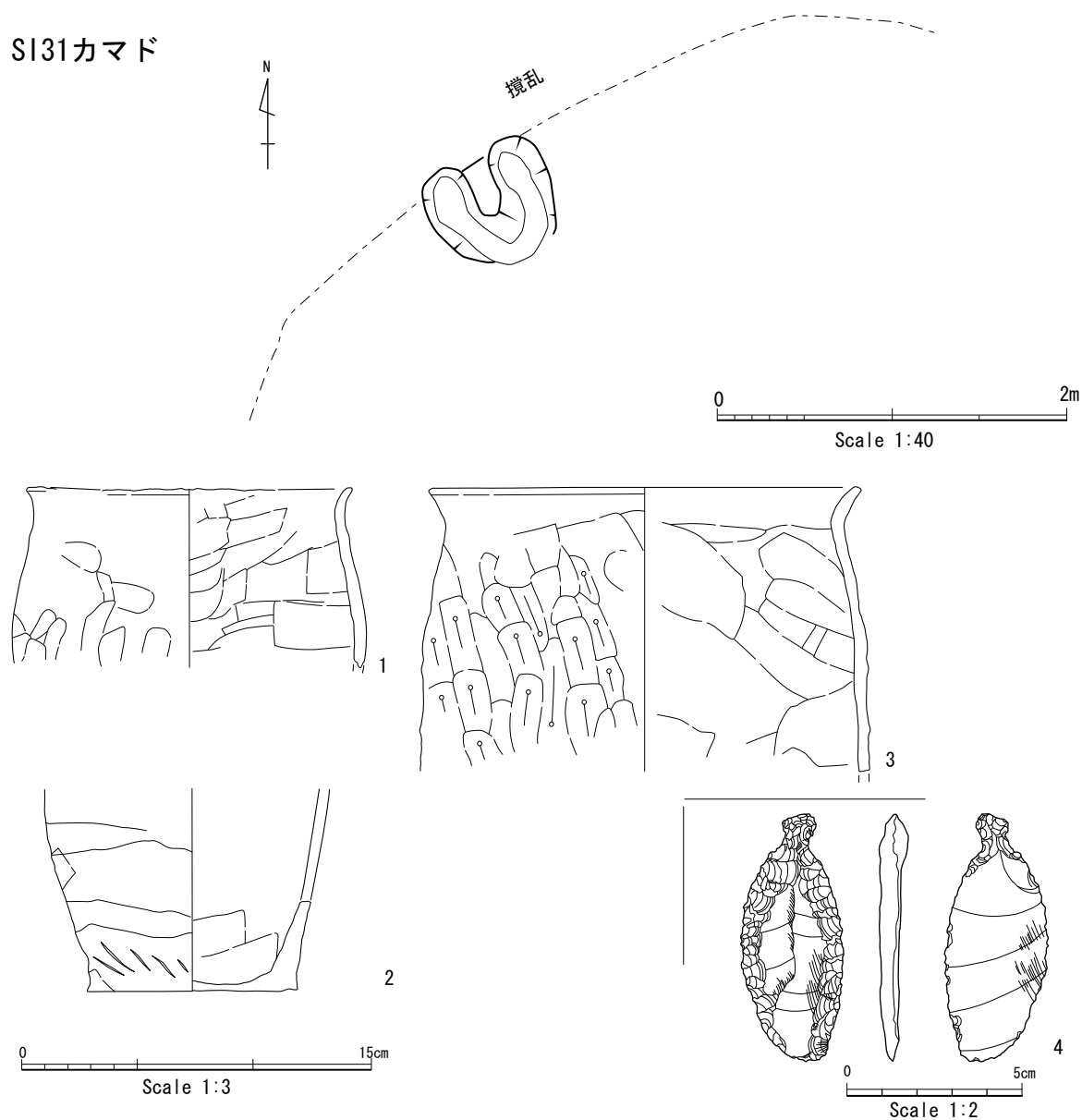
遺構 カマドとその粘質土の分布は0.7×0.8mの範囲に広がる。カマドの構築土と考えられる。

遺物 出土個体数は少ない。ほかに石匙が1点出土した。

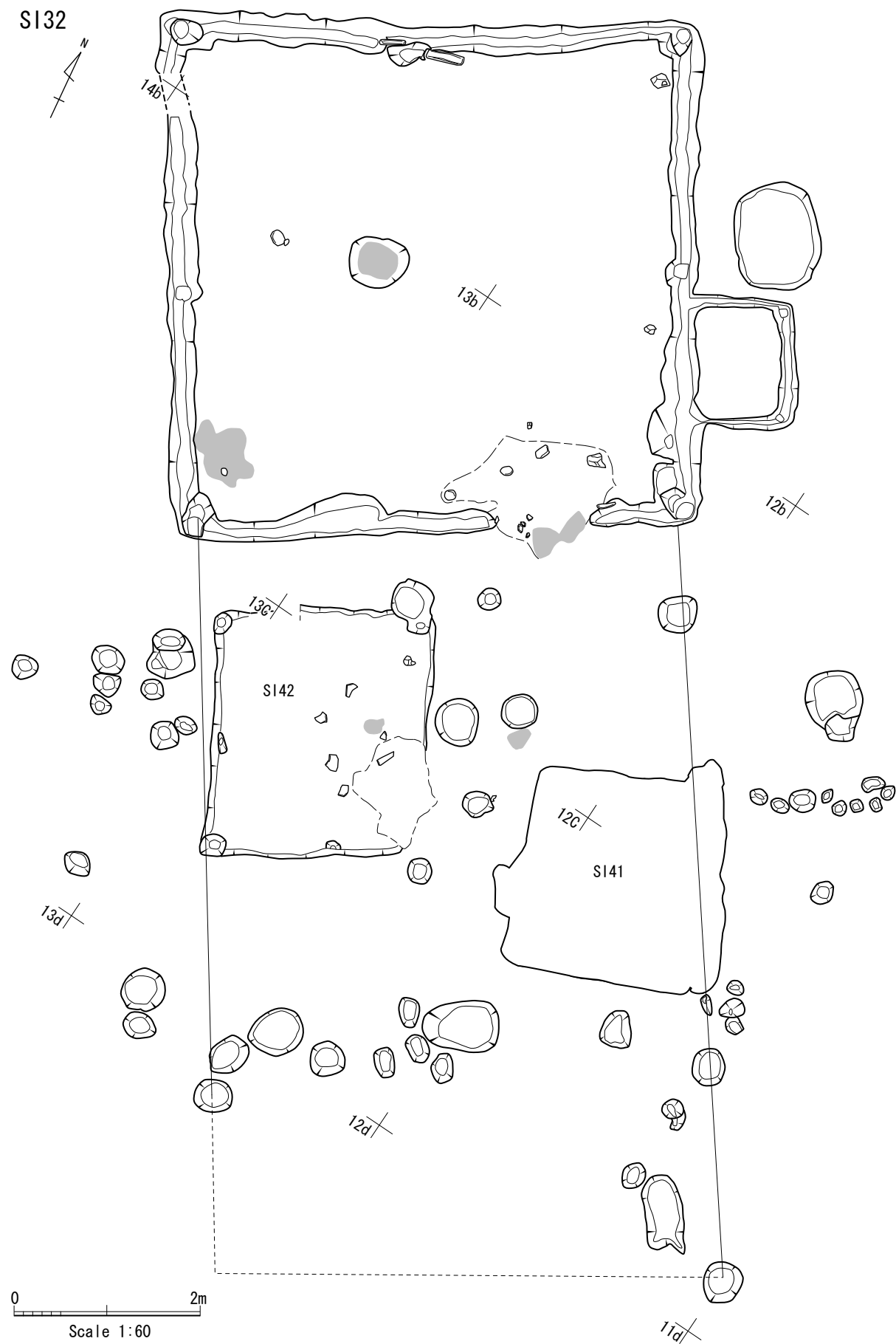
第71図1は口縁端部が丸くおさまる。体部がやや張る。底部（2）はやや薄い。3は長甕口縁部～体部上半部で、つくりは粗雑である。端部がやや角張る。体部は明瞭なヘラケズリである。

4は石匙である。片面加工のもので、硬質頁岩製である。出土遺物が少なく、時期は不明である。

SI31カマド



第71図 SI31カマドと出土遺物



第72図 S132

SI32 (第72・73図)

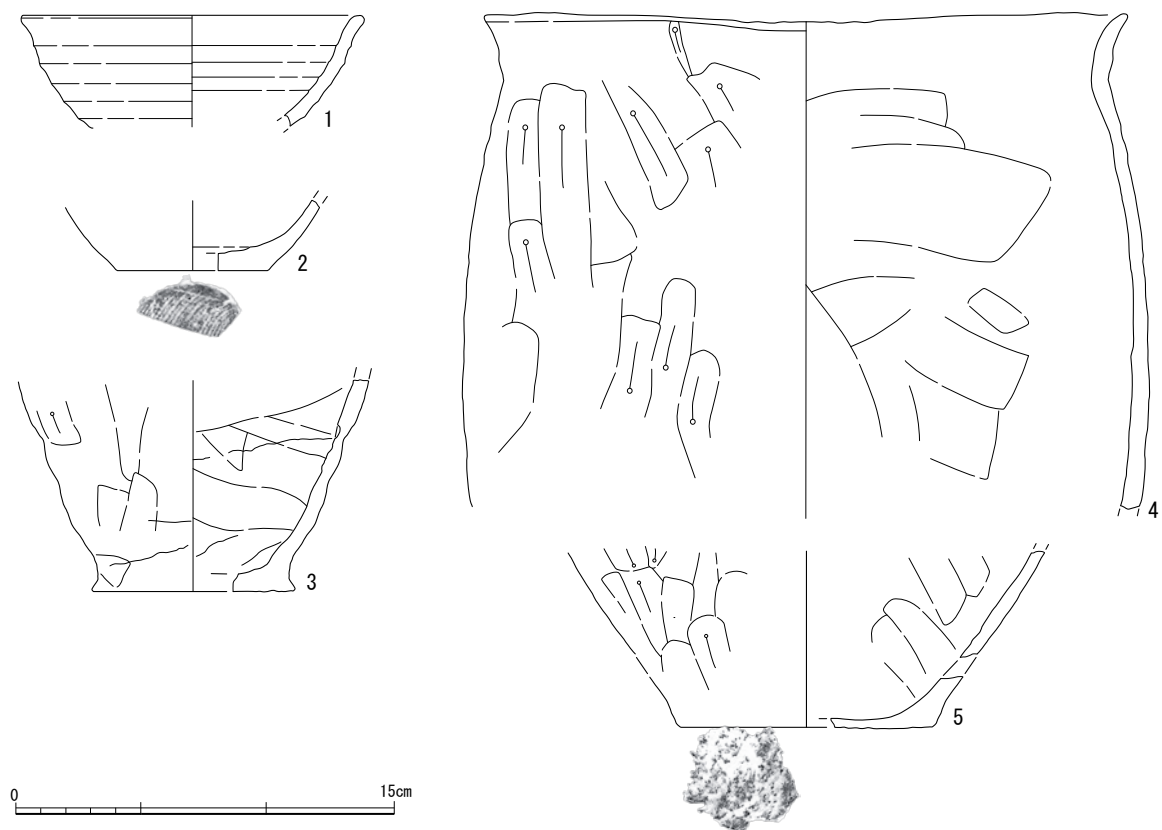
位置 11・12・13・14-a・b・c・d区に位置する大型の竪穴住居で、東部に張り出し部、南東部に掘立柱建物がセットとなる。

遺構 主軸はN-25°-Wで、カマドは南東辺の東側コーナー付近にある。竪穴は主軸でない方向がやや長く、約5.7m、主軸方向は5.4mで、張り出し部を含めた面積は約32㎡とやや大きい。これの半分以上のSI41と掘立柱建物部分が重複しているが、新旧関係は不明である。SI42と南東辺で接している。深さ30cmで、SI41よりは深い。上部はあまり削平されていないと推測される。北東辺・北西辺の壁の立ち上がりはゆるいが、平面形はほぼ正方形をなす。壁溝はカマドをのぞいてめぐり、柱穴と考えられるピットが壁溝内にいくつか存在する。壁溝は幅20~32cmである。各コーナーには深さ40cm前後のピットがある。このほかの壁溝のピットのうちで30cm以上のものは、竪穴に伴う柱穴であろう。カマドは1.3×1.9mで、基本的に3層に分かれ、上層・中層が粘土混じりで、下層は焼土層である。中層・下層はよく焼けている。カマドより土師器小甕(3)、長甕(4)が出土している。

掘立柱建物は桁行3間(約7.1m)、梁間は不明である。面積42㎡と推定される建物である。柱掘方は径36~44cmの円形で、深さ15~28cmである。

遺物 出土土器は数個体である。土師器碗(1・2)、小甕(3)、長甕(4・5)がある。小甕・長甕が非ロクロのA系、碗はロクロと考えられる。

第74図1の碗Bはロクロ土師器で、この胎土は須恵器系である。2は胎土精良であるが、1のように須恵器に近い焼き上がりではない。内外面ともていねいにロクロナデを行う。3は薄い器壁で、底部外面の調整は粗いヘラケズリとも見えるが、はっきりしない。4は器壁が相対的に厚く、薄い3と



第73図 SI32出土遺物

は異なる。4は体部に外面ヘラケズリ、内面ナデ痕がある。胎土は丸味をもつ礫を含む。

時期等 時期はⅡ期と考えられる。

SI33 (第74・75図)

位置 13・14・15・16～18-b・c・d・e・f区に位置する。竪穴の南東部が近代の土取り穴により壊されている。

遺構 主軸はN-23°-Wで、カマドは攪乱を受けているためか、検出されていない。平面形は長方形で、主軸方向が長く、約10.4m、ほかは約8.8mである。面積は約91.5㎡である。深さは約20cmで、一部は削平されていると思われる。壁溝はないが、壁際と床面にピットがみられる。これらは径24～80cm、深さ14～60cmである。床面からは川原石が点々と出土した。

遺物 出土土器は数個体と少ない(第75図)。

須恵器無台碗(1)は器壁がやや薄く、体部の開きは小さい。2・3はいずれも須恵器の体部片である。2は外面が平行タタキ目、内面が平行文あて具痕、3は外面が縄目状平行タタキ目、内面が矢羽根状あて具痕である。4～6は土師器碗。4は碗Bである。体部は丸い。内面に広くタールが付着する灯明皿である。5は食膳具としては、胎土の粗いものである。体部はロクロナデである。6は黒色土器である。底部のみ遺存しており、大きさからみて、小甕の可能性も考えられる。底面はヘラケズリである。7は小甕で、口径約16cmのものであるが、全体の器形、法量が不明である。鍋(8)は内面のナナメ方向のナデは、ハケ状工具かと思われる。口縁部のヨコナデは強く、胎土は須恵器系で、明るい色調である。

11は釘と推定される鉄製品で、端部が尖った棒状を呈し、断面形はやや膨らみをもった方形である。9は手持砥石で、直方体を呈し、正・裏・両側面に作業面をもつ。石材は軟質の砂岩で重量は320gである。床面から出土した。11は石英安山岩の円礫を素材としている擦り石。作業面は側面にみられ、不定方向の擦痕がみられる。重量は568gで、埋土から出土した。12は水晶の原石。

時期等 時期はⅡ期と考えられる。

SI34 (第76図・図版52)

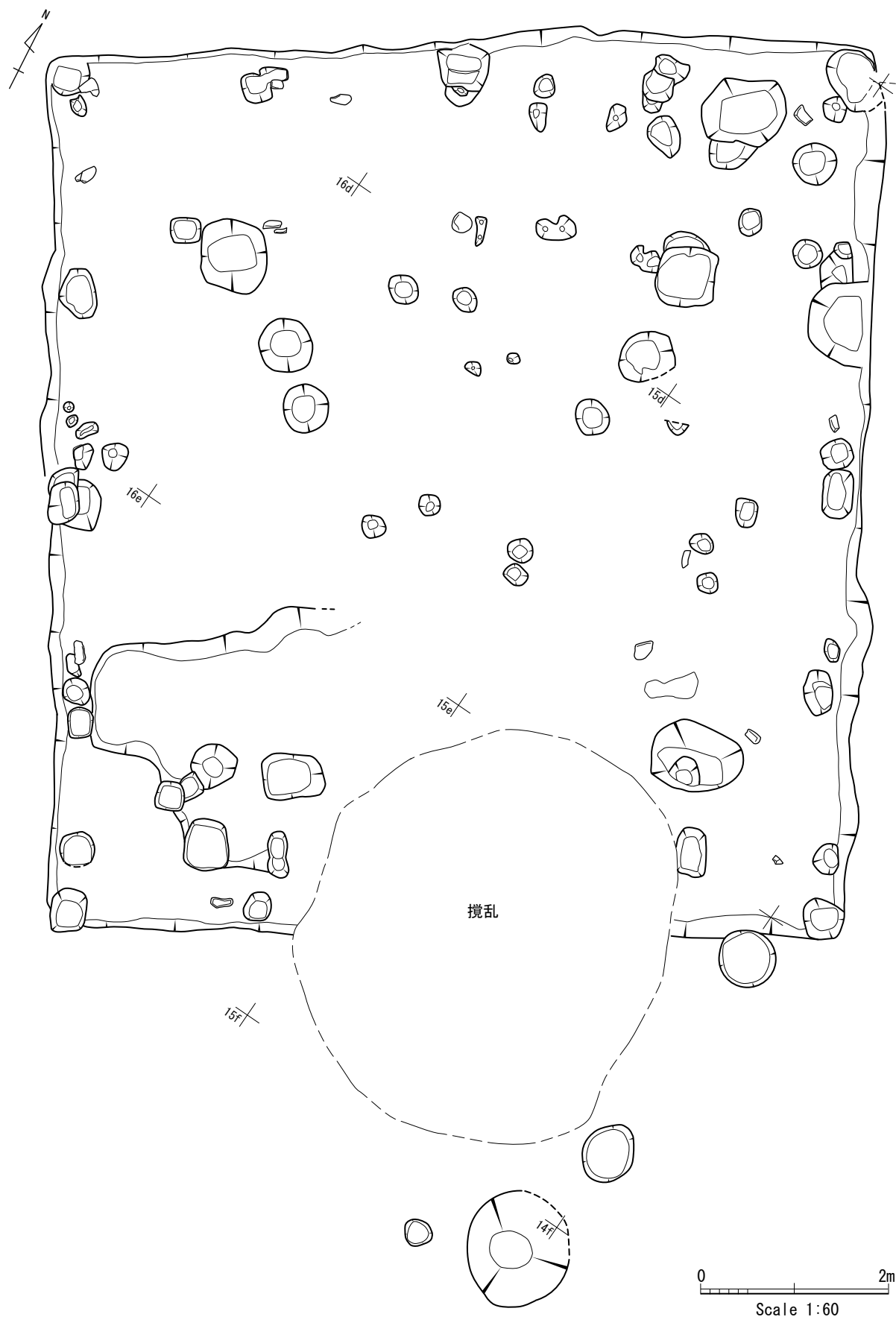
位置 21・22-Y・Z区に位置する。

遺構 主軸はN-70°-Eで、南東辺の東コーナー付近にカマドラしきものがある。主軸方向がやや長く、約4.6m、ほかは約3.7mで、比較的明確な長方形を呈する。面積は約17㎡で、比較的小さい。深さは19cmで、上部は多少削平されていると思われる。柱穴は各コーナーに存在し、規則的に配置されている。このほか北東辺に2つの柱穴がある。深さは20～50cmのものが多い。壁溝は北西をのぞく、3辺に検出された。これらは幅12～24cmである。また、カマドラしきものは粘質土をあまり含まず、しまりもよくないが焼けている。

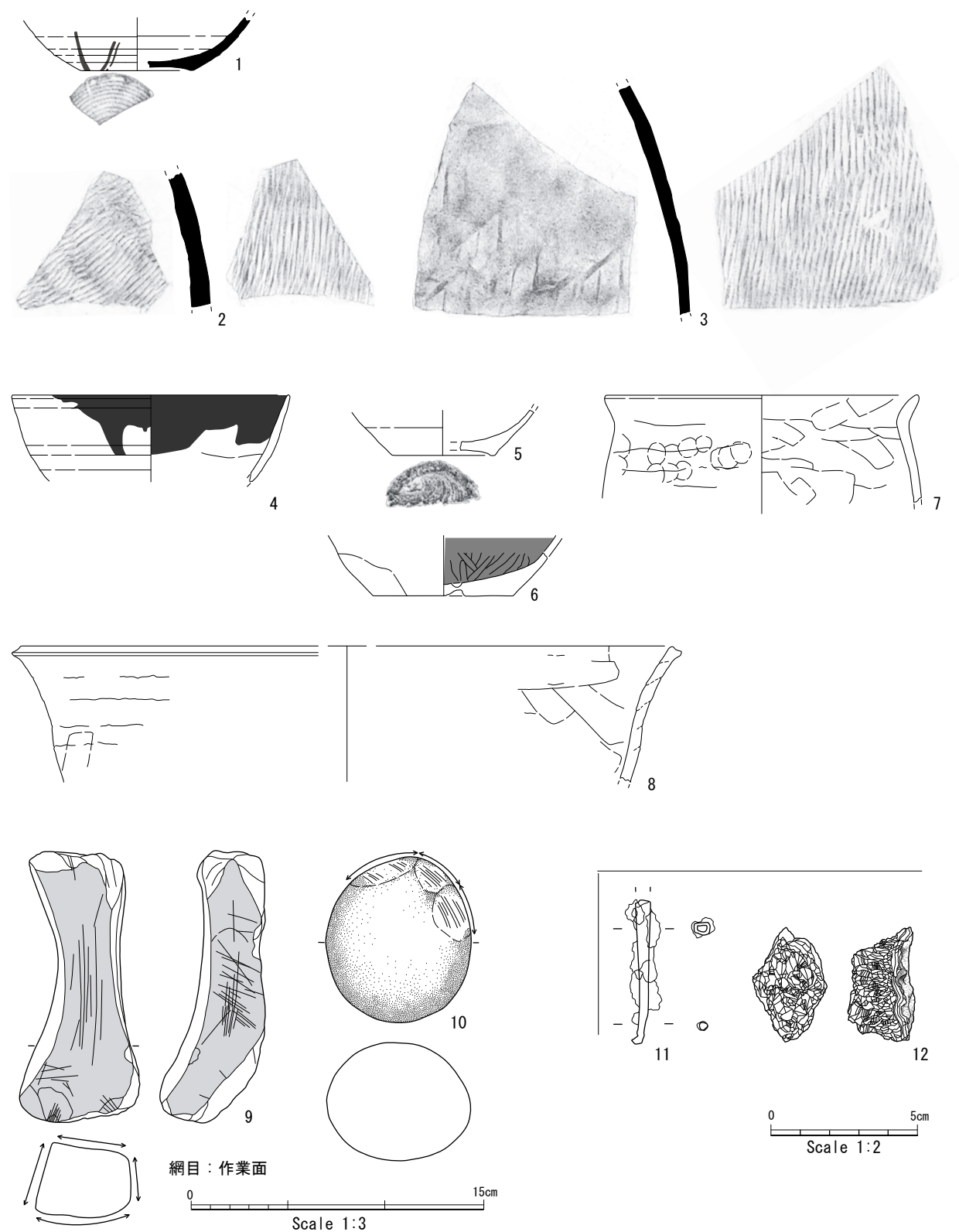
遺物 10個体ほどの土器が出土している。土師器碗・小甕・長甕がある。

碗(1～3) 底部外面が回転糸切りのものである(図版52-6)。1は口径約14cmで、体部が比較的直線的である。底部は回転糸切り無調整である。ロクロナデは外面より内面がていねいである。胎土は精良であり、1mm以下の長石を含む。2は黒色土器である。1よりやや小型と推定される。底径

S133

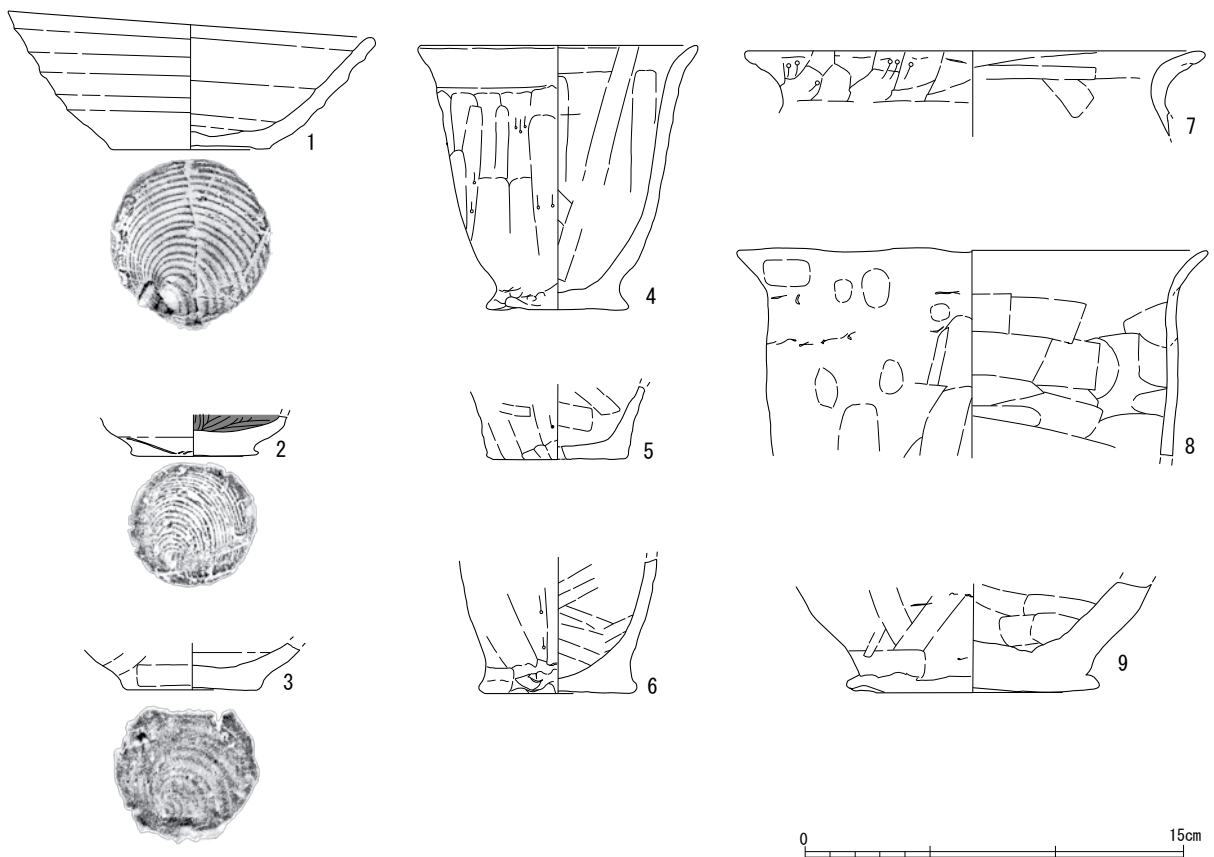
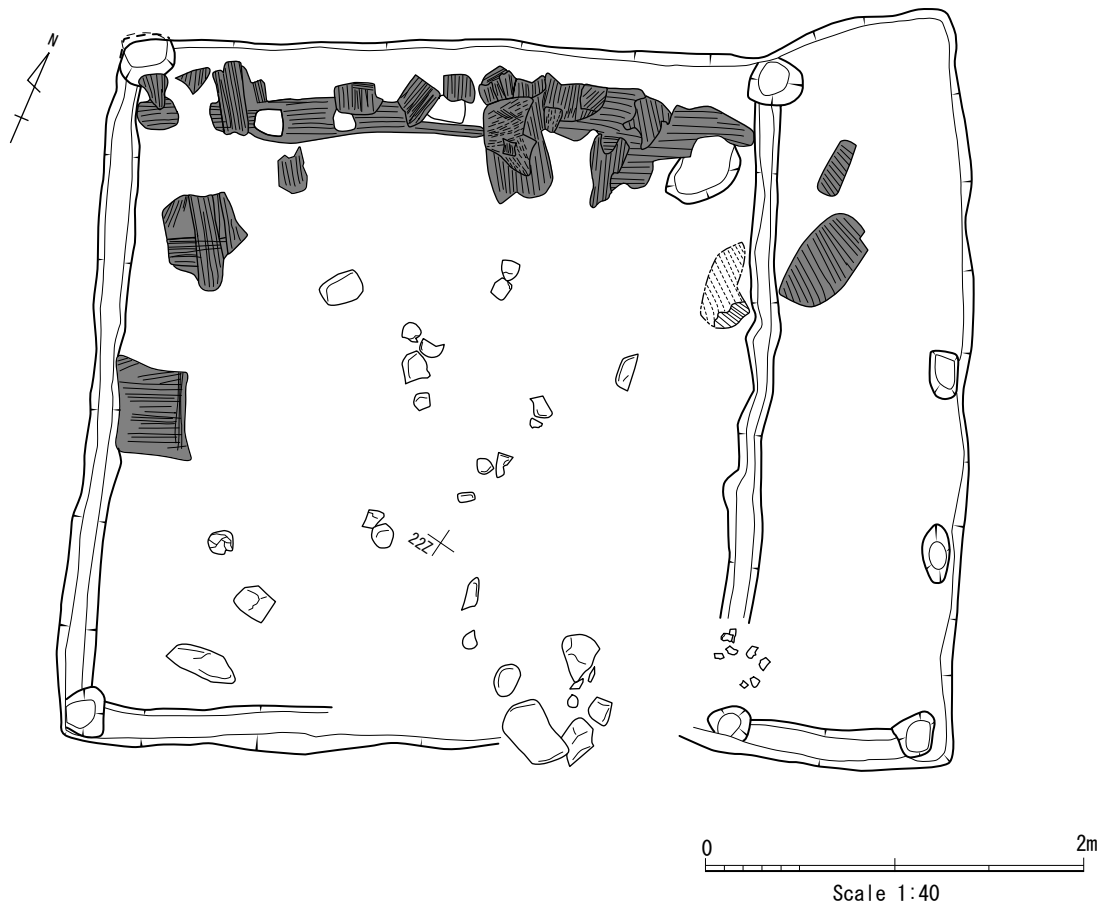


第74図 S133



第75図 SI33出土遺物

SI34



第76図 SI34と出土遺物

2 黒色

は5cmである。内面にヘラミガキを施し、底面は回転糸切りである。内面は黒色処理される。3は胎土精良で、須恵器系胎土ではない。底部外面は回転糸切りで、ヘラケズリはなされない。体部は大きく開き丸味をもつ形態であろう。

小甕（4～7） 4はほぼ完形品で北西部から出土した。口縁部は比較的短く、あまり外反しない。端部は丸くおさまる。体部はあまり丸味をもたない。器壁は全体に薄い。底部外面は不調整であるが、粗いヘラケズリがなされる。胎土はにぶい橙色である。明確な二次焼成を受けており、ススの付着がある。実際に使用されたと考えられる。5は小型品である。底部外面はナデである。6は底部が小さく、小甕と考えられる。7は端部が短く外側へ開く。

長甕（8・9） 8は端部が丸味をおびる。底部（9）は平底であるが、大きくて器壁が厚い。

時期等 時期はⅡ期に比定されよう。

SI35（第76・77図）

位置 21・22・23・24-W・X・Y区に位置する竪穴住居で、北西側にSI46が重複するが、新旧関係は不明である。北東側コーナーにかなり大きな攪乱坑がある。

遺構 平面形がほぼ正方形を呈しており、カマドの位置も一般的である。長軸方向が約9.0m、短軸が約8.6mで面積約77.4㎡である。主軸（短軸）はN-22°-Wで、カマドは南東辺、東寄りにある。深さは約15cmで、上部は若干削平されていると考えられる。壁際には深さ50cm前後の穴がみられるが、多くは柱穴と考えられる。壁溝は北側のみめぐり、幅24～48cm、深さは30～33cmと深い。埋土上層に遺物が含まれていた。出土個体数は数点である。カマドは0.8×1.0mで、カマド内より須恵器壺（1）、土師器甕（6・8）が出土した。

遺物 A群須恵器が出土している。

須恵器（1） 無台壺がある。口径に対し、器高が高い。径高指数（器高／口径×100）45以上で、身の開きも比較的小さい。口縁部はほぼ直線的である。器壁は薄く、身は深い。

土師器（2～10） 小甕・長甕・鍋・壺Bがある。

壺B（2） 食膳具としては、胎土の粗いものである。

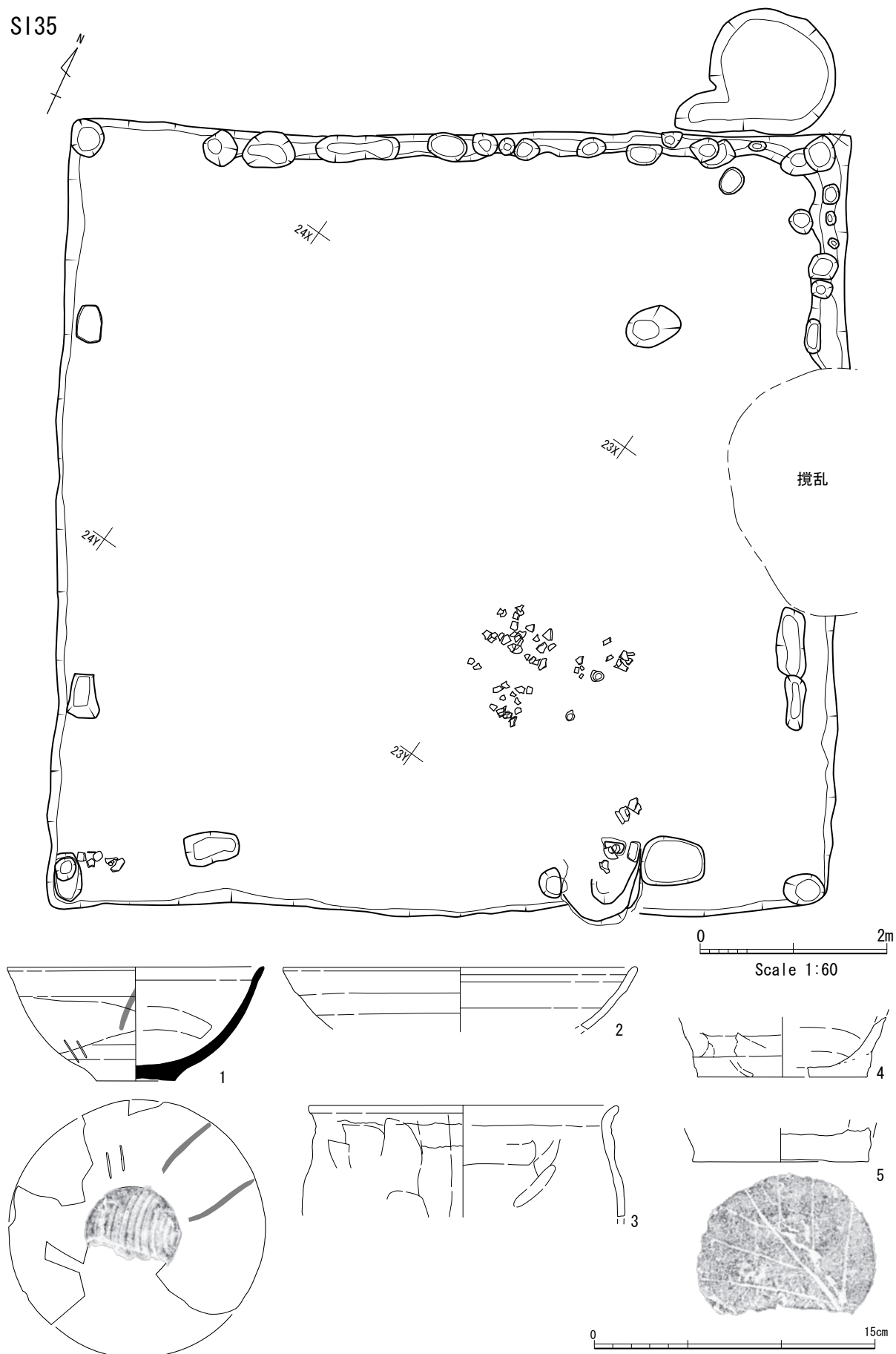
小甕（4） 底部外面にナデ痕があり、A系である。

長甕（3・5～8） いずれもA系である。5は木葉痕をもつ。網状脈で、葉脈が細い。6～9は器壁が厚く、つくりはシャープでない。6をのぞき、口縁部は体部から明瞭に「く」の字状に外反する。5・7・9の端部は丸くおさまる。5・6・8・9の体部外面に粘土紐の接合痕が残る。8は体部のふくらみがやや大きい形態である。口縁端部は面をもつ。体部外面のナデは弱く、内面は凹凸がなく、ていねいなナデが施される。9の体部外面は幅広のハケ状ナデで、内面はヘラナデ痕が明確である。

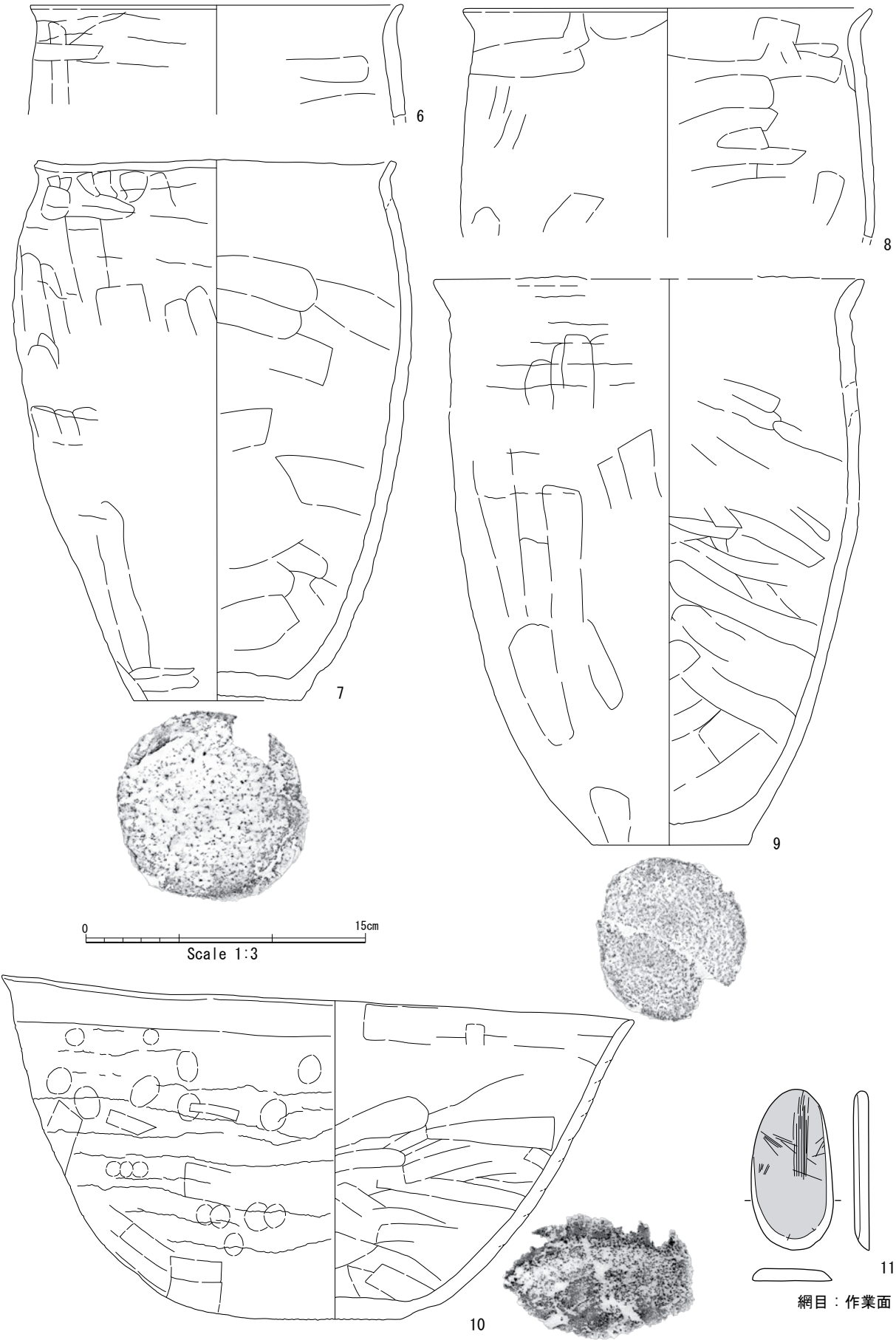
鍋（10） 鍋は非ロクロA系のものである。鍋としては全形を知りうる数少ない例である。底部は丸底風で、丸味をもって立ち上がる。口縁はわずかに外反し、端部は丸くおさまる。

11は砥石で、扁平な砂岩を素材とし、平面形は長楕円形である。作業面は正面にみられる。重量は34gで、埋土から出土した。手持砥石とみられる。

時期等 時期はⅡ期である。



第77図 SI35と出土遺物 (1)



第78図 SI35出土遺物

SI36 付SK2 (第79・80図)

位置 18・19・20・21・22－c・d・e・f・g区に位置する竪穴住居で、南東部の掘立柱建物がセットになる。掘立柱建物はSI65と重複し、SI65を切る。

遺構 主軸はN－24°－Wで、南東辺東側コーナー寄りにカマドがある。竪穴部の平面形はほぼ正方形で、一辺7.6～8.8m、面積は66.8㎡である。深さは27cmで、SI65の床面より深い。床面の壁際に柱穴がある。柱穴は径48～52cmで、深さ52～57cm前後である。壁溝が各辺にあるが、部分的に途切れる。幅は20～30cmである。カマドは1.3×0.8mで、上部二層に粘質土を含み、上から2番目は焼けている。カマド内から出土した土師器甕（5・10）はカマドの芯と考えられる。床面で出土したものが多い。椀形鍛冶滓が615g出土しており、鍛冶工房の可能性が考えられる。

掘立柱建物は桁行3間（約8.2m）、梁間2間（約6.9m）で、長軸方向は竪穴の長軸方向に一致する。面積56.5㎡で比較的大型であり東柱はない。柱間寸法は梁間だけが長く（約3.6m）、ほかはほぼ等間（約2.7m）となる。柱掘方は径36～56cmの円形、深さ8～20cmで、比較的大きい。この建物の北西側にある竪穴はこの建物と関係する。そう考えれば、この建物は床張り（高床）でなく、土間の平地式建物と考えられる。

本遺構内南東部に土坑が存在する（SK2）。SK2は隅丸方形を呈し、長軸約1.7m、短軸約1.1mである。面積は約1.9㎡。埋土のなかより土師器小甕（13）が出土した。

遺物 出土土器は10個体程度である。須恵器甕、土師器無台碗、小甕、長甕がある。このほか椀形鍛冶滓も出土した。

須恵器甕（1） 1は器壁が薄く小型であり、壺の可能性はある。外面は格子目状平行タタキ目、内面のあて具痕は不明瞭である。つくりはよい。

土師器（2～12）

無台碗（2） 無台碗の底部でロクロ回転糸切り無調整である。

小甕（3～5） 3はB系で口径12cmの小型のものである。4は須恵器系胎土に類似する。底部外面はヘラナデである。4は底部外面が不調整である。

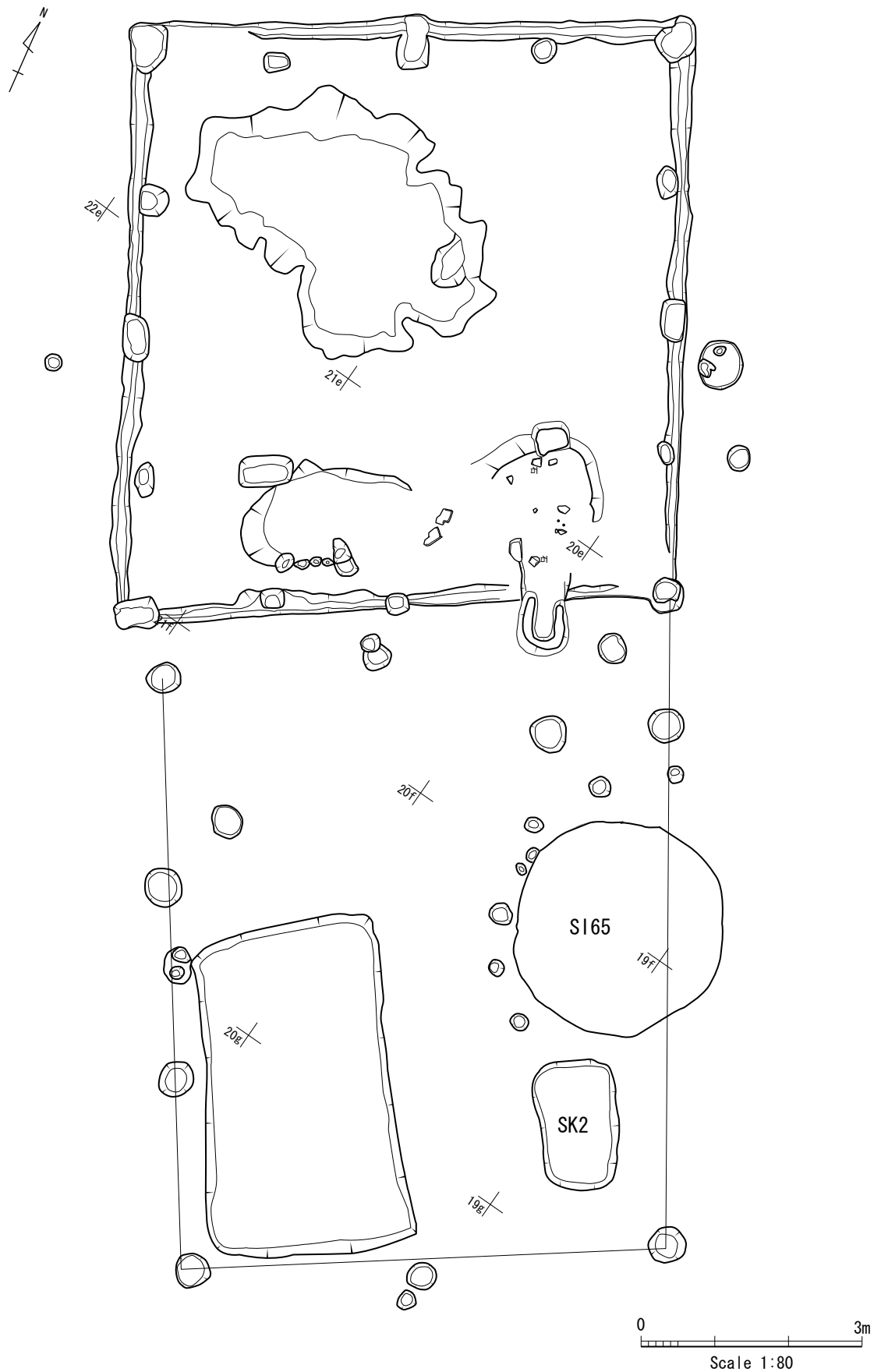
長甕（6～11） 6は形態・手法からみると、長甕と考えられ、復元口径は20cmである。口縁部は「く」の字状に直線的に体部から屈折して外反し、端部は丸くおさまる。ナデが弱い。7は口縁部のヨコナデが強く、内面にナデがみられ、A系である。8はやや小さく、体部の立ち上がりも大きい。この底部外面に木葉痕がある。9は体部下端をヘラケズリするが、ごく粗いものである。おそらく体部外面の凹凸を消すためのものであろう。体部の立ち上がりの角度からみて長甕であろうか。10は砂痕をとどめる。外面の色調は6と類似するが、内面の色調が異なる。二次焼成などによる色調変化とも考えられ、同一個体の可能性は残っている。11は大きくて器壁が厚いことから長甕と考えられる。

12・13は椀形鍛冶滓。

14はSK2出土の土師器小甕。B系と考えられる。体部がやや丸く張り、口縁部は外反し上方へつまみ上げられる。

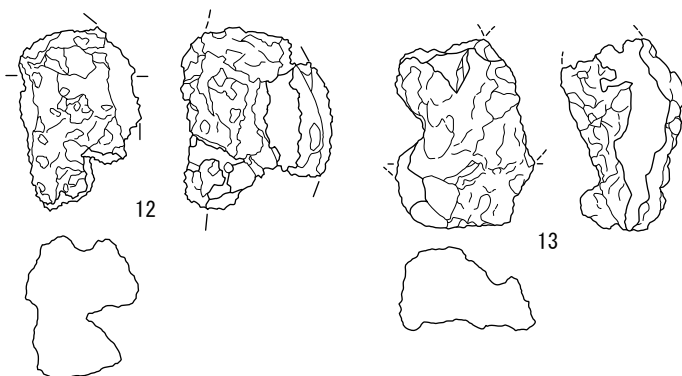
時期等 時期はⅡ期の古い段階と考えられる。

S136

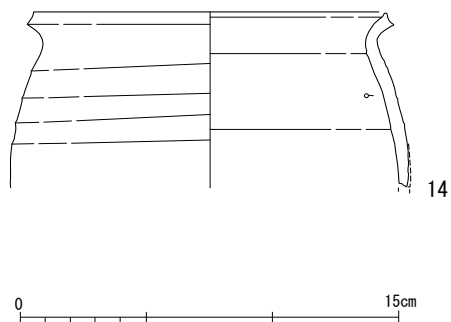


第79図 S136・SK2

SI36



SK2



0 15cm

第80図 SI36・SK2 出土遺物

SI37 (第81図)

位置 22・23－g 区に位置する竪穴で、ほとんどが調査区外であり、北側の一画が検出されたのみである。

遺構 主軸は不明で、カマドは検出されていない。長さ、面積も明確でない。上部は削平されていると考えられる。幅約28～40cmの壁溝があり、北側コーナーに柱穴と考えられるピットがある。出土遺物は土師器1点のみ。出土土器が少なく、時期は不明。

SI38 (第82図)

位置 24・25－e・f 区に位置する。

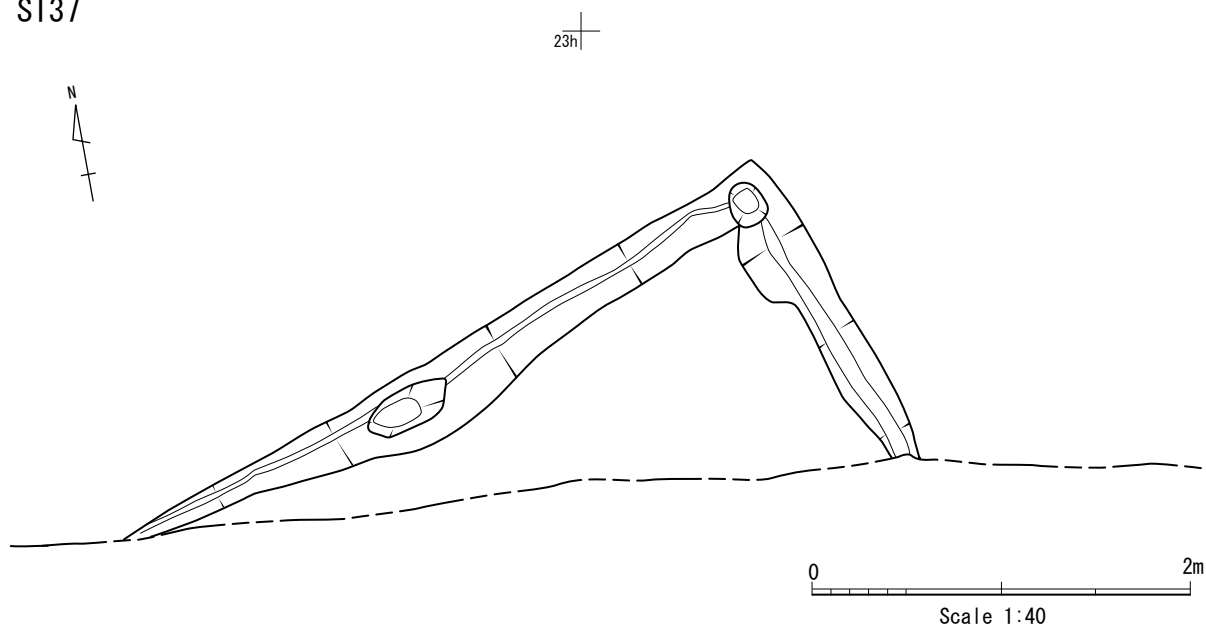
遺構 主軸はN－18°－Wで、カマドは南東側コーナー付近にある。平面形はほぼ正方形で、一辺3.3mである。面積は10.9㎡である。深さ17cmで、上部は削平されていると思われる。壁溝はない。小さくて浅いピットが多く、柱穴もあると考えられる。カマドは0.8×0.6m、高さ約30cmである。土師器甕(3)が、カマドの中央から出土した。またカマドの前面からは土器が集中的に出土した。

遺物 出土土器は約5個体である。

第82図1・2は須恵器甕体部の破片である。1は転用硯である。内面中央はきわめてよく磨滅している。2は外面が縄目状平行タタキ目、内面は矢羽根状のあて具痕である。器壁は薄い。3は土師器長甕で、明瞭に「く」の字状に屈折し、端部はつままれて鋭い。ケズリを含めて、つくりはシャープで、焼成もやや硬質である。体部外面はヘラケズリで、顕著である。内面はナデである。

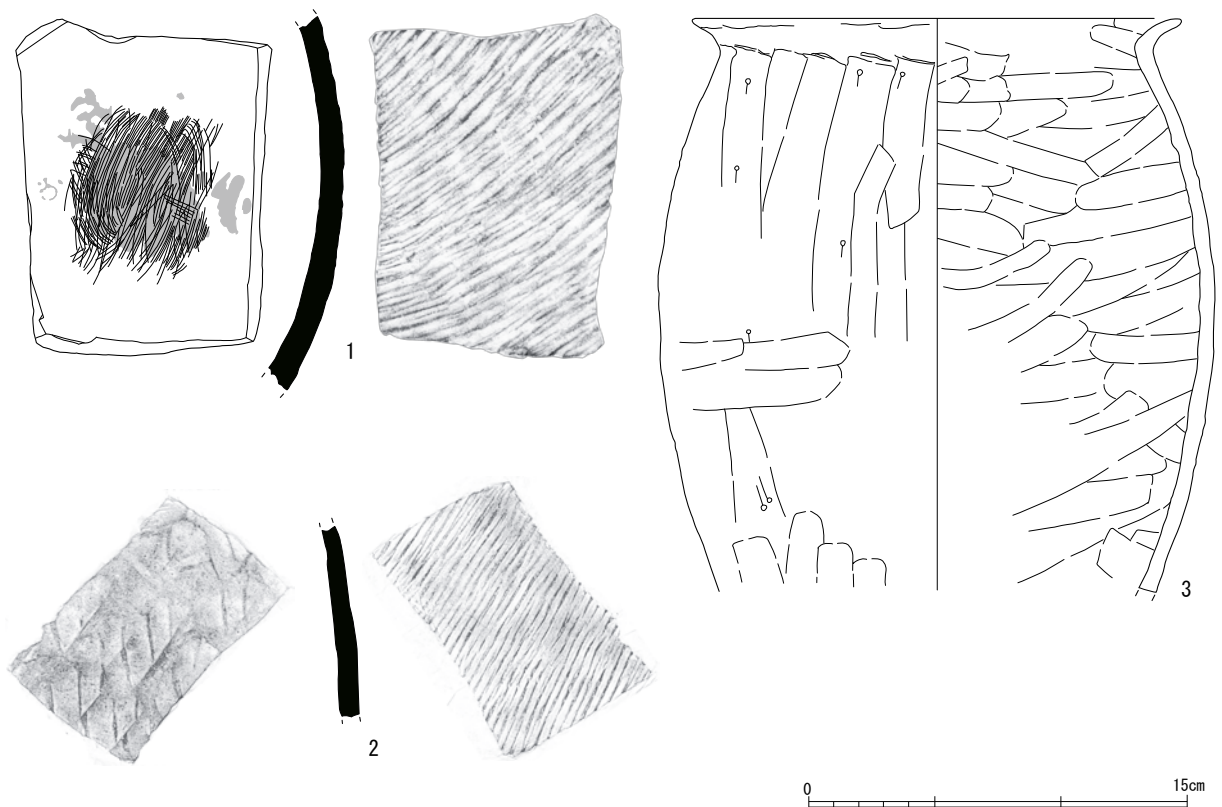
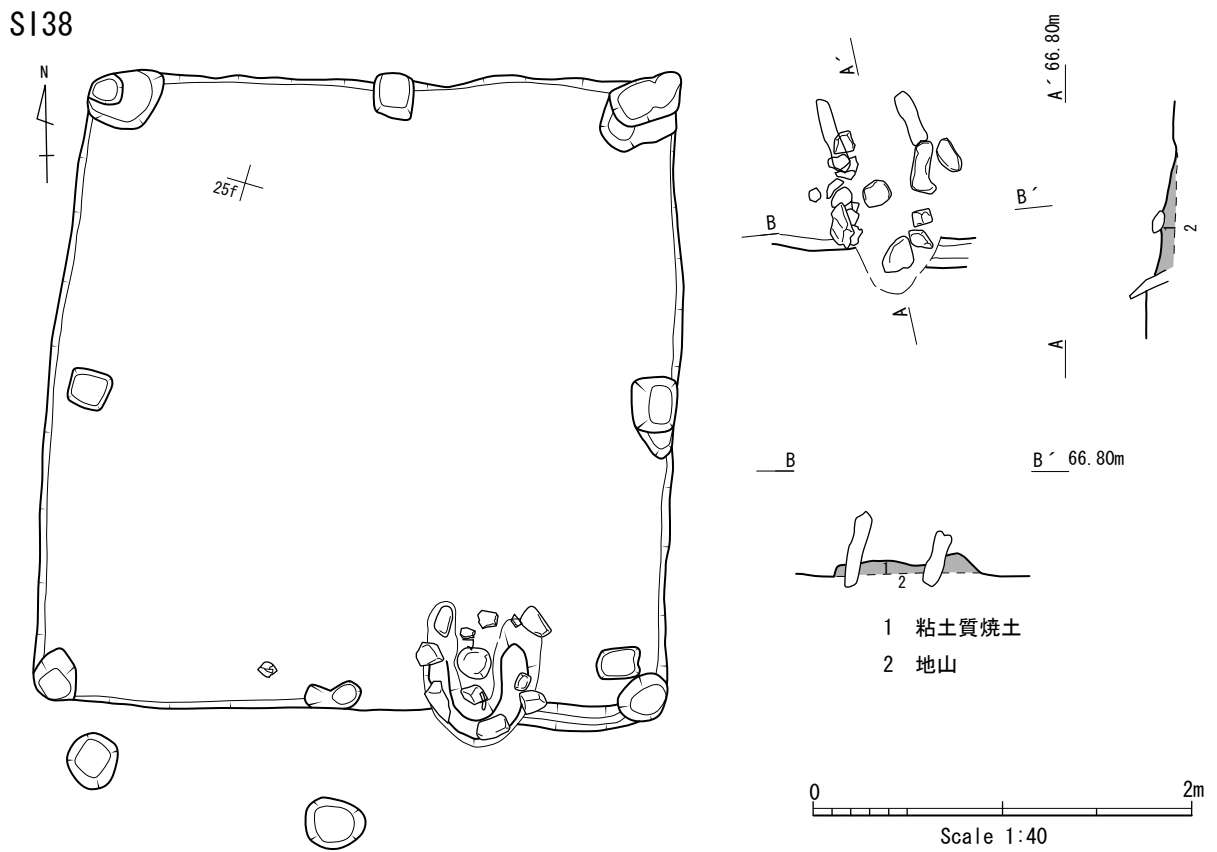
時期等 時期はⅡ期と考えられる。

SI37



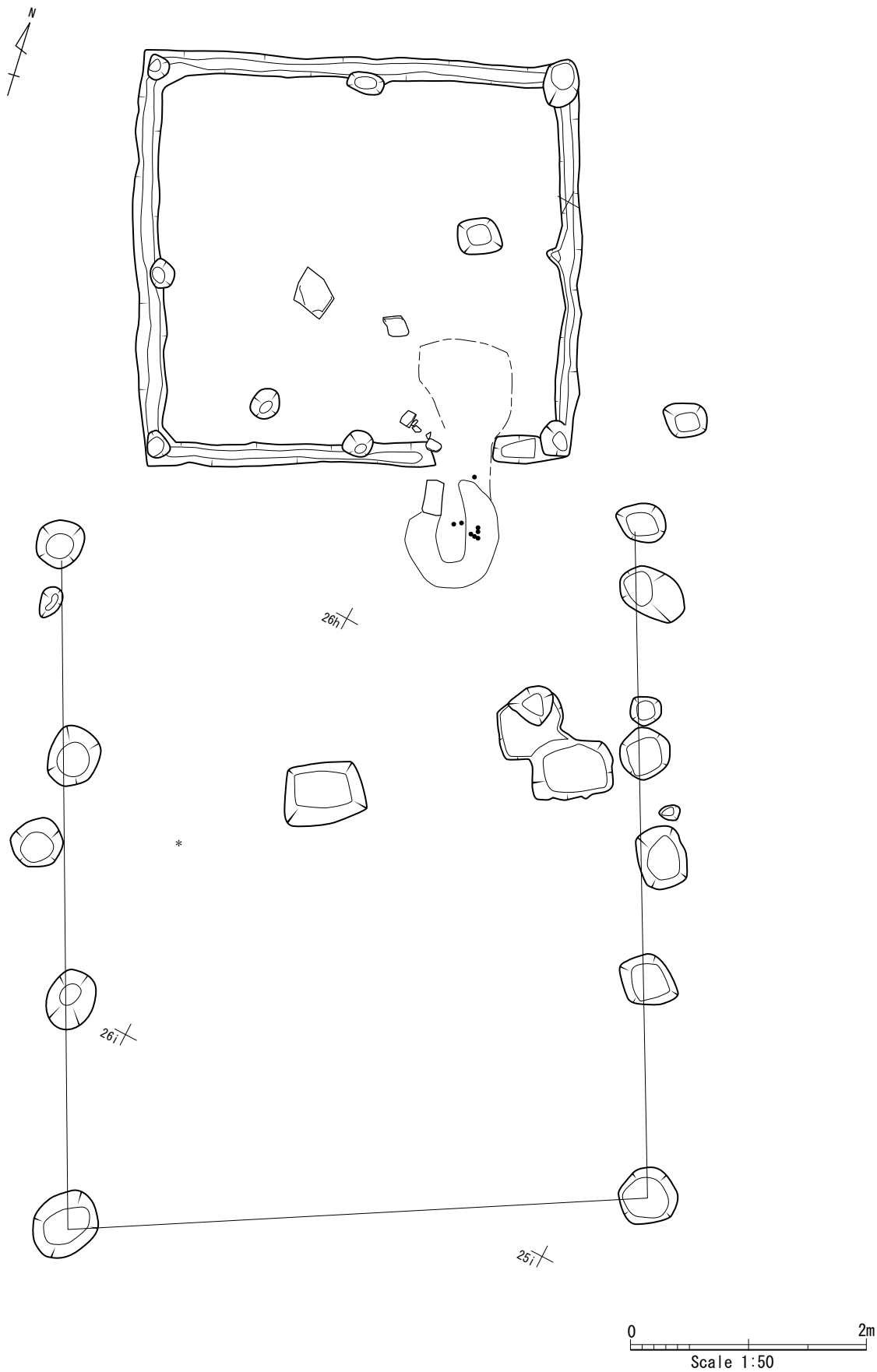
第81図 SI37

SI38



第82図 SI38と出土遺物

SI39



第83図 SI39

SI39 (第83・84図)

位置 24・25・26-f・g・h・i区に位置する。

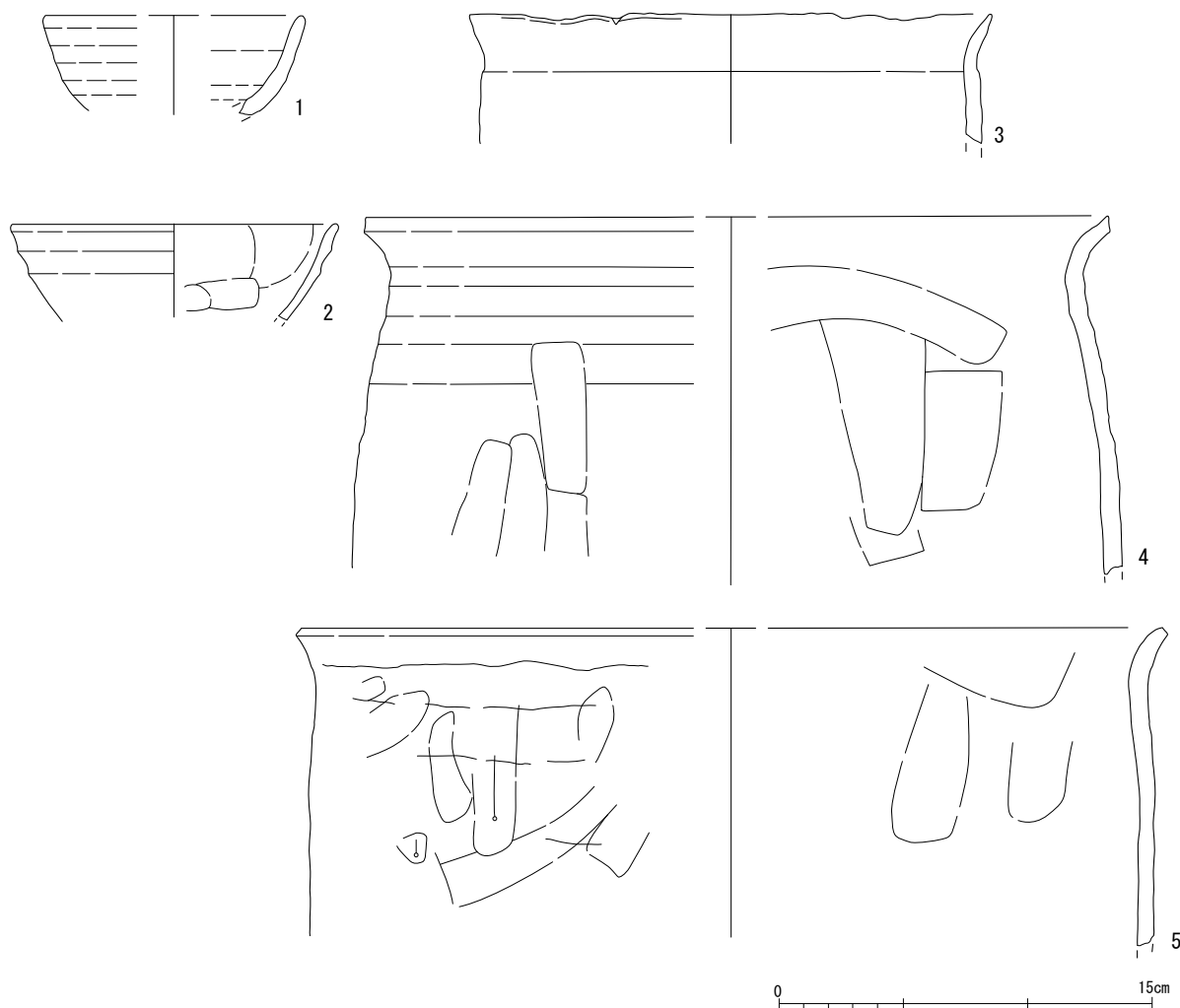
遺構 本竪穴の南東部には掘立柱建物がセットとなる。竪穴は、プランが整った方形を呈するが、掘り込みが浅い。主軸はN-20°-Wとなり、主軸方向3.8mで、ほかは3.4m、面積12.9㎡である。壁溝は各辺にあり、幅約12~24cmである。

掘立柱建物は桁行3間(約6.2m)、梁間1間(約5.3m)で、面積は約33㎡である。束柱はない。桁行の柱間寸法はそれぞれほぼ等間である。柱掘方は20~32cmの円形で、深さ13~25cmである。北から南へむかって地形が若干傾斜する。

遺物 出土土器は数個体と少ない。土師器無台碗(1・2)・長甕(3~5)がある。

第84図1・2は無台碗で、口径10~13cmである。3は端部が鋭く調整され、焼成は軟質である。4は技法がB系で確実に古い。5は口縁部から体部上半は器壁が厚く、つくりはシャープでない。

時期等 出土土器が少ないため、時期ははっきりしないが、I期からII期の古い段階と考えられる。



第84図 SI39出土遺物

SI40 (第85・86図)

位置 26・27-i・j 区の調査区南端に位置し、南側は調査区外へのびる。

遺構 カマドは検出されていない。主軸はN-19°-Wである。主軸の長さは不明で、ほかは約5.0mある。面積は約22.7㎡。上部は削平されていると考えられる。壁溝は各辺にあり、幅は約24~40cmである。柱穴は北東・北西のコーナーに深さ約70cmのピットが2か所ある。

遺物 出土土器は10個体ほどある。土師器長甕と鍋がある。すべてA系である。

第85図1は長石を含み、全体に器壁が厚く、つくりはシャープでない。2は口縁部と体部の屈折は丸味をもち、口縁端部は丸い。体部外面のナデは部分的であり、あまり行われな。体部外面には粘土紐の接合痕が残り、断面にもそれが観察される。以上の点からすると、ロクロは使用されず、調整が粗いことが推定される。胎土は粒子を含むがやや精良である。第86図5はつくりがシャープである。口縁部は弧状に外反し、端部は丸くおさまる。ナデもシャープである。内面はヨコ方向のヘラナデである。6は器壁が比較的薄く、体部と口縁部の屈折は丸味をもち、口縁端部は丸くおさまる。これは体部中位に張る部分があり、体部外面はヘラナデである。一般的な形態であり、胎土に長石を含む。7は、外面はヘラナデ、内面は横方向のハケ目状ナデである。底部(3・4)は平底であるが、いずれも大きくて器壁が厚いことから長甕と考えられる。8は鍋とみられる。底部外面は網状脈の木葉痕で、外面下端は指頭圧痕で、底部との境をおさえる。比較的つくりはよくない。

時期等 土器の時期は明確ではないが、長甕からⅡ期と考えられる。

SI41 (第87図)

位置 11・12-b・c 区に位置する竪穴住居で、SI32と重複する。SI32は住居の北側にほぼ重複しているが、新旧関係は不明である。

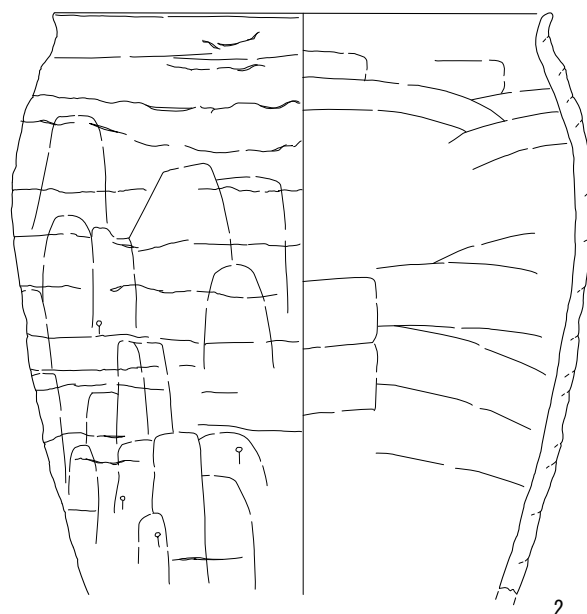
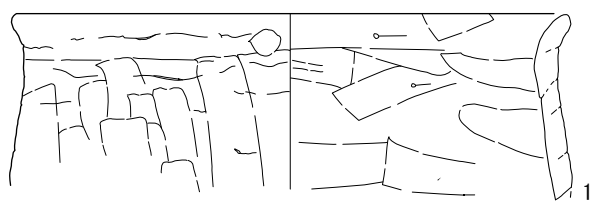
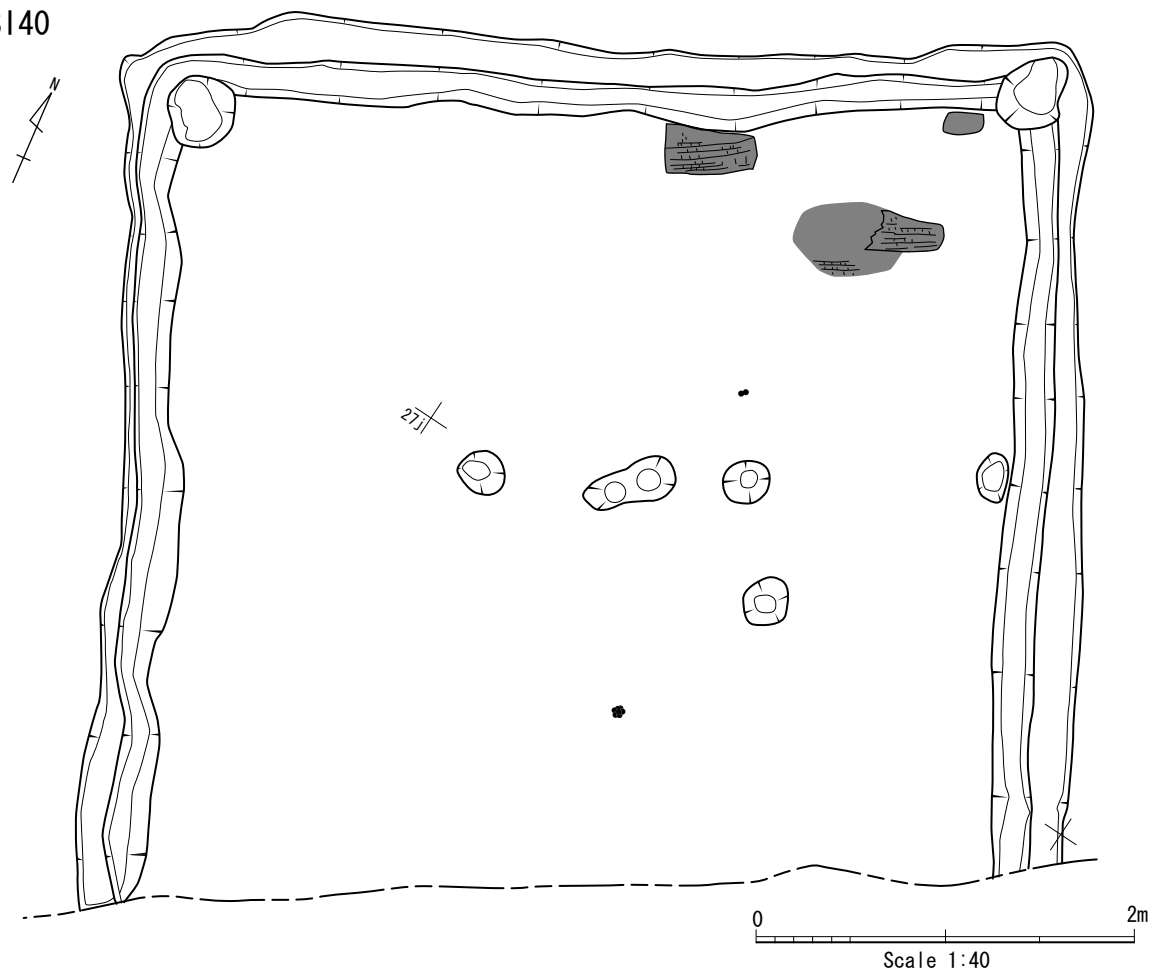
遺構 主軸はN-75°-Eで、カマドは東辺南寄りにある。カマドのある辺がやや長く2.4m、ほかは2.3mで台形を呈し、面積は5.5㎡で小型である。深さは約15cmと浅く、上部は削平されていると考えられる。住居を切る3つのピットがある。部分的に深さ18cm程度の壁溝がある。カマドで壁溝は途切れる。壁際には小さなピットがあり、柱穴と考えられる。カマドは0.6×0.6mである。カマド上層は焼けていない粘質土があり、その下に部分的に焼けた暗褐色ないし褐色の粘質土を含む土層がある。

遺物 出土遺物は少ないが、土師器小甕B系(2)が出土した。

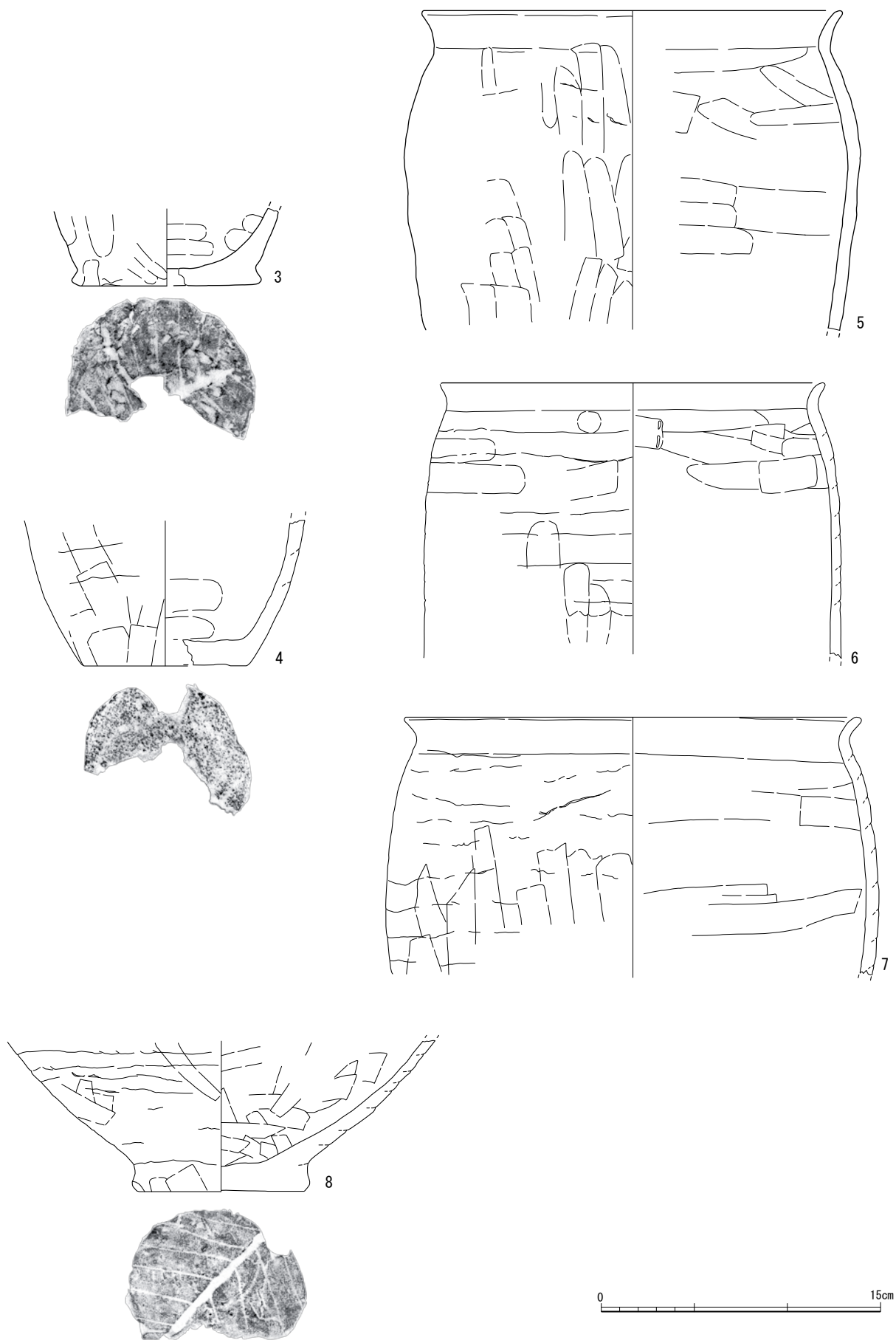
第88図1は復元口径13cmの埴で、灯明皿として使用したものである。2は小甕B系である。底部のみの3は長石を含みながら、胎土が比較的精良である。長甕で明瞭にロクロ土師器と判断されるものは内外面平行タタキ目の体部破片(4)のみである。5・6は確認調査試掘坑w15出土の土師器長甕である。w15調査地点は調査記録から本竪穴が該当する可能性が高いため、あわせて報告する。5は口縁部がほぼ水平で短く外反し、端部が丸くおさまる。体部上位内外面はナデで、内面下位もナデである。外面中位~下位はヘラケズリである。6は5よりも器高が高く、手法はやや異なる。口縁部は体部からゆるく屈折し、弧状に外反する。全体につくりはシャープでなく、端部は丸くおさまる。口縁部の外面にヨコナデと思われるかすかな痕がみられる。A系である。体部外面下半はヘラケズリ、内面はナデで、外面中位に弱いナデを行う。底部は平底で、体部との接合部が外面によく残る。

時期等 時期はⅠ期かと考えられる。

SI40

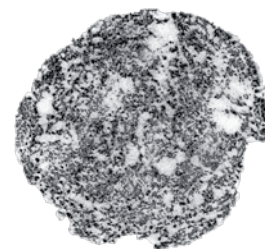
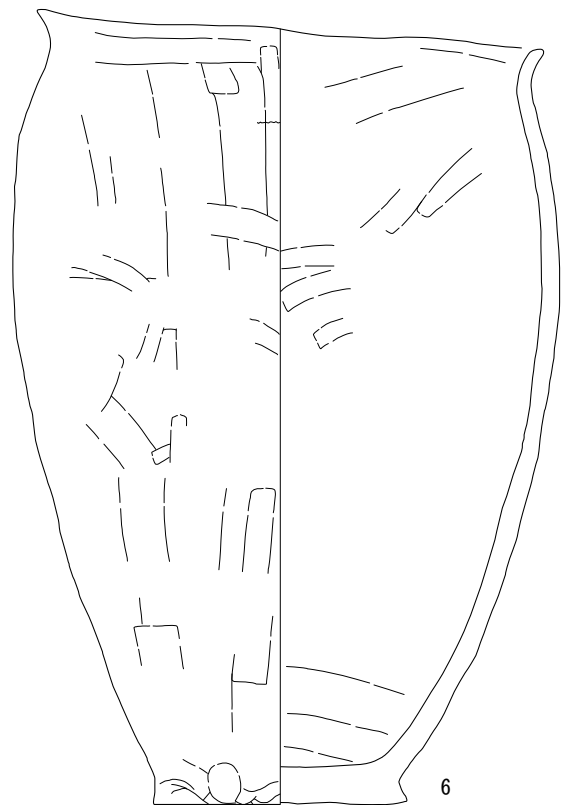
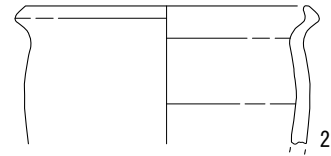
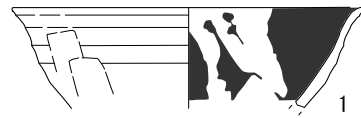
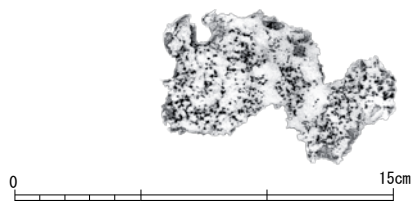
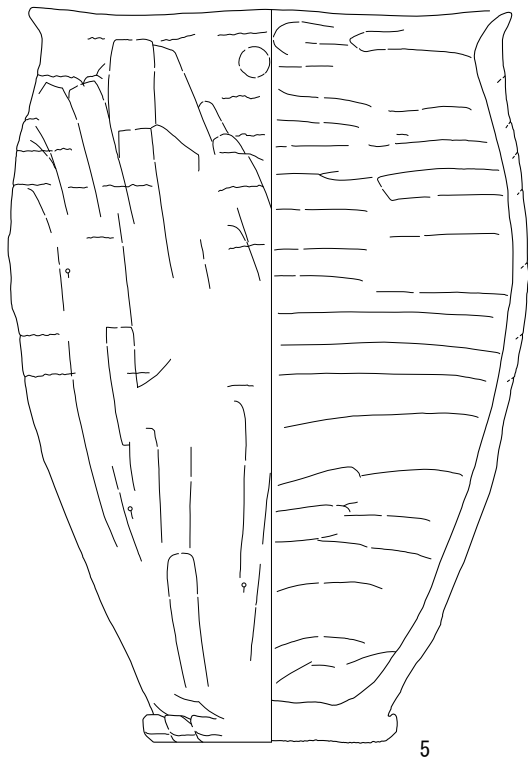
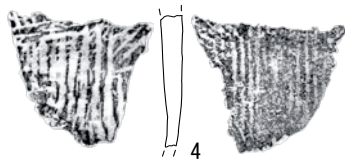
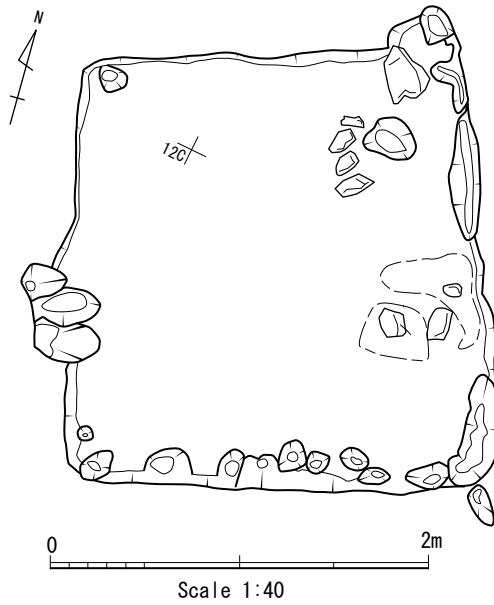


第85図 SI40と出土遺物 (1)



第86図 SI40出土遺物 (2)

SI41



第87図 SI41と出土遺物

1 タール

SI42 (第88図)

位置 12・13-b・c区に位置する。

遺構 主軸はN-74°-Eで、東辺にカマドがある。深さ10cmで、東西は2.3m、南北は2.6mで、ほぼ正方形に近い平面形である。面積は6㎡である。壁溝はなく、南東をのぞく各コーナーに柱穴がある。カマドは長さ1.2mである。上部に焼けた粘質土があり、土師器片を含む。

遺物 出土土器は約8個体である。

第88図1は長甕で、カマド内から出土したものである。平底で、体部外面はほとんどヘラケズリであるが、上半部にタテ方向のヘラナデと思われる調整があり、口縁部も短く、外方に屈折する形態から、A系と考えられる。底部の器壁が薄いこと、底部が不調整であること、胎土が精良ではなく、明るい褐色を呈することもその特徴とみることができる。2も非ロクロのA系である。体部外面下半を粗くヘラケズリする通有な調整である。この調整は粗製品にみられる一般的なヘラケズリであり、器面を削るものである。底部は厚い。3はつくりがシャープではなく、端部も丸くおさまる。4は器壁が厚く、A系である。口縁部の端部は丸い。体部外面はヘラケズリである。1と同様なタイプである。5は長甕の体部破片で、器壁は厚く、外面のタタキ目の凹凸は比較的大きい。内面は平滑である。胎土は須恵器系でないと考えられる。

時期等 時期はⅠ期と考えられるが、土器の接合関係から SI41よりは古いと考えられる。

SI43 (第89図)

位置 27・28-a・b・c区に位置し、北側に SI44が近接する。

遺構 主軸はN-19°-Wで、東側コーナーにカマドの構築材だった粘土がある。一辺の長さは3.3~3.5mで、ほぼ正方形を呈する。面積は11.5㎡である。深さは16cmで、上部は多少削平されていると思われる。柱穴は壁際に8個あるが、壁溝はいっさいみられない。カマドの構築材だった粘土範囲は0.3×0.2mで、やや焼けた粘質土を少し含む茶褐色土層が遺存するのみである。カマドから土師器甕(1~4)が出土した。

遺物 出土土器は数個体である。

第89図1・2は長甕である。1は「く」の字状に外反し、口縁端部は短く、丸くおさまる。2は口縁部が大きく外反し、端部が外方へのびる。底部(3・4)は平底でA系である。4は底縁が張り出し、内面ナデ、外面は粗いヘラケズリである。

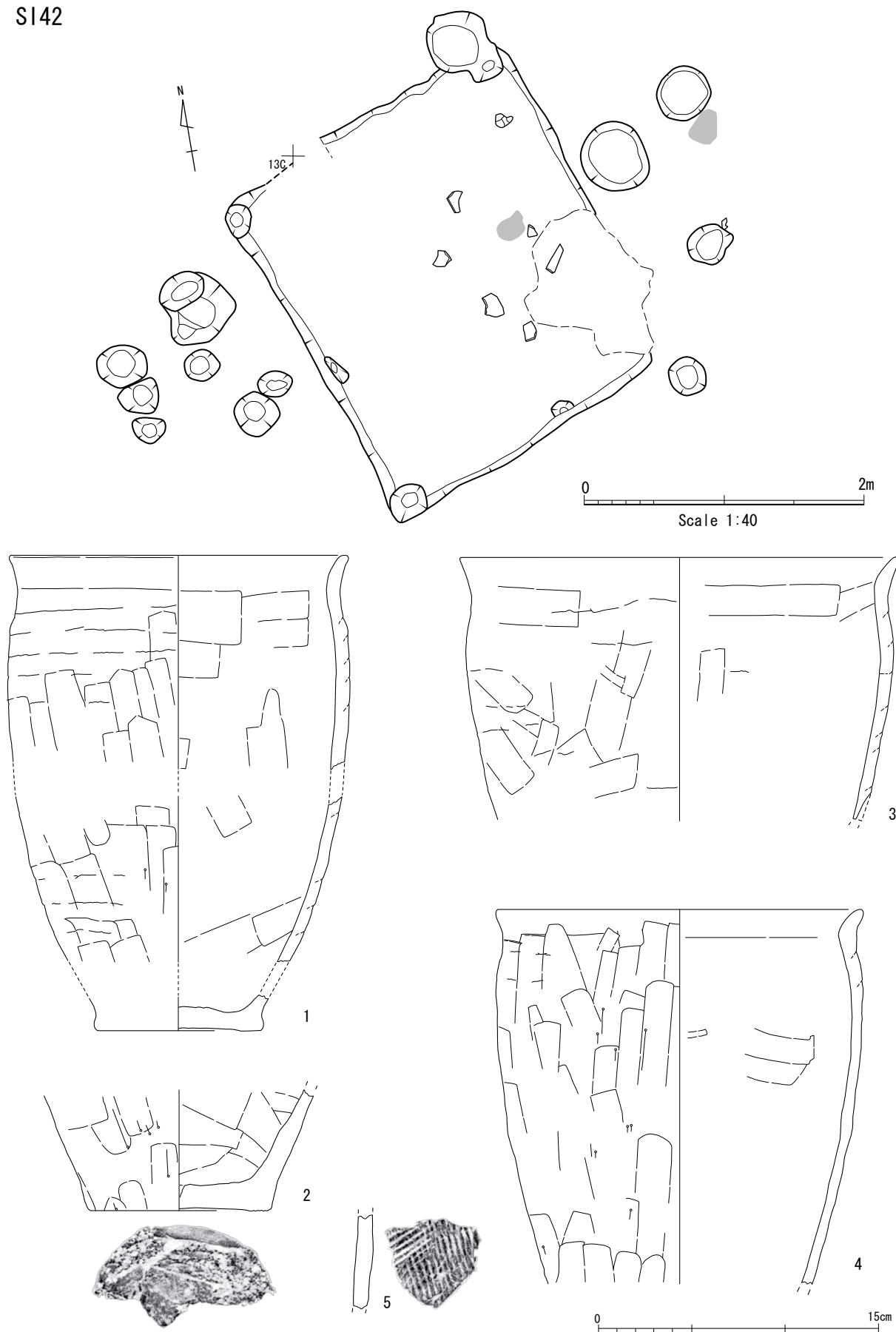
時期等 時期はⅡ期である。

SI44 (第90・91図)

位置 26・27・28-Y・Z・a・b区に位置する。

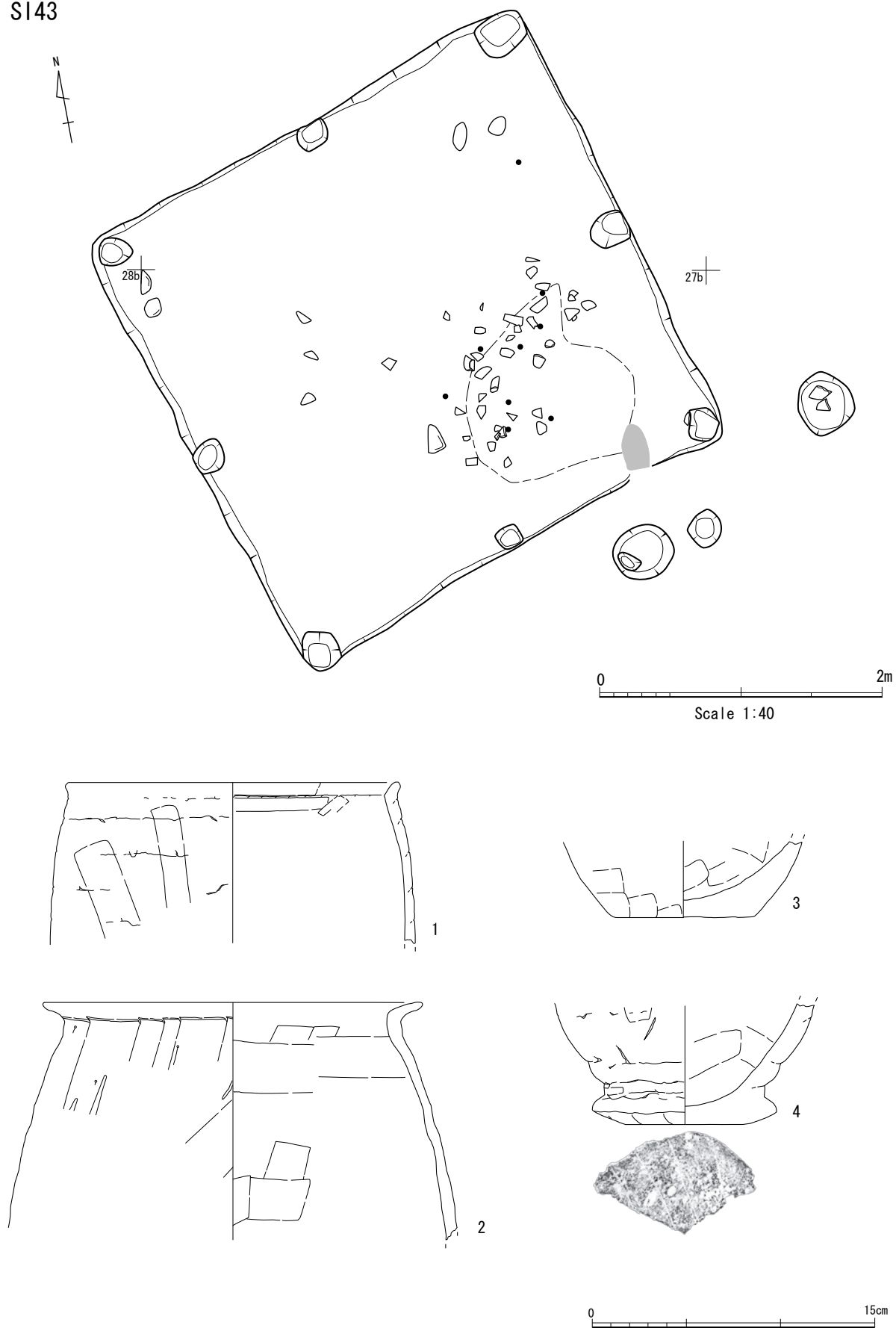
遺構 この竪穴の南側には廂状の掘立柱建物が付属する。主軸はN-16°-Wで、ほぼ北から45度偏向する。カマドは南東辺の北寄りにある。竪穴の規模はおおよそ5.3×5.3mで、ほぼ正方形である。面積28㎡、深さは19cmである。深さ数cmから56cmのピットがあり、四隅のものは柱穴と思われる。壁溝は各辺にあり、深さ24cm以下である。また、本竪穴内には壁溝がめぐっており、建替えをした可能性が高い。

SI42



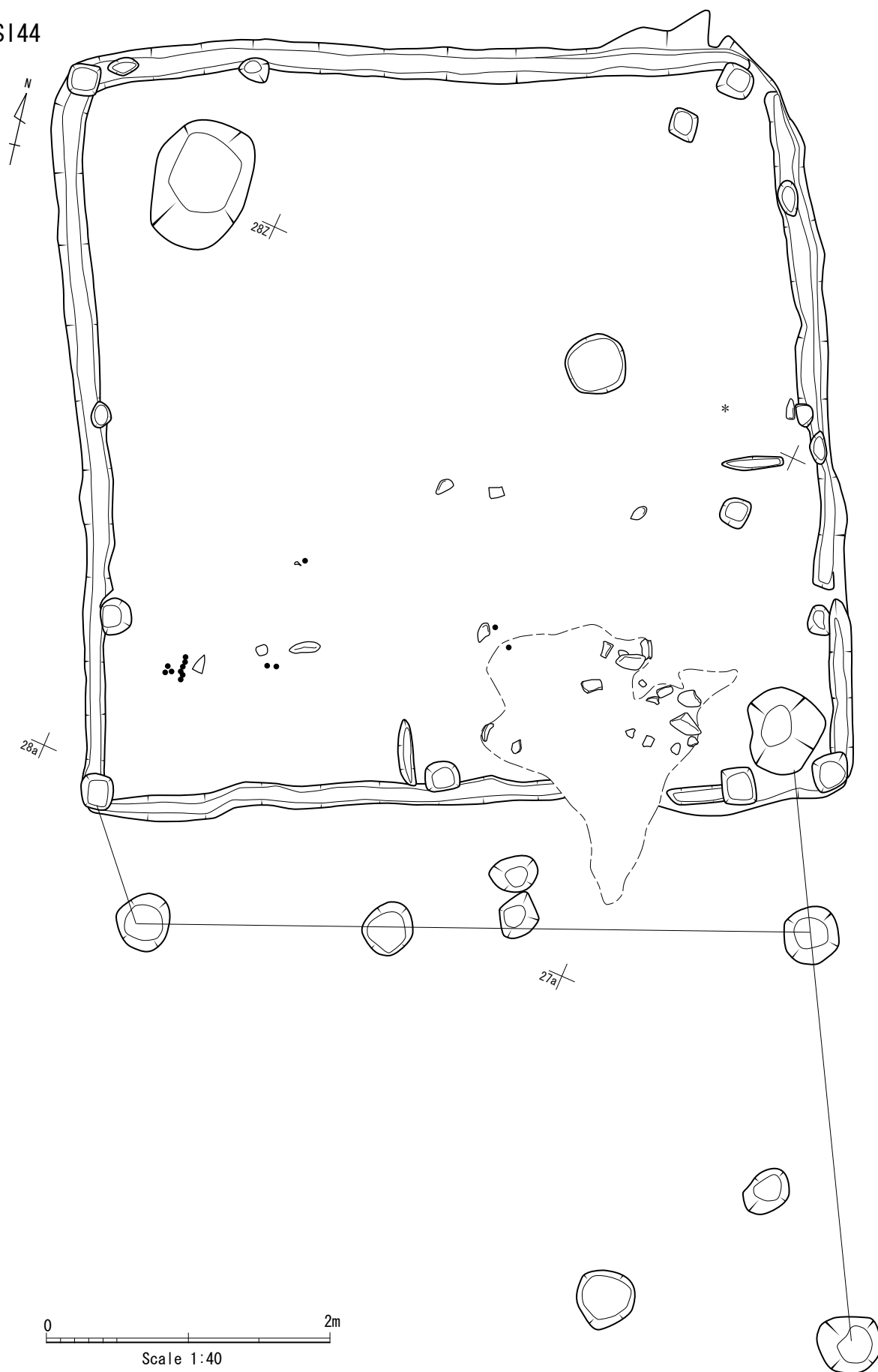
第88図 SI42と出土遺物

SI43



第89図 SI43と出土遺物

S144



第90図 S144

カマドは2.0×1.8mで、カマドの芯に使用された土師器小甕（2）、甕（3）が検出された。両袖に甕をそれぞれ入れる。両者の間隔は約1mである。両袖の甕の側面には焼けていない粘質土が張りつき、中央の天井部の上方には粘質土、下方には土がある。上方の粘質土は下部、すなわち甕に接する部分約10cmは焼けており、その上は焼けていない。甕の下部の土層はよく焼けている。煙道の存否は確認できない。カマドに使用された甕はいずれも使用済みのものである。これ以外にも床面からややまとまって土師器が出土した。

掘立柱建物は堅穴の南側に廂状に取り付くが、南西側の様相は不明である。堅穴南辺に平行して4個の柱穴が並ぶ。長軸方向3間（約4.9m）、短軸1間（約3.3m）である。面積は不明である。柱掘方は径36～40cm、深さ15～25cmの円形で、堅穴の柱穴に比べ大きい。

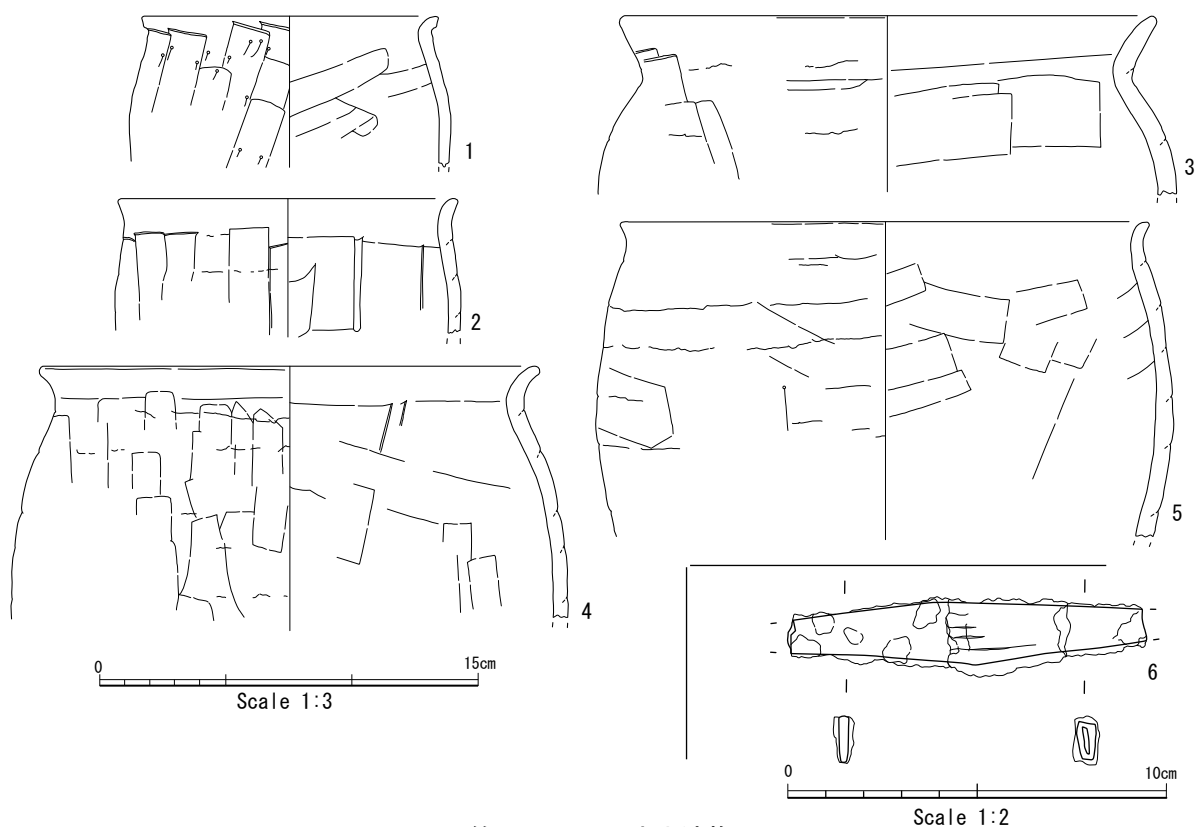
遺物 カマドの芯として使用された土師器甕1個体がある。同時に使用されたものである。ただし、これら以外にはほとんど土器がみられない。ほかに鉄製の刀子（6）がある。

小甕（1・2）はA系である。2は口縁部が短く外反する。

長甕はいずれもA系である。3・4は「く」の字状に外反する口縁部をもつ。全体に器壁は厚い。また、体部外面には粘土紐の接合痕がよく残っている。外面上位のナデはほとんどシャープではない。4の長甕はSI13（第45図8）と形態・手法などが共通するものであり、体部径が比較的大きい。5はSI42（第88図4）と共通するつくりの長甕である。器壁はやや厚く、焼成は軟質である。胎土・色調などの特徴からSI43（第89図3）と同一個体とみられる。もし、同一個体であるとすれば、SI43（第89図3）はカマド出土資料のため、SI44→SI43という新旧関係が成り立つ。

6は鉄製品の刀子で、柄の木質が一部遺存している。重量は26gで、埋土から出土した。

時期等 時期はⅡ期に比定される。



第91図 SI44出土遺物

SI46 (第92～94図)

位置 23・24・25-V・W・X区に位置する竪穴住居。南東側にSI35が近接するが、新旧関係は不明である。

遺構 竪穴の南東辺には掘立柱建物が取り付く構造である。主軸はN-29°-Wで、カマドは南東辺東寄りにある。南コーナーに大きな掘り込みがある。竪穴は一辺5.2～5.4mで、ほぼ正方形の平面形である。面積は28㎡。上部はほとんど削平を受けていないと考えられる。床面にいくつかピットがある。壁際のものをのぞき、配置はととのっておらず、柱穴かどうかは不明である。南西辺には壁溝がある。カマドは1.1×0.7mである。カマド内から、土師器壺(1・2)、小甕(3)、甕(4～9)が出土した。

掘立柱建物は2間(約5.3m)×2間(約5.2m)である。面積は約28㎡。北西から南東にむかって傾斜する地形にある。柱掘方は約30～36cmの円形である。

遺物 土器の出土量は10個体ほどである。土師器壺(1・2)、小甕(3)、長甕(4～10)がある。

第93図1・2は内面黒色処理の壺である。1は口径11.4cmほどと推定される。体部から口縁部の開きの角度は、通有の坏に比して立ち上がっており、口縁部はまったく外反しない。口縁部内面は横方向のヘラミガキと黒色処理がなされており、ロクロナデで生じた口縁部内面のくぼみはきれいに消されている。外面はロクロナデであるが、上半部は小さな凹凸がわずかにみられる。2もヘラミガキ調整される。

小甕(3)はA系である。口縁部は内湾し、端部はかるく外方へつままれる。体部はやや丸く張る。4～8は長甕で、口縁部はヨコナデが弱いA系1類である。4は、口縁部がゆるく外反し、端部は丸くおさまる。内面はヨコ方向のナデの後タテ方向のナデがはいり、外面はヨコナデの後ヘラケズリである。5は口縁部・底部の破片に接合部のないものの、おおよそ全体の器形を知りうる。平底で体部中位にややふくらみを持ち、口縁部はゆるく弧状に外反する。端部は丸くおさまり、部分的に面をもつところもある。体部は内外面ともヘラナデである。底部内面は若干凹凸があり、そのまわりが輪状にくぼむ。これは成形した際に体部と接合させた名残りと考えられる。胎土に1～2mm大の長石粒を含むが、全体に比較的精良であり、相対的に粗い6～8とは明確に異なる。かりに須恵器に対応させれば4・5はA群になる。6の形態は体部がやや張る。外面は粗いヘラケズリが施される。底部外面は全面に砂が付着する。底部(8)は外面砂痕で、あるいは7と同一個体の可能性をもつが、現状での色調は明瞭に異なる。

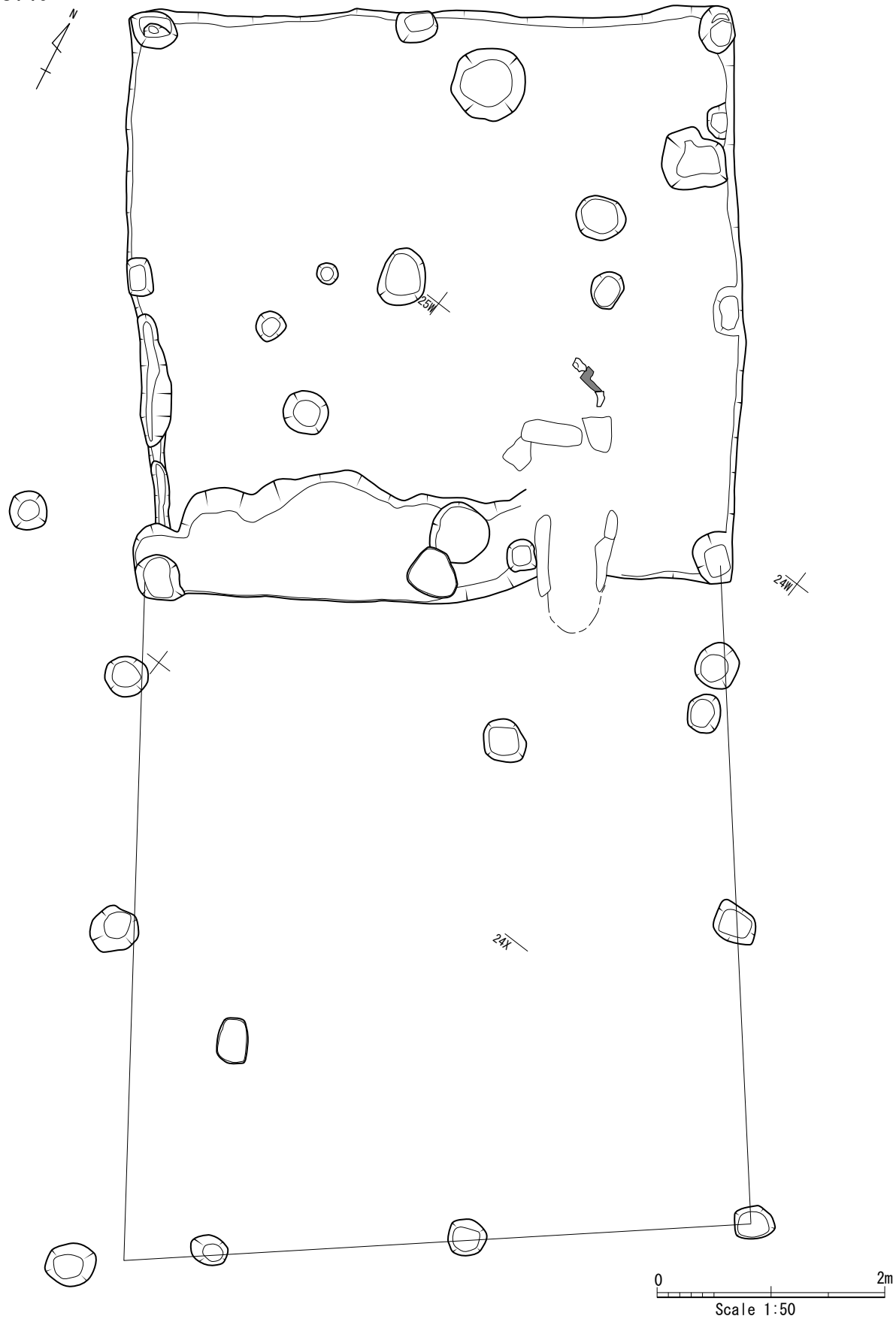
時期等 時期はⅡ期と考えられる。

SI47 (第95・96図)

位置 26・27・28-V・W・X区に位置する平安時代の竪穴住居。南側にSB13が近接するが、切り合い関係はない。

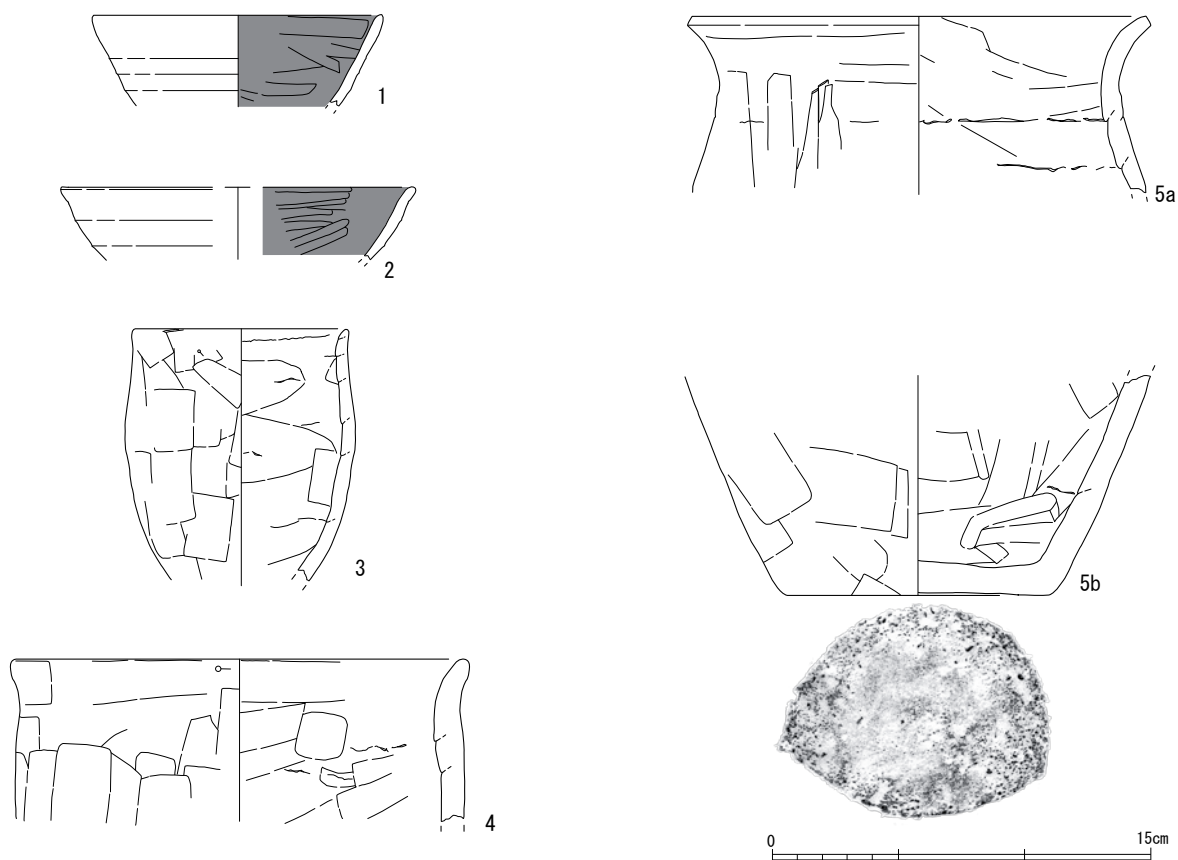
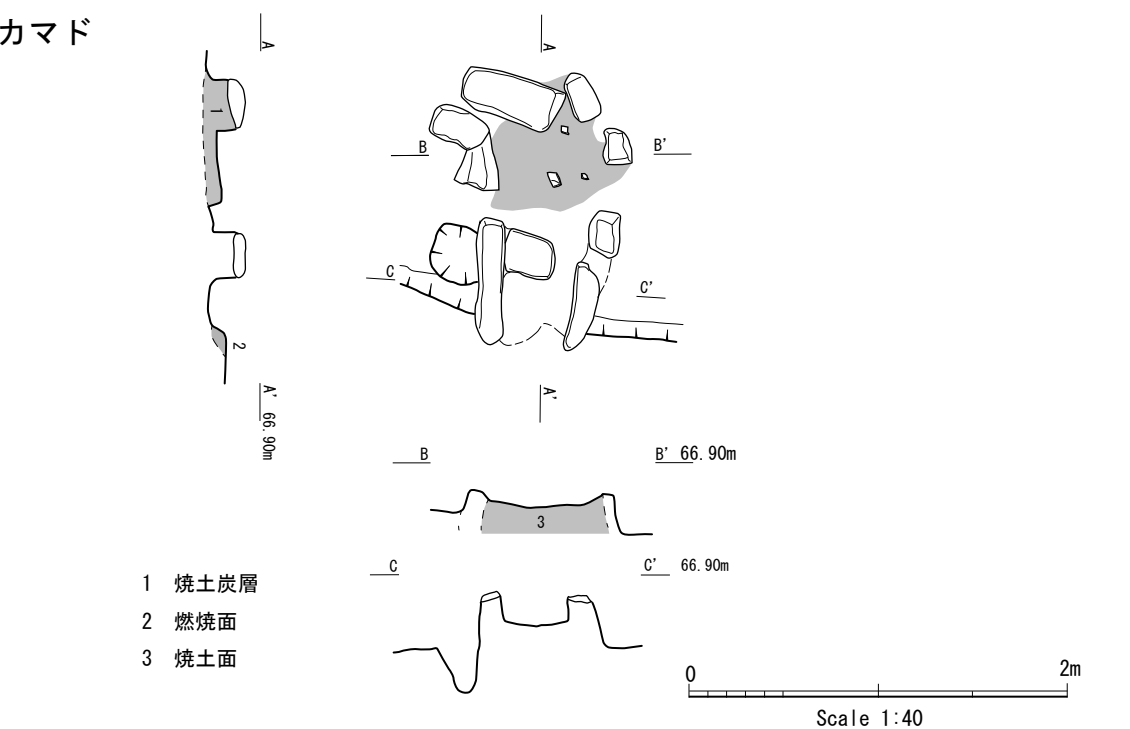
遺構 竪穴南東側には掘立柱建物が取り付く構造となる。主軸はN-27°-Wで、南側コーナーにカマドがある。竪穴の平面形は明瞭な正方形で、南東・北西4.4m、北東・南西4.6m、面積20.2㎡である。深さは約16cmである。床面にあるピットは規格的な配置をしている。壁溝は南西辺をのぞく3辺にある。カマドは1.8×1.4mで、住居の外側に向かって長くのびる平面形である。最下層が焼けた土層で、

SI46



第92図 SI46

SI46 カマド

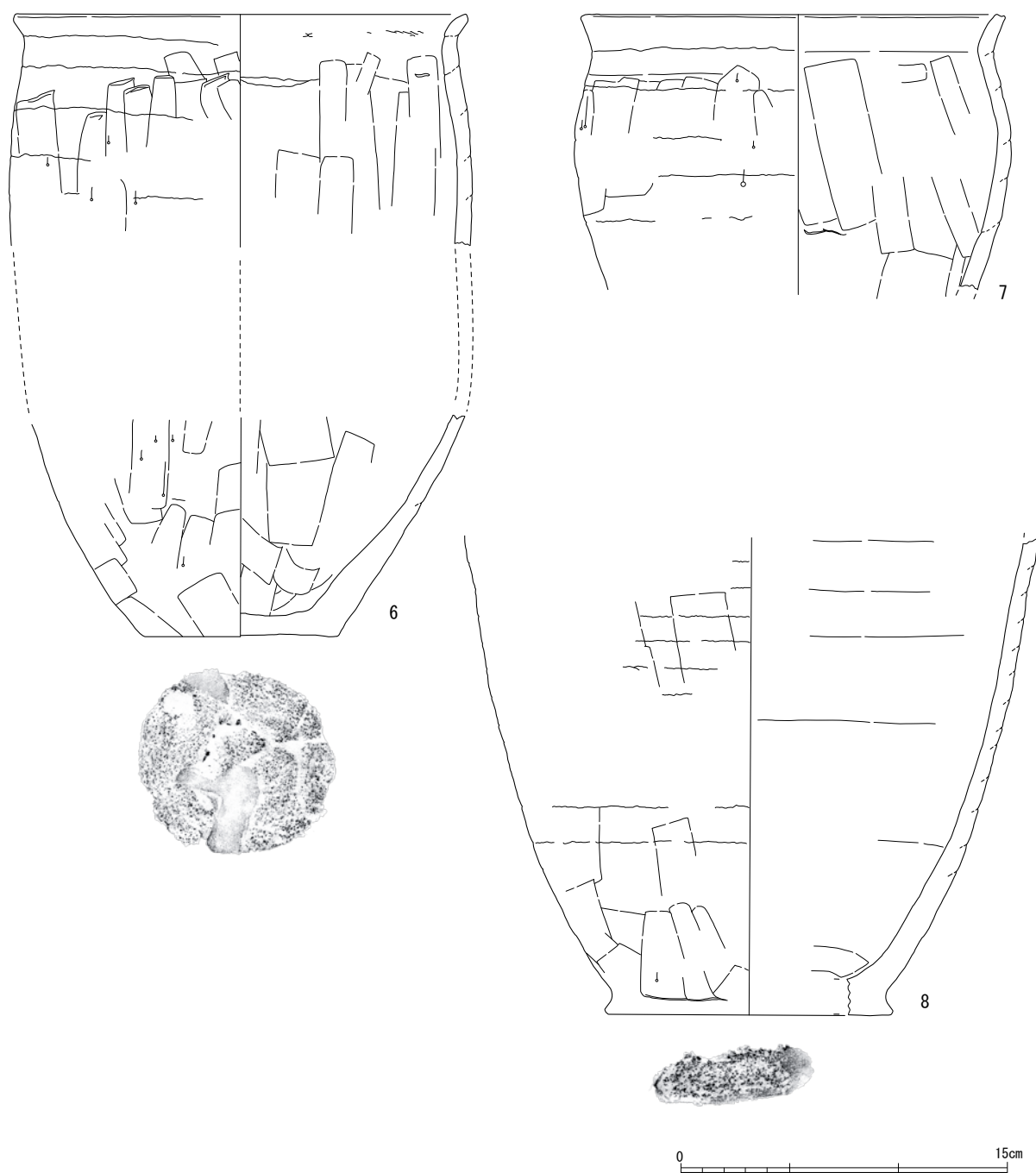


第93図 SI46カマドと出土遺物 (1)

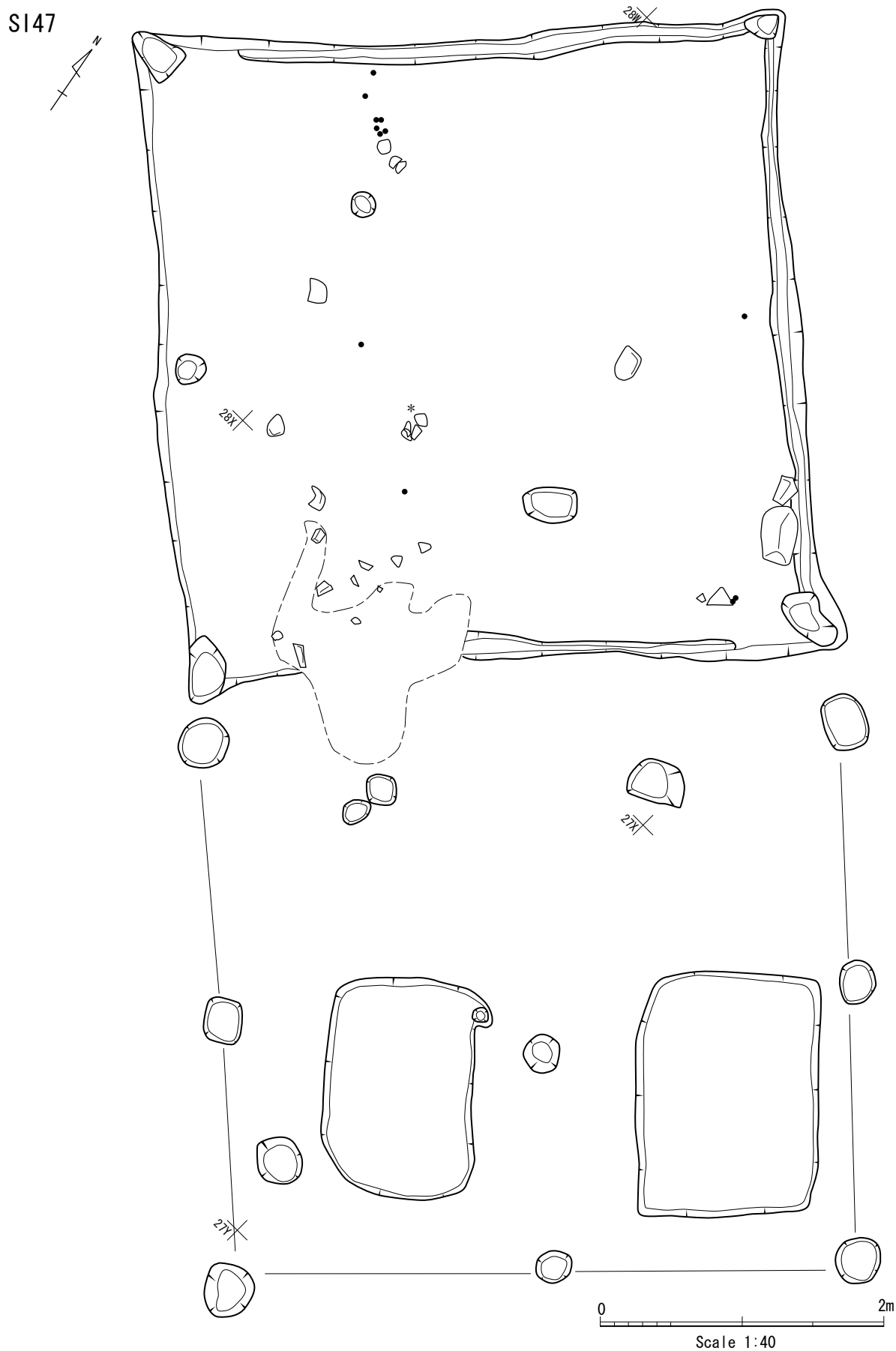
1・2 黒色

その上に焼けた粘土混じりの土となる。最下層は住居の段の上までのびており、煙道になる可能性をもつ。カマドより土師器甕（4・9）、その付近からも土師器甕が出土している。

掘立柱建物は2間（約4.2m）×2間（約4.7m）の建物である。面積は約19.7㎡。柱間寸法は南東辺がやや長い。柱掘方は径24～32cmの円形である。掘立柱建物内南東部には、建物に取り囲まれるように1.7×1.3mほどの隅丸長方形の掘り込みが2個ある。本遺構に伴うものと考えられる。



第94図 SI46出土遺物（2）

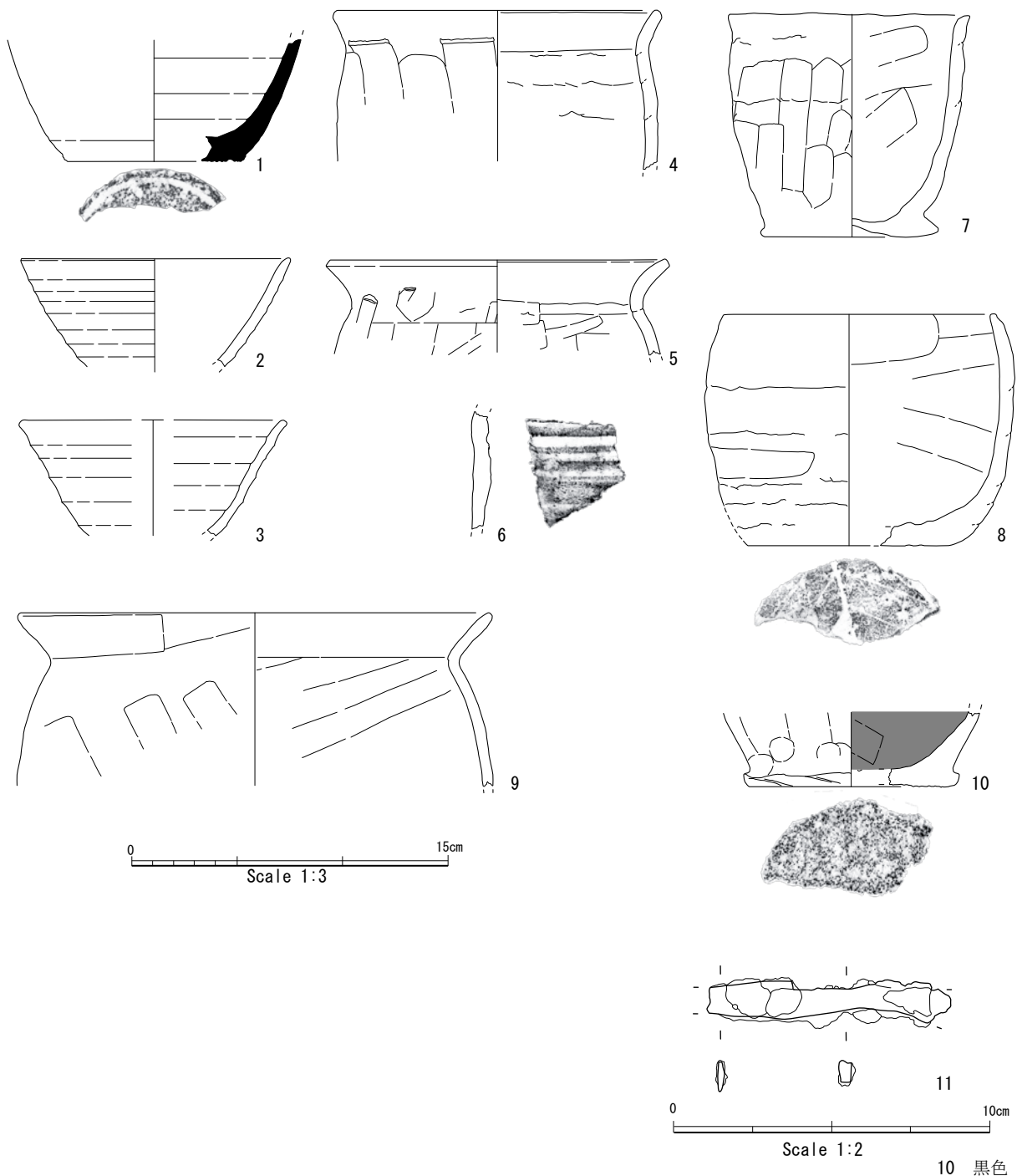


第95図 S147

遺物 出土土器は約10個体である。図化したほかにも、土師器片は多数ある。ほかに器種不明鉄製品(11)がある。

須恵器の瓶・壺類(1)は無台で、胎土は海綿骨針を含まず、粗いB群である。

土師器には埴(2・3)、小甕(5・7・10)、甕(4・6・9)、鉢(8)がある。埴はB系、ほかはA系である。埴(2・3)は底径が小さく、体部に丸味をもつ。内外面のロクロナデが比較的ていねいで、器面はなめらかである。小甕(5・7・10)はA系である。5は口縁が「く」の字状に外反し、体部は張る。7は口縁部が短く外反し、端部が若干尖る。内面は底部付近までヘラナデが入り、外面はタテ方向のハケ目である。外表面底部は砂や鉄滓が付着し、中央がくぼむ。小甕の底部(10)は



第96図 SI47出土遺物

底部砂底である。胎土は石英などを含み、粗い。短胴甕（9）は長石粒を含むものの、比較的精良な胎土である。口縁部は「く」の字状に外反し、端部が丸くなっている。鉢（8）は非ロクロの土師器で、胎土・つくりは7と共通している。口径13.0cm、器高11.0cmで、安定した大きい平底をもつ。体部内面のみかるくヨコ方向のヘラナデをし、ほかは指頭圧痕で、底部外面は木葉痕である。一部二次焼成を受けているが、ススは付着していない。

11は両端部が欠損し、刃部は認められない。重量は14 gで埋土から出土した。

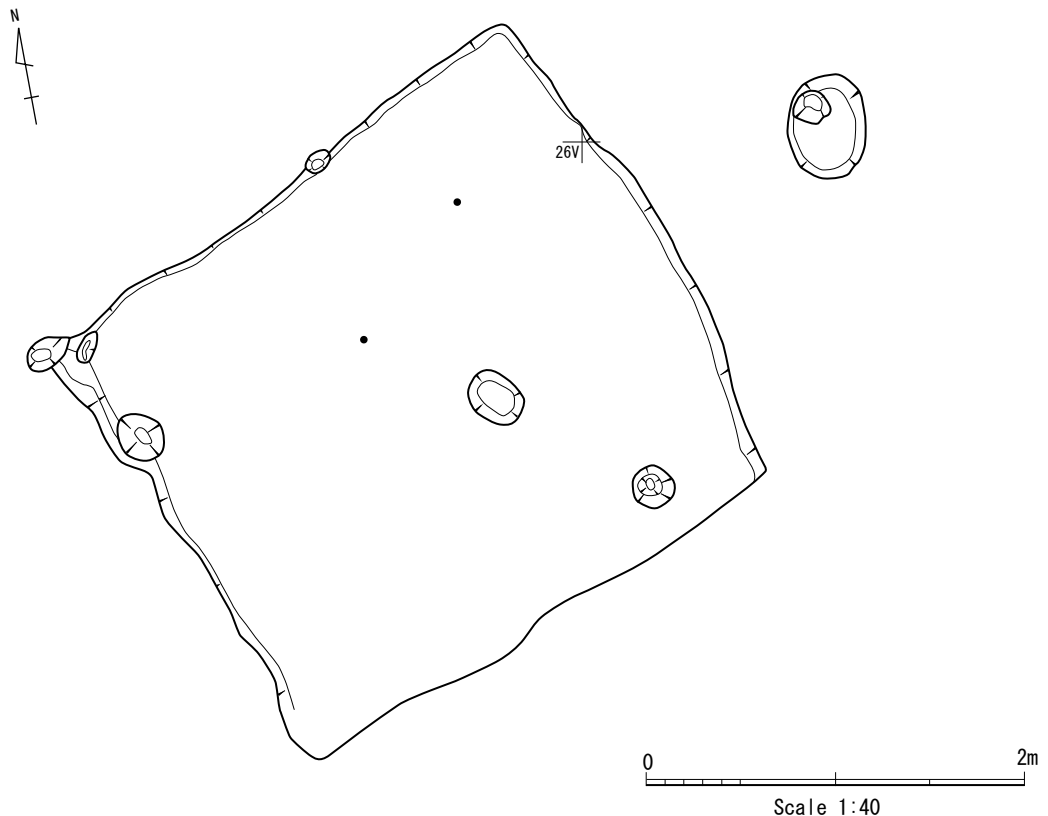
時期等 時期は出土土器よりⅡ期と考えられる。

SI48（第97図）

位置 25・26-U・V区に位置する竪穴。

遺構 主軸はN-70°-Eで、カマドはない。出土遺物がなく、住居でない可能性もある。平面形はほぼ正方形で、一辺2.6~3.0mで、面積は7.8㎡とごく小さい。床面にあるピットは規則的な配置をしていない。壁溝はない。出土土器がなく、時期は不明である。

SI48



第97図 SI48

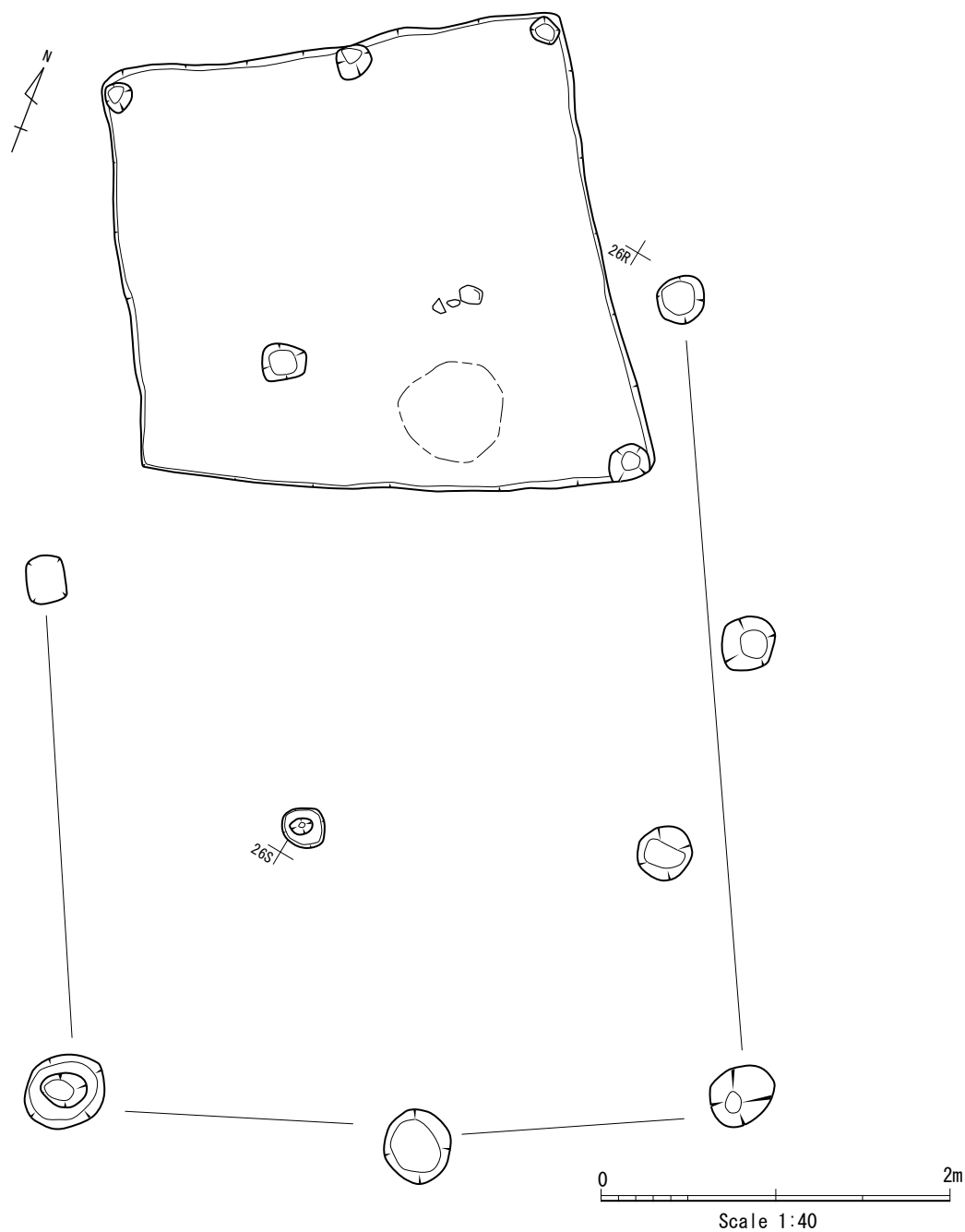
SI49 (第98図)

位置 25・26-Q・R・S区に位置する。

遺構 本遺構は竪穴住居とそれを取り囲む掘立柱建物からなる。主軸はN-20°-Wで、カマドはない。竪穴は平面形がほぼ正方形で、一辺2.7m、面積7㎡である。北西の壁際に3つと南東隅に1つの柱穴が比較的規則的に配置される。径16~24cmである。壁溝はない。

掘立柱建物は2間(4.9m)×2間(4.3m)で、面積は約21㎡。柱間寸法はそれぞれ等間とならない。柱掘方は径28~44cmである。出土土器は竪穴からの土師器2点のみである。出土土器が少なく、時期は不明である。

SI49



第98図 SI49

SI50 (第99図)

位置 26・27-R・S区の調査区際に位置し、北側は調査区外にのびる。

遺構 竪穴住居とその南東部には取り付く掘立柱建物からなる。主軸はN-20°-Wで、カマドは南東辺にある。平面形はほぼ正方形をなすとみられ、南東辺が3.2mである。南側コーナーにごく浅い2つのピットがあるが、柱穴と考えられる。壁溝はない。カマドは1.9×2.5mで、前方下部に焼けた土層、その上に粘質土がのる。土師器甕(1)が左袖付近から出土した。

掘立柱建物は1間(約3.0m)×1間(約4.5m)で、面積は約13.5㎡。柱間寸法はそれぞれほぼ等間である。柱掘方は径24~40cmである。

遺物 土器は土師器片が13点出土した。第99図1は長甕の口縁部片である。出土土器が少なく、時期は不明である。

SI51 (第100図)

位置 28・29-S・T区の調査区際に位置し、北側の一部は調査区外へのびる。

遺構 主軸はN-18°-Wで、カマドは南東辺東寄りにある。平面形はほぼ正方形をなすと推測され、南東辺は3.0mほどである。高いところに位置しているため、深さは15cm程度と浅く、上部はかなり削平されている。柱穴・壁溝はいっさいみられない。カマドは1.2×1.6mで、芯材に土師器甕を使っている。

遺物 出土土器は土師器が20片と少ない。第101図1は長甕の口縁部片で、縁端部が丸くおさまる。出土土器が少なく、時期は不明である。

SI52 (第101図)

位置 31・32・33-X・a区に位置する。

遺構 主軸はN-25°-Wで、カマドは南東辺に2つある。北西辺がやや長く7.0m、ほかは6.8mで、ほぼ正方形を呈する。面積は48㎡で、深さは30cmである。上部は多少削平されていると考えられる。壁際と床面にピットがあるが、比較的規則的に配置され、柱穴と考えられる。旧カマドとみられる部分には1.8×1.1mの範囲に、焼けた土層があり、北側に粘土混じりの土がある。新カマドは1.5×0.7mで、下層に焼けた土層があり、上層に粘質土がのる。カマド手前より土師器片が出土した。

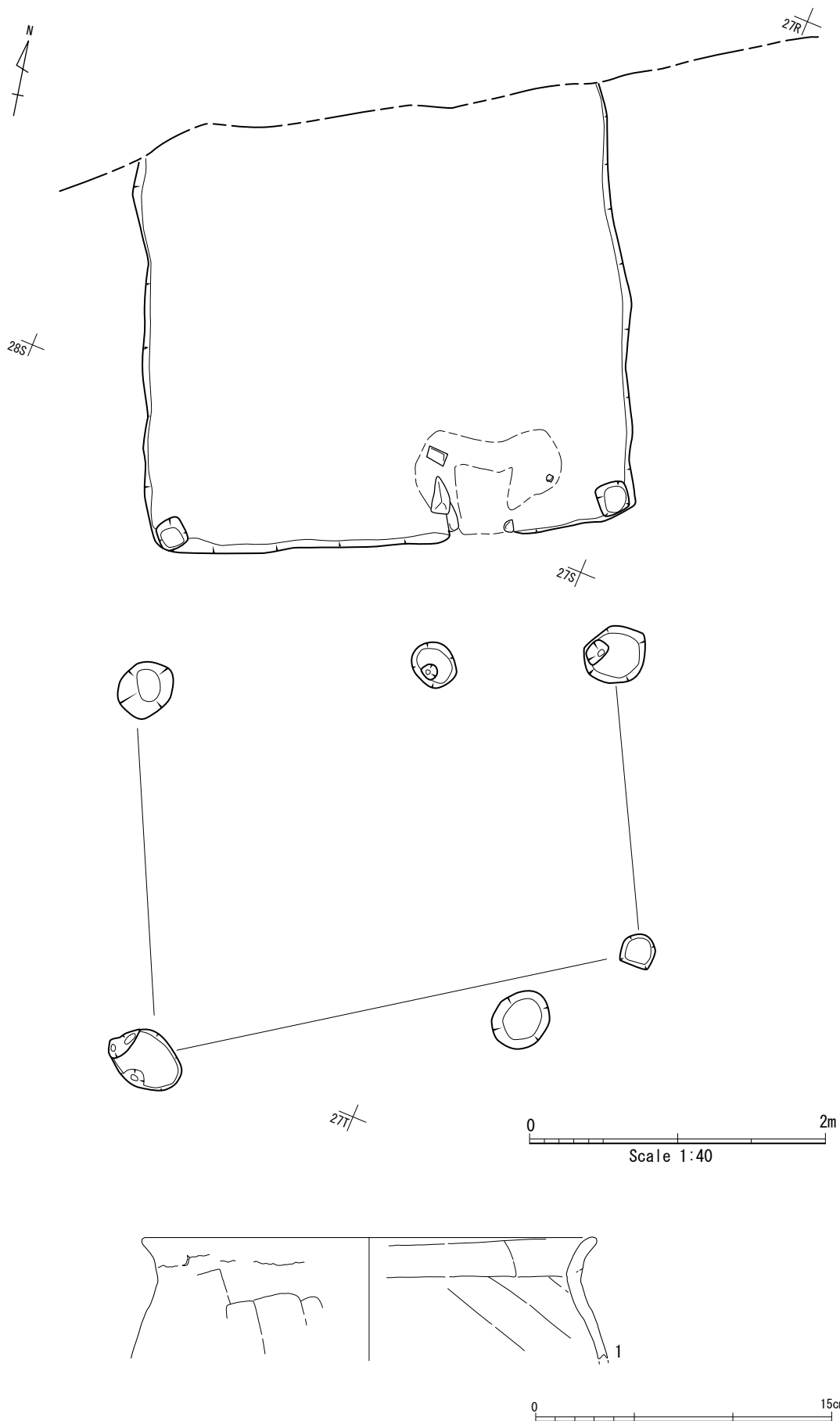
遺物 出土土器は約10個体である。第101図1は須恵器小瓶である。口縁部のみで、全体の器形はわからない。胎土A群と推定される。端部外側に引き出した面をもつ。西海老沢窯に多い長頸瓶の口縁部のつくりと同一である。小型の長頸瓶であろう。口縁端部は外側に面をもつ。2はB系の長甕で、端部に面をもつ。3は底部の大きな平底で、底部外面は砂底である。したがって、非クロロ土師器である。大きさからみて、小甕とは考えられないから、長甕であろう。

時期等 時期はⅡ期と考えられる。

SI53 (第102図)

位置 33・34・35-Z区に位置する。

S150



第99図 S150と出土遺物

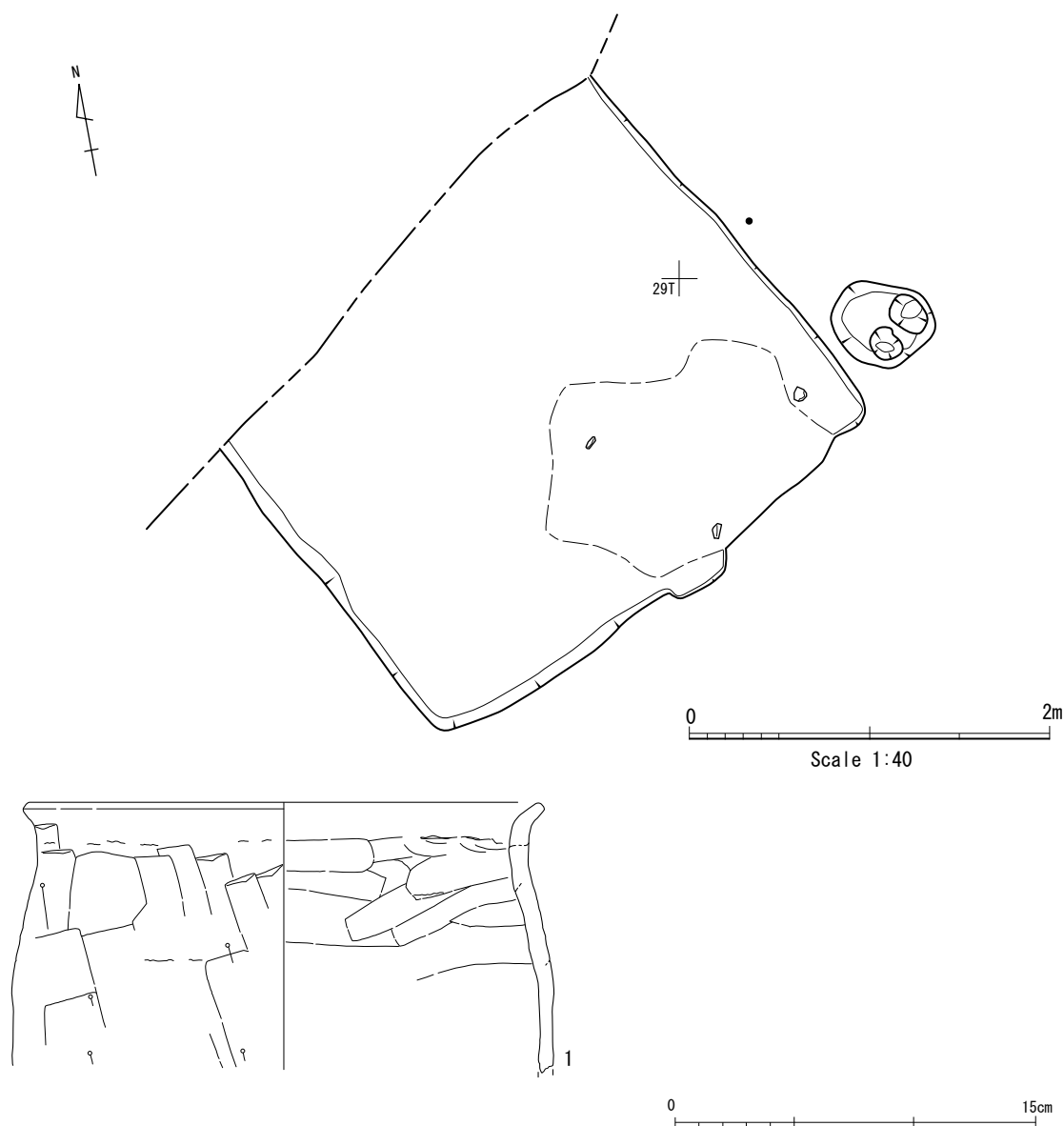
遺構 主軸はN-12°-Wで、南東側コーナー付近にカマドがある。東西方向がやや長く、4.4m、ほかは4.1mで、ほぼ正方形を呈する。面積約17.6㎡、深さ15cmで、上部は削平されていると考えられる。各コーナーには柱穴の可能性もある、深さ36~52cmのピットがあるが、その他は明確ではない。カマドは1.3×0.9mである。カマド内からは支脚と考えられる土師器小甕（2）が出土した。

遺物 出土土器はカマド付近に多く、8個体程度ある。

第103図1は埴Bで、ロクロナデは外面より内面がていねいであるが、胎土は石英・長石を含む。小甕の底部（2）は底部木葉痕である。胎土は粗い。2は3と同一個体の可能性がある。長甕（3）は「く」の字状に外反し、端部が丸くおさまるもので、つくりは粗雑である。

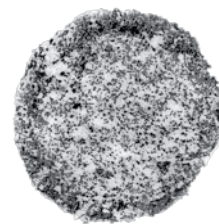
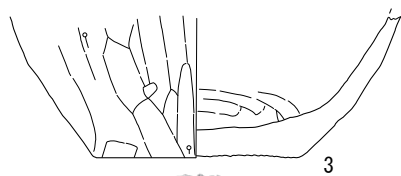
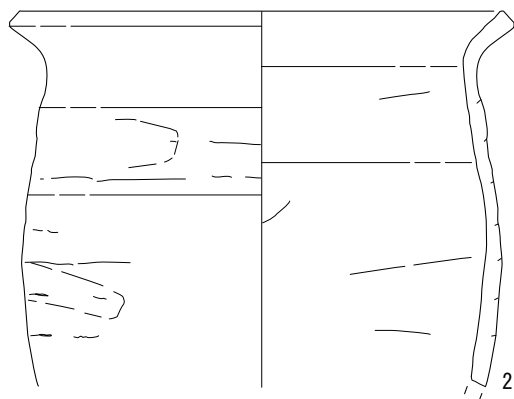
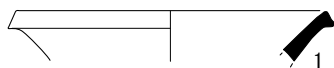
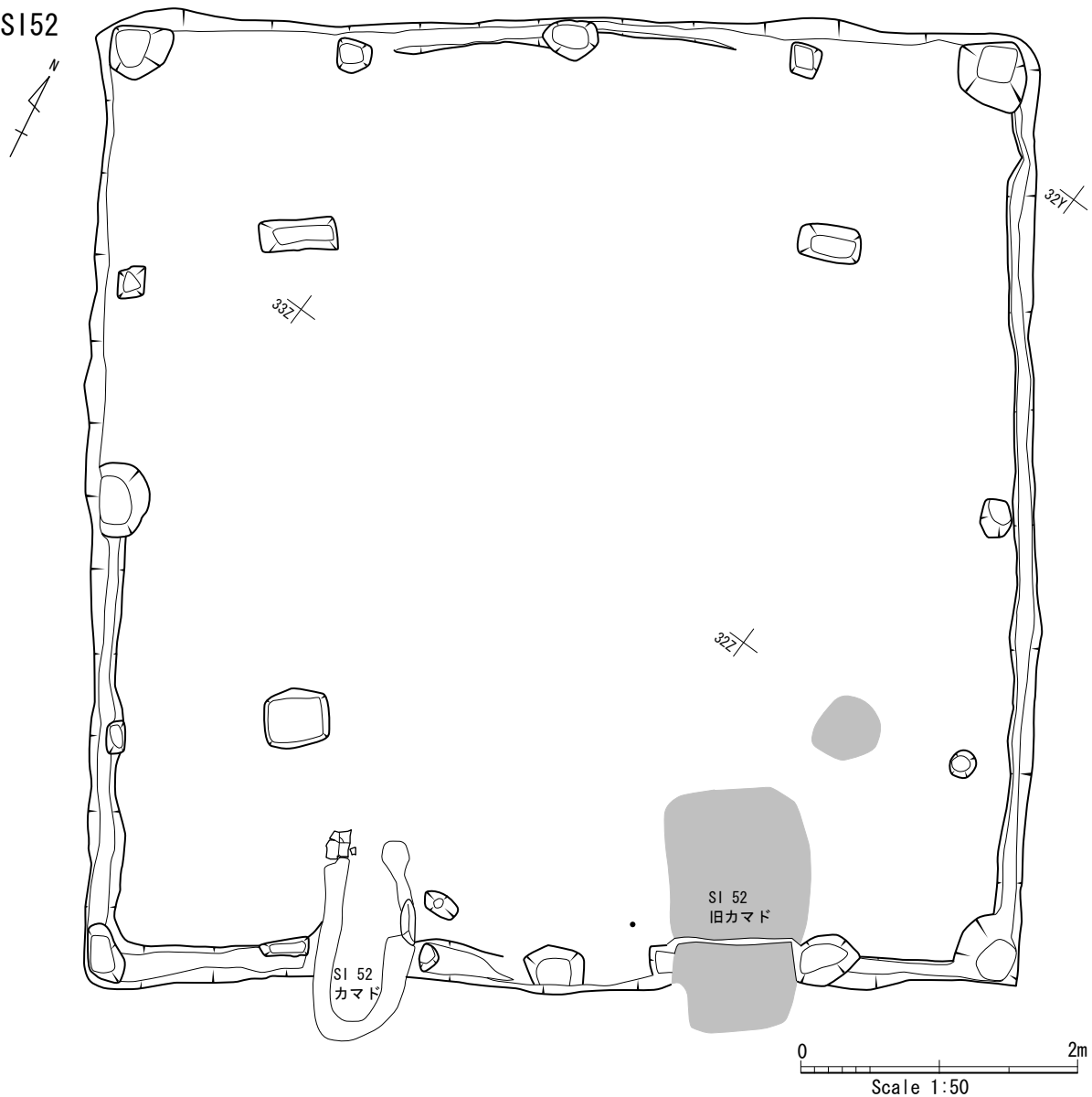
時期等 時期はI期である。

SI51



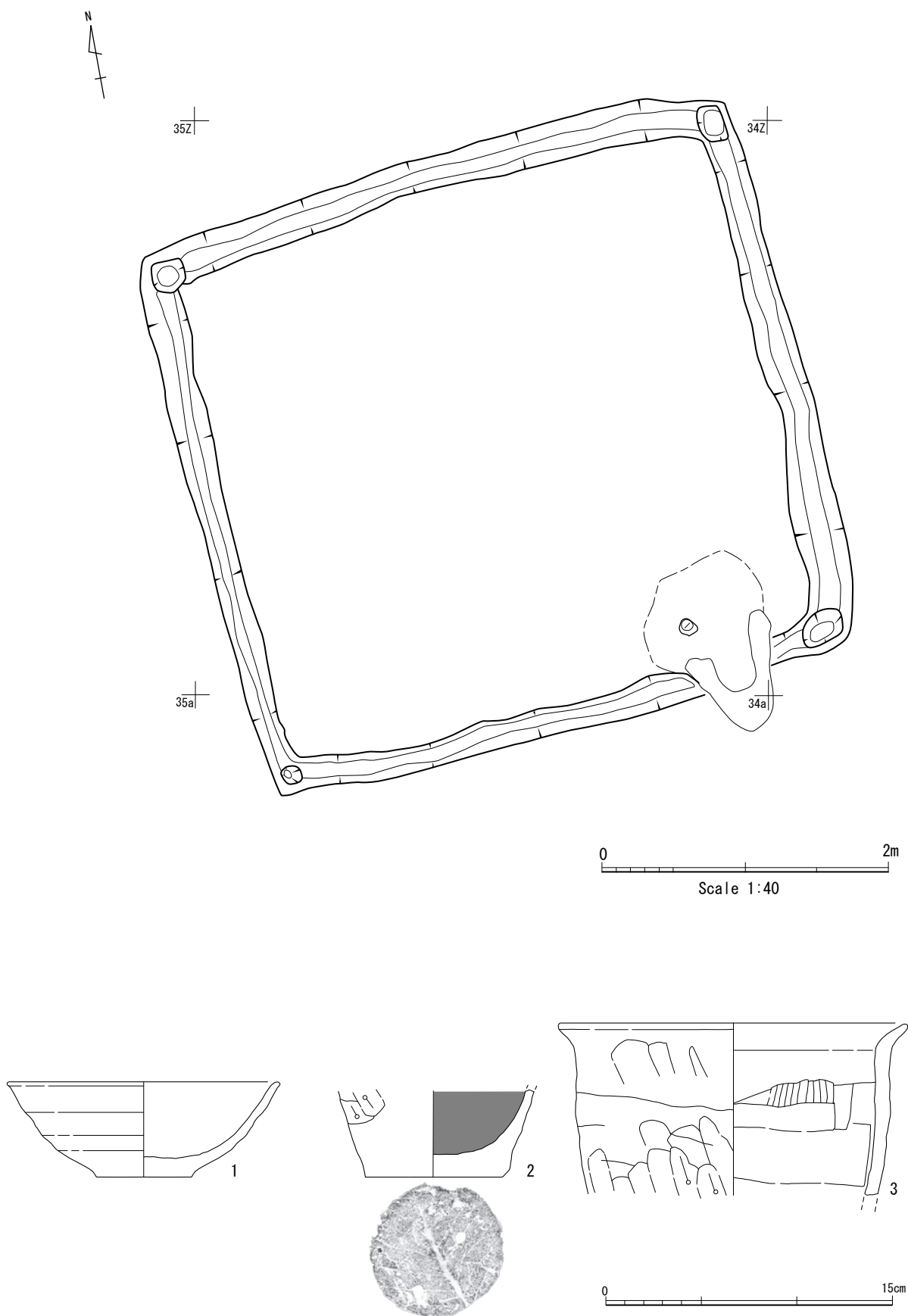
第100図 SI51と出土遺物

SI52



第101図 SI52と出土遺物

SI53



第102図 SI53と出土遺物

2 黒色

SI54 (第103・104図)

位置 41・42・43－e・f・g区に位置する。

遺構 主軸はN－23°－Wで、カマドは南東辺南寄りにある。平面形は主軸でない方向がやや長く、6.4m、ほかは5.6mである。面積は35.8㎡。深さは8cmとごく浅く、上部はかなり削平されていると思われる。柱穴は明確なものが、壁際と床面にある。カマドの部分のをぞいて、深さ8cmの壁溝がある。カマドは0.8×0.8mで、最上層に焼けていない粘質土があった。

遺物 出土土器は数個体である。実測個体のほかに、須恵器壺1点がある。また、鉄製品刀子（5）も出土した。

第103図1は須恵器壺の底部で、胎土A群である。器壁が厚く、高台は低い。2は埴Cで、体部は比較的直線的である。身がやや深い。粒子を含む粗い胎土で、焼成もやや軟質である。普遍的なロクロ土師器の埴と同じと考えられる。3・4は小甕で、3は復元口径13.6cm、4は復元口径16cmのものであるが、全体の器形・法量は不明である。3の技法はB系である。

5は平棟造りの刀子。刀部の関は不明瞭である。重量は65gで、床面から出土した。

時期等 時期はⅠ期であろう。

SI55 (第105図)

位置 44・45－e・f区に位置し、SI56により北西側をわずかに切られる竪穴住居。

遺構 主軸はN－22°－Wで、東側コーナーにカマドがある。主軸と直交する方向がやや長く、3.0m、ほかは2.6mで、長方形を呈する。面積7.8㎡でかなり小型である。深さは約30cmである。カマド脇に小さなピットが1個あるが、柱穴かどうかはわからない。壁溝はない。カマドは2.0×0.8m、高さ約30cmとやや小さく、住居の外側にのびる。カマドの前部付近の床面は浅くレンズ状にくぼむ。後方部の焼けた粘質土のなかに土師器が出土した。

遺物 出土土器は土師器片36点で、すべて南側から出土した。

第105図1は長甕の小破片であるが、特異な口縁形態である。端部は若干くぼみ、面をもつ。

時期等 時期はⅠ期と考えられる。

SI56 (第105図)

位置 44・45－e・f区の調査区際に位置する。大半は調査区外のため、南東側の一部を発掘調査した。本竪穴はSI55を切る。南東辺が重複するが、その範囲はわずかである。

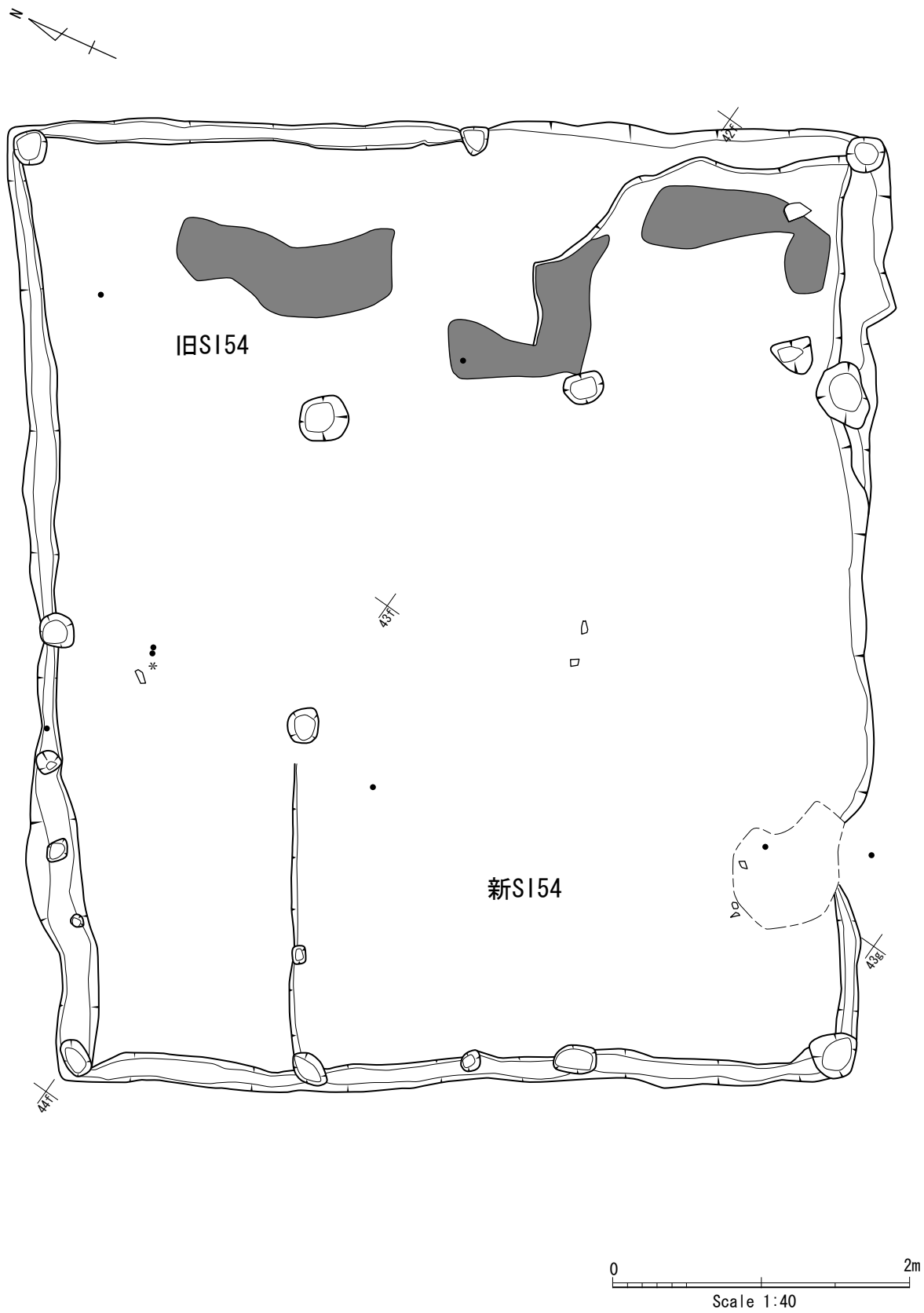
遺構 主軸はN－25°－Wで、南東辺東寄りにカマドがある。南東辺の長さは4.7mである。上部はあまり削平されていないと考えられる。壁際に沿って小さなピットがあり、柱穴と考えられる。壁溝はない。カマドは0.7×0.7mである。

遺物 出土土器は土師器片52点である。

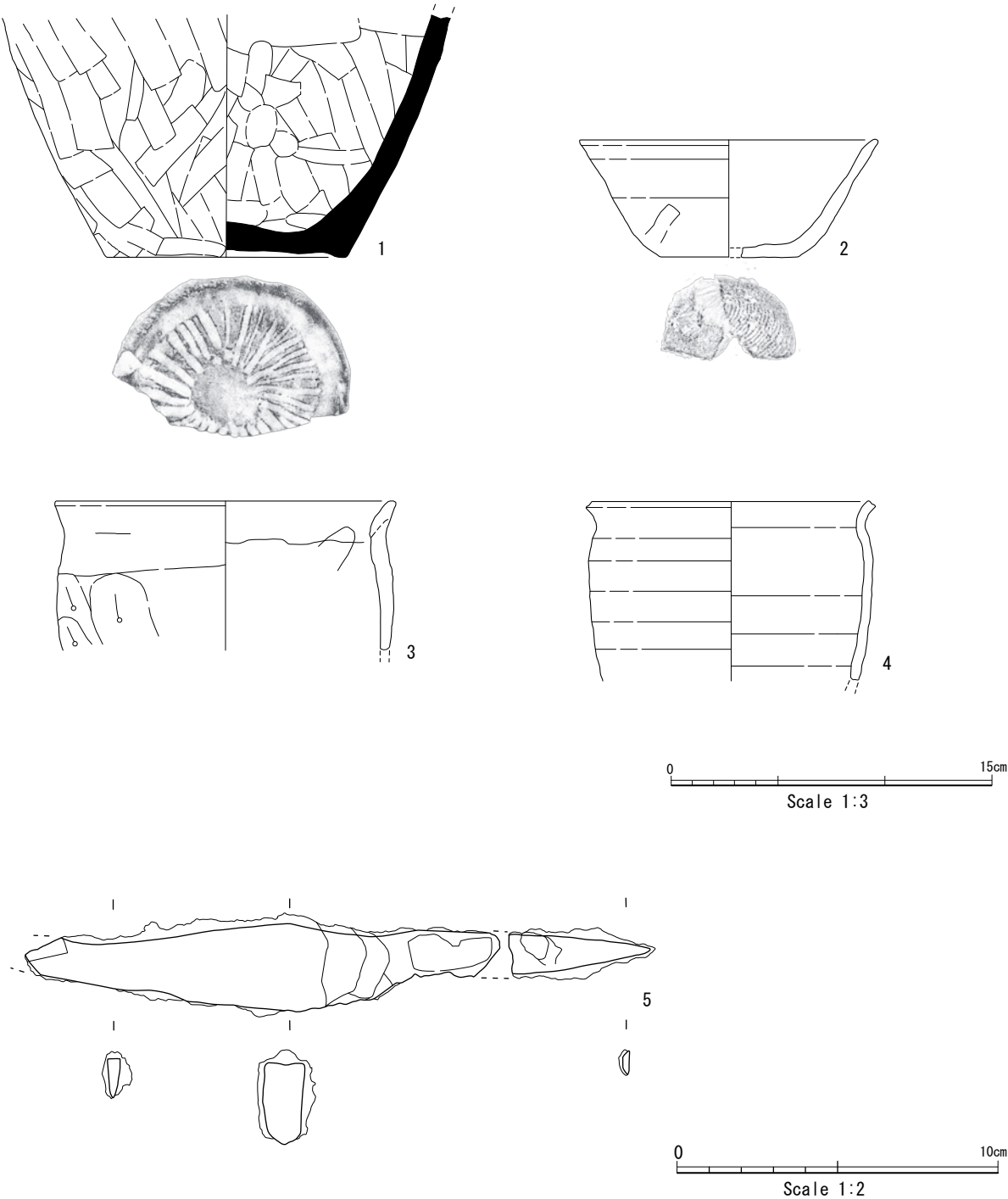
第105図2の小甕は非ロクロである。3の底部は体部外面がロクロナデされ、体部は直線的に立ち上がる。胎土は比較的精良で須恵器系ではない。4は外面にヘラナデがある。

時期等 時期はⅡ期と考えられる。

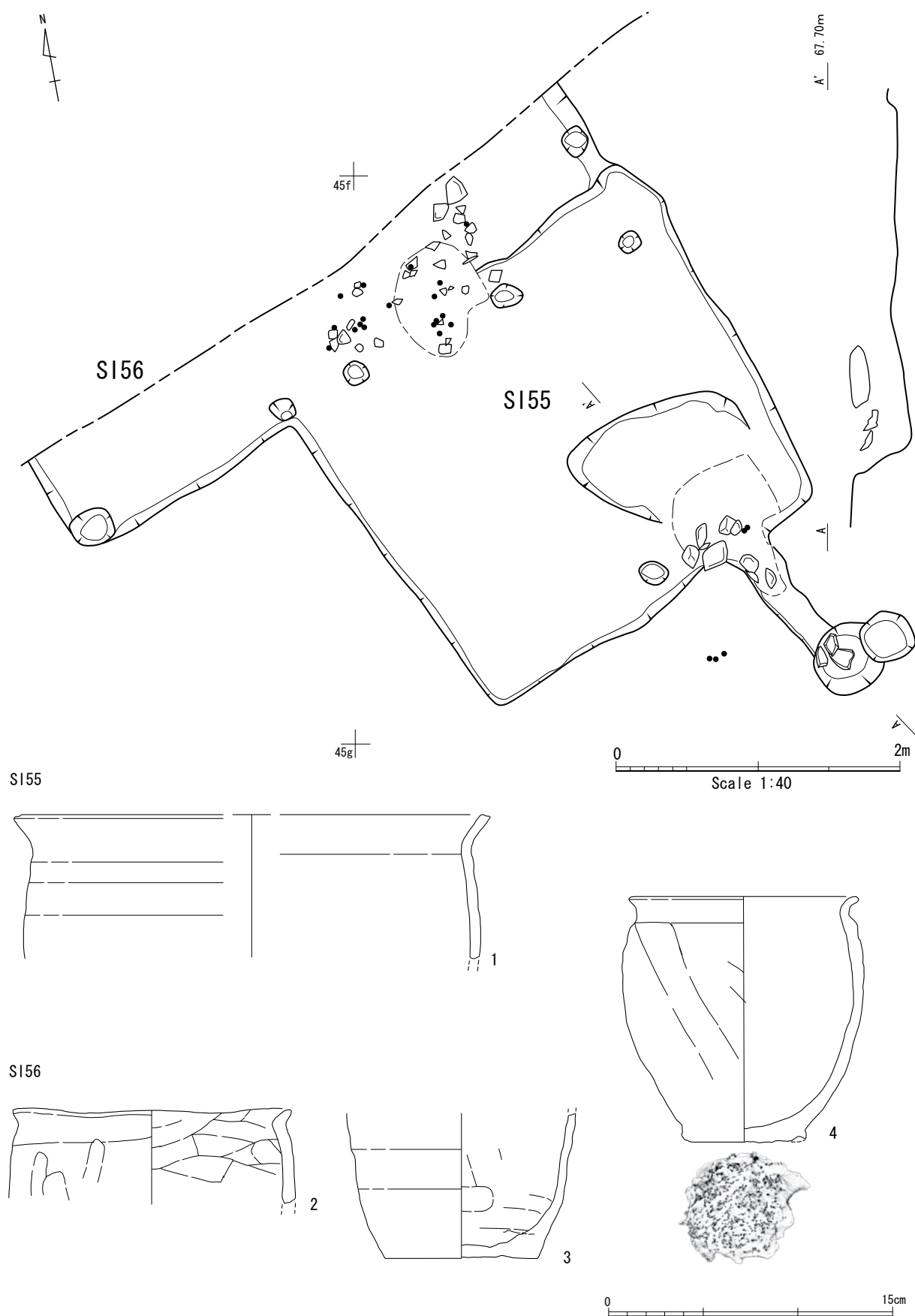
S154



第103図 S154



第104図 SI54出土遺物



第105図 SI55・56と出土遺物

SI57 (第106図)

位置 44・45－i・j 区に位置する。

遺構 主軸はN－20°－Wで、南東辺にカマドがある。東西は4.2m、南北4.3m、面積18㎡である。深さは20cmと浅く、上部は削平されていると考えられる。柱穴は四隅にみられ、壁溝が竪穴内に検出された。カマドは1.4×1.3mで、カマド内から土師器片が出土している。

遺物 出土土器は土師器片27点である。

第106図1は土師器無台碗で、体部は丸味をもち、ロクロナデがていねいで凹凸をほとんど残さない。2～4は非ロクロA系の長甕である。底部(2)は外面ほぼ不調整である。器壁が厚い。3は外面に粘土紐の接合痕をとどめるもので、よくあるタイプである。外面はタテ方向の弱いヘラケズリ、内面はヨコ方向の強いヘラナデと思われる。黄色っぽい色調で、胎土は丸味をもつ小礫を多く含んでいる。4は内面にヨコ方向のナデで口縁部のヨコナデが弱い。口縁端部は丸くおさまリ、体部は直線的にのびる。比較的粗雑なつくりで3と類似する。

時期等 時期はI期頃かと考えられる。

SI58 (第107図)

位置 37・38－h・i・j 区に位置する。2軒の竪穴が重複しているが、建替えをして拡張したものとみられる。

遺構 主軸はN－22°－Wで、カマドは東辺北寄りにある。旧竪穴は一辺4.4～4.8mで、平面形はほぼ正方形を呈する。面積は21㎡で、小型である。深さは約60cmである。柱穴はない。幅15～40cm、深さ約10cmの壁溝がある。

新竪穴は、主軸と直交する方向が長く、3.3m、主軸方向が3.2mで、平面形はほぼ正方形を呈する。面積は約10.5㎡である。深さは約40cmである。カマドのある北東辺をのぞいて、幅15～30cm、深さ約10cmの壁溝がある。北西側コーナーのピットは柱穴の可能性をもつ。カマドは1.2×0.9mで、あまりよく残っていない。上部が焼けた粘質土で、その下は焼けた土層である。カマドから土師器片が出土しているが、出土量は多くない。埋土最上層は黒褐色土層である。床面直上の層は、十和田a火山灰二次堆積層とみられる乳白色火山灰層である。

遺物 出土土器は土師器片8点である。

第107図1は皿で、推定口径11.8cm、器高3.3cmである。口縁部はやや外反する形態をとる。大きさはSI20出土の12とほぼ同じである。長甕(2)は内面がナナメ方向のナデ、外面がタテ方向のヘラケズリで、口縁部のヨコナデも強いA系2類である。口縁端部は面をもつ。やや硬質の焼成である。

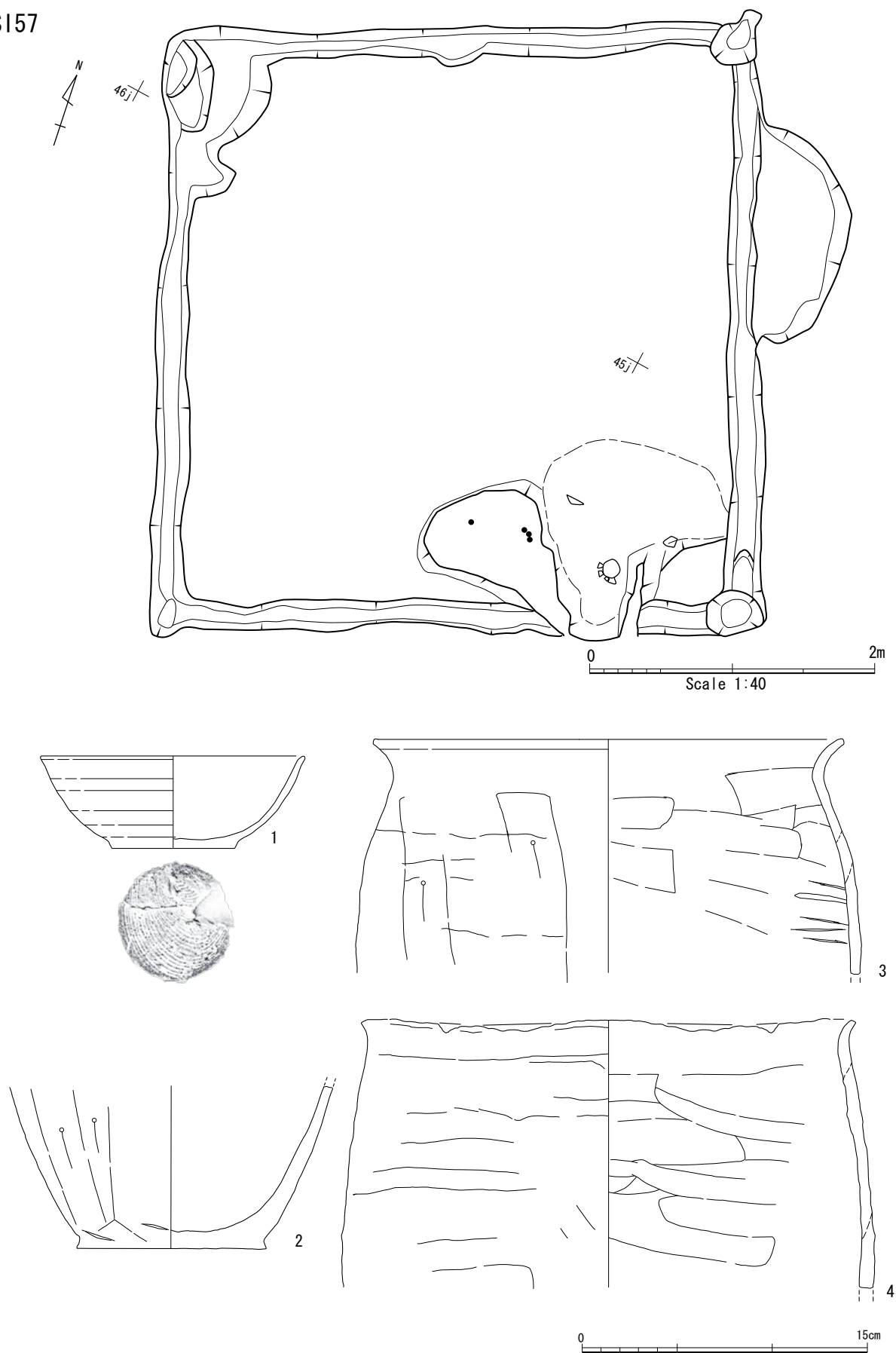
時期等 時期は新竪穴の床面直上より、十和田a火山灰とみられる乳白色火山灰が検出されており、I期と思われる。

SI59 (第108図)

位置 20・21－W・X区に位置する竪穴である。

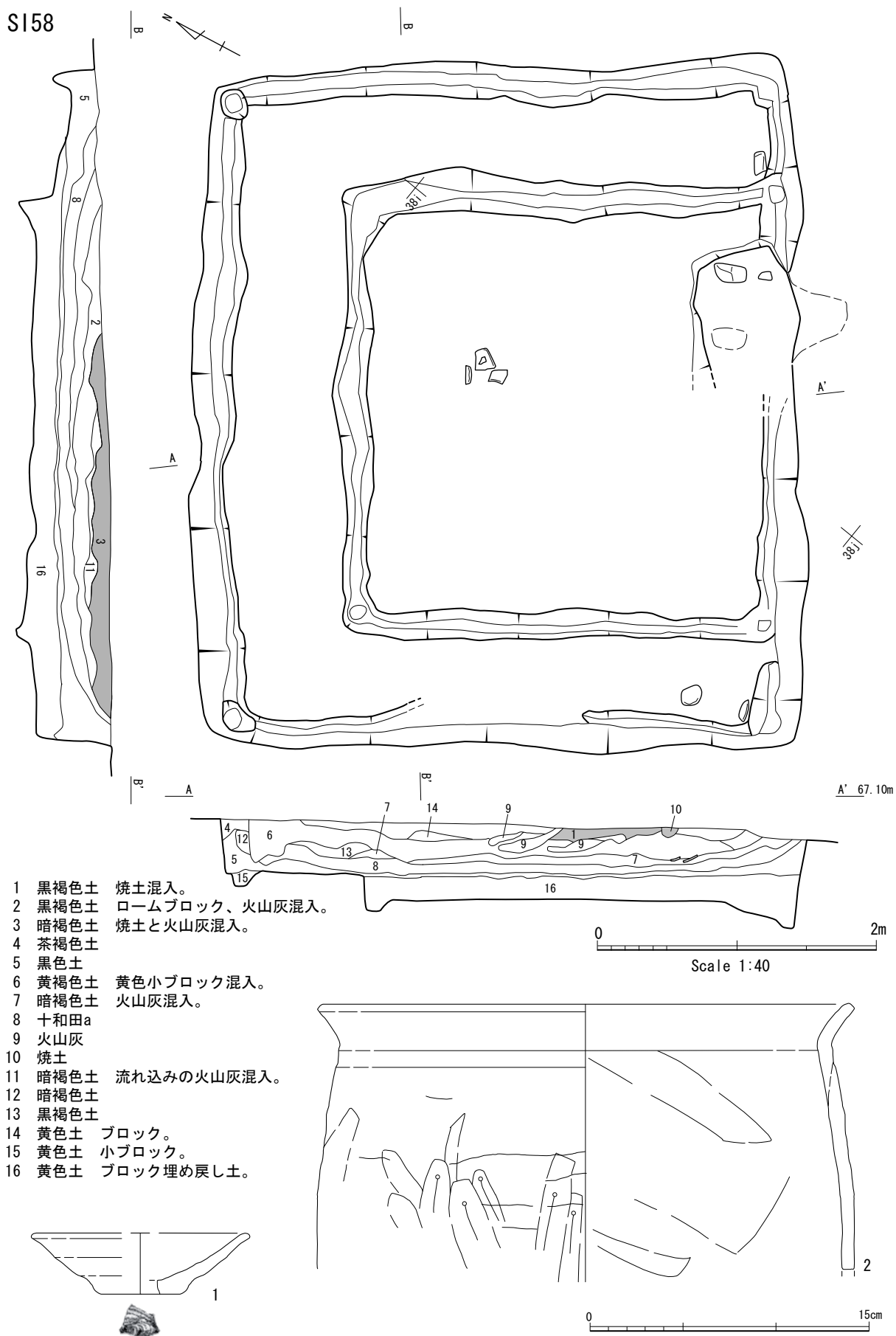
遺構 主軸はN－28°－Wで、北部が一部途切れるが、正方形のプランであろう。面積は6.2㎡と推定され、深さ14cmである。壁溝はない。北西のコーナー付近にはカギ状にやや太い溝(深さ数cm)があ

S157



第106図 SI57と出土遺物

S158



第107図 S158と出土遺物

る。壁はほぼ垂直にたち上がる。柱穴は比較的明瞭に把握される。南東・北東のコーナーに深さ22cm以上の柱穴が2個ずつある。カマドはない。

遺物 土師器3点が出土した。第108図1は無台碗で、丸味をもち、若干身が深い。

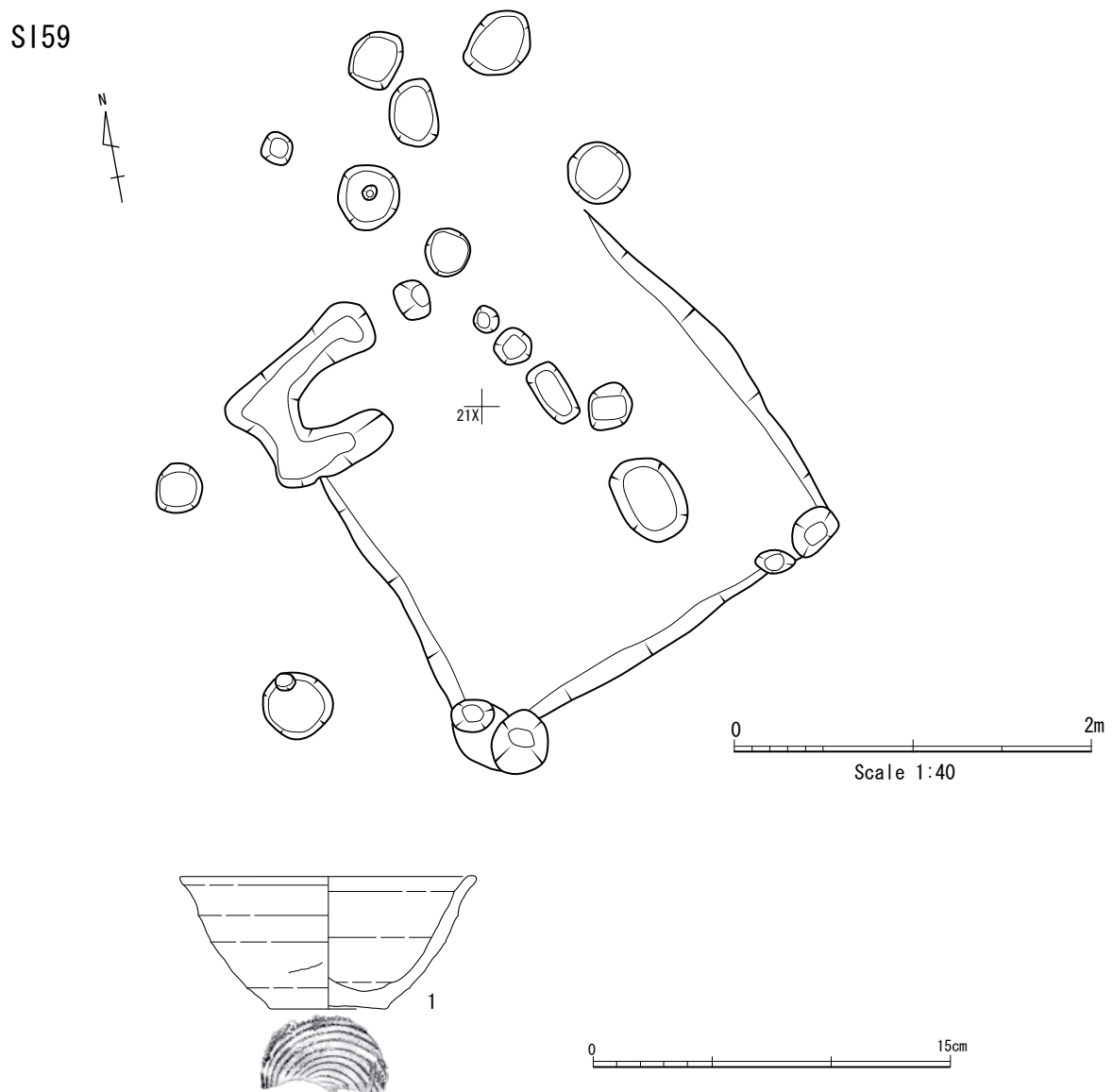
時期等 時期はI期と考えられる。

SI60 (第109図)

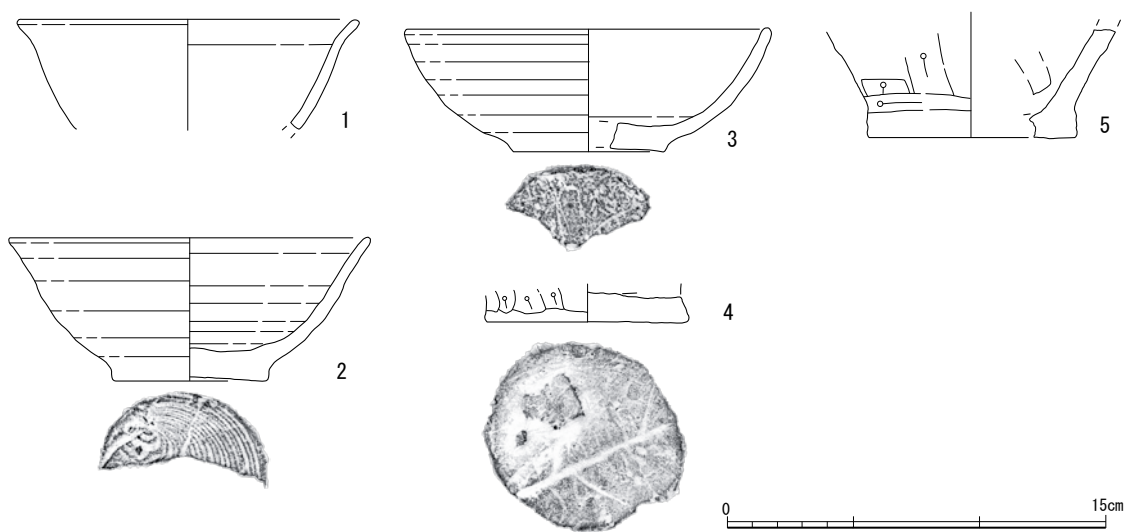
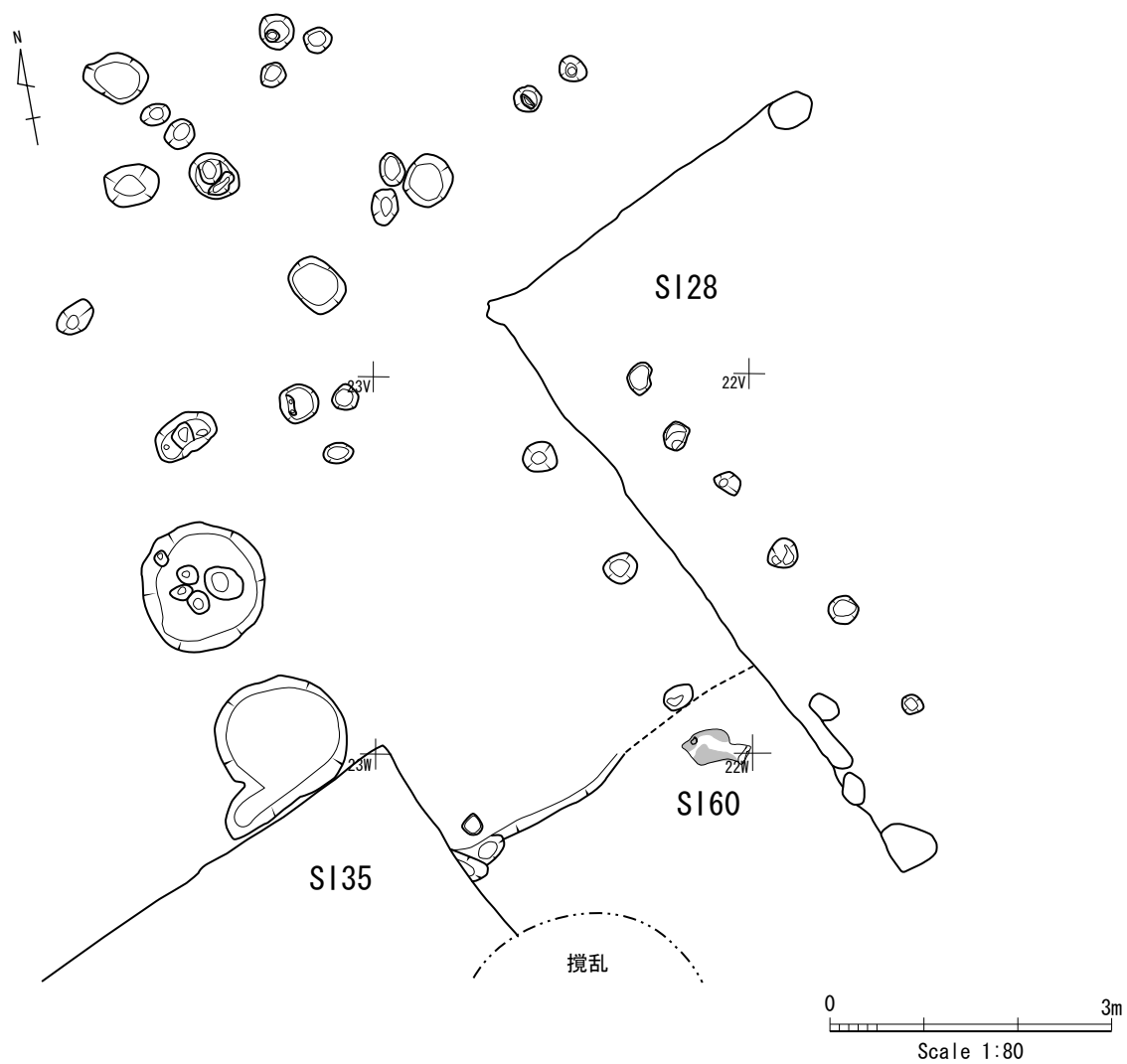
位置 22-w区に位置し、SI28とSI35に切られる竪穴住居。大部分をSI28とSI35に切られており、遺構の全容は不明である。

遺構 主軸はN-25°-Wで、カマドは南辺にある。ピットはあるが、柱穴かどうかはわからない。壁溝はない。カマドは0.5×0.6mである。

遺物 出土土器は少量である。



第108図 SI59と出土遺物



第109図 SI60と出土遺物

第109図1は土師器埴である。底径が小さく、体部に丸味をもつものである。内外面のロクロナデは比較的ていねいで、器面はなめらかである。2・3は無台埴である。2は相対的に身が深く、口縁部はあまり外反しないものである。3は体部に丸味をもち、身がやや浅い。手法はともに共通しており、ロクロナデは内面のほうが外面より相対的にていねいであり、器面が平滑に仕上げられている。4・5は小甕の底部。4は外面木葉痕である。5は外面下端にかかるいへラケズリを行う。

時期等 時期はⅠ期と考えられる。

SI61 (第110図)

位置 14-u区に位置する。

遺構 大半が攪乱に壊されており、カマドを確認したのみで、遺構の全容は不明である。出土土器は土師器片21点である。

時期等 出土土器から10世紀の遺構と考えられる。

SI63 (第110図)

位置 24・25-h・i区の南東際に位置する竪穴で、北側のごく一部を調査したにすぎない。

遺構 ごく浅い(約10cm)。主軸はN-23°-Wで、カマドは検出されていない。一辺6.5mで、比較的大型である。ピットは3個あり、北西コーナーのものは柱穴と思われる。幅15~30cm、深さ約10cmの壁溝がある。土師器2点が出土した。詳細な時期は不明である。

SI64 (第57・111図)

位置 12-Q区に位置する。SI22を切る。SD20と重複するが、新旧関係は確認していない。

遺構 竪穴と掘立柱建物からなる。ただし掘り込みが明確でなく、床面も平坦でないため、SI22から独立した竪穴住居でない可能性もあるが、カマドと思われる焼土もあり、一応、竪穴住居としてあつかう。床面は深さ約5cmである。主軸はN-20°-Wで、カマドと思われる焼土は南東辺にある。主軸方向が2.9m、ほかが3.6m、面積は10.4㎡で比較的小型である。柱穴は四隅にあり、南東辺をのぞいて、幅16~32cmの壁溝がある。焼土のなかには土師器片が入っていた。その他に出土土器はほとんどない。

掘立柱建物は桁行3間(約4.2m)×梁間2間(約4.2m)で、面積は約17.6㎡。柱間寸法はそれぞれ等間とならない。柱掘方は径24~48cmである。

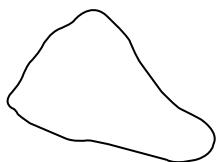
遺物 住居そのものは明確ではないものである。土師器と鉄製品が出土した。

第111図1は小甕で、内外面にもヘラナデである。口縁部内面にはよく炭化物が付着している(図版53-6)。2はにぶい黄橙色を呈する。

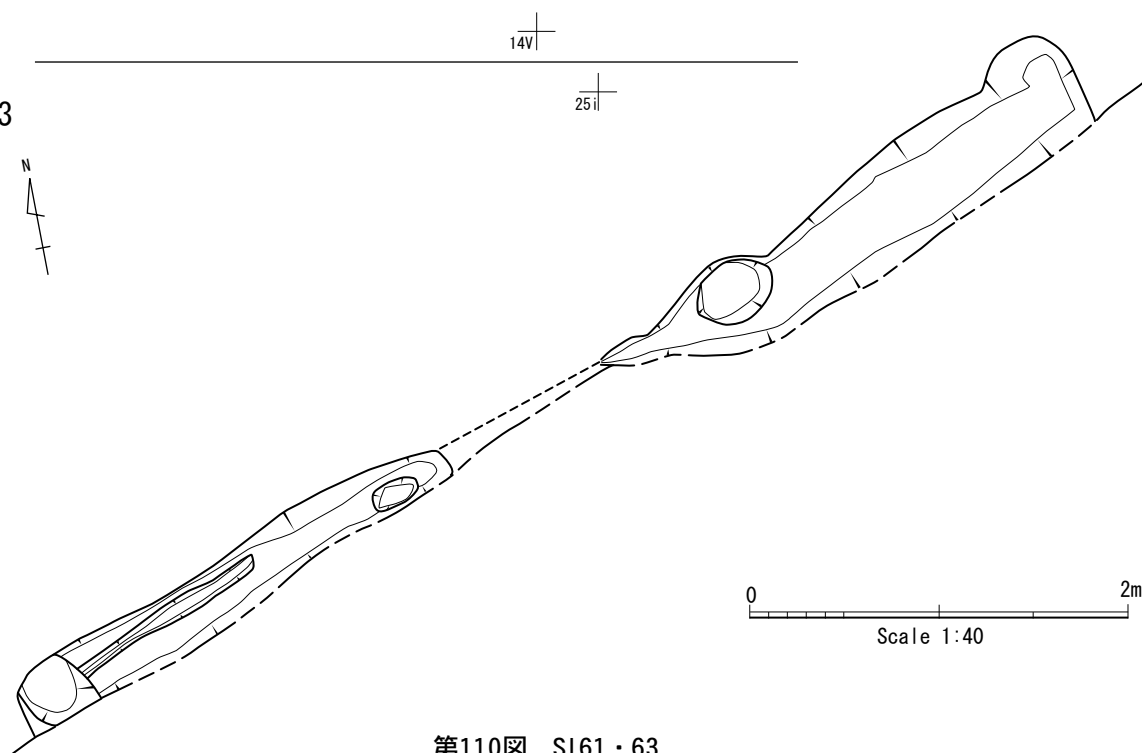
3は器種不明鉄製品で、断面が曲がっているが、刃部は認められない。重量は11gで、カマドから出土した。

時期等 時期はⅡ₂期であろう。

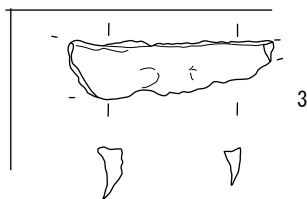
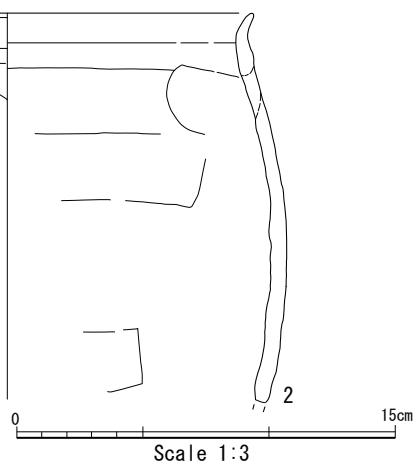
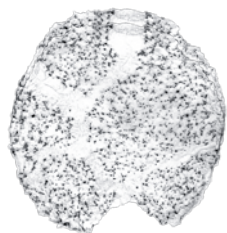
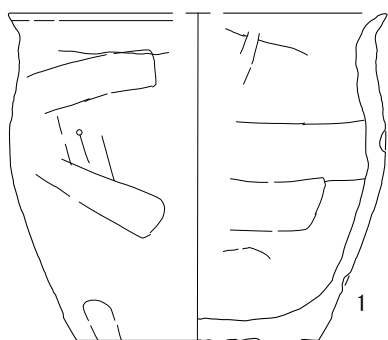
SI61カマド



SI63



第110図 SI61・63



第111図 SI64出土遺物

SB 1 (第112図)

位置 8・9-H・I区、SI6の北側に位置する2間(約3.8m)×2間(約3.8m)の総柱の掘立柱建物。

遺構 主軸はN-14°-Wで、面積は約14.4㎡である。柱間は2間ほぼ等間隔である。柱穴は直径約40cmの円形に近いもので、柱痕跡はない。平安時代の高床式倉庫と考えられる。出土土器がなく、時期は不明である。

SB 2 (第112図)

位置 5・6-K・L区に位置する3間(約4.4m)×2間(約2.5m)の掘立柱建物。

遺構 主軸はN-50°-Wで、平面形は長方形を呈する。面積は約11㎡である。南側の柱間はほぼ等間隔である。柱掘方は円形に近く、径28～44cmである。平安時代の掘立柱建物と考えられる。出土土器がなく、時期ははっきりしない。

SB 3 (第113図)

位置 9・10-N・O・P区に位置する2間(約4.0m)×2間(約3.8m)の総柱の掘立柱建物。

遺構 主軸はN-21°-Wで、面積は約15㎡である。柱間寸法はほぼ等間で、柱掘方は径40～48cmである。出土土器がなく、時期は明確ではない。

SB 4 (第113図)

位置 14・15-P区に位置する。SI18・SD16と重複するが、新旧関係は不明である。

遺構 主軸はN-29°-Wである。SI18・SD16と重複し、南側はよくわからないが、南東・北西2間(約3.4m)×北東・南西2間(約3.5m)の可能性がある。面積は約12㎡で、平面形はほぼ正方形をなすものと推測される。柱間寸法はほぼ等間である。柱掘方は径24～44cmである。出土土器がなく、時期は明確ではない。

SB 5 (第114図)

位置 16・17-N・O区に位置する2間(約3.5m)×2間(約3.5m)の総柱の掘立柱建物。

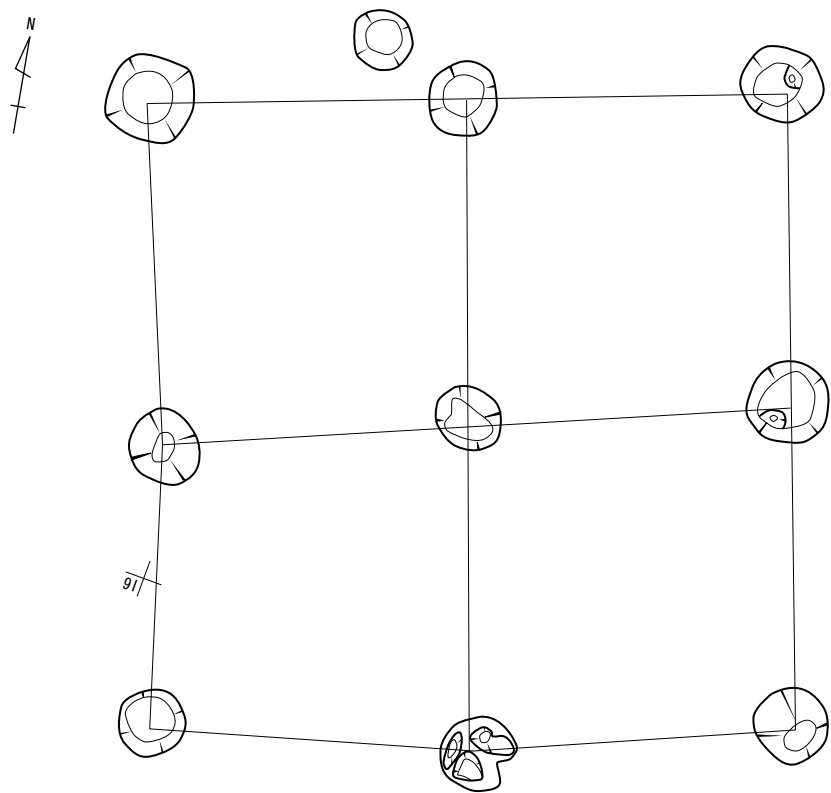
遺構 時期は平安時代と考えられる。主軸はN-35°-Wである。面積は約12㎡、柱掘方は径24～44の円形ないし楕円形である。柱間寸法は等間にならない。出土土器がなく、詳細な時期は不明である。

SB 6 (第113図)

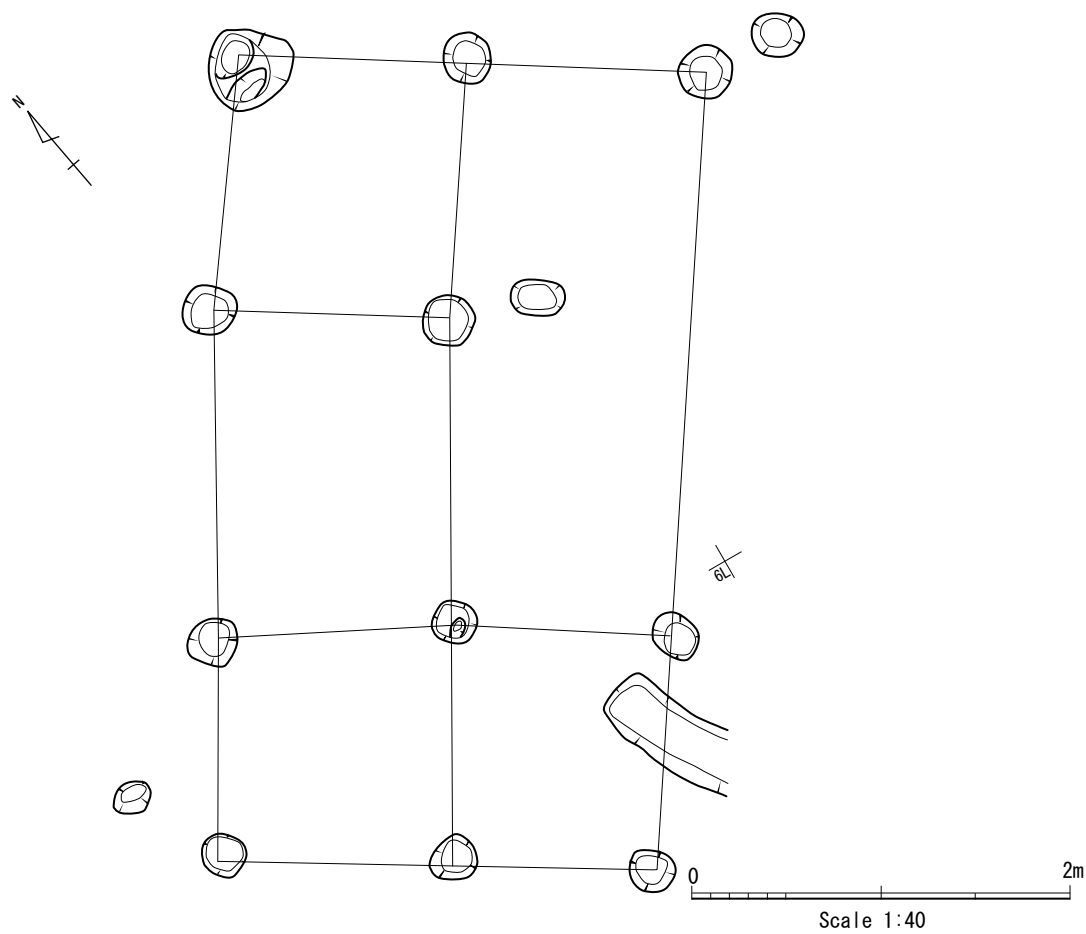
位置 17・18-N・O区に位置する平安時代の総柱の掘立柱建物。SB7と重複するが、新旧関係は不明である。これらは規模・方向が同じことから、いずれかを建替えたものと思われる。

遺構 2間(3.4m)×2間(3.4m)の総柱で、南東から北西方向の柱間が短い。この短軸方向はN-35°-Wである。面積は11.5㎡である。柱穴掘方は径44～56cmである。柱間寸法は等間にはならない。出土土器がなく、詳細な時期は不明である。

SB1

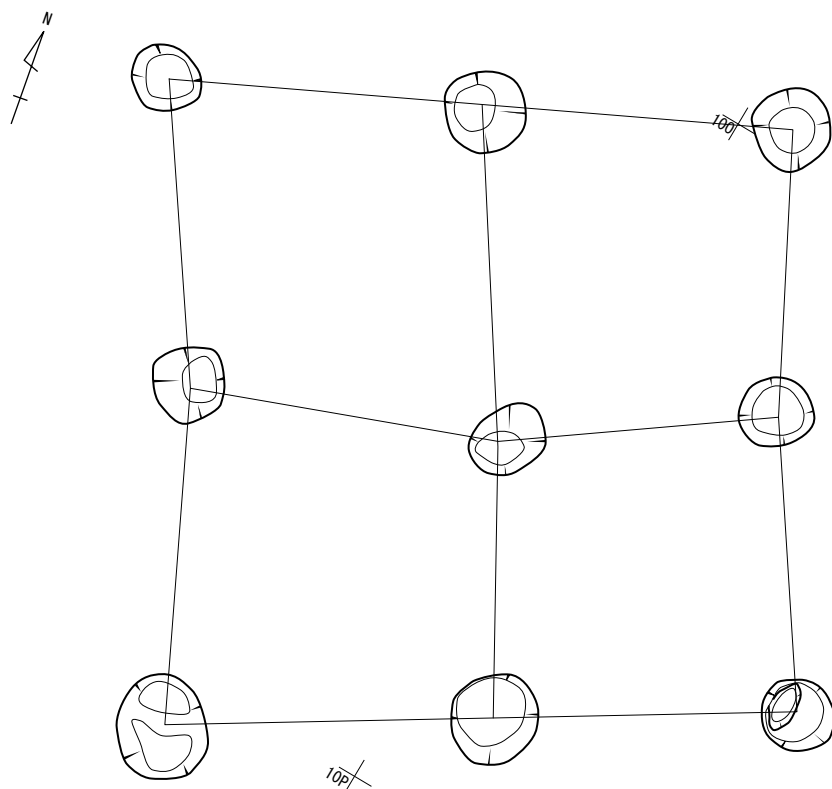


SB2

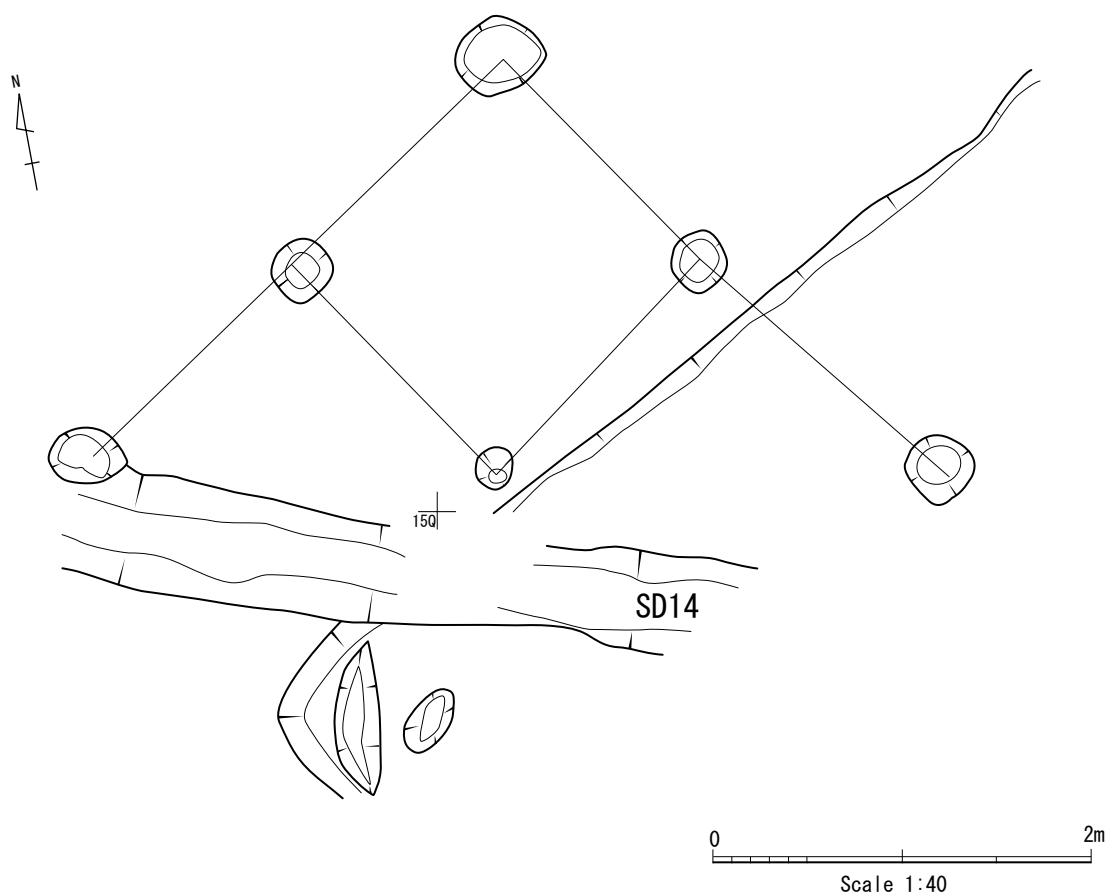


第112図 SB1・2

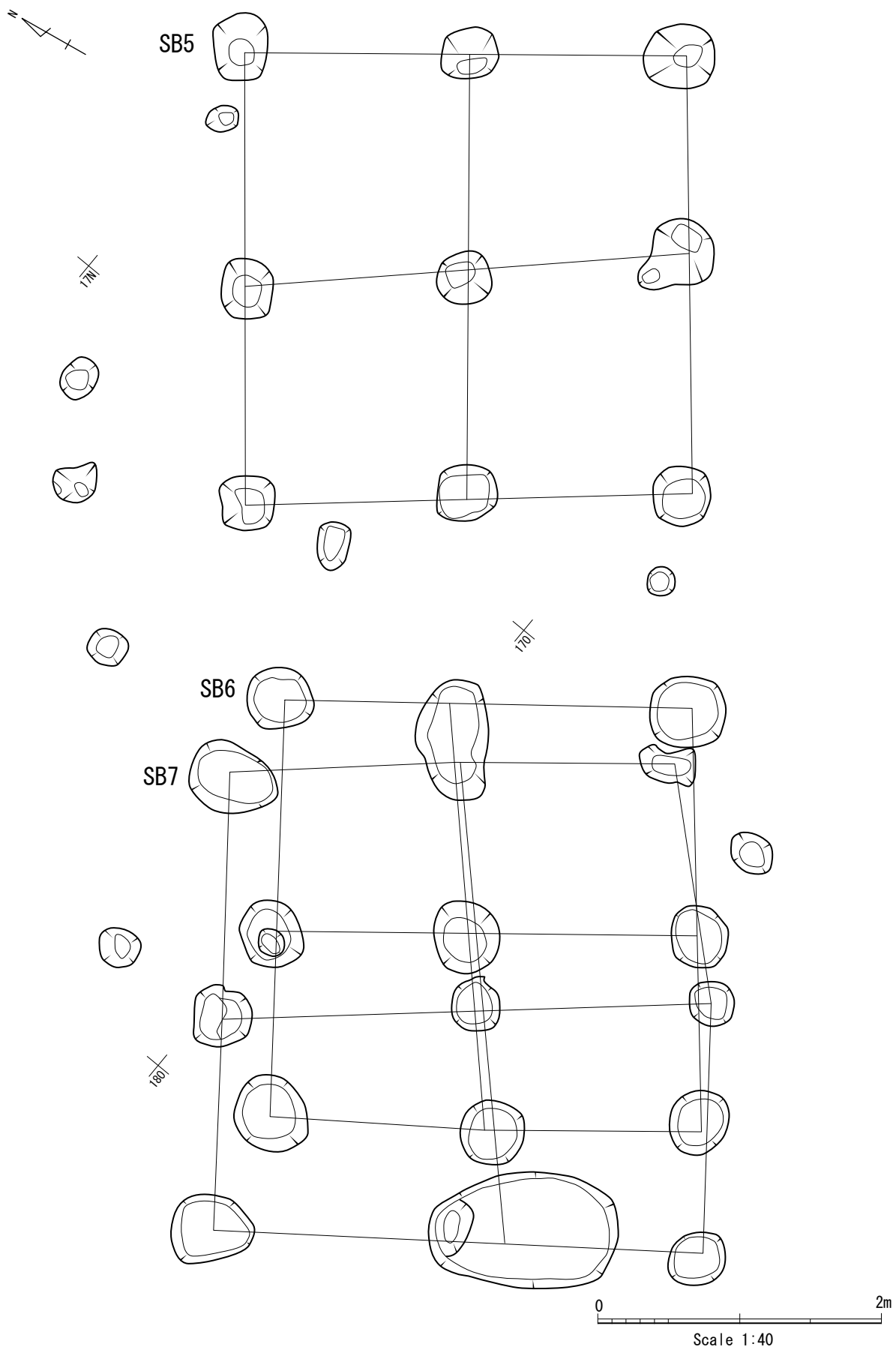
SB3



SB4



第113図 SB3・4



第114図 SB5～7

SB 7 (第114図)

位置 17・18-N・O区に位置する平安時代の総柱の掘立柱建物。SB 6と重複するが、新旧関係は不明である。

遺構 2間(4.0m)×2間(4.0m)の総柱で、南東から北西方向の柱間が短い。この短軸方向はN-27°-Wである。面積は13.3㎡である。柱間寸法は等間にはならない。柱掘方は径32~136cmの不整円形である。出土土器がなく、詳細な時期は不明である。

SB 8 (第115図)

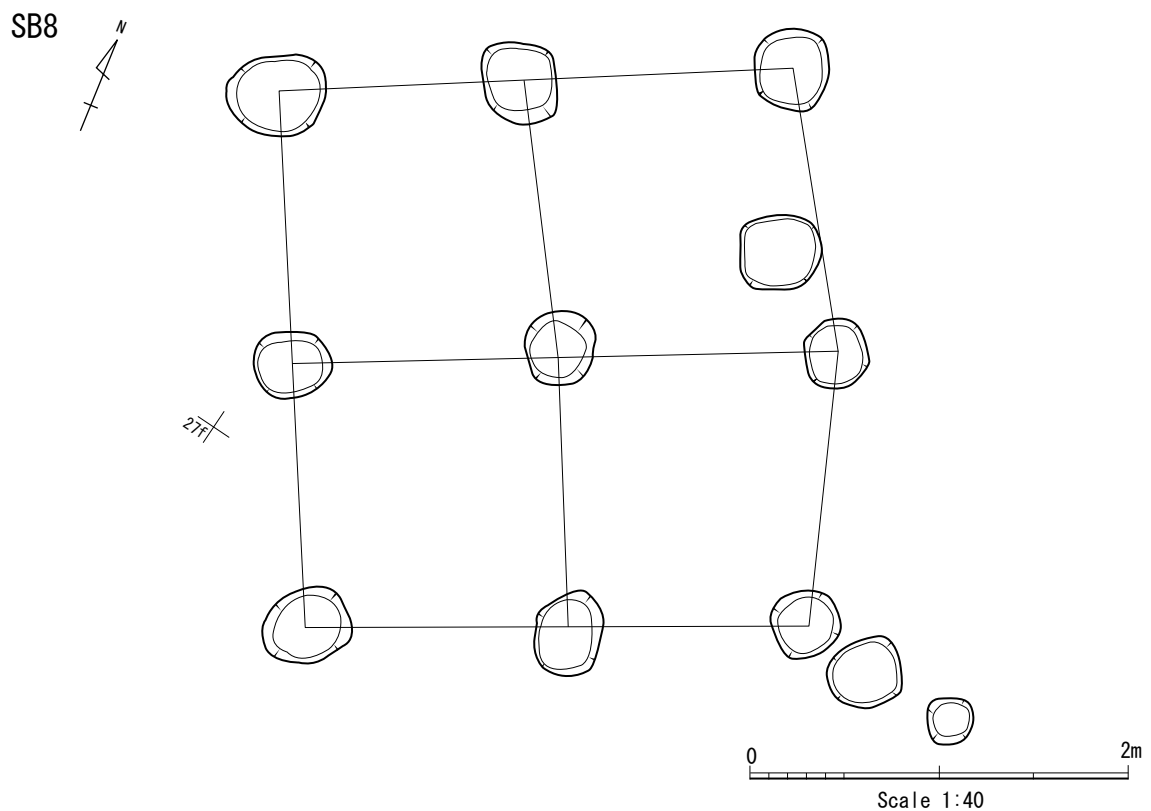
位置 26・27-e・f区に位置する。

遺構 2間(3.3m)×2間(3.2m)の平安時代の総柱の掘立柱建物である。南東から北西方向の柱間が若干長い。この長軸方向はN-23°-Wである。面積は10.2㎡である。柱間寸法はそれぞれほぼ等間である。柱掘方は径32~44cmである。出土土器がなく、詳細な時期は不明である。

SB 9 (第116図)

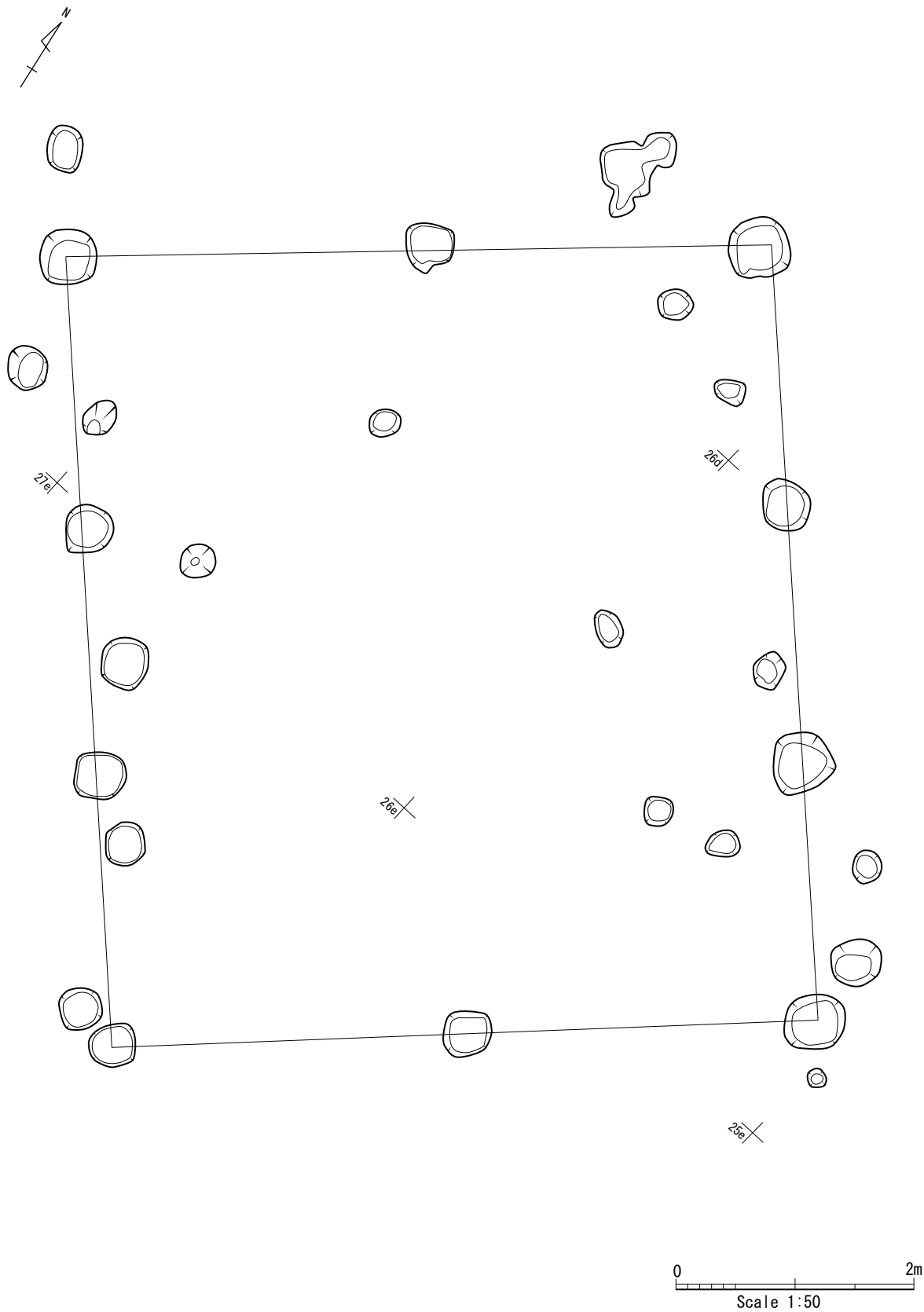
位置 25・26・27-c・d・e区に位置する平安時代と考えられる掘立柱建物である。

遺構 3間(約7.0m)×2間(約6.3m)で、南東から北西方向の柱間が短い。この長軸方向はN-33°-Wである。面積は約44.1㎡である。柱間寸法は等間にならない。柱掘方は径36~52cmの円形で、深さ17~36cmである。出土土器がなく、時期は不明である。



第115図 SB 8

SB9



第116図 SB9

SB10 (第117図)

位置 16・17・18-a・b区に位置する2間(4.1m)×2間(4.1m)の掘立柱建物である。2棟同位置に重複しており、建替えたものとみられる。

遺構 面積は16.8㎡で、長軸はN-64°-Eである。柱間寸法はそれぞれほぼ等間である。柱掘方は径約50cm程度の円形で、深さは20~50cmである。出土土器がなく、詳細な時期は不明である。

SB11 (第118図)

位置 17・18・19-b・c区に位置する平安時代の掘立柱建物。柱穴が重複しているものが多く、建替えないし柱抜き取り穴とみられるが、現状では判断できない。

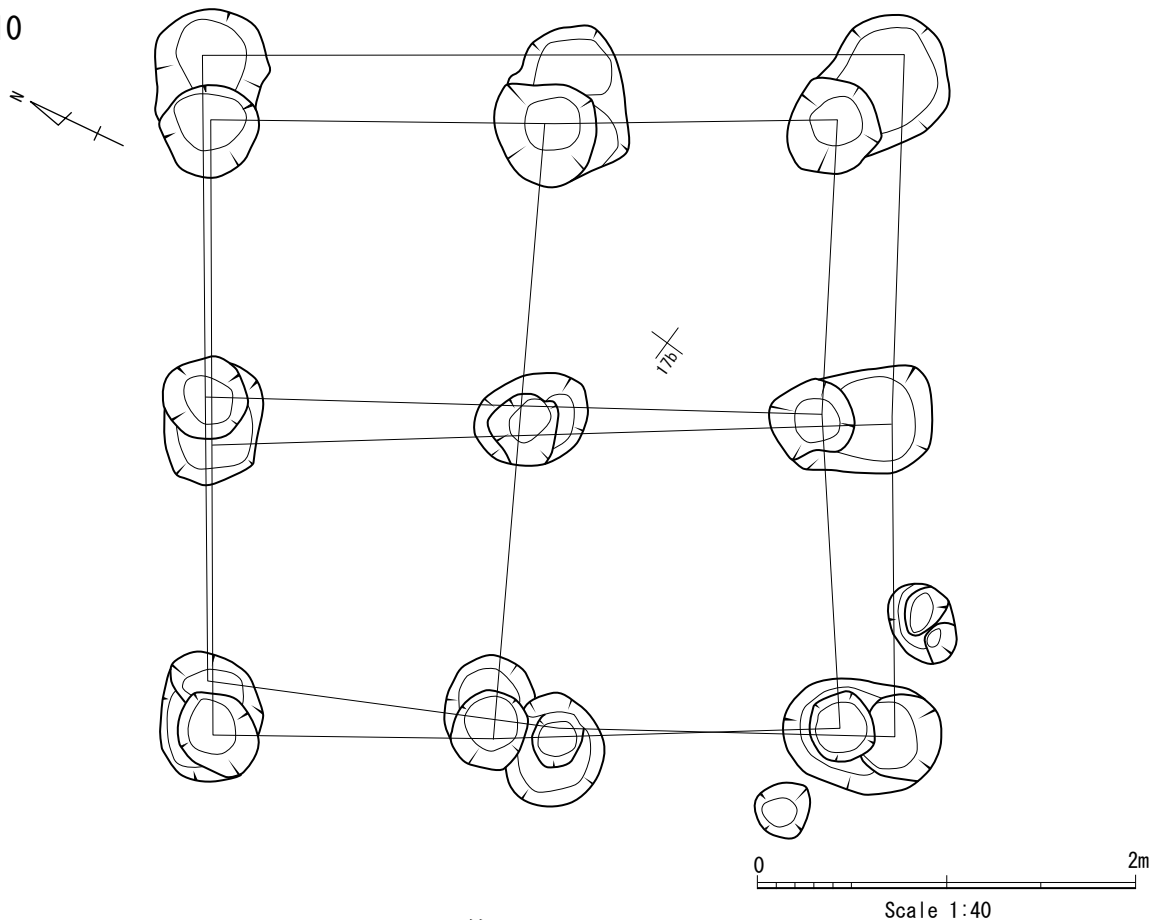
遺構 桁行3間(5.6m)、梁間が2間(4.1m)で、長軸はN-64°-Eである。面積は22.9㎡。柱間寸法はそれぞれほぼ等間である。柱掘方は径50~70cmの円形で、深さは35~60cmである。出土遺物はないが、平安時代のものと考えられる。

SB12 (第119図)

位置 12-e区の調査区際に位置する平安時代の掘立柱建物である。

遺構 主軸はN-68°-Eである。調査区際で南東側はよくわからないが、南東・北西2間(約3.6m)×北東・南西2間の可能性がある。検出された範囲内の柱間寸法はそれぞれほぼ等間である。柱掘方は径32cm程度の円形で、深さは30~37cmである。出土遺物がなく、詳細な時期は不明である。

SB10



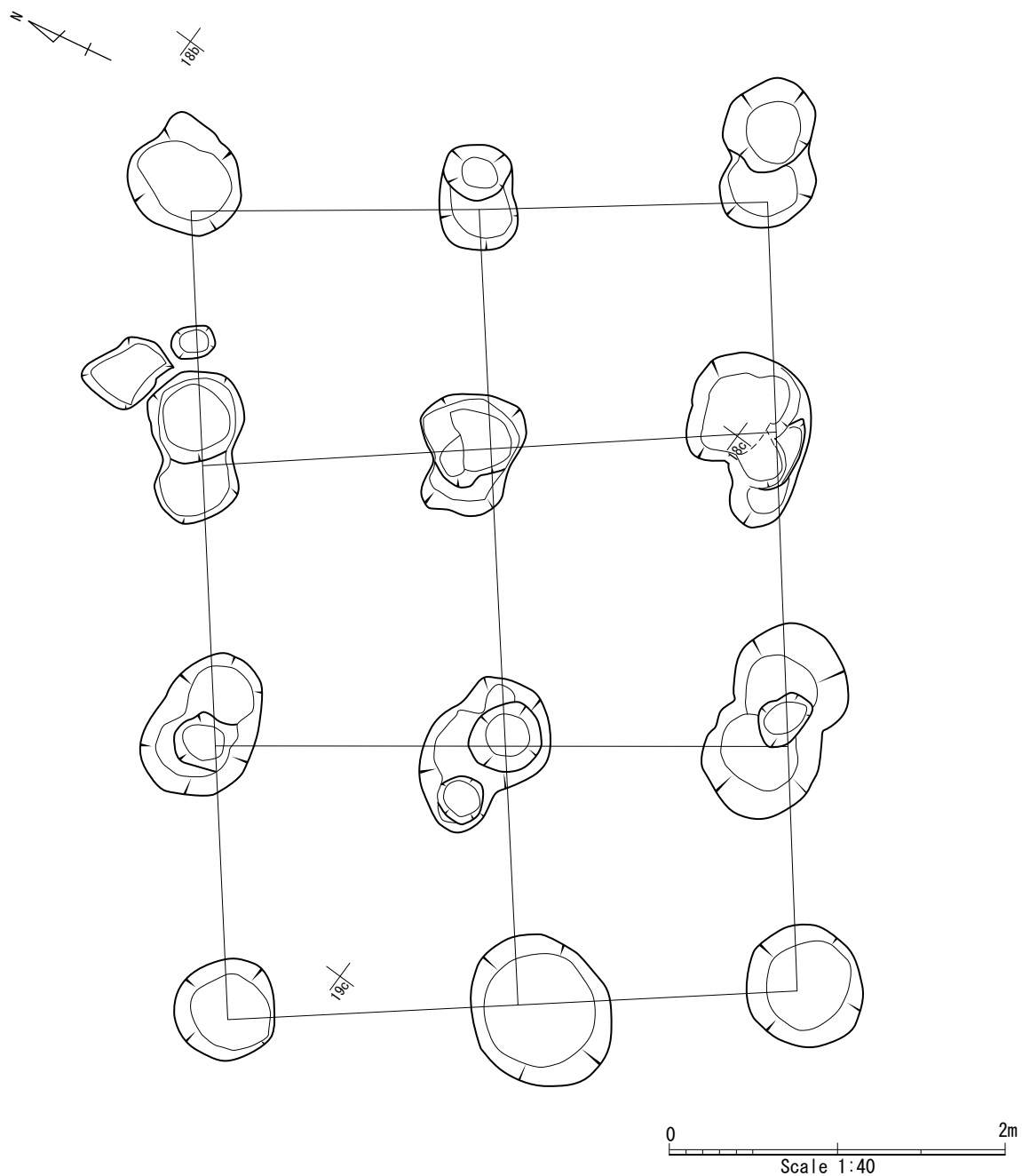
第117図 SB10

SB13 (第119図)

位置 26-Y区に位置する掘立柱建物。

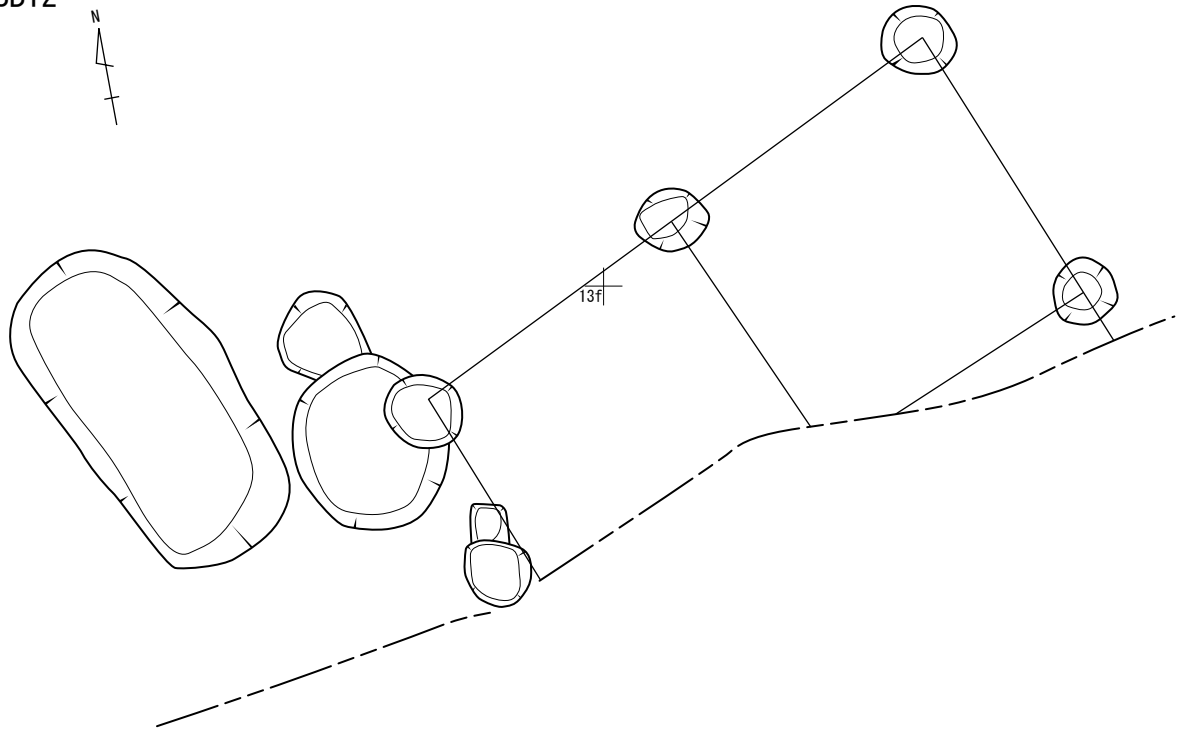
遺構 桁行2間(約3.3m)、梁間1間(約1.5m)で、長軸はN-70°-Eである。面積4.1㎡。SI44との関係は不明である。柱間寸法は等間にならない。柱掘方は24~32cmの円形で、深さ8~27cmである。出土遺物はない。この建物周辺にはまだ柱穴があり、ほかに建物が存在する可能性が強い。時期は不明である。

SB11

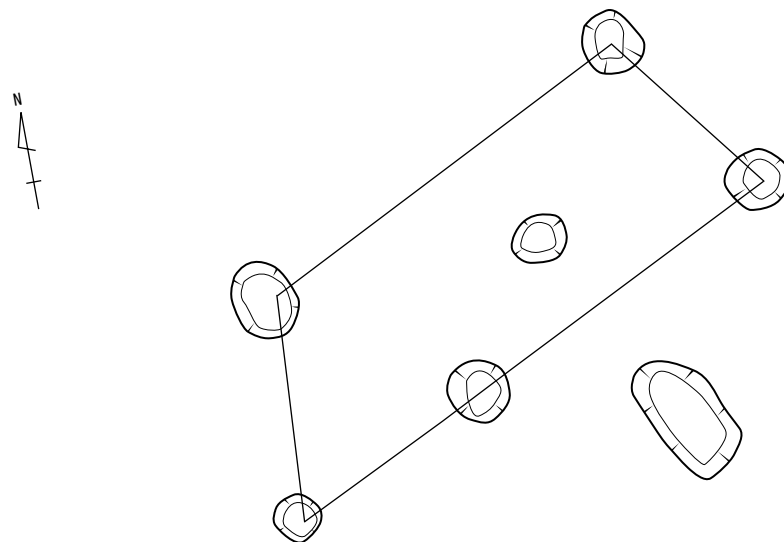


第118図 SB11

SB12



SB13



272

262

0 2m
Scale 1:40

第119図 SB12・13

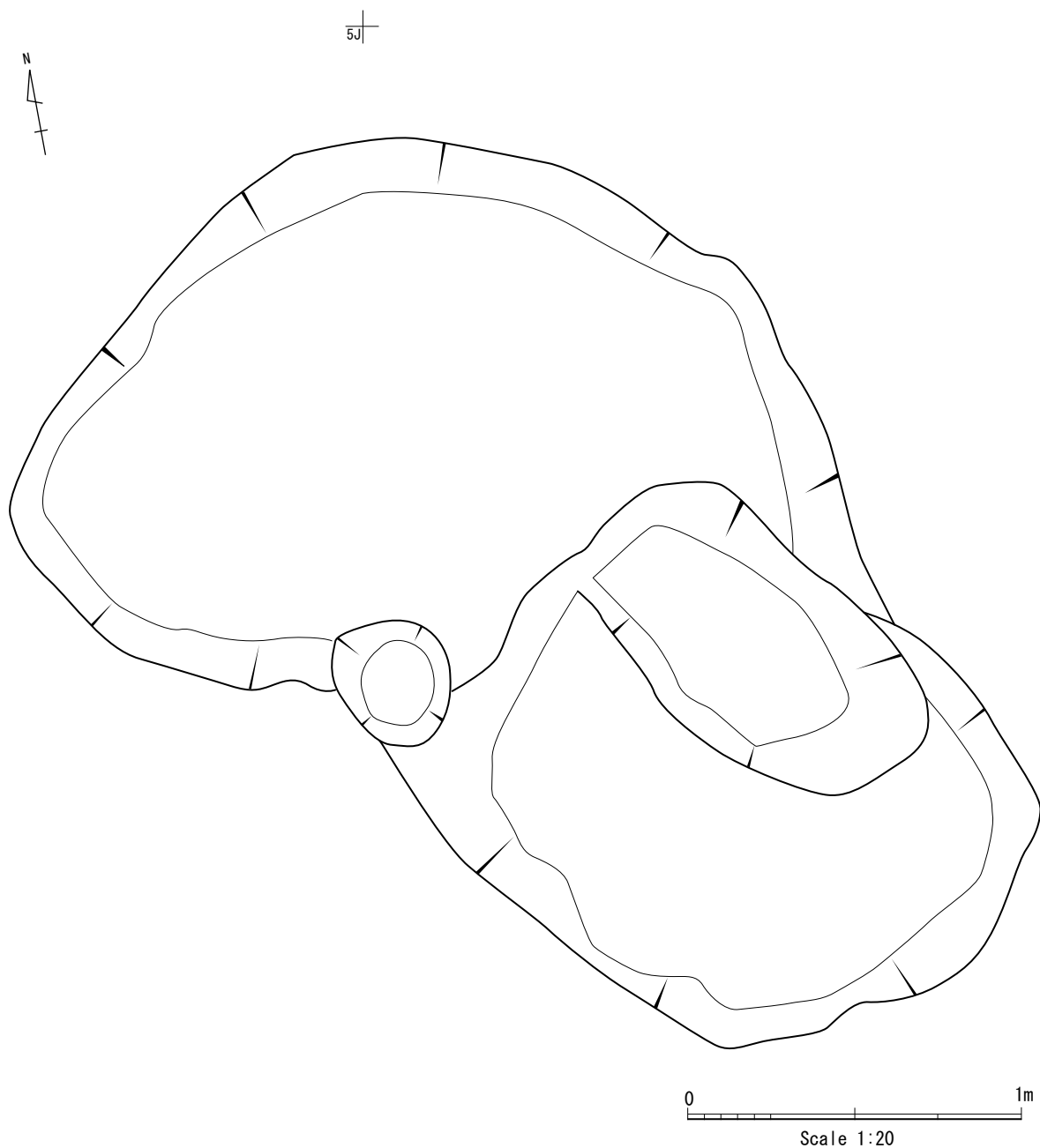
SK 1 (第120図)

位置 4・5-j 区に位置する SB 2 の北東にある平安時代の土坑である。

遺構 平面形は径約3.2mの不整形の楕円形を呈する。深さは12～28cmで、断面は皿状となる。出土土器は土師器 3 点がある。

時期等 土師器が出土していることから、平安時代の土坑と考えられる。

SK1



第120図 SK 1

SD 1 (第13図)

位置 1-Aから3-G区にかけて南西方向にのびる溝である。東西方向に延びるSD 2と連結し、丁字形をなす。SI 5と重複し、SI 5を切る。

遺構 途中切れている部分もあるが、連続していたものと思われる。幅24～40cm、深さ17～19cmの断面U字形である。遺物は出土しなかった。

SD 2 (第13・14・16図)

位置 調査区北端の2～13-G～R区に位置する東西方向の溝である。

遺構 東西37.4mにわたって検出され、東端はSD 1と連結し、西端は13-G区で途切れる。溝はほぼ直線的でN-77°-Wである。上端幅24～52cm、深さ15～17cmである。底面は水平であり、立ち上がりは明瞭である。出土遺物はほとんどないが、SD 1と連結するため、これと同時期の所産と考えられる。規模もSD 1とほぼ同様で、溝の機能も共通すると考えられる。遺物は出土しなかった。

SD 3 (第13・14図)

位置 調査区東端3・4-J～L区に位置する南東-北西方向のやや規模の大きい溝である。SD 1と重複するが、新旧関係は不明である。

遺構 きわめて直線的である。上幅は幅48～80cm、深さ約15cmである。方位はN-32°-Wである。

遺物 出土遺物はごく少ない。

時期等 埋土からは10世紀を下限とした遺物しか出ていないことから、この時期にほとんどが埋没したものと考えられる。この溝の機能は明確ではない。

SD 4・SD 5・SD 6 (第13・14図)

位置 3・4-G～O区に位置する3本の溝で、SD 1に並行または重複することから、いずれも同時に存在したものでありそれぞれ互に関連した機能を有するものである。南北方向で、SD 6はSD 1と南側で重複するが、新旧関係は不明である。

遺構 3本の溝はそれぞれほぼ共通した規模で、ほとんど直線的である。SD 5は幅28～36cm、深さ8cm前後であり、SD 4はこれよりやや小さく幅24～32cm、深さ5cmである。溝の方位はSD 4が約N-20°-E、SD 5が約N-12°-Eである。

SD 6は幅24～72cm、深さ30cmである。ほぼ直線的で、南北方向から東へ若干偏向する。溝は北から南へ若干偏向する。遺物はほとんど出土していない。SD 1とほとんど同一で、切り合い関係はみられず、同時に機能していたものと考えられる。SD 1と交差する西側の延長線上にSD 6とみられる溝が存在しないことも、これを裏付けられる。遺物は出土しなかった。

SD 7 (第14図)

位置 調査区東端4・5-N～P区に位置する南北溝である。北側は調査区外へのび、南側は攪乱により壊されている。

遺構 規模はSD 6とほとんど同じであり、幅32～56cm、深さ20cm前後である。方位はN-34°-Eで

ある。埋土もおおむねSD6と同じである。遺物は出土しなかった。

SD8（第13図）

位置 3-J・K・L区に位置する。

遺構 N-18°-Eの溝である。幅48～108cmを測る。遺物は出土しなかった。

SD9・SD10（第13図）

位置 3-L区に位置する浅い溝である。

遺構 SD9は幅16～28cmを測る。SD10は幅24～32cmを測る。遺物は出土しなかった。

SD11・SD12（第14図）

位置 発掘区の東端、5・6-N・O・P・Q・R区にある二本の溝で、南側で重複する。

遺構 SD11は幅24～52cm、深さ8～19cmを測る。SD12は幅28～56cm、深さ40cmを測る。遺物は出土しなかった。

SD13（第14図）

位置 6～10-I～P区に位置し、ほぼ南北にのび、北側ではSI6を取り囲むように弧状に曲がる。

遺構 幅12～36cm、深さ約15cmを測り、6-P区で浅くなって消滅する。8-K区で分岐し、SI6につながっているが、その関係は不明であった。遺物は出土しなかった。

SD14（第14・15・17・19・121図）

位置 6～21-N～S区、SD17の北側にあたり、ほぼ東西にのびる浅い溝である。

遺構 幅約35～60cmを測る。東端は二又に分岐し、攪乱により壊されている。西端は16-P区でSD17と重複する。

遺物 第121図2は口径6cmのごく小さい口頸部で、施釉陶器の小瓶に類する器種と推定される。口縁端部は外側に面をもち、その下端は沈線状の段をもつ。14-P区溝中より出土しており、本遺構出土とみられる。

時期等 埋土中から須恵器が出土していることから、平安時代の溝と考えられる。

SD15（第19図）

位置 16～18-P～Q区、SI20東隣に位置し、N-70°-Eでのびる浅い溝である。東側はSD14と重複し、西側はSI20と重複する。

遺構 幅56～76cm、深さ25cmを測る。重複するSI20との関係は不明であった。遺物は出土しなかった。

SD16・SD17（第15・17図）

位置 7～16-P～U区に位置する。

遺構 SD16は7-T区から東西方向にのび、10-U区でSI23を取り囲むように弧状に曲がり、途中

13-S区でSD17が分岐し、北西部は16-P区でSD14と合体する。SD17は幅32～56cm、深さ7cm、SD16は幅40～80cm、深さ20cmを測る。

SD17はSI64と重複しているが、その関係は不明であった。遺物は出土しなかった。

SD18 (第17・50図)

位置 12・13-P区に位置する2本が交差し、丁字形をなす溝である。SI17と重複し、SI17を切る。

遺構 東側は徐々に浅くなり消滅する。幅20～32cmを測る。図示はしていないが、溝のなかには拳大～人頭大の川原石が敷かれていた。遺物は出土しなかった。

SD19・SD20 (第15図)

位置 5-U～Y区に位置する2本並行に南北にのびる溝である。

遺構 南北両側ともに先細りになり消滅する。なお、攪乱坑を挟んで北側にSD1・SD11があり、SD19・SD20にそれぞれ対応する。SD19は幅28～40cm、深さは深い部分で22cmを測る。SD20は幅24～64cm、深さは深い部分で30cmを測り、南側で二本の溝が重複している。遺物は出土しなかった。

SD21 (第15図)

位置 5-Y区に位置する幅30～40cm、長さ約5mの溝である。

遺構 SD22と重複し「入」字形をなすが、新旧関係は判然としなかった。遺物は出土しなかった。

SD22 (第15図)

位置 5・6-Y～b区に位置する溝である。北側はSD21と重複、4-Z区でSD23と重複するが、新旧関係は判然としなかった。南側は調査区外へのびる。

遺構 幅56～76cm、深さ25cmである。重複するSI20との関係は不明であった。遺物は出土しなかった。

SD23 (第15図)

位置 4～6-Z～b区に位置し、L字形にのびる溝である。SD22、SI26と重複しており、本遺構のほうがSI26より新しい。SD22との新旧関係は判然としなかった。

遺構 幅12～48cm、深さ20cmで、東側が狭まる。遺物は出土しなかった。

SD24 (第15図)

位置 4-X～Z区に位置し、南北にのびる溝である。

遺構 幅36～88cm、深さ47cmを測る。遺物は出土しなかった。

SD25 (第22図)

位置 27-U～W区に位置する溝でSI47に隣接する。

遺構 幅12～20cmである。出土遺物はないが、土層からみて平安時代の遺構と推定される。遺物は出土しなかった。

8) その他の遺物 (第121～124図)

ここではおもな遺構出土以外の遺物を取りあげる。

溝出土土器 (第121図)

1は土師器鍋。器壁が厚く、非ロクロのA系で口縁部の歪みは大きい。内面はていねいなナデ調整で、外面中位～下端にナナメ方向のヘラナデがみられる。内外面には部分的にタール状の黒色物質が付着している。「SD03」と注記があるが、どの溝に該当するかは不明。

柱穴出土土器 (第121図)

3は14-a区柱穴出土の須恵器長頸瓶で、口縁部は短く外反し、端部は上方にのびる。上方へのつまみあげは鋭く、その側面はくぼむ。内外面はきれいにロクロナデされる。体部破片はまったくないほか、口頸部の半分以上を欠損する。頸部と体部の接合部にあたる破損部は意図的に割ったような状況を呈している。

包含層出土土器 (第121・122図)

須恵器 (4～9)

埴 (4・5) 5は身の深い形態である。4・5ともに火だすきがかかる。

瓶・壺 (6・7) 壺・瓶類を一括するもので、器種はそれぞれ異なっている。6は長頸瓶である。体部～底部と口縁部を欠く。頸部は細い。頸部に沈線をめぐらす。胎土はやや粗く、B群の可能性も考えられる。7は壺。体部上半から口縁部を欠くが、大きな個体である。体部下半は強いヘラケズリで、底部は広い平底である。内面はロクロナデである。

甕 (8・9) は同一個体とみられる頸部と底部である。8は大型のものでなく、器壁は薄い。外面は平行タタキ目、内面はナデである。

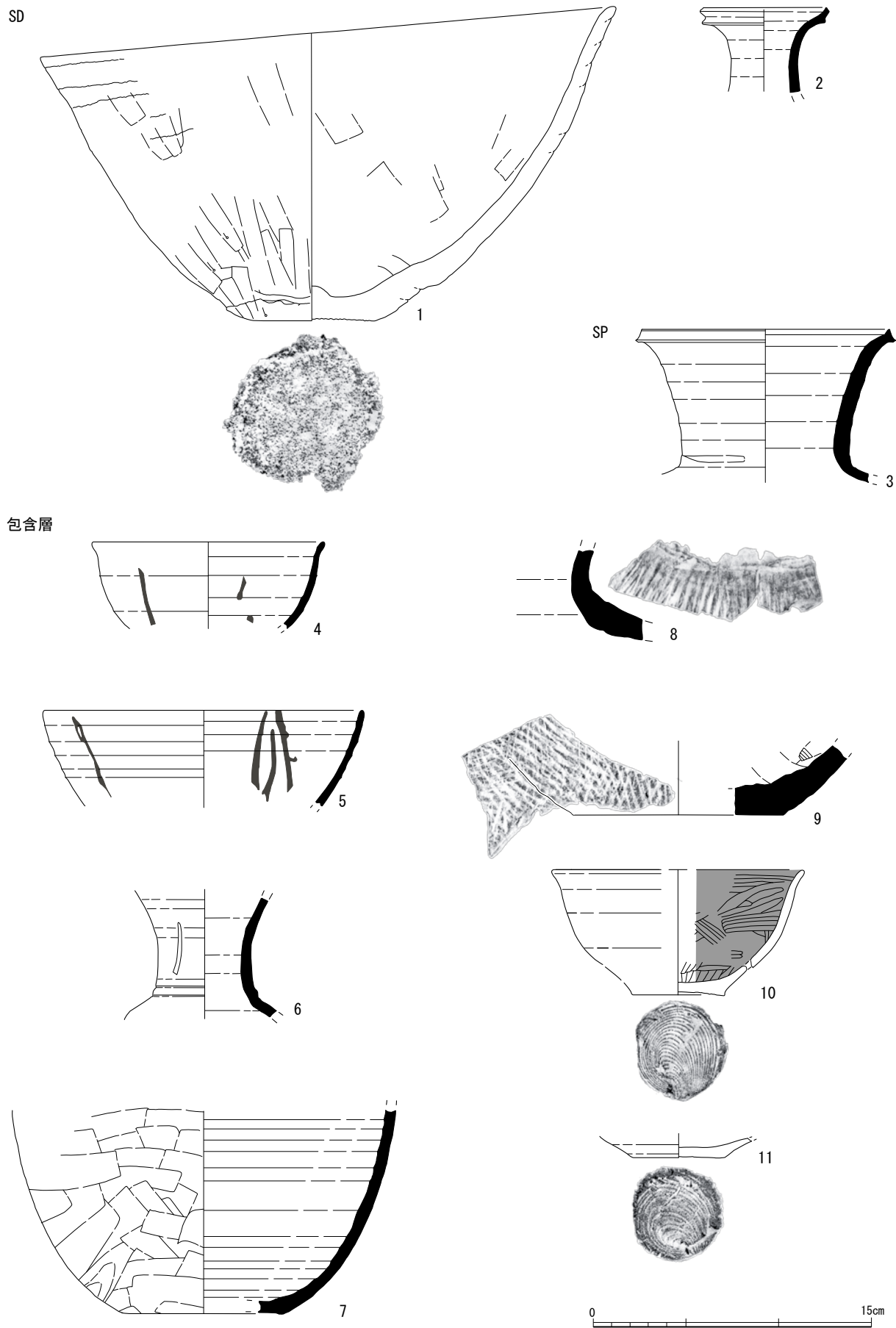
土師器 (第121図・122図)

埴B (10・11) 10は黒色土器である。11はロクロナデが外面より内面のほうがていねいである。胎土に2～3mmの石英・長石を含み、須恵器系に類似する。

甕 (12～17) 12～16は当初、SI16とされた箇所から出土したものであるが、SI16は遺構ではないと判断された。12はロクロ土師器である。13の甕は内外面ともナデで口縁部のナデが弱い非ロクロのA系である。14～17はいずれも非ロクロの底部。14・15はともに小甕、16・17は長甕である。14は精良な胎土の砂底である。15は外面下端にかるいナデを行う。16は器壁が薄い。17は器壁が厚く、調整は比較的ていねいである。

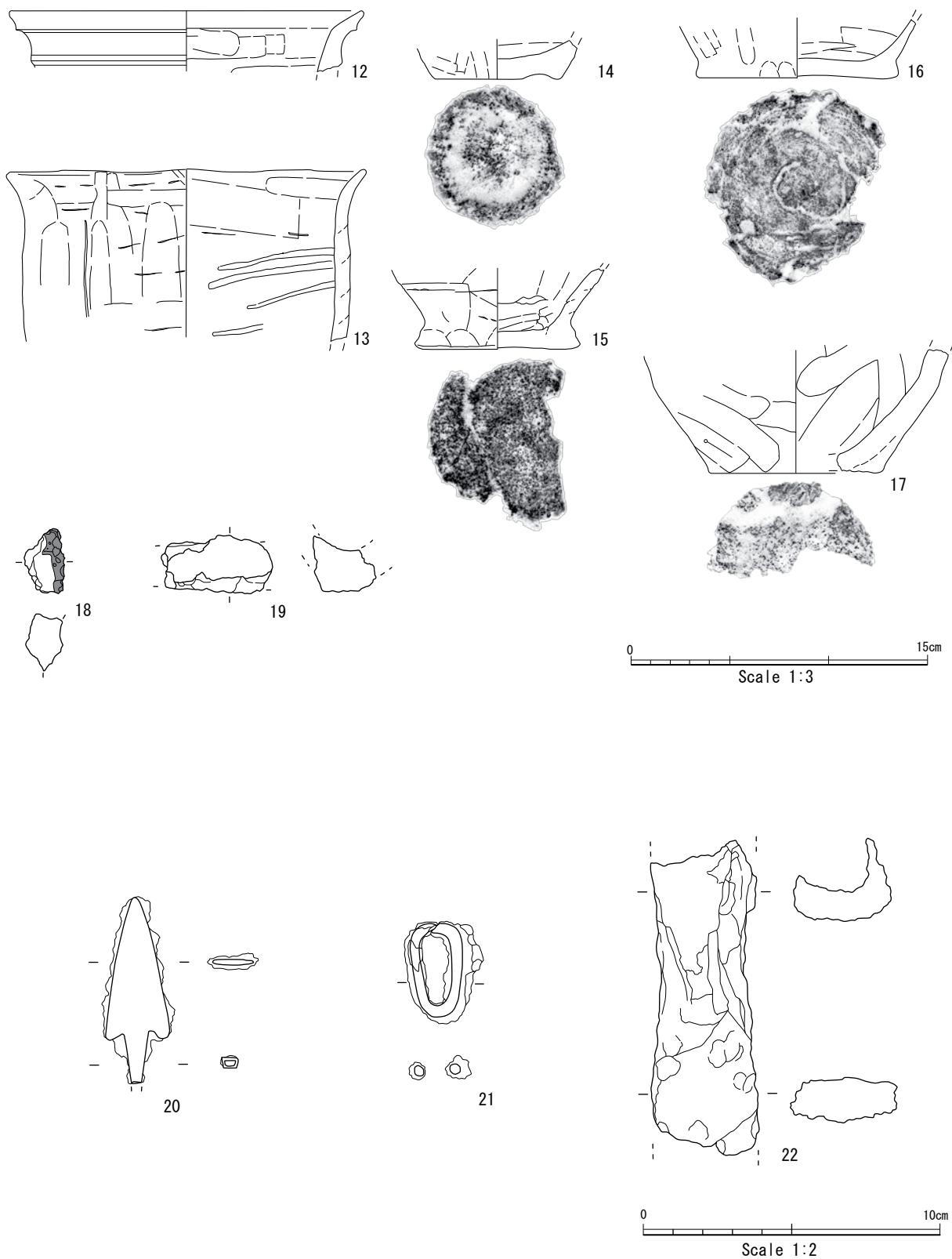
土製品 (第122図18・19) 18・19はフイゴ羽口。19は両端部を欠く。内面にナデがなされている。溶着物はみられない。胎土は他の土師器と大きく異なるものでない。

鉄製品 (第122図20～22) 20は鉄鏃で、長三角形式有茎鏃である。重量は11gである。21は帯金具の刀装部である。長さ3.5cm、幅0.9cm、厚さ0.7cm、重量8gである。22は有袋式の鉄斧で、手斧の可能性もある。両端部が欠損している。鉄板を折り曲げて袋部を形成している。重量は138gである。



第121図 SD・SP・包含層出土遺物 (1)

10 黒色



第122図 包含層出土遺物 (2)

確認調査出土土器（第123・124図）

試掘坑ごとにとりあげる。このうち、o 10、o 11、u 5は竪穴住居、p 11は土器捨て場出土である。

g・h 19（1） 1は土師器小甕の底部。

k・l 13（2～7） k・l 13は調査区西部SI53周辺である。2は須恵器無台碗で、底部外面回転糸切りののち、再調整を施さないものであるが、身の深い形態である。こうした器形はSI35などにみられ、Ⅱ期頃のものと考えられる。体部外面には「l」のヘラ記号がある。3～5は非ロクロA系の土師器小甕である。3は長石を含むものである。4は体部のふくらみはまったくなく、鉢形の形態で、口縁部は短く、外反する。5の体部もほとんど張らない。口縁部は短い。6・7は明確なB系である。6は胎土が相対的に粗い。口縁部は「く」の字状に外反し、端部は上方へつままれる。口縁部は沈線状にくぼむ。体部上半部は内外面ともロクロナデであるが、内面はその後ナナメ方向のナデである。7は口縁部が水平にのび、端部に明瞭な面をもつ。

o 10（8） 8は平底の底部で、器種は須恵器壺と考えられる。内面はロクロナデで、底面はナデである。体部外面下端はヘラケズリと思われる。

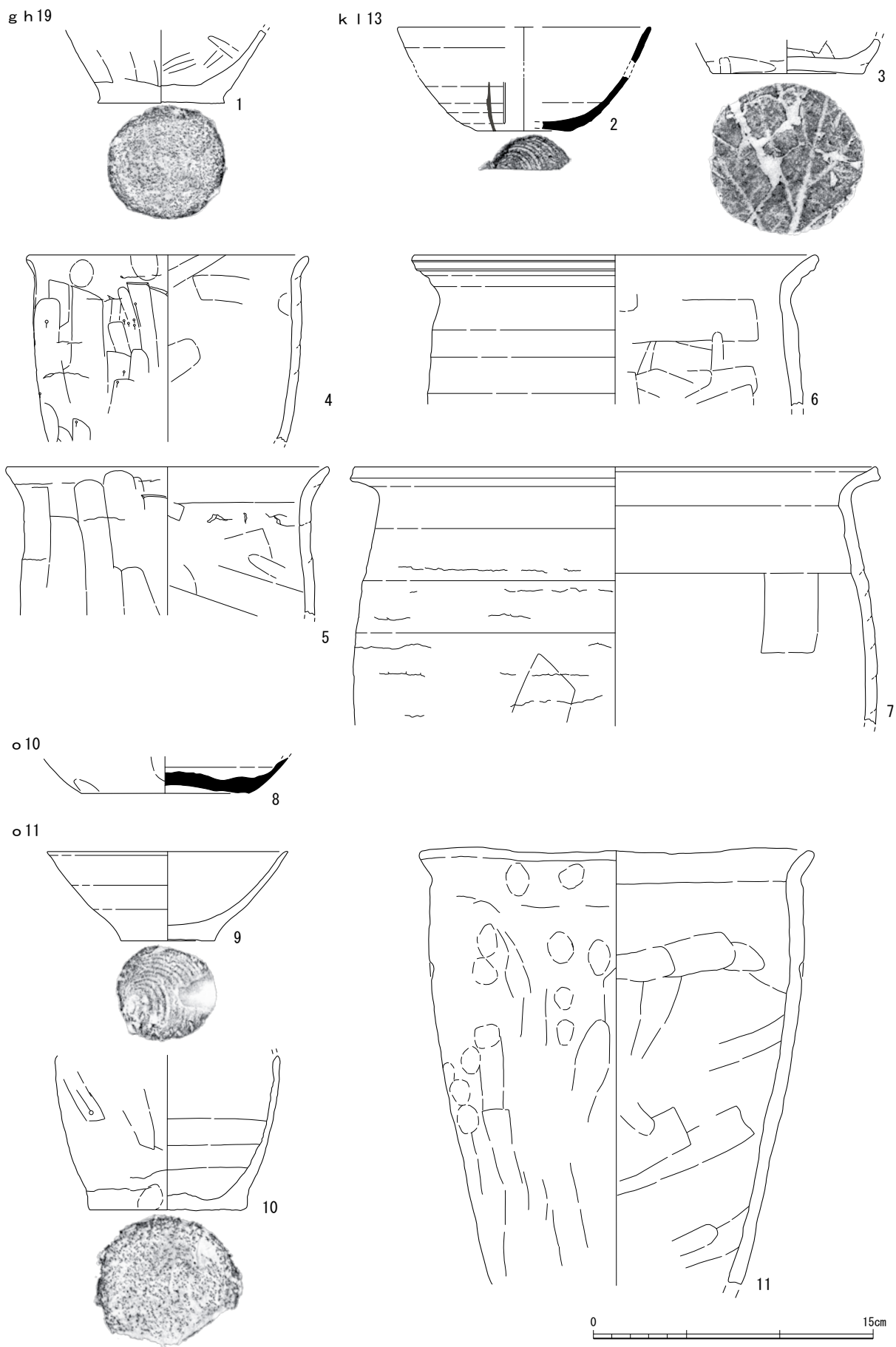
o 11（9～12） 土師器がある。9は小型の碗で、口径13cm、器高4.8cm、底径5.0cmである。やや小ぶりで、器高がやや高く（径高指数36.9）、底径が小さいなど、ほかのものとはやや形態が異なる。法量からいえば、SI60出土の碗と類似する。10～12は長甕A系である。底部（10）は外面がナデである。11・12はヨコナデが弱く、口縁部の歪みも大きい。11は指頭圧痕が、12は粘土紐の積み上げ痕がよく残る。

p 11（13・14） 土師器がある。13は無台碗の半完形品で口径12.8cm、器高5.7cm、底径6.0cmである。相対的に身が深く、口縁部はあまり外反しないものである。ロクロナデは内面のほうが外面より相対的にていねいであり、器面が平滑に仕上げられている。土師器甕底部（14）は全体の器壁が均質で、相対的に厚く、底部外面にヘラケズリ、体部下端にタテ方向のヘラケズリを行う。底部外面のヘラケズリの手法を勘案すれば、非ロクロ土師器のA系と考えられる。

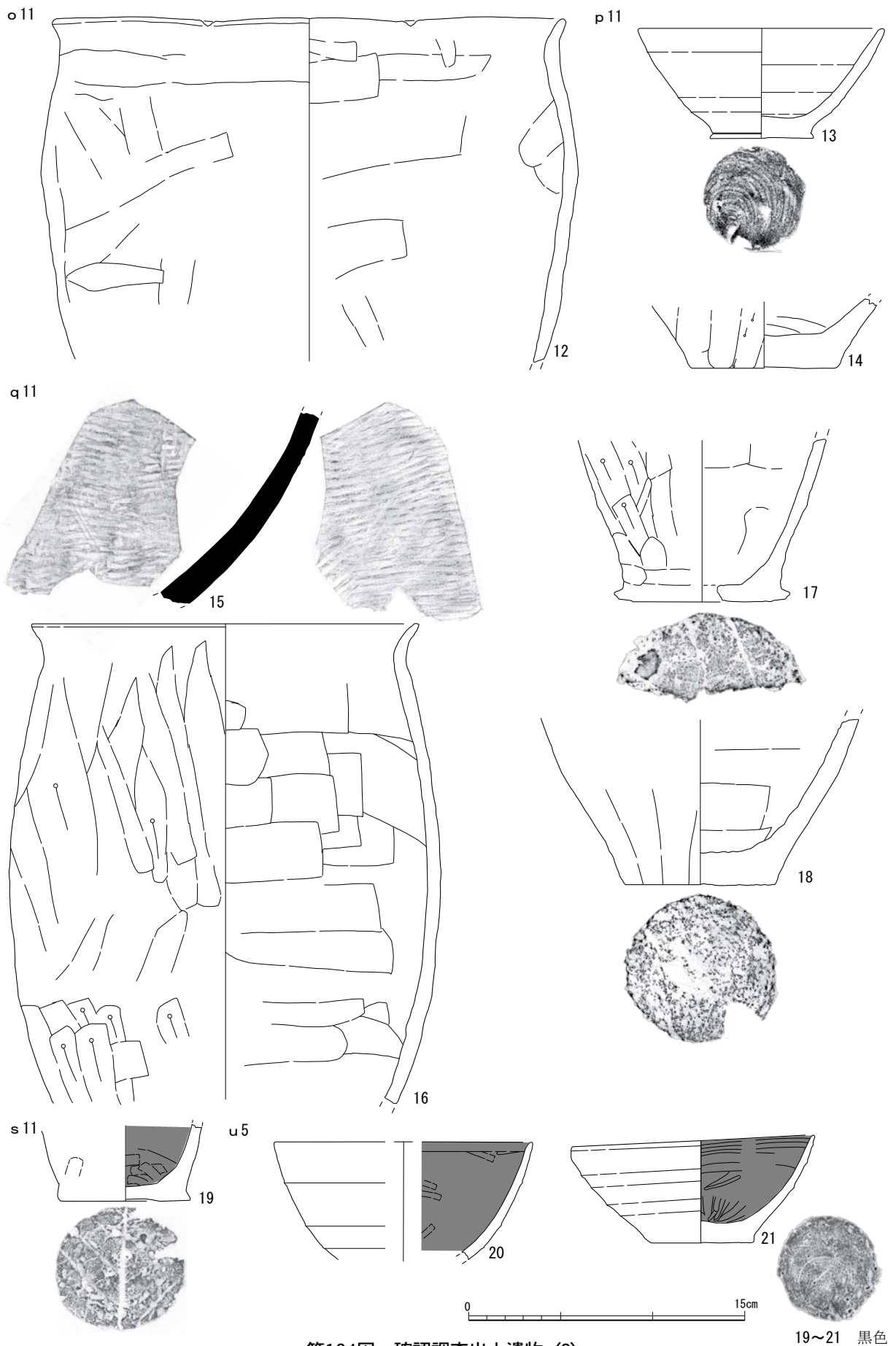
q 11（15～18） 須恵器甕、土師器長甕がある。15は須恵器甕体部片である。外面平行タタキ目、内面平行文あて具痕である。16～18は土師器長甕。16は口縁端部が丸くおさまる。底部（17・18）のうち、17は木葉痕をもつ。網状脈で、葉脈が細い。底面までヘラケズリされる。18は部分的にヘラケズリであり、底部外面には砂痕がみられる。

s 11（19） 19はケズリ調整のA系であるが、底部外面は木葉痕をもつ。内面は黒色処理される。

u 5（20・21） 20・21は内面黒色処理の土師器碗である。20は口径14cm、器高は8cmほどと推定



第123図 確認調査出土遺物 (1)



第124図 確認調査出土遺物 (2)

される。体部から口縁部の開きの角度は、通有の坏に比して立ち上がっており、口縁部はまったく外反しない。口縁部内面はヨコ方向のヘラミガキと黒色処理がなされており、ロクロナデで生じた口縁部内面のくぼみはきれいに消されている。外面はロクロナデであるが、小さな凹凸がみられる。21は遺存状況が不良なため、調整が不明瞭なところもあるが、底面の糸切り痕は観察される。

(4) 近代

近代の遺構として土坑1基がある。

SK 3 (第125図)

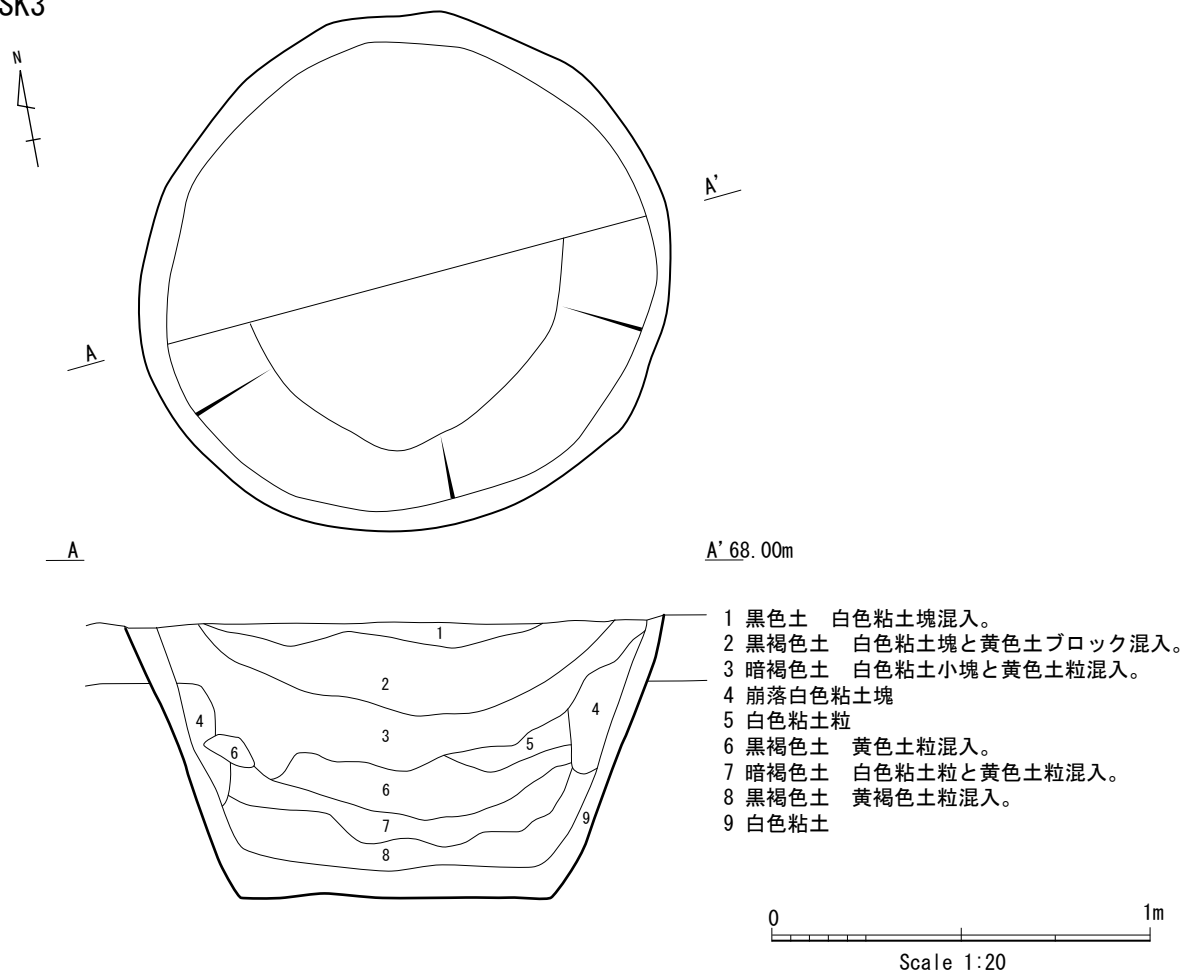
位置 38-e・f区に位置する土坑である。

遺構 平面形は円形で、径約1.4mである。深さは74cmで、底面は平坦で、急斜度で立ち上がる。埋土に粘土塊を多量に含み、最下層から壁面は白色の粘土を貼り付けてあった。

遺物 土師器が1点出土した。

時期等 近代以降の糞尿溜と考えられる。餌釣館跡(旧 山王岱遺跡)や川口十三森遺跡に類例がある。

SK3



第125図 SK3